

M. Nakanishi Home Page 2004

『 Iron Road 和鉄の道 』 【4】

- 日本の源流・「たたら」探訪 -

2005.1.15. by Mutsuo Nakanishi



佐用町 大播山の夜明け 朝霧 2004.2.11.



口絵 1 先大津阿川村山砂鉄洗取之図

江戸末期 山口長門の「白須たたら」のたたら製鉄の詳細な工程絵図

「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」の周辺で
 -江戸末期長門のたたら製鉄(白須たたら)工程絵巻-

- 山口県立博物館 平成14年度企画展「国路「鉄と人の文化史」
- 新聞記者 江戸1世紀新聞「たたら 日本古来の製鉄」より

outou09.htm 2004.3.25. by 黒. Kakuishi

東京大学大学院工学研究科 藤

先大津阿川山砂鉄洗取図 江戸末期 長州のたたら製鉄の全工程を畫した全長44Mにも及ぶ絵巻。

北長門「白須たたら鉄山」について、長門での山砂鉄・沖田鉄での鉄砂採取からその運搬そして白須鉄山山内の様子・たたら場・大鍛冶・小鍛冶による鉄素材の製造そして鉄屑処理・沖田鍛冶加工による原料製造にいたる原料採取からたたら製鉄・原料加工までの全工程を畫した絵巻物。
 江戸時代、全図巻を並べたたたら製鉄の工程や風景を示す貴重な史料である。また江戸時代の針金グリス製りきの図にビックリしました。
 また、かつて歩き回った長門の海岸・山中のたたら製鉄の関連地として描かれていること知って、コレもビックリ。

先大津阿川山砂鉄洗取之図



← 砂鉄採取・鉄穴流し [北長門](#) [長門](#)



木炭製造(小炭・穴炭焼) ← 砂鉄と製品運搬 ← 砂鉄伸質 ←



白須たたら山内 ([北長門](#)・[長門](#)・[長門](#)・[長門](#)・[長門](#)・[長門](#))



鉄素材・針金製造 ← 大鍛冶 ← 鉄生産(たたら生産・木床づくり)

口絵 2 「ふいご祭り」

旧暦 1 1 月 8 日 鞆を使う職人たち 鍛冶屋が鞆を祭り古式鍛錬を神社に奉納した



金山彦を祭る岐阜県垂井 南宮大社 金山祭「ふいご祭り」 2004.11.8.

口絵 3 磁石石 山口県須佐町 高山

磁石の指針を狂わす「磁石石」この高山では 磁石の指針が狂う



口絵 4 播磨風土記に記載された和鉄の里



口絵 5 たたら製鉄が始まる5世紀後半以前に 先たたら精錬技術があったのでは・・・
多くの鉄の伝説がそれを語っている



『Iron Road 和鉄の道』和鉄探訪【4】 2004

- 口絵 1 先大津阿川村山砂鉄洗取之図 口絵 2 ふいご祭
 口絵 3 磁石石 山口県須佐 高山 口絵 4 播磨風土記に記載された和鉄の故郷
 口絵 5 古代 先たたら技術があった・・・

『Iron Road 和鉄の道』和鉄探訪【4】 2004

1. 播磨国風土記 古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk
兵庫県西播磨 佐用郡 大撫山製鉄遺跡群を訪ねて
2. 炭素 14 の加速器質量分析法(AMS 法)による年代測定法の周辺で
「弥生時代が 500 年遡れる」と国立歴史民俗博物館で発表
3. 岩手県の人達が作った長編アニメ映画
「アテルイ」に今の時代を重ねて
4. 鉄のモニュメント 東京六本木ヒルズ (66 ビル群)
5. 「和鉄の道・Iron Road」 口絵 【1】たたら製鉄原料
砂鉄ともうひとつの製鉄原料(餅鉄・高師小僧&鬼板)
6. 蝦夷の鉄 「和鉄の道・Iron Road」に掲載した東北地方「和鉄探訪」9 編

1. 岩手県の人達が作った長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて	和鉄の道 15
2. アサヒ 製鉄王権の製鉄史の探訪 和鉄の道 4	和鉄の道 4
3. 古くから北上山地域の和鉄 一宮町探訪	和鉄の道 8
製鉄の主要原料「餅鉄」・日本刀のルーツ「舞刀」を訪ねて	
4. 心残りだった東北 和鉄のふるさと Walk 北上江釣子・砂鉄川・扇王	和鉄の道 8
「あの高師 俺はむねり・・・」 北上市市民会館 」と暮ら	
5. 『田舎なれども和鉄の道は 西も東も谷の山』	和鉄の道 2
岩手県・南部「和鉄の道」 北上山 南大塚・扇石	
6. 古代 出羽 和鉄の道を訪ねて	和鉄の道 5
北上山地域の探訪から出羽山脈 出羽・秋田そして津軽十三歳へ	
出羽山脈の和鉄の道は製鉄の生み出す	
7. 出羽 製鉄の心臓部を歩く和鉄の道	和鉄の道 6
～北上(和鉄) 山 人 神 鉄～	
東北 鉄の山 奥に浮かっていた「和鉄の道」を探して	
8. 「和鉄の道」と岩手山脈「和鉄の道」	和鉄の道 8
「和鉄の道」・「十勝内」・「和鉄の道」	
9. 古くから北上山地域の製鉄遺跡群と和鉄の道	和鉄の道 6

7. 播磨風土記の和鉄【2】 御方里周辺 (宍粟郡一ノ宮町安積)
安積山製鉄遺跡(平安時代末期の製鉄遺跡) 探訪
8. 古代 初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地
鉄の山「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道
9. 日本 木の文化のルーツ 北陸に点在する縄文のウッドサークル探訪
10. 播磨風土記 産鉄の里「御方里」 一宮町「三方」を訪ねて
11. 「須佐高山の磁石石」& 白須鉄山遺跡を訪ねて 山口県須佐町
中国山地の砂鉄ベルトの西端 山口県北東部の和鉄地帯を訪ねて
12. 「鉄の 5・6 世紀」古代 大和政権の日本統一を支えた
北河内の大規模専業鍛冶工房 大泉製鉄遺跡 探訪
13. 先大津阿川村山砂鉄洗取之図」の周辺で
-江戸末期長門のたたら製鉄(白須たたら)工程絵巻-
14. 旧暦霜月 8 日(11 月 8 日)金山祭り・鞆 祭 (ふいごまつり)

『 Iron Road 和鉄の道 』 【4】

- 日本の源流・「たたら」探訪 -

【 第1分冊 【1】 ~ 【6】 】

- 口絵 1 先大津阿川村山砂鉄洗取之図 口絵 2 ふいご祭
口絵 3 磁石石 山口県須佐 高山 口絵 4 播磨風土記に記載された和鉄の故郷
口絵 5 古代 先たたら技術があった・・・

『 Iron Road 和鉄の道』和鉄探訪【4】 2004

1. 播磨国風土記 古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk
兵庫県西播磨 佐用郡 大撫山製鉄遺跡群を訪ねて
2. 炭素 14 の加速器質量分析法 (AMS 法) による年代測定法の周辺で
「弥生時代が 500 年遡れる」と国立歴史民俗博物館で発表
3. 岩手県の人達で作った長編アニメ映画
「アテルイ」に今の時代を重ねて
4. 鉄のモニュメント 東京六本木ヒルズ (66 ビル群)
5. 「和鉄の道・Iron Road」 口絵 【1】たたら製鉄原料
砂鉄ともうひとつの製鉄原料(餅鉄・高師小僧&鬼板)
6. 蝦夷の鉄 「和鉄の道・Iron Road」に掲載した東北地方「和鉄探訪」9 編

1. 岩手県の人達で作った長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて	和鉄の道 15
2. アサヒ 畿内王権の制鉄史の探訪集 「行方製鉄遺跡」を訪ねる	和鉄の道 4
3. 志保県北上川流域の和鉄 一輪博物館へ 製鉄の主要原料「餅鉄」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて	和鉄の道 8
4. 心残りだった東北 和鉄のふるさと Walk 北上江崎子・砂鉄川・藤王 「あのふるさと 俺住む所、・・・ 北上市市民会館 」と会う	和鉄の道 8
5. 『田舎なれども和鉄の道は 西も東も谷の山』 岩手県・南部「和鉄の道」 北上山 高木塚・磐石	和鉄の道 2
6. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて 北上川流域の製鉄から大撫山製鉄 出羽・秋田そして産鉄十三渡へ 大撫山製鉄史の和鉄の道は製鉄の生み出す	和鉄の道 5
7. 備前 製鉄の心臓部を貫く和鉄の道 -北上(和鉄)は 人 神 餅- 東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄の道」を探して	和鉄の道 6
8. 「製鉄の道」と岩手山北山麓「和鉄の道」 「和鉄・和鉄社」・「十勝内」製鉄社	和鉄の道 8
9. 岩手山北山麓の製鉄遺跡群と和鉄の道	和鉄の道 6

1.

播磨国風土記古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk

兵庫県西播磨 佐用郡 大撫山製鉄遺跡群を訪ねて 2003.11.14.



佐用坂より 大撫山



山崎断層に沿って広がる佐用町 大撫山頂より

2003.12.31. sayou00.htm by M. Nakanishi

播磨国風土記(713年(和銅6年)頃)讃容の里(佐用)の項 産鉄の記事

「(鹿庭山)々四面有十二谷 皆生鉄也 難波豊前於朝廷始進也」

『 山(鹿庭山)の四面に十二の谷があるみな鉄を産する。

難波の豊前の朝廷に始めて献上した 』

【 内 容 】



1. 播磨国風土記に見る西播磨の産鉄記事と和鉄の道
2. 讃容の里 鹿庭山(大撫山)製鉄遺跡群を訪ねて
3. 「讃容の里」Walk まとめ

7世紀初頭にまとめられた「播磨国 風土記」の中の「讃容の里」の項に産鉄の記録がある。

現在の兵庫県佐用郡 兵庫県の西の端 岡山県との境 中国山地の真っ只中 中央を南北に千種川が流れる山郷。

また 中国山地の山々を東西にずらせた巨大な山崎断層が貫き、その断層に沿って中国縦貫道が通る。

中国山地を切裂き東西に走る山崎断層と山間を縫って千種川に流れ込む佐用川との十字路が「讃容の里」今の佐用町である。

千種川の北には「製鉄神 金屋子神の降臨の地」の伝承のある岩鍋。そして、後世「千種鉄」の一大製鉄地帯「千種」南には刀鍛冶の里「長船」。

また、大陸・西日本の日本海諸国から畿内へと続く「和鉄の道 Iron Road」の中間点 それを示す播磨国風土記の産鉄の記事。古代の大製鉄地帯吉備・美作・伯耆・出雲・丹後の諸国と畿内を結ぶ十字路にあって この地は中国山地の奥深い山里ながら、四方の山々から鉄を産する栄えた古代の一大製鉄地帯であつたという。でも、今この地域の一角には巨大な放射光施設が座る先端科学技術の発信地

昔四面 12 の谷から鉄を産した大撫山(鹿庭山)の頂上には、日本最大のレンズを有する反射望遠鏡が座る県立播磨天文台が四方の天空をみすえる。

今「讃容の里」は星空が素晴らしい山郷 「星空の街」



南光町下三河千種川 と「讃容の里」佐用の町を見下ろしてそびえる大撫山の谷筋と県花「野路菊」

「千種」は知っていたもののあまり頭になかった佐用。千種川に沿った産鉄記録を調べようと訪れた姫路の県立歴史博物館で見つけた播磨風土記の記事。「風土記の考古学【2】播磨国風土記の巻」の「播磨の鉄」(執筆 土佐雅彦)の中に 播磨風土記 産鉄の山が周囲に古代の製鉄遺跡群を持つ現実の山として記録されていました。訪れたかった山郷『佐用』と『「4面12の谷から鉄を産した山」がその中央にどっかりと座っている』全く宛てはありませんでしたが、五万分の一の地図を頼りに 11月半ば 晩秋の『讃容の里』を訪ねました。

1. 播磨国風土記に見る西播磨の産鉄記事と和鉄の道



大撫山の南麓 佐用川山崎断層に沿って広がる佐用町 大撫山山頂より播磨の古代精鉄遺跡群



「日本で何時頃から製鉄がはじまったのか？
古代大陸から何時？ どのルートで製鉄技術が伝来したのか？」

日本誕生にも大きな影響を与えたこの製鉄技術の始まりは 最古の製鉄遺跡が6世紀の半ばまでさかのぼれ、北九州 出雲・丹後 吉備 畿内・近江などが候補地として考えられているが、まだ良く判っていない。

兵庫県の西の端 中国山地から西播磨を南に流れ下る千種川上流の山間の地である千種・岩鍋は製鉄の神「金屋子神」降臨伝

承の地。千種川に惹かれてもう何年にもなる。

11月6日 千種川流域をもう一度調べたいと訪れた姫路の兵庫県立歴史博物館で

「風土記の考古学【2】播磨国風土記の巻」の「播磨の鉄」の項(執筆 土佐雅彦)

に西播磨の産鉄地域の歴史やたたら製鉄遺跡調査がレビューされ、忘れかけていた播磨国風土記の産鉄記事に再度接しました。

奈良時代の初頭和銅6年(713年)撰進の命で作られた各国の「風土記」は和鉄誕生を考える貴重な資料。

現存する播磨・常陸・出雲の風土記の中に「産鉄」の記事があり、播磨国風土記には吉備・美作・伯耆に接した播磨の西の端の山間地帯での産鉄の記事がある。

中国山地から南へ播磨を流れ下る「千種川」と「揖保川」流域の山間部である。

今まであまり気にとめていなかった千種川に流れ込む佐用川流域の山間部に大きな製鉄遺跡群がある。

その中心が佐用町古代の「讃容の里」

播磨風土記にみる播磨の産鉄記事

【播磨国風土記 讃容の郡(佐用郡)の項】

讃容の里

讃容というわけは、大神妹背二柱の神がさきをあらそって国を占められた時、妹玉津日女命が鹿を生け捕って寝ころがし、その腹を割いてその血にひたして稲をまかれた。

すると一夜のあいだに苗が生えたので、直ちにそれを取って植えさせた。

ここに大神は勅して「あなたは五月夜に植えなされたのか」と仰せられ、すぐさま他の処に去ってしまわれた。

だから五月夜の郡とよぶ。神を贅用都比売命と名づける。

現在も讃容町田がある。すなわち鹿を斬りさいた山を鹿庭山とよぶ。

山の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する。難波の豊前の朝廷に始めて献上した。

その鉄を発見した人は別部犬で、その孫らがこれを献上し始めたのである。

【播磨国風土記 宍粟の郡(宍粟郡)の項 (抜粋)】

柏野の里 敷草の村(千草)

草を敷いて神の御座所とした。だから敷草という。

この村に山がある。その南方十里ばかりのところには沢がある。広さは二町ばかりある。

この沢に菅が生え、笠を作るのに最適である。ヒノキ・スギ・栗・オウレン・黒葛などが生える。

鉄を産する。狼・熊が住む。

御方の里(一ノ宮町)(抜粋)

大内川・小内川・金内川 大きい方の川を大内といい、小さいのを小内と称し、鉄を産するのを金内と称する。

その山にはヒノキ・スギ・黒葛などが生える。大神・熊が住む。

平凡社 東洋文庫 『風土記』 吉野裕訳より

「(鹿庭山)々四面有十二谷 皆生鉄也 難波豊前於朝廷始進也」

『 山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する。
難波の豊前の朝廷に始めて献上した 』

「山全体が鉄の山・・・????????」これは 凄い

歴史博物館で見た「播磨の鉄」では播磨風土記に記載された「鹿庭山」が佐用町の中心にそびえる「大撫子山」。この山の周りに沿って流れる佐用川・千種川流域に幾つかの古代の製鉄遺跡群があり、この流域一体が古代の一大製鉄地帯である事が調査レビューとともに記載されていました。

早速 国土地理院の地図に場所の書き込みチェック。
山また山の中 果たして今も製鉄遺が残っているだろうか・・・

地図で見ると大撫山には県立西播磨天文台とドライブウェイが伸び、「四面十二の谷」との記述どおり、高くはないが、周辺はみんな山。山だけ見ることになるかもしれないが、それも良し。どんな山が興味深深。うまく行けば 古代の製鉄遺跡にも行けるかもしれない。
地図をにらみながら、何度となく訪れた「千種・岩鍋」のイメージをこの西播磨「讃容の里」に重ねながら、イメージを膨らませました。



播磨の古代製鉄遺跡群



古代風土記の産鉄記事「讃容の里」と製鉄遺跡群



兵庫県播磨地方の概略



佐用坂より 大撫山



山崎断層に沿って広がる佐用町 大撫山山頂より

西播磨では中国山地が海岸地まで延び、山深い郷を形成している。

古代 畿内の周縁部にあたり、製鉄技術伝来の候補地のひとつ吉備地方(美作・備前・備中・備後)と密接な交流を有していた。

北から南へ流れ下る千種川上流域の宍粟郡千種・岩鍋は「古代製鉄の神 金屋子神 降臨の地」の伝承地。

また、千種川が流れ下る河口近くには備前長船の刀鍛冶の郷がある。

千草の北 但馬 氷ノ山の麓の街道筋にも何度か見かけたたたら遺跡の標識。

西播磨は古代からの産鉄の郷。

この千種川水系の佐用川と千種川が中国山地をながれくんだり、巨大な東西に走る山崎断層にぶつかるところが佐用町。

正確には中国山地から流れ下ってきた千種川と佐用川は断層にぶつかり、断層に沿って東西に方向を捻じ曲げられ、断層を抜けた南で合流してまた南へ流れ下る。

千種川と佐用川が合流する手前の佐用川沿いの街が古代に編纂された播磨国風土記に産鉄の記事がある「讃容の里」佐用町である。

この「讃容の里」の北側に連なる壁としてそびえる山の中央に4面12の谷すべてから鉄を産する山 旧名「鹿庭山」と称する「大撫山」がある。

北の中国山地より深い山間をぬって南北に流れ下る二つの大河「千種川と揖保川」の流域に形成された西播磨。この山間の地は古代西から東へまた北の日本海沿岸から南へと大陸と日本を結び幾多の産鉄の民が往来し、日本に製鉄技術をもたらした和鉄の道があったに違いない。

でも神戸から出かけると通いなれた千種よりもさらに山深い郷というのが私のイメージ。

長い間静かな山里であったこの千種川流域では、今山崎断層に沿った狭い谷間を中国自動車道が東西に貫き、千種川に沿って智頭急行線が南北に開通。さらに鳥取から佐用を通して竜野を結ぶ横断高速道路も一部開通。

佐用町の南の千種川と揖保川にはさまれた丘陵地には播磨科学公園都市が整備され、その中心に設置され「放射光」施設が数々の新しい微量分析での成果をあげている。また、佐用町には県立西播磨天文台が設置され、日本最大の反射望遠鏡が設置されるなど山深い郷に変わらないが、新しい街へ急速に変貌しつつある。

神戸に帰ったら 一番先にゆっくり 山里を歩きたい場所でした。



播磨の鉄 佐用町周辺の古代製鉄遺跡群



西下野製鉄遺跡群近傍 千種川

「山全体が鉄の山・・・????????」これは 凄い
古代 西播磨の山里「讃容の里」には 吉備地方や出雲など日本海諸国と畿内を結ぶ「和鉄の道・Iron Road」があった。中国山地の山また山の中 果たしてこの山間の町に製鉄遺跡はのこっているだろうか・・・

大撫山にはドライブウェイが伸び、県立西播磨天文台と広い公園になって 「星空の町」のベース基地になっている。「四面十二の谷」との記述どおり、高くはないが、周辺はみんな山。そして、狭い谷あいをぬって佐用川が流れている。

山だけ見ることになるかもしれないが、それもよし。
佐用川に沿って大撫山の山裾をその痕跡をイメージしながら歩いてみよう。
11.14.地図を片手に秋晴れの朝 佐用町 大撫山へ出かけました。

2. 讃容の里 鹿庭山(大撫山)製鉄遺跡群を訪ねて 兵庫県佐用町 203.11.14.



佐用町全景 大撫山より 2003.11.14.

【内 容】

- 2.1. 山崎から千種川流域の佐用へ
 - 千種川沿いに広がる南光町三河製鉄遺跡群と西下野製鉄遺跡 -
- 2.2. 佐用町の中央にそびえる古代製鉄の一大生産地 大撫山
 - 今は頂上に西播磨天文台 -
- 2.3. 大撫山 南面の谷にある永谷製鉄遺跡
- 2.4. 佐用川沿いの大撫山製鉄遺跡群を訪ねて
 - 播磨風土記「讃容の里」Walk -



国道 179 より 大撫山



大撫山頂上近傍



大撫山より南面とその麓にある永谷製鉄遺跡



2.1. 山崎から千種川流域の佐用へ

-千種川沿いに広がる南光町三河製鉄遺跡群と西下野製鉄遺跡-



山崎-南光町間の峠道 2003.11.14.

11.14. 秋晴れの早朝 久しぶりに三木から加古川を横切って加西へ。

加西からは中国自動車道に沿って山裾を通過して 揖保川を渡ると山崎。

ここは、攝津・播磨から美作や因幡・出雲へのちょうど中間点にあり、四方からの道が交差し、山深い中国山地へ分け入る要衝の地。

山崎の街中を通るのは4,5年ぶりであるが、西南の丘陵地を切り開いて播磨科学公園都市が出来た事や、中国自動車道を中心とした交通整備により、周辺の山間地の開発が進んだのだろう、以前よりも随分街が大きくなった様な気がする。

南の竜野から揖保川沿いに鳥取へ向かう因幡街道を山崎の街中で横切り、街中を通り抜け、中国縦貫道に沿って西に向かうといよいよ奥深い山中。

山崎断層が中国山地を左右に切裂き、山間の狭い回廊を東西に作り、佐用町への道がこの回廊の中につづいている。

吉備・美作・伯耆の国に隣接して中国山地に点在する西播磨の古代からの一大製鉄地帯に入ってゆく。

もう 佐用町まで大きな町なし。交通量も激減し、良く手入れされたスギ林が続く山中を南光町へ向かう。

切窓峠を越えると揖保川の流域から、いよいよ千種川の流域に入る。相変わらず、狭い谷あいの道が続く。

山崎から約 30 分ほどで山間の小さな集落下三河の三叉路に出る。前方に立ちはだかっている山裾を千種川が流れ、川に沿って北へ行くと千種 南へ行くと佐用である。

下三河の三叉路を南に折れて千種川に沿って佐用に向かう。

千種川が直角に西にまがり、正面にトンネルから抜け出した赤い高架橋が見えると西下野の集落。

この千種川に沿って両岸に約 30 を超える古代の製鉄遺跡があり、南光町三河製鉄遺跡群と呼ばれている。



山崎-南光町間の峠道 2003.11.14.



山崎から佐用へ 西下野製鉄遺跡近傍



千種川 南光町 下三河付近

この西下野には次ぎのような「たたら製鉄」に関係した昔の盆踊り唄が伝わっているという。

嫁にゆくなら 下野にござれ
下野山かげ 朝寝床 (省略)
金もあるある 金谷の段に
ほしくば やるぞ 掘って取れ (省略)
金の鳥鳴く その声聞けば
やがて長者に なるそうな (省略)
-- 「兵庫史を歩く」より --

人っ子一人いない静かな集落。

もう こんな盆踊り唄も消えてしまったのか……………
両側から山が迫る狭い谷あいを川に沿って歩く。

まっすぐに見通せる狭い谷筋に清流の千種川が流れ、
緑の山肌をワインレッドの高架橋が走る。

ゆっくり風来坊するにはもってこいの場所である。
対岸中国縦貫道のむこうの山裾が奈良時代初頭の西下
野製鉄遺跡と思われるが、どこも全く判らない。





西下野 中国縦貫道と千種川 対岸の山裾の谷に西下野製鉄遺跡がある 2003.11.14.

やつと道路沿いの民家のおじいさんを見つける。製鉄遺跡のことを聞くと、すぐ前の田圃も川向こうの山裾もみな製鉄遺跡跡だという。

地図を見せながら西下野製鉄遺跡の位置を聞く。

脇道の橋を渡って中国縦貫道くぐり 細い道を藪の中を山肌に沿って少し登ったところ。

教えてもらったとおり、中国縦貫道のトンネルを抜け、山裾を少し登ったところに広場があり、階段状に谷あいが何段か聖地された林になっている。

その奥に炭焼きか何かの建物が建っている。

位置的にはここが西下野製鉄遺跡の位置なのだが、どうもはっきりしない。



千種川南岸 西下野製鉄遺跡 ??? 2003.11.14.

この千種川に沿った山間にはいくつもの古代製鉄遺跡があり、古代ばかりでなく、中世・近世まで 種々のたたら遺跡があったというが、今は静かな谷あいの集落の中に埋もれている。

西下野製鉄遺跡では 5 つの炉床と共に工房跡や炭窯砂鉄置き場などが見付き、比較的lowチタンの砂鉄を原料とした奈良時代初頭の製鉄遺跡と見られている。



三河製鉄遺跡群の点在する千種川 西下野近傍

この三河製鉄遺跡群で使われたlowチタン砂鉄原料は千種川の川砂鉄などとみられ、「同時代の製鉄遺跡でありながら、隣接した佐用町の大撫山製鉄遺跡群が高チタンの製鉄原料であるのと対照的である」との調査結果に興味をつのらせている。

高チタン原料は精錬過程で形成したスラグがねばく、安定した鉄製造が難しく、lowチタン原料に取って代わられてゆく。

後世 奥出雲でのたたら製鉄が盛んになったのも、このlowチタン原料が豊富にあり、大量生産が安定して出来たからだと言われている。

一方 古代製鉄の黎明期 丹後のたたら製鉄（遠所製鉄遺跡）では、近くに低チタンの原料がありながら、高チタン原料が使われている。

丹後の特異点と置いていたが、丹後に近い西播磨でも同じような事象がみてとれる。

まだ安定した高温が得られにくい時代には 他の不純物成分とあいまって、高チタン原料の有する比較的低温での溶融が和鉄精錬には好まれたのではないか・・・

私はむしろ高チタン原料を好んだ和鉄製鉄技術・産鉄の民がいたのではないと思っている。

(もっとも 後世 西播磨の和鉄製造もその中心は讃容から低チタンの千種へと移り、
また、低チタン原料のこの三河の地では後世まで和鉄 製造が続いてゆく。)

この西播磨は大陸から吉備・美作・奥出雲・丹後と畿内を結ぶ要衝の地。

そこに異なる製造プロセスの和鉄製造技術が時代を同じくして存在する事これこそがこの地を通る「和鉄の道」の重要性を物語っているのではないか・・・

高チタン原料から低チタン原料への移行がこの地で解き明かされるのではないか・・・

ここでどんなドラマがあったのか・・・

もののけ姫のイメージを思い浮かべながら 興味津々である。

2.2. 佐用町の中央にそびえる古代製鉄の一大生産地「大撫山」

- 今 頂上には西播磨天文台 -

千種川沿いに山間の徳久集落を抜け、南に流れ下る千種川と別れて北に佐用坂と呼ばれる峠道をのぼって佐用の町に入ってゆく。

幾つかの谷の出口の平地部中央に佐用川が流れ、その両側に街並と田圃があり、それを取り囲んでぐるっと山また山の狭い扇状地地形である。

街の北には街に接してどっしりと大撫山が構えている。

山また山ではあるが、山並みが低く視界が開けていて実に明るい。

中国山地に分け入って、兵庫県の奥の奥と置いていましたが、その陽気な明るさにビックリ。



大撫山頂上より 佐用の町 山崎からの中国縦貫道が見える 大撫山南東側 佐用の街へ入る中国道が見える

西播磨天文台の標識に従って、北に市街を突き抜け、また現れた中国縦貫道のガードをくぐったところから、高さ 436m 大撫山へのドライブウェイがついており、山へ登ってゆく。

ちょうど 野路菊の季節。

ドライブウェイのあちこちに野路菊の群生がみられる。途中 お地藏さんが祭られたところが南面の展望台になっている。

そこからは南に広がる佐用の街並とそのむこうに果てしなく続く山並みが見え、やっぱり、奥深い山の中にいる事を実感する。

ここには石碑があり、お地蔵様の由来と共にこの山が昔「鹿庭山」と呼ばれ、古代製鉄の一大産地であったことが記されている。



大撫山中腹 地蔵堂横の展望台からの南面の展望 2003.11.14.

古代製鉄に関する記述はこの石碑のみにあるだけで、この山が「鉄の山」であった痕跡は見当たらない。そこから 少し登ってゆくと頂上。

頂上は天文台を戴く良く整備された広い公園になっていて、360度山また山 どこまでも続く山並みの展望 本当に山また山 どこを見ても 山を実感する。

これは同時に夜になるとそれこそ眼の位置からどこまでもどこまでも広がる真っ暗な大空。全天星が輝く素晴らしい星のポイントと想像され、ここに天文台を誘致したこの街の人たちの眼力にもおどろく。



山腹に整備されたロッジと公園



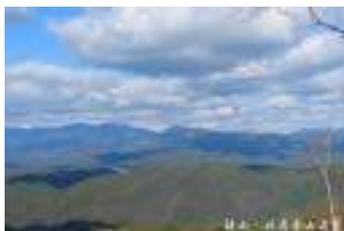
山頂の県立西播磨天文台



360度山また山を示す方向表示板



北西 那岐山



北 後山・日名倉山



南東 雪彦山



南西-西 岡山・津山

【 大撫山 山頂からの眺望 2003.11.14. 】

この地が古代の播磨国風土記に

「山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する。難波の豊前の朝廷に始めて献上した」と記述されて、日本誕生にも大いに貢献した古代の一大製鉄地帯であることなど 全く忘れ去られている。明るい天文台一色の山である。

四面十二の谷 どの谷からも鉄が出たと言う谷を見ながら、頂上にある天文台の周りを地図片手に一周。頂上付近のどこからでも 谷に降りれそうであるが、製鉄遺跡の場所など全く判らない。



野路菊



西播磨天文台と地元の人達



ドライブウェイ脇の赤土

公園整備をしている陽気な地元の人たちに製鉄遺跡の事を聞いて 色々教えてもらいました。

「子供の頃には尾根につけられた旧道の山道のいたるところで 磁石を引っ張って砂鉄集めを良くした・・・。また、ドライブウェイの途中からまっすぐ下にする旧道を降りれば、小さな池のある堰堤にでる降りとそこが永谷池のはず。そこに製鉄遺跡が確かあって、今も調査しているはず。小屋がたしかある。でも もう探さんかも・・・」

大撫山南面の堰堤のある池 位置的には地図通り、永谷製鉄遺跡に違いなし。

また、ドライブウェイ脇の山肌では、真っ赤な土が帯状に連っており、やっぱりこの山は鉄の山かも。もう 和鉄の痕跡はさがせないものと思っておりましたが、「四面 十二の谷 皆 鉄を産す」が現実味をもつ

て、永谷製鉄遺跡がある谷筋につけられた旧道を永谷池に向って下りました。

大撫山は 360 度の山の展望が楽しめる本当に明るい山。

山また山の中心にそびえ、低い山でありながら全く都会の裏山臭さがない。

夜には天空いっぱい星空が広がる事だろう。

古代 産鉄の民がこの山を中心に世界へつながったと同様 今も天文台がこの街を世界へとつなげている。

全く 知らなかった山ですが、四面十二の谷が広がる山 360 度山また山が続く大展望や山腹に咲く県花「野路菊」が素晴らしい。そして その山の周りの狭い谷に広がる街には清流がながれ、日本の原風景 「讃容の里」 和鉄のふるさとはいまもやっぱり輝いていました。今度は一度泊まって星空を見に……………。

2.3. 大撫山 南面の谷にある永谷製鉄遺跡



大撫山からまっすぐ麓の永谷池へ下る旧道 2003.11.14.



中国縦貫道の際 大撫山南面の谷にある永谷製鉄遺跡 全景 後ろは大撫山



永谷 B 遺跡

池の底に遺跡が眠る永谷池

杉林の中にスラグ原が広がる永谷 C 遺跡

大撫山南面の谷にある永谷製鉄遺跡 (8 世紀半ばから 10 世紀にまたがる重複遺跡)

頂上からドライブウェイを下ったところから、まっすぐに尾根を下る道に入ってゆく。

車一台がやっと通れる程度のみちではあるが、ほとんど使われておらず、落ち葉が覆っている。

全く人気のない谷筋の山腹につけられた道をどんどん下ってゆく。

野路菊が美しい林の中の本道。振り返ると頂上の天文台が見下ろしている。

引き返しもなく、ちょっと心配になりかけた頃 前方に池が見え、谷の出口の狭い田圃にクロスして中国道が前方をふさいでいる。これが永谷池か・・・



大撫山頂上から永谷池への谷筋の道



手前の田・奥の池・左手杉林にまで遺跡がひろがっている池のすぐ下に小さな作業小屋があり、人影があるのを見てほっとする。
 やっぱり、この池が永谷池 そして下ってきた道の反対側池の奥の林と池の下の田圃が製鉄遺跡だと教えてくれる。資料ではここにはいくつかの製鉄遺跡が重複して存在し、この池の底にも遺跡が眠っている。
 また、すぐ下の田圃からは3基の炉跡や砂鉄が出土。池の西杉林の中はスラグ原。

永谷製鉄遺跡 2003.11.14.

この杉林の奥からも一基の炉跡が確認され、ここがもっとも古く8世紀半ばまでさかのぼれる可能性があるが、しっかりした確認は取れていないとの事。

この池からまっすぐ北に谷筋が伸び、大撫山の頂上が見える。



杉林の中にスラグ原が広がる永谷C製鉄遺跡



杉林の中のスラグ原 永谷C製鉄遺跡

杉林の中のスラグ原で見つけた製鉄スラグ



大撫山製鉄遺跡群 永谷製鉄遺跡で 2003.11.14.

教えてもらった左手の杉林の中に入ると数段の平地になっていて、その奥が山肌の傾斜地になって、製鉄遺跡らしい面影がある。

足元の雑草の中 あちこちにスラグが散らばっている。

何時の時代のものなのか、また発掘調査後のものなのか不明であるが、資料にあるスラグ原であろう。思いもかけなかった製鉄スラグとの出会いです。見下ろす正面は古代讃容の里振り返って見上げる山は鹿庭山。

誰一人いない谷の中で、播磨風土記の世界に思いついていました。

2.4. 佐用川沿いの大撫山製鉄遺跡群を訪ねて 播磨風土記「讃容の里」Walk



大撫山南麓に沿って佐用町より西へ 上月町へ抜ける佐用川沿いの国道 179 佐用町吉福付近

資料「播磨の鉄」(執筆 土佐雅彦)の調査記録によると大撫山の周辺には約 55 の大撫山製鉄遺跡群があり、播磨国風土記の記載どおりだとすると 6 世紀にまでこの地での和鉄製造はさかのぼれる事になる。

大撫山製鉄遺跡群をチェックした五万分の一の地図を頼りに大撫山南面側佐用川沿いを製鉄遺跡を訪ねて佐用の町から上月町へ「讃容の里」の Walk。

晩秋 大撫山をみながら清流沿いの山里風景はまさに絵画の世界から出てきたような日本の原風景そのもの。街道筋を集落の人に話を聞いたり、川を覗き込んで砂鉄の存在を調べたり。また、田圃のあぜにおりたり、谷筋の藪を覗き込んだり・・・

製鉄遺跡の場所特定は出来ませんでした。その地名や谷からの出口の地形に製鉄遺跡のイメージを重ねながら、古代 播磨風土記ののどかな「讃容の里」Walk を楽しみました。

のどかな山郷の晩秋の夕暮れ時 穏やかな山並みをバックに清流が流れる田舎の夕景に見とれていました。

山平製鉄遺跡・鍛冶屋製鉄遺跡近傍



佐用の街をでて、大撫山の南面に沿って流れる佐用川の川を見ながら上月町へ進む。

対岸の山裾を姫新線・智頭急行が走る。

この山裾に山平製鉄遺跡・鍛冶屋製鉄いせきがあるが、特定できなかった。

山平製鉄遺跡

8世紀後半の製鉄遺跡で厚いスラグ層が出土
複数の炉が在ったようだが、未特定

鍛冶屋遺跡

弥生時代の住居跡と重複して製鉄炉が出土
時期は未詳

佐用町真盛より 佐用川越しに山脇・山平の集落



鍛冶屋遺跡のある山脇 鍛冶屋地区

金屋中土居遺跡近傍

大撫山の西面に沿って流れる幕山川が佐用川に合流する金屋橋を北に幕山川に沿って 中土居・金屋の集落が広がる。

この幕山川と大撫山の山裾が広がる田圃・さらには谷を入ったところなどに製鉄遺跡があったと集落の人に教えてもらったが、今は痕跡なし。

平安時代の製鉄遺跡と見られている金屋中土居遺跡では重層・重複した3基の炉床が出土。

金屋中土居遺跡もこの田圃の中に眠っている。



上月町大撫山西麓を流れる幕山川と
中土居・金屋集落



金屋大撫山西の扇状地
この中に中土居遺跡が広がる



金屋地区
奥に大撫山頂上が見える

播磨・吉備・美作の境 太平記の「杉坂峠」へ



太平記の杉坂峠 播磨と美作の境 今は峠の下を中国道がトンネルで抜けている

大撫山の西面の中土居・金屋地区を北に通り返り、西に曲がって中国縦貫道にそって山間の峠道を登ってゆくと、西播磨と美作の境 杉坂峠。

太平記 後醍醐天皇・児島高德の歴史が刻まれた峠。全くひと気のない静まり返った峠である。

今は中国縦貫道がトンネルで抜けてゆくため、全く往来がなし。 静かな峠である。

播磨の鉄の山と吉備・美作の鉄の山を結ぶ道 讃容の里も美作の里も今はほとんど和鉄の痕跡を見つけれないが、古くからこの峠道を通して日本各地へ和鉄の技術が伝播して行ったに違いない。

確証はないが、私にとっては「太平記」の史実よりも鉄の歴史の方がもっと身近に感じられます。

昔はこの峠を越えて幾多のドラマが繰り広げられたに違いない。

この杉坂峠のすぐ手前 皆田集落には絵の中から飛び出してきたような素晴らしい萱葺きの屋敷がありました。

この地の大名主であった屋敷と土地の人に聞きましたが、この地が古くからの交通の要衝であったことがこの屋敷見て一人納得。素晴らしい屋敷でした。



杉坂峠下 皆田集落 萱葺きの大屋敷



播磨・吉備・美作の境 杉坂峠近傍

3. 播磨国風土記「讃容の里」Walk まとめ



「(鹿庭山)々四面有十二谷 皆生鉄也 難波豊前於朝廷始進也」

**山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する
難波の豊前の朝廷に始めて献上した**

播磨国風土記(713年(和銅6年)頃) 讃容(佐用)の項



東 佐用坂から大撫山



大撫山の南面に沿う佐用川



西 上月町側から大撫山

大陸からの文化がいち早く入った古代の大国 吉備・美作・伯耆・出雲・丹後などと畿内を結ぶ交流路の入り口にあたる西播磨。

中国山地の奥深い里ではあるが、早くから開けた土地。産鉄の民がこの山中に分け入り、この地でいち早く和鉄生産が始められた事を風土記は示している。

この西播磨で「製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地」で後世「千種鉄」として隆盛をきわめた「千種」については良く知っていましたが、同じ千種川水系にあって千種の南側に隣接する「讃容(佐用)」については知らず。播磨風土記の記事に接して出かけましたが、山また山の中に都会の喧騒からはかけはなれた独立した家並がある静かな郷でした。

古代 大陸からの和鉄精錬技術伝来の過程で大陸・西日本の大国と畿内とを結ぶ要衝の地において和鉄生産がスタートする。



鉄精錬技術伝播・継承の真っ只中であって、日本誕生に大きな役割を与えたであろう。

まさに大陸・西国から畿内への「和鉄の道 Iron Road」の本道がこの山深い中国山地を中継地として通っていたのであろう。この地でも丹後国であったと同様にどうも高チタンの製鉄原料の産地で生産が始まり、低チタンの製鉄原料の産地へと移ってゆく技術伝播の変遷が見られるという。



産鉄の中心地「鹿庭山(大撫山)」の頂上から 360 度山また山の景観と清流佐用川の流れを眺めていると、眼には見えぬこの山郷の山間でこの地を通過して行つた産鉄の民にイメージが膨らんでゆく。



そういえば 周辺の吉備・伯耆・丹後の山々では産鉄の鬼伝説があるが、ここでは消えている。早くから畿内に組み込まれ、一通過点だつたのか・・・それとも技術交流・交替がスムーズに行つたのか・・・中国山地から南へ流れ下る千種・佐用川水系のこの地にはまだまだ知らないドラマがあつたろう。

今は本当に日本の田舎の原風景 静かな山里「讃容の里」。

古代製鉄のシンボル大撫山には日本一の反射望遠鏡のある天文台(今伊丹三菱電機で製作中と聞く)があり、全天見渡す限り星がきらめく星空の町。そして この南には現代技術の最先端 大型放射光施設が設置された播磨科学公園都市。鉄の伝来・伝播が日本を作つたように今この地から新しい発信がなされている。

兵庫県の西の端「佐用」。私にとっては名前だけでよく知らなかつたこの山里がなんとも暖かい親しみのある明るい街に感じられ、これからも何度となく通いたいところ。

晩秋 佐用川に映える夕日に送られながら

2003.11.14.夕 Mutsu Nakanishi

参考資料

「風土記の考古学」【2】播磨国風土記の巻「播磨の鉄」(執筆 土佐雅彦)

東洋文庫 145「風土記」吉野裕訳 平凡社



播磨国風土記 古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk

1. 播磨国風土記に見る西播磨の産鉄記事と和鉄の道
2. 讃容の里 鹿庭山(大撫山)製鉄遺跡群を訪ねて
3. 「讃容の里」Walk まとめ

【完】

「弥生時代が 500 年遡れる」と国立歴史民俗博物館で発表

炭素 14 の加速器質量分析法(AMS 法)による年代測定法の周辺で
国立歴史民俗博物館を訪ねる 2003.12.

1. 国立歴史民俗博物館発表『弥生時代の開始が考えられていたより古くまで遡れる』
--加速器質量分析法による C14 高精度解析による年代測定がもたらした大きな課題--
鉄器伝来の大陸との交流史も見直しか??????
(2003.7.13. 掲載資料再録)
2. 「歴史を探るサイエンス」展(2003. 10月)資料からデータを見る
 - 2.1. 放射性同位元素炭素 14 による年代測定原理と AMS 法の概要
 - 2.2. 炭素 14 年代計測法 年代較正曲線 INTCAL98
 - 2.3. 「弥生時代が 500 年遡れる」
--北九州では弥生時代が紀元前 10 世紀に始まったと考えられる--
 - 2.4. 今後の展開に期待を込めて

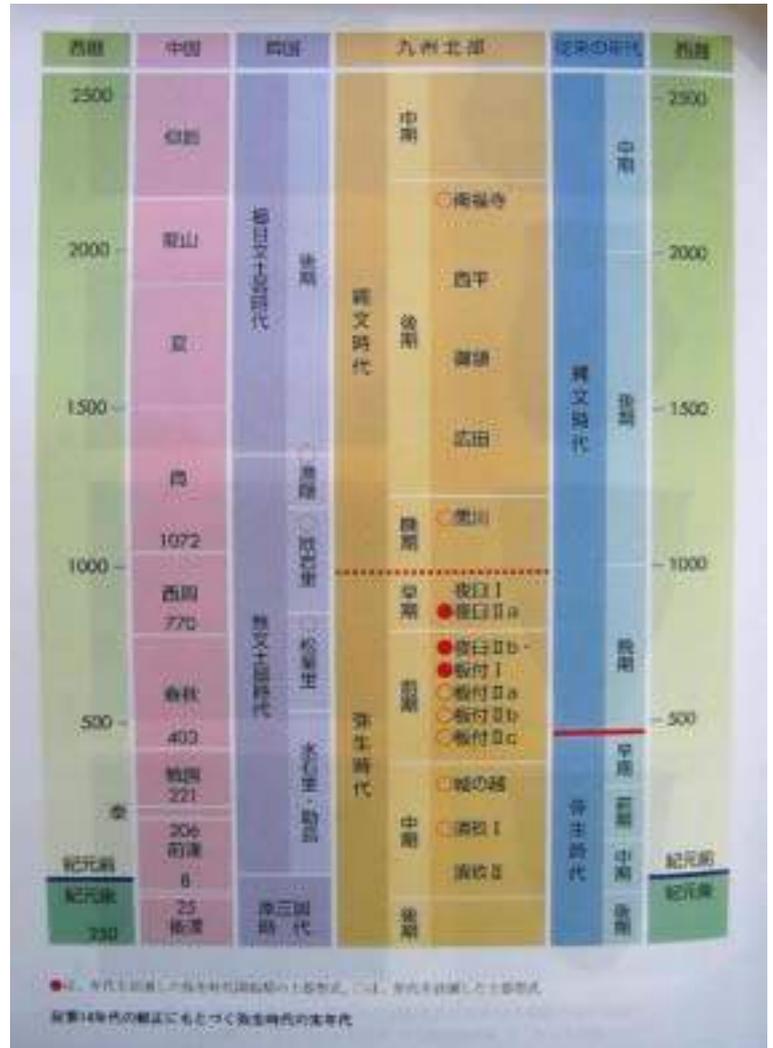
「弥生時代が 500 年遡れる。」

弥生時代の始まりは紀元前 10 世紀・・・」

そして、今秋 国立歴史民俗博物館で「歴史を探るサイエンス」展を開催して具体的な検討結果を展示すると佐倉国立歴史民俗博物館の発表(2003.5月)にビックリ。

「教科書が変わる」「中国や大陸との関係が変わる」とその信憑性についての数々の疑問と共に話題を提供している。

「従来の土器による編年の相対計測法に対して、炭素放射性同位元素 C14 の加速器質量分析法(AMS 法)による絶対計測法」というストーリーに技術屋としてはなおさら興味深深。絶対的な計測法・尺度でその信憑性が検証・証明されれば、いろいろな物が直接に比較でき、鉄器・和鉄に含まれるカーボンからも直接的な製作年代が期待できるかもしれない。加速器質量分析法は非常に大規模な設備で誰でもがすぐ出来る代物でないが、ごく微量で測定が可能。しかし、ごく微量の試料での計測であるがゆえに、試料の安定性や検量線の問題ならびに絶対値検証の確かさなど新しい技術であるだけにどれだけクリアーになっているのか・・・と批判も多い。



炭素 14 年代の較正に基づく弥生時代の実年代

この「歴史を探るサイエンス」展が 10 月から 11 月末まで、国立歴史民俗博物館で大々的に開催され、先に発表の年代測定についての具体的なデータが一般に公開された。

この「歴史を探るサイエンス」展には行けなかったのですが、12 月 3 日歴史民俗博物館を訪れ、この展覧会

の別刷や国立歴史博物館研究業績集「炭素 14 年代測定と考古学」(2003.年 10 月)を得ることが出来ました。これらの資料で、今回の弥生時代の始まりを証明する AMS 法による炭素 14 年代計測結果や本計測に用いられた年代較正曲線の検証などの詳細データが研究論文として開示され、多くの批判に答えています。

私にとっては、自分なりに C14 年代測定法の具体的な測定方法の実際や歴史歴史博物館発表の『弥生時代の始まりは紀元前 10 世紀に遡れる』とした根拠データを知ることが出来ました。その信憑性には門外漢として良く判りませんが、きっちりデータで抜けの内容自分たちの根拠をクリアーに提示するもので説得力のあるデータに納得。まだまだ、裏付け 追試の展開が必要でしょうが、新しい解析法が新しい展開を切り開いていく実例を垣間見ることが出来たように思っています。

また、同時にこのような巨大設備を扱える一握りの研究者・・・との疑問も。多くの人たちが自由にこれら設備を使った検討に参画できることが今後の展開の重要な鍵とも思っています。

測定根拠となった試料の環境・来歴の明確化や検体数の考え方や絶対年代確定の根拠となる年代較正曲線の信憑性について、まだまだ異論・論争があるようですが、データ-解析の論拠・ストーリーをきっちり整理把握することでの判断力を養う事はきわめて重要であり、もし 現在まだ十分な解明論拠になっていなくても、その論拠やストーリーが正しければ、今後の多くの人達の検証によってさらに発展解が見つけ出されてゆくものと考えます。

こんな思いもこめて『『弥生時代が 500 年遡れる』と発表された炭素 14 の AMS 法計測による年代測定法』について、素人ながら自分の頭整理として 国立歴史民俗博物館で手に入れた資料をベースに新しい年代計測法としての加速器質量分析法(AMS 法)による炭素 14 年代測定法の概要とその展開として整理しました。

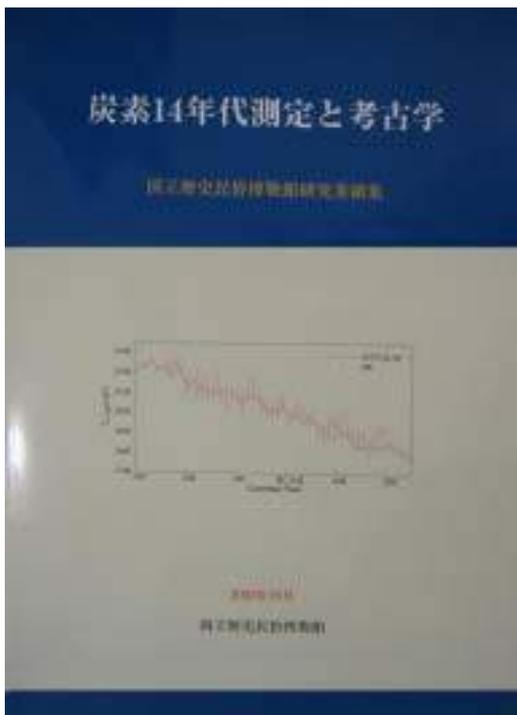
『絶対的年代測定の根拠となる C14 年代の暦年への年代較正曲線の検証そして弥生時代の始まりを紀元前 10 世紀とした国立歴史博物館のストーリー』等は今後の更なる展開のベースになるものであり、今後の更なる展開にも期待をこめて以下に取りまとめました。

資料 1. 「歴史を探るサイエンス」展 別冊

2. 国立歴史博物館研究業績集「炭素 14 年代測定と考古学」(2003.年 10 月)

3. 「加速器質量分析法による古代鉄の放射性炭素年代測定」名古屋大学年代測定総合研究センター 中野俊夫

日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会 2000 年度秋季シンポジウム論文集より



1. 国立歴史民俗博物館発表「弥生時代の開始が考えられてきたより古くまでさかのぼれる」
加速器質量分析法による C14 高精度解析による年代測定がもたらした大きな課題
鉄器伝来の大陸との交流史も見直しか?????

(0307rekihaku.htm 2003. 7. 13. 採録)

「弥生時代の開始が BC 10 世紀まで遡れる」と千葉佐倉の国立歴史民俗博物館のチームが発表。

九州北部の弥生時代早期から弥生時代前期（年表参照）にかけての土器（夜臼・式土器・板付・式土器）に付着していた炭化物などの年代を、加速器質量分析 (AMS) 法による炭素 14 年代測定法によって計測したところ、紀元前約 900～800 年ごろに集中する年代となった。

考古学的に、同時期と考えられている遺跡の水田跡に付属する水路に打ち込まれていた木杭 2 点の年代もほぼ同じ年代を示した。

これらの年代の整合性を確かめるために、前後する時期の試料、同時期の韓国や東北地方の試料の年代を測定した結果、以下のことがわかった。

- 1) 韓国の、この時代に併行するとされる突帯文土器期と松菊里期の年代について整合する年代が得られた。
- 2) 考古学的にこの時期と前後する土器の型式をもつ土器の試料の年代値と考古学的編年の間にはよい相関が得られた。
- 3) 遺跡における遺物の共伴から、同時代とされる東北地方の縄文晩期の土器の年代と強い一致が得られた。



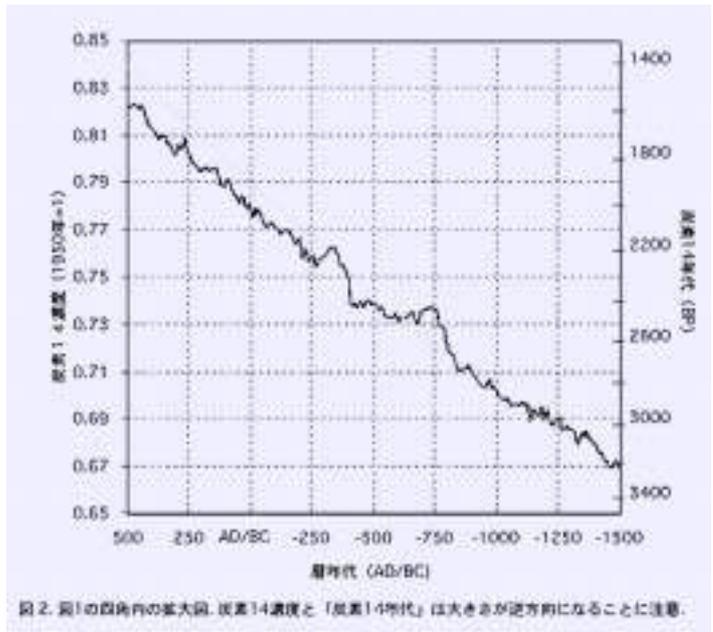
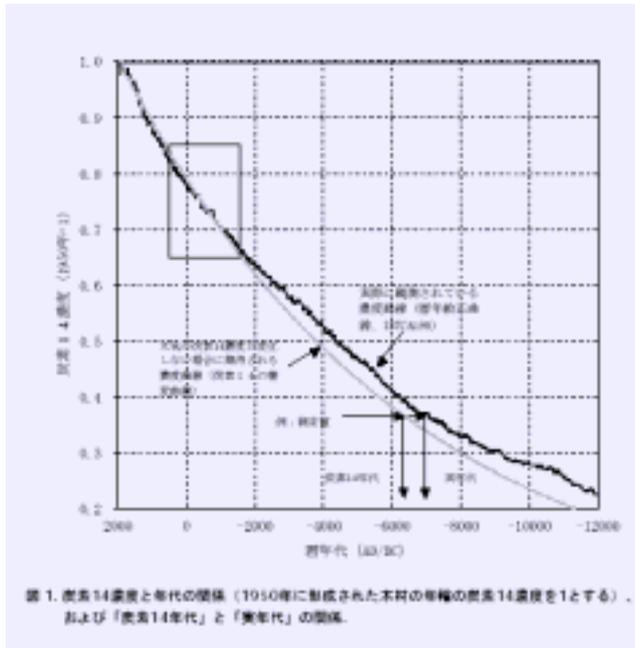
年代測定に用いられた北九州の遺跡

以上のように、夜臼・式土器・板付・式土器を使用していた時代は紀元前 9～8 世紀ごろ、すなわち日本列島の住人が本格的に水田稲作を始めた年代（夜臼・式）は、紀元前 10 世紀までさかのぼる可能性も含めて考えるべきであることが明らかとなった。

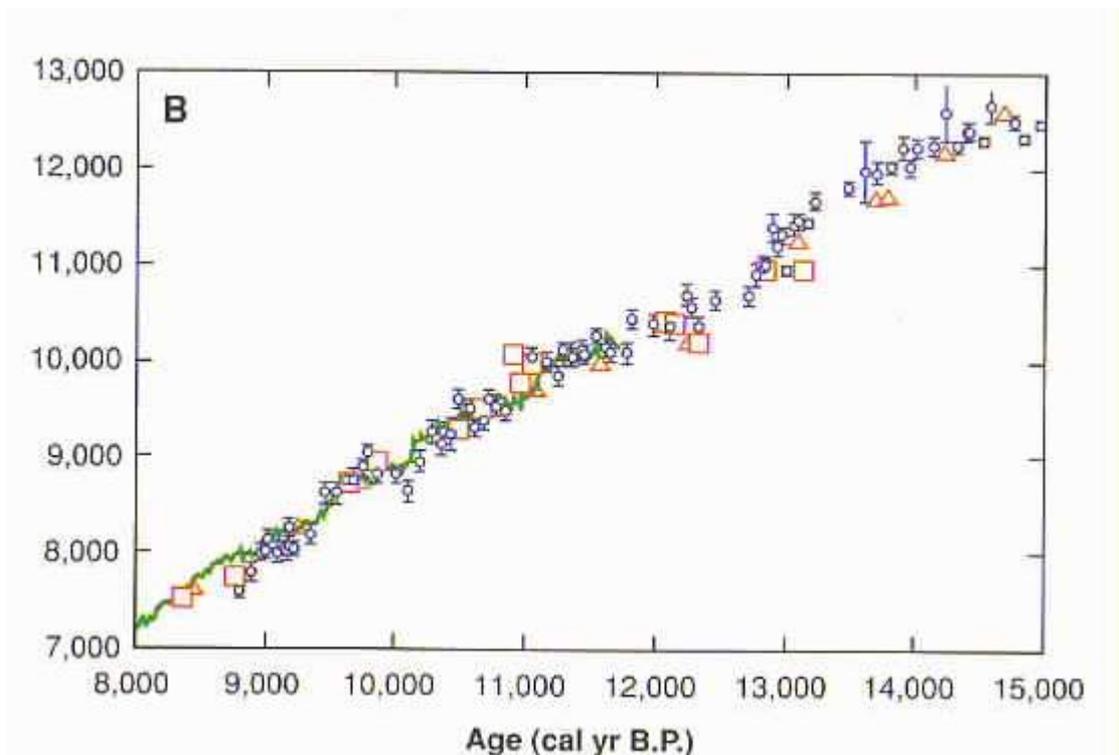
なお、この成果は平成 15 年秋に開催の「歴史を探るサイエンス」において展示される。

国立歴史民俗博物館 「弥生時代の開始年代について」 より

<http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/news/index.htm>



歴史民俗博物館で発表された測定結果資料



水月湖の 10000 年前近傍の実年代（暦年代）と放射性炭素年代のグラフ。

青丸は堆積物による年代測定、緑の線は年輪法、赤のシンボルはサンゴ礁の U-Th 法 (Kitagawa, 1998)

(注 歴史民俗博物館の年代測定検量線とは別資料です)

まださらなる検討は要するが、計測技術の進歩により、極微量でも計測が可能となった C14 加速器高精度質量分析による年代測定法を弥生時代の開始と考えられてきた北九州の弥生初期の遺跡から出土した土器に付着した炭素に適用して計測した結果 従来の土器編年では紀元前約 500 年前と考えていたのが、さらに 500 年程遡れるという。

一般的には C14 質量分析の誤差は 50~100 年といわれており、信憑性は高いという。

その結果 これが事実とすると稲作の大陸と国内伝播の年代のギャップも解消されるというが、問題は土器と一緒に出土した鉄器。

時期が BC800~900 年ということになると大陸での鉄器が普及し始める春秋戦国時代よりも日本国内の方が古いことになり、大陸と日本交流の関係など見直す必要がでてくる。
 信憑性について論議が巻き起こり、考古学の世界では大きな反響が出ていると伝えられている。



東北アジア諸国の初期鉄器文化模式図と日本弥生初期の頃の鉄器出土遺跡

この年代測定が事実だとすると鉄の伝来・大陸との交流史がヒックリかえる新事実であり、にわかには信じがたい話であるが、ロマンとしては大変興味があるし、矛盾点克服には まだ多くの検証が必要であろうが、きっちりとした根拠に基づき物理量の結果から導き出された結果にうなっている。

今日にいたるまで 新しい解析・計測評価技術の展開が大きな発明・発見をもたらし、時代を動かしてきたこと明確である。しかし 新技術にはそれが安定してこなされるまで 幾つかの落とし穴があるのも事実。エンジニアの技術解析の世界でも 何度も経験した落とし穴である。
 検体の量や状態・取扱精度・測定精度・評価値を決める検量線の精度などすべてが上がらないと全体の精度は上がらない。「すべて精度が同一に上がらなければ、精度はもとのレベルにもどる。」 暴走は慎まねばならぬ。しかし、今後 さらに きっちりとした科学の眼での検証や他の時代の測定での整合性などの検討がすすめられるだろう。



加速器質量分析装置例 歴史民俗博物館資料より

新しい加速器質量分析技術の展開が次々と年代確定に大きな威力を発揮すること間違いなく、「和鉄の歴史が書き換えられるかも知れない」と期待しつつ、門外漢として この決着に興味津々である。

2003. 7月 NHKが報ずる「弥生時代の開始年代」に関する考古学の反響報道を聞いて

2003. 7. 13. by Mutsu Nakanishi

2. 「歴史を探るサイエンス」展(2003.10月)資料 からデータを見る

2.1. 放射性同位元素 C14 による年代測定原理と AMS 法の概要

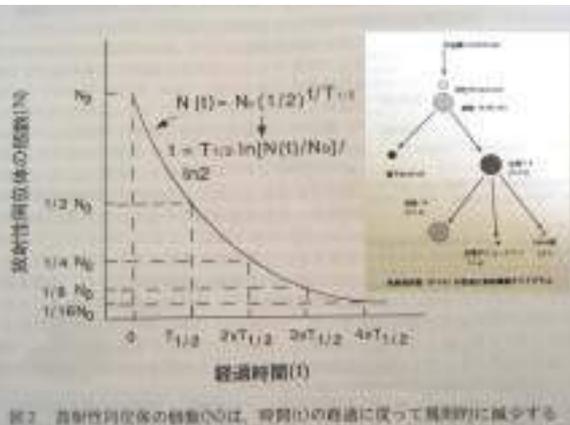
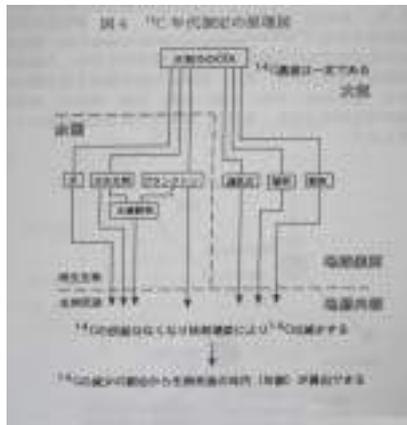
自然界に存在する炭素同位体のひとつ C14 が放射線を出しながら窒素にかわる半減期は周辺環境にかかわらず一定である事を利用してその年代を測定するのが炭素 14 年代測定法。その半減期は 5730±40 年。地球大気圏上層で宇宙線によって作られた大気中の炭素 14 量はほぼ一定(実際には変動があり、校正が必要になった)とすれば、試料の炭素 14 の濃度を測定すれば絶対年代が計測できる。

この場合、注意すべき事はこの方法で年代計測できるのは外から炭素を取り込まなくなった年代であり、例えば、木々が刻む年輪ではその年輪一つ一つの年輪を形成した年代を示す。逆にその年輪ひとつひとつにはその年の大気中炭素 14 の濃度ならびにその変動を記録している。したがって、伐採年代や木製品の加工年代を示すものでなく、試料がどんな年代の情報を示すのかを試験材採取の環境・来歴に立ち返ってよく吟味する必要がある。逆にこの年輪の一つ一つにはその年々の環境の変化などによる炭素濃度バラツキなど具体的な自然界の来歴をそのまま濃縮保存していると考えられ、絶対年代検証の大きな論拠になる。古木の年輪ばかりでなく、埋没林・湖沼の年縞堆積物 サンゴなどが年輪と同様年々の具体的な自然界の来歴を濃縮保存していると考えられている。

炭素 14 計測年代とこれら年代保存データと対比較正する事で絶対年代が出される。したがって年代校正として用いられるこの年代保存データがきわめて重要。

また、試料の汚染・異物混入にも注意が必要。特に微量での検査が可能となればなるほど試料の汚染や試料の環境来歴は重要で、試料が本当に目的を代表できるのかについても吟味は必要となる。

従来 C14 の濃度は β 計数法で計測されていたが、最近実用されるようになった AMS 法の概要を図に示すが、この方法では炭素原子をイオン化して加速して直接炭素 14 原子を一つ一つ計測する。



AMS法による C14 年代測定の装置概略

この方法では 1mg 以下の炭素原子を 0.3~0.5%の精度で測定できるという。

したがって、文化財など壊わせないものからも微量の試料を採取できるようになり、検査対象を大幅に増やすことが出来るので、総合的な年代測定の検証判断にも大きなメリットとなっている。

このように最近 炭素 14 年代測定は微量でも精度よく計測できる AMS 法が出現し、適用範囲が大きく拡大

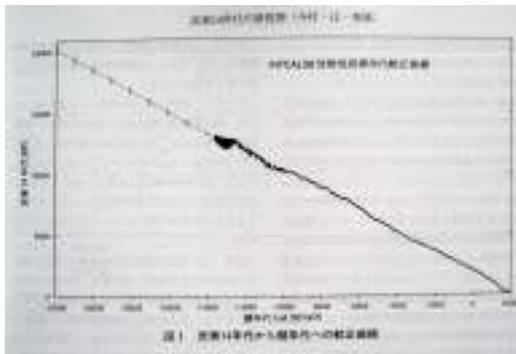
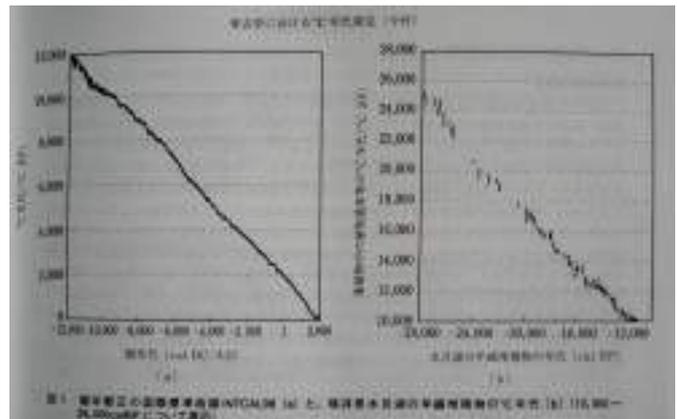
し、今まで実体測定が出来なかった数多くの物についての測定が可能になり、検討対象範囲が大きく広がり、比較検討できる事象をふくめ、情報量が格段に増加した。

最大課題はやっぱり絶対年代測定の為の絶対年代を決める較正曲線の信憑性と多くのデータによるその検証。今回の歴史博物館の発表については現在もまだ多くの論争があり、検証も必要ではあろうが、多くのデータが開示され、ひとつの解が示されていると思う。(年代較正曲線の信憑性は専門家の領域であり、素人では踏み込めない。時代の流れがそれを解決するだろう。)

本項は名古屋大学年代測定総合研究センター 中野俊夫「加速器質量分析法による古代鉄の放射性炭素年代測定」(日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会 2000 年度秋季シンポジウム論文集)の資料・図面をベースに作成

2.2. 炭素 C14 年代計測法 年代較正曲線 INTCAL98

炭素 14 年代測定法による絶対年代の確定には過去の炭素 14 濃度の変動や半減期の不確定さを相殺するため、確実に各々の年代が判っているもののチェックが必要である。年代の判った古木の年輪や海洋・湖沼の年縞堆積物あるいはサンゴなどがこの役に使われ、数々の年代較正曲線のデータベース検討が国際的に行われ、現代では 24000 年までの較正曲線(INTCAL98)が作成され国際標準として使われている。今回の歴史民俗博物館の検討もこの年代較正曲線を使って検討がなされた。



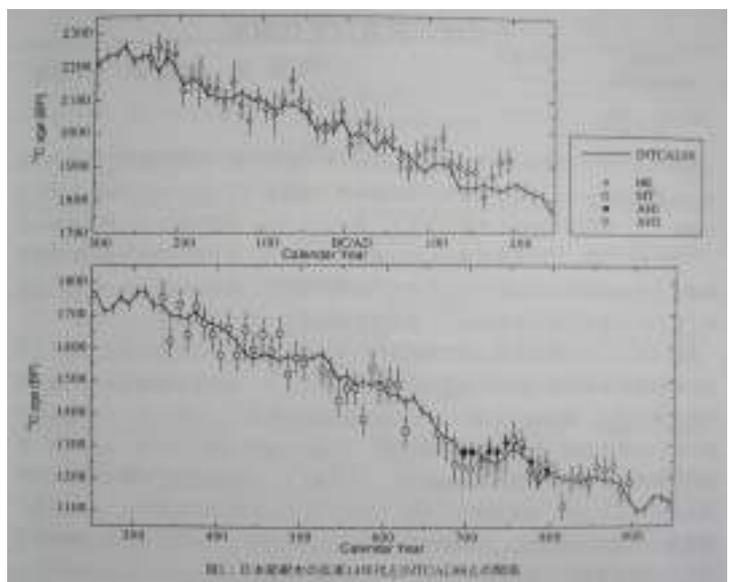
年輪年代と炭素 14 年代

測定で得られた炭素 14 濃度から得られる「炭素 14 年代」を、さらに暦年のスケールに換算することを、「較正」とよび、これは、大気中の炭素 14 濃度の年々の変動を補正するためである。そのために国際的に「較正データベース」が作られている。古い建物や遺跡から出土した古木を用いて、年輪の年代決定をおこない、それぞれの年輪材料の炭素 14 濃度を系統的に測定することによって得られ、現在は北米・ヨーロッパの木材が基準になっている。したがって、炭素 14 による国際標準年代測定法は、その基礎を年輪年代に築いている。



日本のデータベースについても屋久杉等年輪をつかった較正曲線データや福井県・水月湖の年縞堆積物に基づく 45000 年のデータベースなども発表され、国際標準とされている較正曲線(INTCAL98)と日本のデータとの地域差等についても既に検証され、国際標準とよく一致することが示されている。

これらの国際標準の年代較正データベースがそろったお陰で、何千年も前の年代が、±20 年程度の素晴らしい精度で判るようになり、異なる地域間の直接的な年代比較も可能となり、国際的な相互間交流なども見直しが可能となったといえる。



従来 考古学の領域で広く行われてきた出土土器の編年による相対年代測定では、考えられない新しい視点評価が行える時代に来ている。

「三内丸山遺跡が持つあの壮大な木の文化はメソポタミア・エジプト文明の時代と同時代。あの世界三大文明の時代に日本にも勝るとも劣らぬ木の文化があつた」と言われても俄かには信じがたがった。

あの縄文のビーナス・亀ヶ岡の土偶・縄文土器そして6本柱の大櫓・古代漆で彩られた縄文のポシェットなど「日本の黎明期 縄文時代はまだ文明以前の未開の時」と何とはなしに思ってきたが、それらが一連の文化・文明のつながりを持って インターナショナルの場に登場するなど思いもよらぬ事。

新しい検討と再考証が始まるに違いない。



縄文文化 ポシェット・ビーナス・三内丸山遺跡・土器

2.3. 「弥生時代が 500 年遡れる」

- 北九州では弥生時代が紀元前 10 世紀に始まったと考えられる -

九州北部の弥生時代開始期検討 土器付着炭化物等による炭素 14 年代測定結果

表 宮原地区沖地域における弥生時代開始期の¹⁴C年代

遺 跡	試料番号	試料種類	時 期	測定機関番号	測定 ¹⁴ C年代 (¹⁴ C 単位)	暦正年代	
						開始年代	終了年代
佐賀県唐津市梅白遺跡	1	炭	夜白土式	Beta-174312	2680 ± 40	830cal BC - 750cal BC	(77.0%)
						880cal BC - 650cal BC	(0.0%)
	2	土器付着炭化物	夜白土式	Beta-172130	2680 ± 40	630cal BC - 580cal BC	(7.0%)
						580cal BC - 540cal BC	(3.6%)
3	土器付着炭化物	夜白土式	Beta-172137	2970 ± 40	900cal BC - 790cal BC	(95.3%)	
					1340cal BC - 1340cal BC	(0.0%)	
福岡市早良区橘本一丁目遺跡	1	土器付着炭化物	夜白土式	Beta-172128	2720 ± 40	1310cal BC - 1040cal BC	(93.3%)
						990cal BC - 820cal BC	(95.7%)
	2	土器付着炭化物	夜白土式	Beta-172129	2640 ± 40	890cal BC - 870cal BC	(7.0%)
						860cal BC - 840cal BC	(4.1%)
福岡市博多区東区遺跡第12区	1	土器付着炭化物	夜白土式	Beta-172131	2650 ± 40	840cal BC - 760cal BC	(93.0%)
						890cal BC - 790cal BC	(95.3%)
	2	土器付着炭化物	夜白土式	Beta-172133	2510 ± 40	810cal BC - 750cal BC	(40.3%)
						720cal BC - 530cal BC	(64.4%)
3	土器付着炭化物	板付土式	Beta-172134	2620 ± 40	520cal BC - 520cal BC	(0.3%)	
					790cal BC - 510cal BC	(99.8%)	
					480cal BC - 480cal BC	(0.0%)	
					450cal BC - 440cal BC	(1.7%)	
4	土器付着炭化物	板付土式	Beta-172135	2590 ± 40	440cal BC - 420cal BC	(1.6%)	
					420cal BC - 420cal BC	(1.6%)	
					420cal BC - 410cal BC	(1.1%)	
					890cal BC - 870cal BC	(3.1%)	
4	土器付着炭化物	板付土式	Beta-172136	2620 ± 40	860cal BC - 840cal BC	(1.0%)	
					840cal BC - 750cal BC	(87.7%)	
					680cal BC - 660cal BC	(2.0%)	
					690cal BC - 590cal BC	(1.3%)	
4	土器付着炭化物	板付土式	Beta-172136	2590 ± 40	830cal BC - 750cal BC	(89.3%)	
					400cal BC - 650cal BC	(8.5%)	
4	土器付着炭化物	板付土式	Beta-172136	2590 ± 40	640cal BC - 560cal BC	(11.3%)	
					580cal BC - 540cal BC	(6.5%)	



前記の二つの表は歴史民俗博物館によって研究評価された縄文・弥生時代と編年された土器に付着した炭化物の炭素 14 年代測定により年代計測された土器形式の年代測定結果ならびにそれを基に再構築した弥生時代の始まりを東アジアや従来の年代評価と比較である。

『弥生時代は従来より 500 年遡れる』と発表された根拠データのひとつである。このデータからは炭素 14 年代計測の較正曲線として INTCAL98 年代較正曲線が正しいと理解すれば、北九州の弥生時代は紀元前 10 世紀に遡れる。

一方 従来のこの時代の年代計測は次のような方法で決定されてきた。「前 1 世紀 前漢の時代以降の中国・韓国の金属器は製造年代がはっきりしており、これら年代のはっきりしている渡来鉄器をベースに出土した年代を決め、それ以前は土器の形式を一つ一つこつこつと綿密に調査検討して編年し、一つの形式の土器が存続するのは約 30~50 年として土器間の相対年を数えて年代を決めてきた」と言う。

この長年にわたる緻密な土器編年研究は凄い業績ではあるが、年代測定という面では土器編年に基づく相対的な年代計測となり、直接的な絶対年代評価は出来なかったと言える。

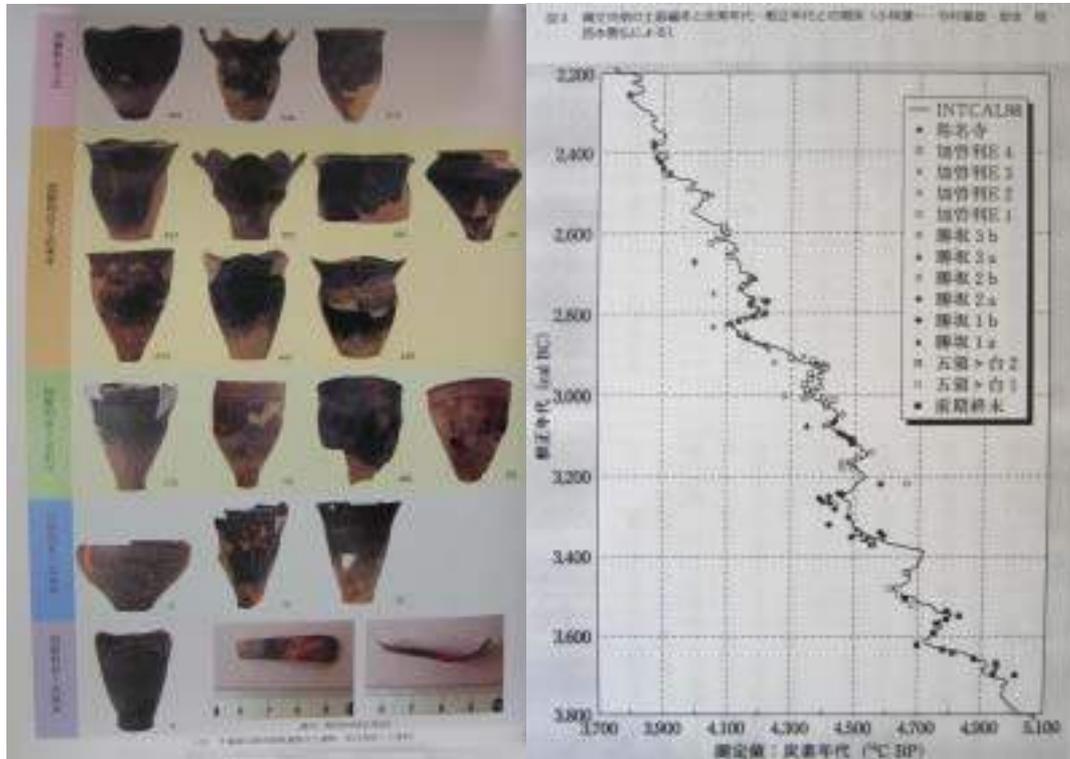
水田耕作が始まる弥生時代の始まりや縄文時代の年代については直接的な実証データがなかった。そんな中で炭素 14 年代測定法が重要な役割を演じるといえると考えられるが、当初は試料の汚染や環境来歴の正確な検証の重要性等の認識のあまみや炭素 14 年代と絶対年との較正曲線がまだ実証評価されていなかった事もあって、疑問符も多く、中々年代測定の中心にならなかったという。

AMS 法の登場で微量の試料測定が出来るようになり、しかも国際的な較正曲線が示され、古木年輪等とでこの絶対年との関係が明確になってきて、絶対年代計測の中心として、従来の方法との関係や時代測定が見直される事となった。

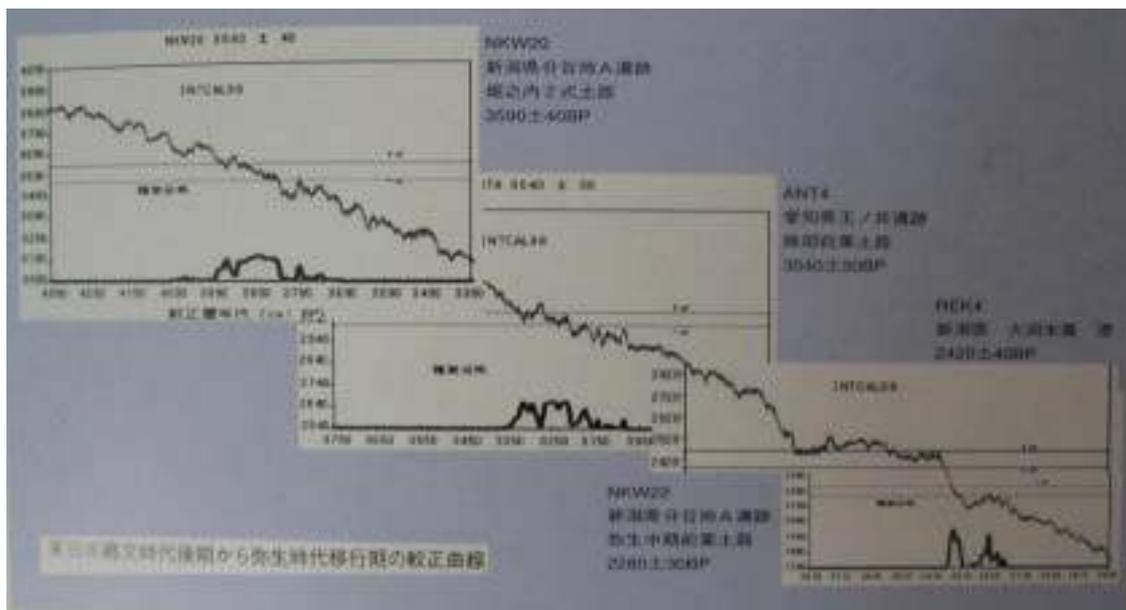
国立歴史民俗博物館の研究では日本古代の年代測定の基本となっている土器編年について AMS 法による炭素 14 年代測定結果との相関について詳細な検討を行い、一部の例外を除きその序列には矛盾がないが、縄

文後期・晩期の時代がさらに遡り、そして、問題の弥生時代の始まりについて、九州北部では紀元前 10 世紀にまで遡れると評価した。

また、この九州北部と青森に水田耕作が始まる時代まで約 700 年のギャップがあることなどの事実も明らかにし、縄文晩期から弥生時代の始まりそして中国の金属器が多数表れてくる紀元前 1 世紀までの日本の状況を対年評価で再構築を評価するに至ったわけである。



縄文時代中期の炭素 14 年代測定値(土器編年試料)と較正曲線の関係



約 500 年遡れるとなると大陸の中国・朝鮮半島と日本との交流の歴史についても一つ一つ見直さねばならぬ。特に鉄器伝来の問題は衝撃的である。500 年遡れるとするとこの時代朝鮮半島ではまだ鉄器は見つかっておらず、従来鉄器は朝鮮半島を通過して伝来したとする定説が怪しくなる。弥生の鉄器が始めて発見されたとする曲がり田遺跡の鉄斧はどうなるのだろう。

鉄器伝来とその後の伝播については常に朝鮮半島との関係が論じられてきたが、中国との関係も見直す事が必要となろう。

もっとも、鉄器にはその製造過程で大量の炭素が加熱燃料から人工的に持ち込まれており、現在出土している鉄器のカーボンからの年代計測が可能となれば、鉄器の年代分析情報からその信憑性も明らかになってくるであろう。

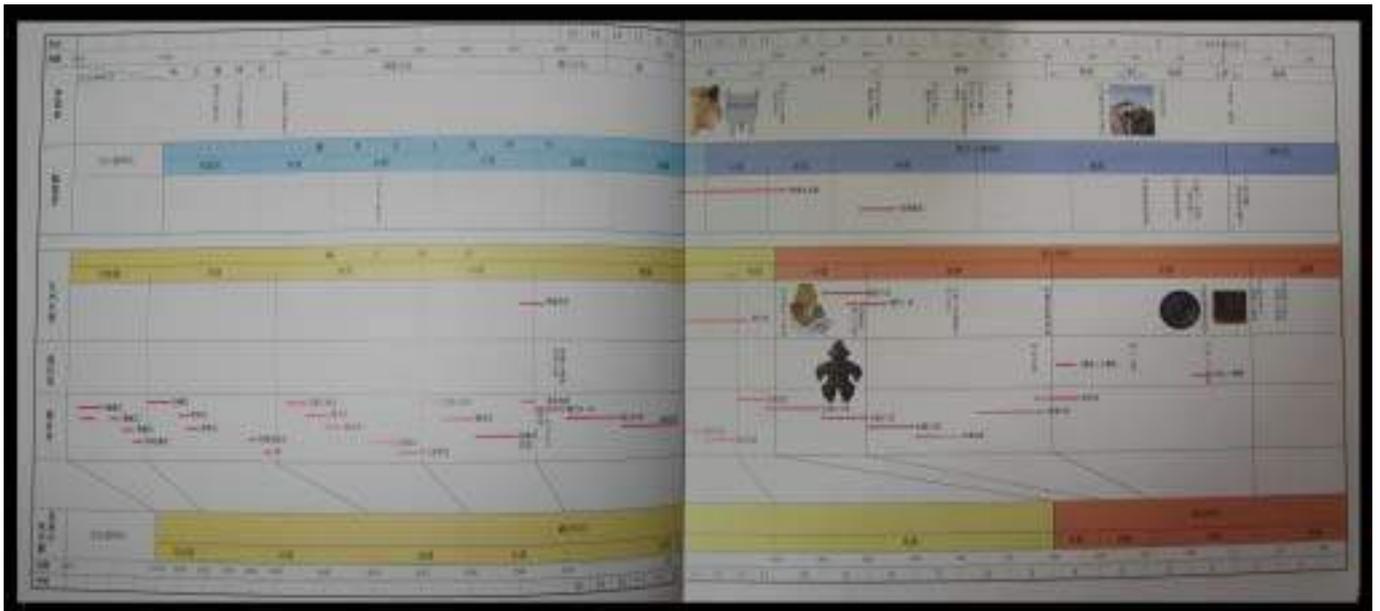
鉄器以外にも 興味は色々・・・

縄文の漆 漆のルーツにも・・・

弧絶して考えられてきた日本の古代の歴史が東アジア・世界の中に存在感を持って登場するのか・・・

日本の木の文化は世界文明のスケールをもつと言う。その信憑性にも迫れないか・・・

C14 較正年代による縄文・弥生時代の暦年表



本表から、従来の評価との対比と東アジアにおける年代較正した日本の位置付けがよく読み取れる。

以上 国立歴史民俗博物館で得た下記資料をベースに取りまとめた。

資料 「歴史を探るサイエンス」展 別冊

国立歴史博物館研究業績集「炭素 14 年代測定と考古学」(2003.年 10 月)

2.4. 今後の展開に期待を込めて

従来の日本の弥生時代の年代評価と炭素 14 年代測定法の大きな差の争点のポイントは次のように思える。

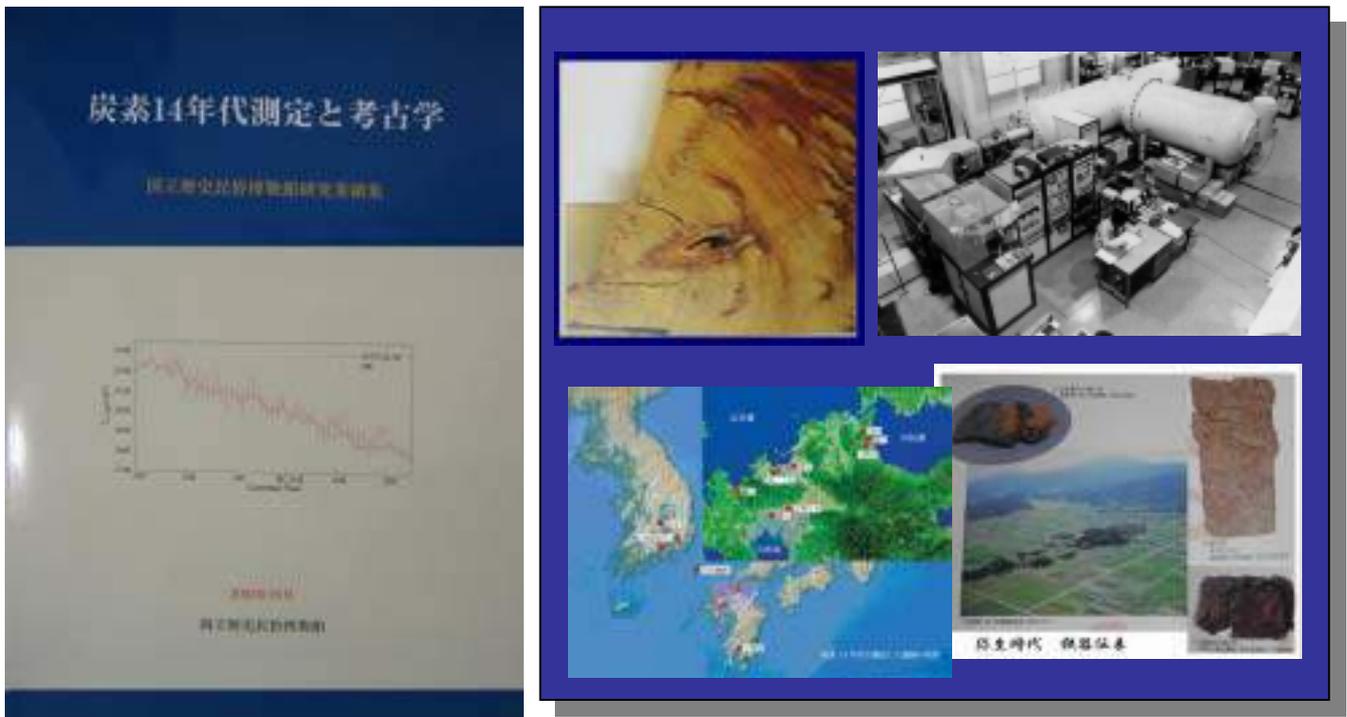
1. 従来の方法では この時代の年代評価が出土する土器の形式の編年により年代が相対評価され土器形式編年の年に絶対評価できるしっかりした根拠がない。
2. 一方年輪等の炭素 14 年代測定の較正曲線の信憑性はまだしっかり証明されておらず、INTCAL98 年代較正曲線が日本の絶対評価に使えるとした根拠はまだとぼしく、検体の来歴などをふくめて、信憑性評価の合意がまだ得られていない。

門外漢では在るが、自分流に考えると間接的評価から直接評価へ そして論理的な筋道が順次積み重ねられていく筋道の方がいずれは 誤差が少なくなり、真に近づけ、その流れに沿って評価する事は大いに意義があると思う。ただし、常に前提と論理が成り立つ範囲を常に明確にして、それを乗り越える時は常に論理が必要であることは銘記しておかねばならぬ。

一方 相対的な総合評価は矛盾を含みながらも全体を良く見通し方向視点を良く現す。したがって、大筋の方向の流れでは優れた面が多く、あいまいさが多い時には正しい手法である事も否めない。
さて、現状は どの位置にあるのか・・・今はどうなのか・・・

でも 国立歴史民俗博物館の研究成果が新しい視点を切り開き、多くの追試検証が進み、真実が明らかになるであろう。また、この方法の応用展開からさらに新しい事実も浮かんでくるであろう。
さしずめ、ぼくにとって一番の興味は古代特に上古の時代の「鉄の問題」と「大陸 中国・朝鮮半島と日本の交流の歴史認識が大きく変わってくるのか・・・」ということである。

解析・評価技術の革新 新しい装置の出現が技術全体を引っ張ってゆく。地味な技術開発屋の一番面白いところでもある。縁の下の力持ち 華々しさはないが、確実に時代を変えてゆく。
この面白さをもこの国立歴史民俗博物館の研究成果に感じており、今後の展開を注視したい。
また、この新しい展開をもたらした質量分析器の設置には莫大な費用がかかり、まだ国内で数箇所に設置されているに過ぎず、おいそれと誰でもが使えるという代物でない。世の常として、一部の人達の独占使用にならぬ広いそれを必要とする研究者の利用が可能となる共同利用・共同研究 学際研究の展開が今以上に進む事を望みたい。



「弥生時代が 500 年遡れる。 弥生時代の始まりは紀元前 10 世紀・・・」
これにより、縄文・弥生の時代感がますます変わる また鉄の伝来は何時・・・
上古の時代 中国・朝鮮半島と日本の交流の歴史が大きく変わるのか・・・

2003.12.30. by Mutsu Nakanishi

3. 岩手県民製作の長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて



2004.1.10. aterui.htm by Mutsu Nakanishi



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上」
と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住んだ自分たちの祖先 蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」とその一族 蝦夷 を指す

そんな思いの岩手県の人達が一昨年製作した市民長編アニメ映画「アテルイ」がある盛岡在住の高橋克彦氏のすごい迫力の大著小説「火怨」をベースに作られた映画である
一度 見たいと思いながら実現できなかったのですが、
DVD・ビデオ販売されているのを知ってやっと見る事が出来ました

2004.1.6. 朝日新聞朝刊「opinion news project」欄に論説副主幹 桐村英一郎氏「いらちの小憩 森を守ろう」と題して次のような一文が掲載された。

森、山、そして自然に宿る神々が昨今、注目をあつめるのはなぜだろう。

(中略)

経済も科学も文化も右肩上がり伸びるといふ史観は「稲作と金属器、国家統合の原理というハード、ソフト両面のハイテク」が日本に持ち込まれた弥生時代から始まったのかも知れない。

目標感覚が狂い、不安にかられた日本人の中で自然を畏怖し、その恩恵に生きた遠い過去の「血」がさわぎはじめたのではないか

弥生時代から続いた自然支配の文明が行き詰まっている。

世界は縄文文化に回帰せねばならない」というのは哲学者の梅原猛さんである。

(中略)

ここで私たちが当惑し、立ち止まることは決して無駄なことではない。

血の中に受け継いだ自然と共生した時代に思いをいたし、小さくとも今できる行動をする。

そんな年にしたいものだ。

2004.1.6. 朝日新聞朝刊「opinion news project」欄

論説副主幹 桐村英一郎氏「いらちの小憩 森を守ろう」より

ぼくの受け止めは 縄文を体現できる東北の楽しさと現地へ出かけて色々得た実感の数々。
さらに使い古された言葉ではあるが、「歴史を振り返るもよし」 自然への回帰 風来坊はやめられぬと・・・。
また、やっとみつけた 岩手県の市民製作 長編アニメ映画 「アテルイ」の姿をこの文にかさねていまし
た。

東北に通って「和鉄」について歩いているうちに 『日高見(北上)の鬼』と呼ばれる蝦夷の族長「アテルイ」
に東北の人達が親しみを込め、熱っぽく語るその人物像ならびに「アテルイ」への強い連帯感にビックリ。
アテルイの生涯と蝦夷の戦いを熱っぽく描いた盛岡在住の高橋克彦の小説「火怨」。

吉川栄治文学賞を受賞した大著で、時代を感じさせない凄い迫力がある。

これが 東北人の思いを込めたアニメ映画「アテルイ」の原案。

東北人で語られてきた蝦夷観 田村麻呂と蝦夷との交流ほか当時の東北の事情をよく現しているとともに現
代を生きる知恵も・・・・・・・・。

2003.1.10. MutsuNakanishi



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上」
と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住ん
だ自分たちの祖先 蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」 と
その一族 蝦夷 を指す

今から約 1200 年前 奈良時代の末期から平安時代初期にかけて坂上田村麻呂を征夷大將軍とし
た蝦夷征伐があった。

坂上田村麻呂がでるまで、朝廷が苦しめられ続けた蝦夷の族長が「アテルイ」

この蝦夷征伐のもうひとつの側面は今まで輸入に頼っていた「金やくるがね」がこの蝦夷の支配
地ででたことによる鉱物資源の支配

朝廷の蝦夷征伐の大軍を苦しめぬいた蝦夷の族長がアテルイ。

蝦夷の心情に共感しつつも戦わねばならなかった征夷大將軍坂上田村麻呂

長年にわたる戦争の中で、アテルイは蝦夷の和平を願い、盟友・モレと約500人の兵とともに
田村麻呂に降伏。

坂上田村麻呂の「蝦夷支配に活用できる人材」と助命嘆願もむなしく、アテルイは河内国で斬首。



古代東北の動き

710 (和銅3)年	平城京遷都
724 (神亀1)年	朝廷が、東北制圧の拠点・多賀城(宮城県多賀城市)造営
767 (神護景雲1)年	伊治城(宮城県築館町)造営
774 (宝亀5)年	蝦夷の抵抗始まる
786 (延暦5)年	朝廷軍が胆沢攻撃へ
789 (延暦8)年	続日本紀に阿弖流為(アテルイ)の名が登場。 朝廷軍5万2800人が第1回胆沢攻撃。 アテルイ率いる蝦夷が北上川東岸の巢伏村で対戦。 ゲリラ戦で朝廷軍に歴史的勝利
793 (延暦12)年	坂上田村麻呂が約10万人の兵を率いて第2回胆沢攻撃。 アテルイ軍、大打撃を受ける
801 (延暦20)年	朝廷軍が第3回胆沢攻撃。アテルイ軍、力尽く。朝廷軍が胆沢制圧
802 (延暦21)年	田村麻呂が蝦夷支配の拠点・胆沢城(水沢市)を造営。 アテルイ、モレと蝦夷約500人が田村麻呂に降伏。 アテルイとモレ、河内国(大阪府枚方市付近)で斬首される
803 (延暦22)年	志波城(盛岡市)造営
811 (弘仁2)年	徳丹城(矢巾町)造営

坂上田村麻呂を信じ 更なる騒乱による犠牲と荒廃をさけ、自ら投降り平和共存を願

「50年 100年先を見て その中での平和な暮らしの為に」

「子供には 戦いを教えるな 戦わせるな」

と恒久の平和共存を貫く

「アテルイは親、兄弟を愛し、美しい自然を愛すために生きた。

21世紀の人間がどう生きるかという大切なメッセージがある」

と東北の人達はメッセージを送る。

話を聞くにつれ、今日本人が忘れかけている人物に出会ったような気がしていました。

ビックリするほど1200年前の構図と同じ鉱物資源を狙った大国支配の構図と弱者支配の眼

現在のイラク戦争の大国主義の構図がそっくりそのまま当てはまるような気がしてなりません。

賛否は別にして 現在の「高速道路公団民営化」の構図も

中央・官僚と地方同じではないか……

……等々。

【参考】

巨大勢力となった寺から逃れる為、奈良平城京から平安京へ遷都されたこの時代。

東寺・西寺しか許されなかった平安京に蝦夷の制圧に成功した坂上田村麻呂は国家

加護の道場として清水寺の建立を許されている。

東北にある蝦夷の勢力の強さがこのことから推察される。

また、坂上田村麻呂の頭の中に蝦夷の族長「アテルイ」への思いがあったかも知れぬ。

その背後の東山 坂上田村麻呂が葬られた地には「將軍塚」の名前が今も残されている。

東北の地にも、大將軍 將軍通りなどの地名が今も残る。



なお、京都 坂上田村麻呂の建立した清水寺には当代になって関西アテルイ顕彰会など市民団体の手によって アテルイ・モレの碑が田村麻呂・アテルイ友情のしるしとして建立された。

【 「和鉄の道」 関 連 】

アドレスリンクに変更した新しいアドレスリンクが隠れています

- 和鉄の道 8. 岩手県北上川流域の和鉄 一関博物館へ
蝦夷の主要武器「蕨手刀」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて
<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/jstlbb08.htm>
- 和鉄の道 5. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/kdiaktaa00.htm>
- 和鉄の道 6. 奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上(和賀)仙人峠越-
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/wgasen00.htm>
- 和鉄の道 8. 心残りだった東北 和鉄のふるさと walk
北上江釣子・砂鉄川・蔵王
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・・ 北上市市民憲章 」と歌う
東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いて
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/0307ttohoku.htm>

和鉄の道Ⅰ <http://www.infokkna.com/ironroad/book/bookiron2001.pdf>

和鉄の道Ⅱ <http://www.infokkna.com/ironroad/book/bookiron2002.pdf>

和鉄の道Ⅲ <http://www.infokkna.com/ironroad/book/bookiron2003.pdf>

4.

鉄のモニュメント 東京六本木ヒルズ (66ビル群) 2003.12.5.

66tkyo.htm by M. Nakanishi 200401.8.



昨年 12 月 東京へ行ったついでに 何かと話題の多い六本木ヒルズ 通称六本木六丁目ビル群(66 ビル)を見に行きました。

クリスマスに近い夕方 多くの人でにぎわっていました。

地下鉄の階段にはこの地下でもインターネットがそのまま使えるハートを横にした「インテル」マークが並んでいる。

この界限 IT ビジネス・情報通信・マスコミ・放送など新しいビジネスの集積地。「東京を変える 日本を変える」といわれている。

昨年完成した東京の高層ビル群と同じく 66 ビルの建設には私の会社の溶接材料も他社の材料と共に使われていまして、その材料展開には苦労しました。

一連のこれら高層ビル群建設に 軽量化が可能な強度の高い新鋼材(高降伏点高靱性鋼)が使われ、特に耐震性に対する配慮から、溶接部にも高いねばさ(靱性)と強度が要求され、新しく開発された高強度高靱性溶接材料が大量に、このビル群建設に使われました。

そんな関係で 汐留・品川・丸の内・大崎のビル群 気になって完成したら見に出かけ そして その一連の高層ビル群の最後が66ビル。

どのビルも天を貫く大きさと美しさに見とれ、その華やかさに眼を奪われるのですが、「2003 年問題」として巷でささやかれてきた周りとの調和がいつも帰る時には頭をよぎります。



まあ、そんな意味からすると この 66 ビルはそんな不安感の頂点のビルか・・・・・・
こんな考え方 時代遅れなのでしょうが・・・・

突如出現した巨大ビル いったんその中に入るとなんでもできるし、人があふれ 凄い賑わい。
新ビル群が目指しているように まさに 新しい街が出現した。
ビルの中に 街並とともに人工の自然空間が作られ、熱気にあふれている。

印象としては これは パビリオン ラスベガスの砂漠の町に突如したパビリオン ビル群ではないか・・・・・・

一度中に入れば 逆に外へ出さないような内部のわかりにくさ。
迷路ではないが、外へ脱出しようとした時のわかり難さ。むしろ 外へ出にくくしている節も感じる。

独立・孤立 周辺との調和のない街づくり
ビルの中では 『やさしさも 人間味』を歌うが、外界をシャットアウトした独立・孤立主義 外に出ると冷たい風が吹く・・・・・・日本人の一番好きで それでいて 一番批判している 『村社会』の匂いを感じています。

外をシャットアウトした冷たさ ある種の関西人が東京に抱くイメージか・・・・・・

スーパーマーケット・マクド 銀行 そして シリコンバレー型 IT ビジネス など アメリカ型のビジネスモデルを競い、瞬間・瞬間のスピードで成功を鼓舞しているあいだに、50年・100年のスパンではみんな奈落の底を体現。新しいビジネスモデルを求めて もがいている。

成功が大きければ 大きいほど 回りに及ぼした影響は大きい。決して 自分だけでとどまらぬと。
東京にできた新高層ビル群の街になにか 新しいソフトが持ち込まれ、これらの街がセンターとなって 外への広がりのある街づくりの巨星にならないのか・・・・と。

そんなこと考えながら 見上げた東京タワー。
非常にシンプルながら 暖かい 『赤』の照明に感動しました。
まあ 年老いた為を感じるさびしさか・・・・とも感じますが、何か違うとビル群を見上げました。
ずっと感じてきた東京新高層ビル群についての期待と後ろめたさそんなことを感じるまま書き連ねました。

2003.1.8. 東京 六本木ヒルズ を紹介してくれた友達への返信メールより
Mutsu. Nakanishi

Nさんが紹介してくれた 66 ビルの図書館・サロンが自己主張せず、地道にそんな輪につながるといいですね・・・・

友達が紹介してくれた 66 ビルが始めた新しい息吹
東京にはなかった新しい空間 民間が行政の分野に踏み込む新しいソフト空間 必要かもしれません
新しい社会を築い



てゆく原動力かも知れません。 でも それは 『平和と調和』があつてこそ・・・・・・・・

大学の山仲間 N 氏 のメールより (抜粋 整理)

友達がくれた 66 ビルの新ビジネスの概要 下記 友達のメールから紹介

新年早々、新しい話題を提供したいと思います。

所は東京都心の六本木に、巨大な森タワーに代表される六本木ヒルズ。凄い人気を博し、大勢の人で満ちあふれています。

しかし、この喧噪とは、まるで別の静寂な世界が、この巨大ビルの中にあります。

最上階に近い49階にある アカデミーヒルズです。そこに、新しい考え方で作られた図書館があります。

でも、普通の図書館と全く違うのです。

昨年末、見学の機会を得ましたので、見聞したところを記しましょう。

第一の特長は、会員制です。二種類ある会員のどちらかに、会費を払ってないと、この図書館は使えません。

設置・経営体である森ビル(文化事業部が担当)の収益源は、この会費です。

会員には、図書館の全域を使え、中でも、利用時には専用となるオフィスなどを利用できるオフィスメンバーと、そうでない コミュニティメンバーがあります。

前者は、年中どの日でも、24時間使えます。五人まで受け入れ可能な応接室も使えます。そうしたことを支える設備と体制が 取られているのです。その分、会費は高く、入会金が三十万円で、月々の会費が六万円必要です。

後者は、利用出来る空間や設備が限定され、時間も朝8時から夜11時まで限られますが、入会金は一万円で月々の会費は六千円です。

中に、ライブラリーカフェがあります。また、同じ階にある六本木フォーラムには、大中小の会議室やホールがありますが、図書館(六本木ライブラリー)の会員は自ら主催する会議などに使えます。料金は必要です。

もっとも、こうした有料図書館というコンセプトは、公立の図書館には受け入れがたいものであるらしく、ごうごうたる非難が寄せられていると伺いました。

曰く、図書館は、公平、無差別、無料公開であるべきだと言うわけです。一方、見学して、目から鱗が落ちたという、公立の方の感想もあるそうです。

民間企業が、寄付ではなく、自ら設置して有料で運営する図書館というものが、世界で初めて、日本に登場したと言うのは、この国の独創性に新たな光りが差し込んできたような 感じすら受けます。

批判も大切ですが、建設的な思考や取り組みは、それよりまして大事なように思います。

以上 2004.1.8. N 氏からのメール 抜粋

「和鉄の道・Iron Road」 口絵 【1】たたら製鉄原料

5.

砂鉄ともうひとつの製鉄原料(餅鉄・高師小僧&鬼板)

tetsu3kuchi.htm 2004.3.1. by M. Nakanishi

1. 砂鉄原料 磁鉄鉱を含む花崗岩類ベルトとその採取

兵庫県立人と自然の博物館 先山徹氏 「赤穂に塩田を作り出した播磨北部のたたら製鉄」より

2004.1.18.兵庫県立歴史博物館で兵庫県立人と自然の博物館 先山徹氏「赤穂に塩田を作り出した播磨北部のたたら製鉄」のセミナーがあった。

古代からの有数の製鉄地帯である北播磨 千種・揖保川水系のたたら製鉄を中心に たたら製鉄とその原料となる鉄を供給した岩石の分布そして、たたら製鉄が自然環境や文化に与えた影響についての判りやすいセミナーであった。

たたら製鉄の中心原料である砂鉄 その砂鉄を含む花崗岩分布の存在 そして この砂鉄を含む花崗岩を崩し砂鉄を得る鉄穴流しによる地形の変化など 明快な話を聞くことが出来ました。

また、 山砂鉄の採取による山崩しが流域に与えた影響の凄さ 数値や地形変化で抑えて講義してもらおうと本当にその凄さに改めてビックリ。

中国山地の砂鉄地帯の分布と砂鉄を含む実際の花崗岩などが同時に判りやすいパネルで展示され、非常に参考になったので、紹介する

砂鉄を育んだ花崗岩類



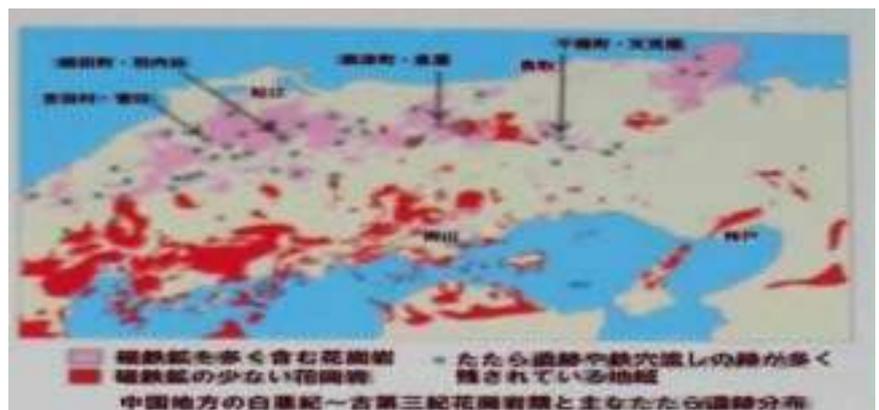
近畿地方から中国地方にかけて、数々のたたら製鉄遺跡が残っている。

そのたたら製鉄地帯は主に中国山地から日本海側にかけての花崗岩地域である。

花崗岩に含まれる鉄鉱石は磁鉄鉱とチタン鉄鉱がありますが、良質の鉄が得られるのは磁鉄鉱の方で、その量は日本海側の花崗岩に含まれている。

花崗岩が磁鉄鉱を含んでいるかどうかは磁石をあててみるとわかります。しかし、チタン鉄鉱は磁石をひきつけません。また、すべての花崗岩がこれら鉄鉱物を含んでいるかということそうではないが、鉄分ということで分析するとその含有量には大差がないということらしい。

花崗岩の黒い斑点模様は黒雲母であり、この黒雲母等の斑点のところに



磁鉄物が偏在し、磁鉄鉱もここに偏在し、かつ この花崗岩に含まれる磁鉄鉱などの鉄鉱物の量はせいぜい 0.1 ~ 1.0vol %程度であるという。

したがって、砂鉄つまり花崗岩に含まれているこの磁鉄鉱を取り出すには、大量の花崗岩を含む山を崩し、流れ下る川を利用して、鉄穴流しなどの方法で磁鉄鉱のみを沈積分別して取り出す。

このようにして取り出された砂鉄が山砂鉄である。

また、山を崩して鉄穴流しなどの人工的な方法での砂鉄採取が行われなくとも、自然に川筋には川に流された岩石が流れの中で砕かれ、岩石に含まれていた磁鉄鉱が川筋や河口の海岸に堆積する。これが、川砂鉄や浜砂鉄である。

日本各地にはこのような砂鉄を産する川筋や海岸が各地に存在する。

とりわけ 中国山地には良質の鉄を作るチタン含有の少ない磁鉄鉱を含む大花崗岩地帯があり、たたら製鉄が隆盛をきわめ、大量生産される時代になめにつれ、日本各地のたたら製鉄の産地を凌駕して、中国山地が一大鉄の生産地帯となってゆく。



近畿から中国地方の磁鉄鉱を含む花崗岩地帯 2004.1.18. 兵庫県立歴史博物館展示より

たたら製鉄が地域の自然や文化に与えた影響

兵庫県立人と自然の博物館 先山 徹氏

「赤穂に塩田を作り出した播磨北部のたたら製鉄」より

古墳時代から明治時代初期にかけて、日本列島の各地で「たたら製鉄」が盛んに行われた。なかでも、中国山地は最大の生産地。

「たたら製鉄」には、大量の炭と砂鉄が必要であり、これら採取のために周辺の山々を切り崩し、自然に大きな影響を与えた。



日本の産業を支えた「たたら製鉄」が地域の自然・文化に与えた影響を兵庫県北播磨千種川・揖保川流域の

「たたら製鉄」に見た。

花崗岩に含まれる磁鉄鉱すなわち砂鉄の量は花崗岩全体のせいぜい1vol.%程度なので、たたら製鉄原料となる砂鉄を確保するため、砂鉄を含む山を崩して 川にその土砂を大量に流し込み砂鉄を選別採取する。

このため、産鉄がその地域の産業・文化を大きく育むとともに、砂鉄採取のため 山を崩す事が山や川筋の地形を変え、洪水をおこすなど産鉄の山の民と川筋下流の田の民の争いを引き起こす。

砂鉄採取の為、山を崩す事により、山の姿を変え、そして、川に流れ込んだこの大量の土砂が川筋や河口に堆積してその地形を変える。

上記写真は兵庫県北播磨 千種川・揖保川流域のたたら製鉄地帯で 砂鉄採取のため山を崩す事により生じた人工地形の変化を示しています。

また、下記の写真は北播磨のたたら製鉄地帯から揖保川に大量に流れ込んだ土砂が揖保川の河口赤穂まで流れ下り、河口近傍に堆積して河口地先を広げていった様子を示している。

この赤穂の揖保川河口では遠浅の地先の広がりを利用して、急速に塩田が発達する。

このような 川筋を流れくだった土砂による河口の地先の広がりや奥出雲たたら製鉄地帯から出雲宍道湖に注ぎ込む斐伊川の河口にも特徴的に見られている。広大な田園地帯が広がる出雲平野の一部もこうして形成されたという。



北播磨たたら製鉄の隆盛が千種川河口の赤穂塩田形成に及ぼした影響

産鉄の民と他の民が争い それが日本各地に残る鬼伝説などとなって残っている事は知っていましたが、今も典型的な自然改造の跡が残っており、

その是非は別にして たたら製鉄の作り出す地形変化までが、その地の産業・文化にまで重要な影響を与えていた事をはじめて知りました。

やっぱり今も昔も「鉄は産業の米」 スケールの大きさにただ ビックリです。

たたら製鉄に必要な砂鉄量の確保と山の切崩し量の算出

磁鉄鉱を含む花崗岩 約 30～40 立方メートルを切り崩すと約 1 トンの砂鉄が取れる
一回のたたら製鉄操業で 約 13 トンの砂鉄を使うとすると
約 500 立方メートルの山をくずさねばならぬ

そのほとんどが 鉄穴流しで土砂として下流に運ばれ、下流域や河口に堆積。
また 山はその形を変える。
木炭も山の木々が大量に切られることを考えるとその凄さが見て取れる。

1. 永代たたら操業 一回で
砂鉄 13 トン・木炭 13 トンを使い 2.5～3 トン のケラ塊が得られる
2. ケラの 1/4～1/3 が玉鋼
3. 最盛期 ひとつの高殿で年間 50～60 回操業
4. 全国年間生産量 8000～10000 トン（江戸時代）
5. 日本刀 1 本（70cm）に 4.5 kg の玉鋼が必要
6. 磁鉄鉱の比重 5.5
7. 花崗岩の中に含まれる磁鉄鉱の量 0.1～1.0 vol. %

2. 餅鉄（磁鉄鉱）



山中の鉱脈にある鉄鉱石が川を流れ下る間に砕かれ、丸い粒状になったもので、川の中にある。
釜石周辺の北上山地から流れ下る川では、今も算出。

この餅鉄を始めとする鉄鉱石を砕いて製鉄原料としたたたら製鉄が東北地方には古くから存在。
古代にはこの鉱石原料と砂鉄原料をもちいたたたら製鉄が並立した





餅鉄の産地 北上山地 釜石より 北上山地 仙人峠付近



3. 高師小僧・鬼板 (褐鉄鉱)



豊橋市の海岸に近い台地 高師が原では今も雨上がり 表面を覆っていた土砂が流されると「高師小僧」と呼ばれる無数の棒状の小さな鉄の塊が頭をもたげて立ち並ぶ。また、この台地には 「鬼板」と呼ばれる板状の鉄の塊も眠っている。

豊橋市高師台や北海道足寄・滋賀県等でも産する。豊橋市高師台の「高師小僧」は天然記念物

これらは、昔 葦原だったところに鉄分を含んだ水が吸い寄せられ、その根の周りにリング状に水酸化鉄として析出した「高師小僧」。また、こんな湿地に長い年月をかけて堆積した「鬼板」。
いずれも 鉄の質としてはあまりよくない褐鉄鉱。
東海・信州地方では 豊富に存在するこれら鬼板などの褐鉄鉱を原料としたたたら製鉄が古代よりあったのではないか・・・と研究が続いている。

古代製鉄精錬の常識からは非常にむづかしいが、
砂鉄や岩鉄にかわるもうひとつの「たたら製鉄」があったのではないか・・・
褐鉄鉱の一種「鬼板」や「高師小僧」にそんなロマンをかけた研究が続いている



鬼板(褐鉄鉱の一種) 鬼板を製鉄原料として取り出した鉄塊

東海・三河地方ではいまだ古代「たたら製鉄」遺跡は発見されていない。
しかし、東海・三河には鉄文化を示す痕跡がある。

東海・三河にも古代から「たたら製鉄」があったのではないか・・・
その製鉄原料として、豊富に存在する褐鉄鉱が用いられたのではないか・・・
製鉄原料の「砂鉄(磁鉄鉱)」より品位は落ちるが・・・
三河には褐鉄鉱の一種 鬼板や高師小僧が豊富に存在する

6. 「蝦夷の鉄」 「Iron Road・和鉄の道」より

6 「蝦夷の鉄」 「Iron Road・和鉄の道」より

2004. 1. 18.



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その潮音 久遠の賛歌

この大地 燃えたついのち ここは北上」

と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住んだ自分たちの祖先
蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」とその一族 蝦夷 を指す

今から約1200年前 奈良時代の末期から平安時代初期にかけて坂上田村麻呂を征夷大將軍とした蝦夷征伐があった。
坂上田村麻呂ができるまで、朝廷が苦しめられ続けた蝦夷の族長が「アテルイ」
この蝦夷征伐のもうひとつの側面は今まで輸入に頼っていた「金やくろがね」がこの蝦夷の支配地でできたことによる鉱物資源の支配
朝廷の蝦夷征伐の大軍を苦しめぬいた 蝦夷の族長がアテルイ。
蝦夷の心情に共感しつつも戦わねばならなかった征夷大將軍坂上田村麻呂
長年にわたる戦争の中で、アテルイは蝦夷の和平を願い、盟友・モシと約500人の兵とともに田村麻呂に降伏。
坂上田村麻呂の「蝦夷支配に活用できる人材」と助命嘆願もむなく、アテルイは河内国で斬首。



6. 「蝦夷の鉄」 「Iron Road・和鉄の道」より

- | | | |
|---|-------|-----|
| 1. 岩手県の人達が作った長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて | 和鉄の道Ⅲ | 15. |
| 2. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄遺跡」を訪ねる | 和鉄の道Ⅰ | 4. |
| 3. 岩手県北上川流域の和鉄 一関博物館へ
蝦夷の主要武器「藪手刀」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて | 和鉄の道Ⅱ | 8. |
| 4. 心残りだった東北 和鉄のふるさと walk 北上江釣子・砂鉄川・蔵王
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・ 北上市市民憲章」と歌う | 和鉄の道Ⅲ | 8. |
| 5. 『田舎なれども南部の国は 西も東も金の山』
岩手県・南部「蝦夷の鉄」 北上山 系大槌・釜石 | 和鉄の道Ⅲ | 2. |
| 6. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線 | 和鉄の道Ⅲ | 5. |
| 7. 奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上(和賀)仙人峠越-
東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いて- | 和鉄の道Ⅲ | 6. |
| 8. 「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・蔵鬼神社 | 和鉄の道Ⅰ | 8. |
| 9. 岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説 | 和鉄の道Ⅰ | 6. |

蝦夷の鉄

「和鉄の道・Iron Road」より

参 考 佐藤清忠氏著「ヒタカミの鬼 ー和鉄の里ー」より 技 粋
<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html>

「出羽は、いかがでしたか」

アテルイもモレに尋ねた。出羽は現在の横手市の近辺である。そこにある雄勝城で、エミシの民と朝廷の間でいざこざがあったのである。

「雄勝城に帰還する者と背くものが半々というところでしょうか。いまは、出羽の糧や銅は、比較的軽い状況ですが、いずれ、出挙（すいこ、年利率50%で朝廷の糧を貸す制度）や、義倉（ぎそう、凶作にそなえた穀物の無償制度）で、がんにがらめになることを心配していたようです。征服された民のさだめですが」

「賣いた人たちは、その後どのように暮らしているのですか」

「帰還した人が多くおりました。しかしすぐに西方（九州地方のこと）に送られるようですね。

ええ、ご推察のように。林業と製鉄の技術指導が兵士としてです。その他は山に逃げたようですね。

子放牧の地にも、多数流れたようです。和装でも受け入れました。たたら作業に就いております」

長を側近でなければ知らない情報がモレの口から紹介された。

「和鉄の鉄は、定評がありますからね」十三湊（とさみなと）の者が口をはさんだ。

和鉄の里では、「高麗たたら」による生産様式が、和後川上流（現土樽鑑山付近）に導入されており、天候に關係なく一定のペースで鉄素材を生産できたのである。モレは逆に、十三湊の者に尋ねた。

「十三湊の鉄の相場はいかがですか」

モレの関心は和鉄の主力交易品である鉄素材の状況である。和鉄の着者達も緊張した顔になる。

十三湊の者はしかし、軽い顔で答えた。

「ふむ。正直な話、下がり加減になった。越後の道中の話だが、このところ朝廷改修や造都の勢が冷め、新羅侵襲を計画していた仲麻呂もいなくなった。しかし近江や出雲、越後はあいかわらず鉄を量産し続けているようなので、陸奥の鉄がだぶついたようだ」

エミシの玄關十三湊には、越後等から鉄素材や本材また塩、魚介類の仲買人の来訪者が多い。

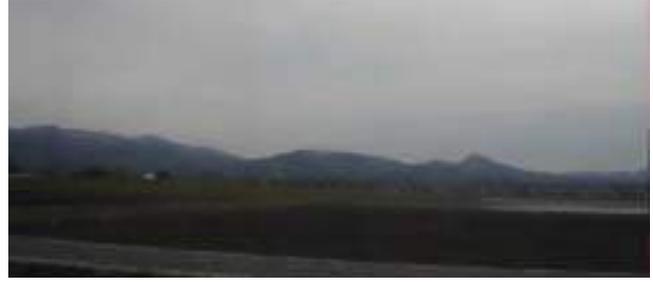
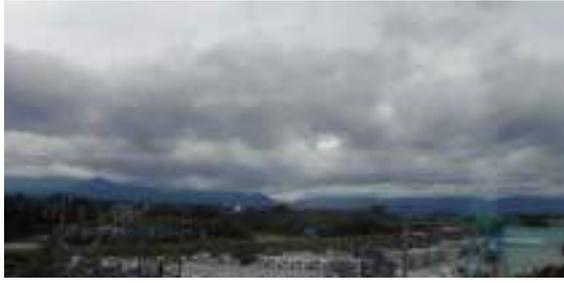
この貿易港には、交易品の流通のみならず、村を逃われた者や渡来人がたどり着き、その後、当時の禁制品であった製鉄に従事することも多かった。

アテルイは、このような者の組織化や開発、流通を行うことが本業であった。

- | | | |
|---|------|-----|
| 1. 岩手県の人達が作った長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて | 和鉄の道 | 15. |
| 2. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄遺跡」を訪ねる | 和鉄の道 | 4. |
| 3. 岩手県北上川流域の和鉄 ー関博物館へ
蝦夷の主要武器「蕨手刀」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて | 和鉄の道 | 8. |
| 4. 心残りだった東北 和鉄のふるさと walk 北上江釣子・砂鉄川・蔵王
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・ 北上市市民憲章 」と歌う | 和鉄の道 | 8. |
| 5. 『田舎なれども南部の国は 西も東も金の山』
岩手県・南部「蝦夷の鉄」 北上山 系大槌・釜石 | 和鉄の道 | 2. |
| 6. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線 | 和鉄の道 | 5. |
| 7. 奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上（和賀）仙人峠越-
東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いて・ | 和鉄の道 | 6. |
| 8. 「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」 | 和鉄の道 | 8. |
| 9. 岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説 | 和鉄の道 | 6. |

6-1.

岩手県民製作の長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて



2004.1.10. aterui.htm by Mutsu Nakanishi



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上」
と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住んだ自分たちの祖先 蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」とその一族 蝦夷 を指す

そんな思いの岩手県の人達が一昨年製作した市民長編アニメ映画「アテルイ」がある盛岡在住の高橋克彦氏のすごい迫力の大著小説「火怨」をベースに作られた映画である
一度 見たいと思いながら実現できなかったのですが、
DVD・ビデオ販売されているのを知ってやっと見る事が出来ました

2004.1.6. 朝日新聞朝刊「opinion news project」欄に論説副主幹 桐村英一郎氏「いらちの小憩 森を守ろう」と題して次のような一文が掲載された。

森、山、そして自然に宿る神々が昨今、注目をあつめるのはなぜだろう。

(中略)

経済も科学も文化も右肩上がり伸びるといふ史観は「稲作と金属器、国家統合の原理というハード、ソフト両面のハイテク」が日本に持ち込まれた弥生時代から始まったのかも知れない。

目標感覚が狂い、不安にかられた日本人の中で自然を畏怖し、その恩恵に生きた遠い過去の「血」がさわぎはじめたのではないかと

弥生時代から続いた自然支配の文明が行き詰まっている。 世界は縄文文化に回帰せねばならない」というのは哲学者の梅原猛さんである。

(中略)

ここで私たちが当惑し、立ち止まることは決して無駄なことではない。

血の中に受け継いだ自然と共生した時代に思いをいたし、小さくとも今できる行動をする。

そんな年にしたいものだ。

2004.1.6. 朝日新聞朝刊「opinion news project」欄

論説副主幹 桐村英一郎氏「いらちの小憩 森を守ろう」より

ぼくの受け止めは 縄文を体現できる東北の楽しさと現地へ出かけて色々得た実感の数々。
さらに使い古された言葉ではあるが、「歴史を振り返るもよし」 自然への回帰 風来坊はやめられぬと・・・。
また、やっとみつけた 岩手県の市民製作 長編アニメ映画 「アテルイ」の姿をこの文にかさねていまし
た。

東北に通って「和鉄」について歩いているうちに 『日高見(北上)の鬼』と呼ばれる蝦夷の族長「アテルイ」
に東北の人達が親しみを込め、熱っぽく語るその人物像ならびに「アテルイ」への強い連帯感にビックリ。
アテルイの生涯と蝦夷の戦いを熱っぽく描いた盛岡在住の高橋克彦の小説「火怨」。

吉川栄治文学賞を受賞した大著で、時代を感じさせない凄い迫力がある。

これが 東北人の思いを込めたアニメ映画「アテルイ」の原案。

東北人で語られてきた蝦夷観 田村麻呂と蝦夷との交流ほか当時の東北の事情をよく現しているとともに現
代を生きる知恵も・・・・・・・・。

2003.1.10. MutsuNakanishi



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上」
と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住ん
だ自分たちの祖先 蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」 と
その一族 蝦夷 を指す

今から約 1200 年前 奈良時代の末期から平安時代初期にかけて坂上田村麻呂を征夷大將軍とし
た蝦夷征伐があった。

坂上田村麻呂がでるまで、朝廷が苦しめられ続けた蝦夷の族長が「アテルイ」

この蝦夷征伐のもうひとつの側面は今まで輸入に頼っていた「金やくるがね」がこの蝦夷の支配
地ででたことによる鉱物資源の支配

朝廷の蝦夷征伐の大軍を苦しめぬいた蝦夷の族長がアテルイ。

蝦夷の心情に共感しつつも戦わねばならなかった征夷大將軍坂上田村麻呂

長年にわたる戦争の中で、アテルイは蝦夷の和平を願い、盟友・モレと約500人の兵とともに
田村麻呂に降伏。

坂上田村麻呂の「蝦夷支配に活用できる人材」と助命嘆願もむなしく、アテルイは河内国で斬首。



古代東北の動き

710 (和銅3)年	平城京遷都
724 (神亀1)年	朝廷が、東北制圧の拠点・多賀城(宮城県多賀城市)造営
767 (神護景雲1)年	伊治城(宮城県築館町)造営
774 (宝亀5)年	蝦夷の抵抗始まる
786 (延暦5)年	朝廷軍が胆沢攻撃へ
789 (延暦8)年	続日本紀に阿弔流為(アテルイ)の名が登場。 朝廷軍5万2800人が第1回胆沢攻撃。 アテルイ率いる蝦夷が北上川東岸の巢伏村で対戦。 ゲリラ戦で朝廷軍に歴史的勝利
793 (延暦12)年	坂上田村麻呂が約10万人の兵を率いて第2回胆沢攻撃。 アテルイ軍、大打撃を受ける
801 (延暦20)年	朝廷軍が第3回胆沢攻撃。アテルイ軍、力尽く。朝廷軍が胆沢制圧
802 (延暦21)年	田村麻呂が蝦夷支配の拠点・胆沢城(水沢市)を造営。 アテルイ、モレと蝦夷約500人が田村麻呂に降伏。 アテルイとモレ、河内国(大阪府枚方市付近)で斬首される
803 (延暦22)年	志波城(盛岡市)造営
811 (弘仁2)年	徳丹城(矢巾町)造営

坂上田村麻呂を信じ 更なる騒乱による犠牲と荒廃をさげ、自ら投降し平和共存を願

「50年 100年先を見て その中での平和な暮らしの為に」

「子供には 戦いを教えるな 戦わせるな」

と恒久の平和共存を貫く

「アテルイは親、兄弟を愛し、美しい自然を愛すために生きた。

21世紀の人間がどう生きるかという大切なメッセージがある」

と東北の人達はメッセージを送る。

話を聞くにつれ、今日本人が忘れかけている人物に出会ったような気がしていました。

ビックリするほど1200年前の構図と同じ鉱物資源を狙った大国支配の構図と弱者支配の眼

現在のイラク戦争の大国主義の構図がそっくりそのまま当てはまるような気がしてなりません。

賛否は別にして 現在の「高速道路公団民営化」の構図も

中央・官僚と地方同じではないか……

……等々。

【参考】

巨大勢力となった寺から逃れる為、奈良平城京から平安京へ遷都されたこの時代。東寺・西寺しか許されなかった平安京に蝦夷の制圧に成功した坂上田村麻呂は国家加護の道場として清水寺の建立を許されている。

東北にある蝦夷の勢力の強さがこのことから推察される。

また、坂上田村麻呂の頭の中に蝦夷の族長「アテルイ」への思いがあったかも知れぬ。

その背後の東山 坂上田村麻呂が葬られた地には「將軍塚」の名前が今も残されている。

東北の地にも、大將軍 將軍通りなどの地名が今も残る。



なお、京都 坂上田村麻呂の建立した清水寺には当代になって関西アテルイ顕彰会など市民団体の手によって アテルイ・モレの碑が田村麻呂・アテルイ友情のしるしとして建立された。

【 「和鉄の道」 関 連 】

- 和鉄の道 8. 岩手県北上川流域の和鉄 一関博物館へ
蝦夷の主要武器「蕨手刀」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて
<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/jstlbb08.htm>
- 和鉄の道 5. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/kdiakta00.htm>
- 和鉄の道 6. 奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上(和賀)仙人峠越-
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/wgasen00.htm>
- 和鉄の道 8. 心残りだった東北 和鉄のふるさと walk
北上江釣子・砂鉄川・蔵王
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・・ 北上市市民憲章 」と歌う
東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いて
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/0307toughoku.htm>

和鉄の道Ⅰ <http://www.infokkna.com/ironroad/book/bookiron2001.pdf>

和鉄の道Ⅱ <http://www.infokkna.com/ironroad/book/bookiron2002.pdf>

和鉄の道Ⅲ <http://www.infokkna.com/ironroad/book/bookiron2003.pdf>

2004.0.10.

2004.1.10. aterui.htm by Mutsu Nakanishi

6-2.

7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫

「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県原町市 金沢製鉄遺跡

1999.11.13. hrmci.htm by Mutsuo Nakanishi



- 2.1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる
- 2.2. ヒタカミ「日高見(北上)」の鬼 蝦夷(エミシ)の雄アテルイ
- 2.3. 8世紀 蝦夷と戦った畿内王権の前線基地「多賀城遺跡」

2.1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県 原町 金沢製鉄遺跡



朝日新聞 「日本の原像」の記事 福島県原町市金沢製鉄遺跡とその上に建つ発電所

今日は 久しぶりに家内と二人 昼の常磐線 快晴の空に映える太平洋の海を眺めました。 朝日新聞大阪版夕刊に「日本の現像・鉄器登場」が連載され、福島県原町市に「日本誕生」にかかわった大規模な製鉄遺跡の有った事を知り、日立にいる姉を訪ねがてら家内と二人で出掛けた。

東京から常磐線の特急で約4時間。日立から太平洋を眺めながら、勿来・常磐を過ぎて福島県にはいり、山間から東に太平洋 西に阿武隈山地を望む盆地にはいる。

「相馬馬追い祭り」で有名な相馬盆地の中心に原町市がある。

この原町市の北の外れ相馬市に隣接した金沢地区の太平洋に面した丘陵から、東日本最大の製鉄遺跡群が出土した。

7世紀後半の奈良時代 日本統一へ向けて、坂上田村麻呂ほか東北征伐が行われたが、その兵器製造所

として武器製造の拠点として 日本統一に重要な役割を果たした「陸奥の国 真吹郷 行方の製鉄」である。

遺跡は東北電力の原町発電所の中にあり、連絡もとらずふらっと出掛けた為残念ながら中に入れず。発電所の建っている外から遺跡群のある丘の周辺を歩き眺めてきました。

発電所の建設により、海岸周辺は良く整備された美しい静かな公園となっていた。太平洋とはるか遠くをゆく船をまた日の出を見るには絶好のポイント。太平洋に面してこの遺跡の上に建つ、東北電力原町発電所とそれに隣接して太平洋の荒波に洗われる海岸北泉海浜公園 砂鉄の海岸で遊んで帰りました。

後日東北電力 原町発電所の石田純一氏より、丁寧なお手紙とともにこの製鉄遺跡発掘の記録資料やビデオまた 鈴木啓氏「宇多・行方の製鉄をめぐる」等多くの貴重な資料を送っていただいた。

1. 金沢製鉄遺跡 東北電力 原町発電所 資料より
2. 金沢製鉄遺跡の特徴
3. 砂鉄の舞う浜 北泉浜 福島県原町市北泉海浜公園
4. 北泉浜で 浜砂鉄が描く模様
5. 「iron Road 鉄の道」

朝日新聞 「日本の原像」より

「日本の原像」を飾る「日本の原像」は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。

「大規模コンテナ」
 東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。

日本の原像

第9回 鉄器奇場

東北に王権の兵器製造所

「日本の原像」を飾る「日本の原像」は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。



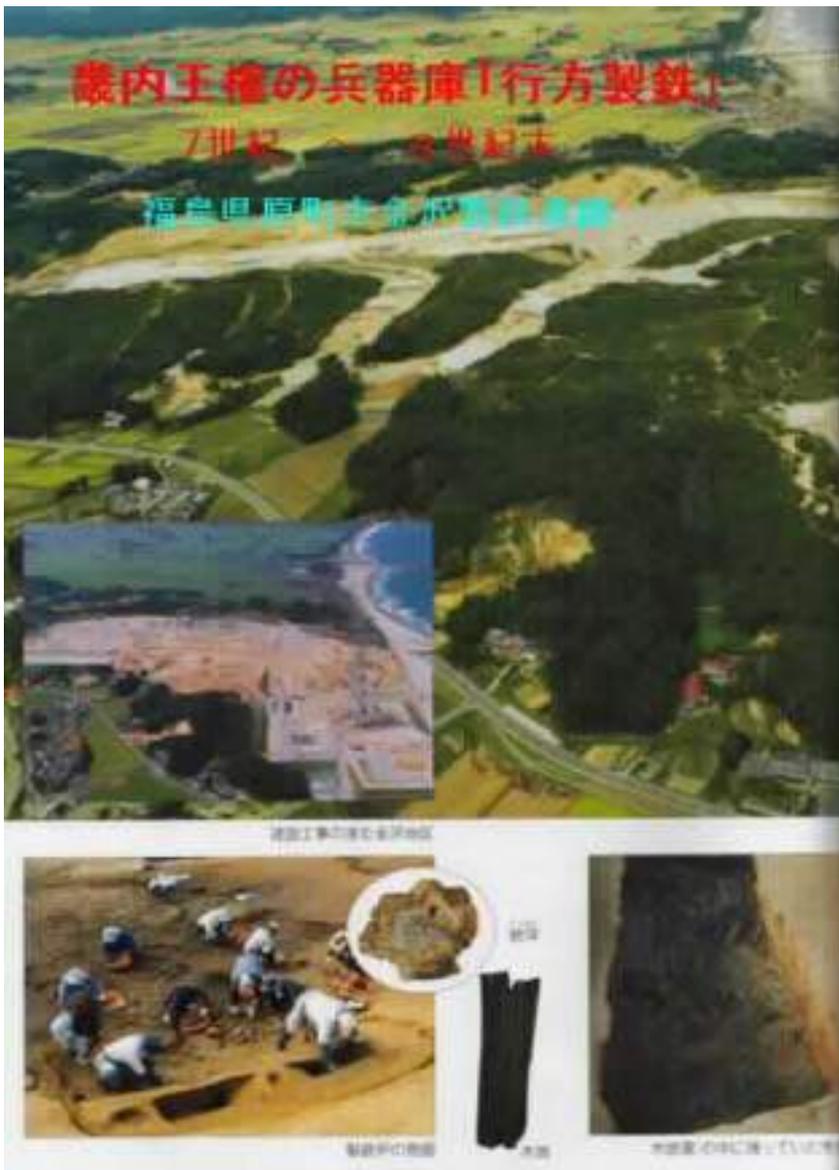
ドームの中で出土した状態のまま保存・展示されている製鉄遺構。製鉄のたぎりに、鉄を融かす作業で増される形状の伊たけは想定復元された一層高層原町市の東北電力原町火力発電所内



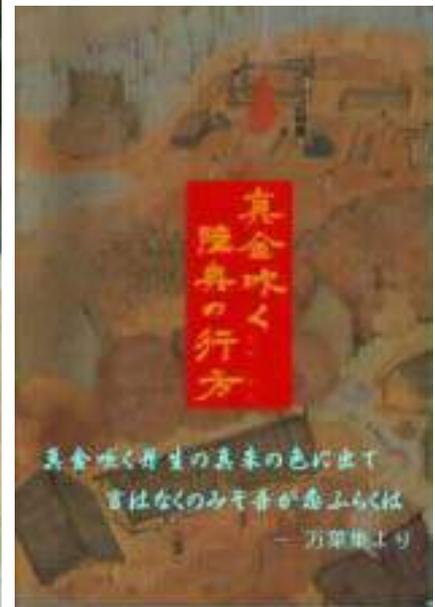
東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。この遺跡は、東北地方の歴史を物語る重要な資料である。

1. 金沢製鉄遺跡

東北電力 原町発電所 資料より



「真金吹く丹生の真朱の色に出て
言はなくのみそ吾が悲ふらくは」
万葉集 14巻 3560首



8世紀蝦夷征伐と行方製鉄遺跡

「たたら」遺跡の多くが山深い奥地の谷あいにあるのに対し、この金沢地区製鉄遺跡群は海岸に面した丘陵にある。すぐそばに背後の阿武隈山地から流れ出て、太平洋の荒波に洗われ、堆積した浜砂鉄の宝庫 泉・北泉の浜がある。

この明るい丘陵の谷間に7世紀から8世紀末にかけ、大規模な製鉄炉や鍛冶炉・炭焼き炉など数々の製鉄鍛冶が営まれた。

当時 奈良時代 畿内王権が着々と日本を統一をめざし、その勢力を東北にまで拡大、蝦夷征伐を盛んに行っていた。

この行方製鉄はその「王権の兵器庫」として重要な役割を果たした。

坂上田村麻呂の蝦夷征伐により 蝦夷勢力が討ち果たされ、胆沢城(現在の一関市)が築かれ、東北が平定されると兵器の需要の低下とともにこの行方製鉄も衰退してゆく。

「真金吹く丹生の真朱の色に出て

言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

この歌は原町市金沢の「真吹郷 行方製鉄」を歌ったものであると鈴木啓氏は述べている。
万葉集に読まれるほどの有名な大規模な製鉄所であった事がしのばれる。

「宇多・行方の製鉄をめぐって」より

2. 金沢製鉄遺跡の特徴

石田氏からいただいた資料によるこの遺跡の全盛期 たたら炉は縦型炉から箱型炉に進化し、踏み鞆を有していることに特徴があり、その踏み鞆のあとが完全な形で出土している。

この踏み鞆の採用により、製鉄量は大幅に増大したことは想像に難くない。

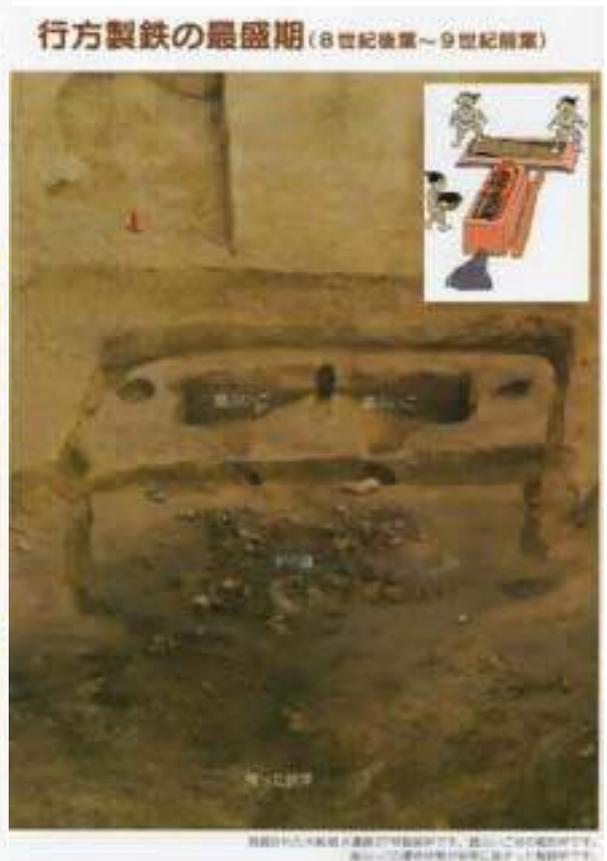
この踏み鞆を持つ箱型炉が全国へ波及して行き、時代が下るに従って天秤鞆を持つ大規模なたたら炉へと進化して生産量を大幅に伸ばしていた。

このように「たたら製鉄」や「鍛冶」として「鞆」は極めて重要で、後年これらの繁栄を祈願する祭りを「鞆まつり」と呼び、今も続いている。

江戸時代 紀伊国屋文左衛門が嵐について 江戸へ運んだみかんは江戸の鍛冶師たちの「鞆祭り」の供え物として必須のみかんであったと言われている。



踏み鞆と箱型炉の復元



出土した踏み鞆と箱型炉 8世紀

3. 砂鉄の舞う浜 北泉浜 福島県原町市北泉海浜公園



北泉浜で きらきら光る砂鉄



砂鉄の浜で 白砂が風に幾筋も舞う

発電所の正門のすぐ横は松林におおわれ、綺麗に整備された北泉海浜公園。海岸にはきっと砂鉄があるはずと砂鉄を探しに行きましたが 本当に印象的な美しい白浜で黒い細かな砂鉄が白砂に混じって 実に綺麗な紋様を描いていました。

見渡す限り太平洋の中 荒波にもまれて沢山の若者が大きな波にサーフィンを楽しんでいる一方 誰もいない砂浜では、波にもまれた細かい砂鉄が 美しい砂鉄の風紋を作り、その上を細かい白砂が風によっていく筋も 流れて、家内と二人風の中に立って見とれていました。

4. 北泉浜で 浜砂鉄が描く模様





風に舞う砂鉄が描く風紋

5. 「Iron Road 鉄の道」

7世紀から8世紀東北にあった蝦夷国・出羽国・津軽国 畿内王権の蝦夷地征伐で次々と畿内王権に組み入れられ、日本国が誕生した。

これらの国には 恐らく北のまほろば 三内丸山遺跡・亀が岡文化などに代表される縄文人やオホーツクの民の血が濃く流れていたに違いない。

これらの国と弥生人の血を色濃く持つ畿内王権とが会いそして日本国の完成へ。

戦いに使われた蝦夷の刀は日本刀の原型となった「蕨手刀」。それが原型となって刀は突く武器から切る武器へと変身し、戦いの主力武器へ。

この蝦夷と畿内大和政権との戦いの武器調達を担った鍛冶の主力が、この金沢の製鉄遺跡。

ここでも 「Iron Road・鉄の道」が歴史の重要な転換点の役割を演じ、出会いを演出している。

この日本誕生に役割を演じ、縄文と弥生人融合を演出した浜の砂鉄を紙にさっと包んでポケットに入れ、この浜を後にした。

私にとっては 空白だった鹿島・房総から三陸海岸の間の部分 阿武隈山地・陸奥のたたら遺跡との最初の出会いだった。

原町は相馬馬追いで有名な町であるが、日本誕生に関わった製鉄の重要な町でも有る。

真金吹く 陸奥の行方 福島県原町市金沢 真吹郷

「真金吹く丹生の真朱の色に出て 言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

1999.11.13. 福島県原町市 北泉海岸・金沢地区製鉄遺跡にて

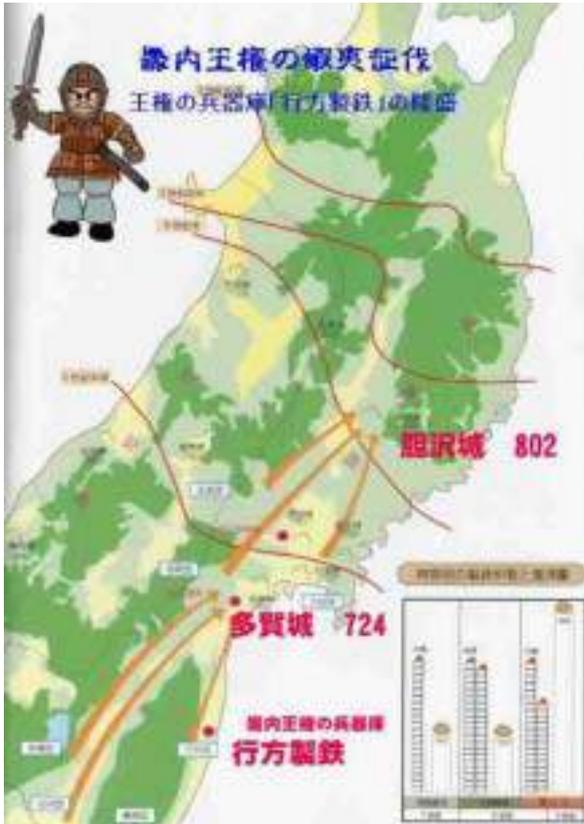
2.2. 日高見(北上)の鬼 「蝦夷(エミシ)の雄 アテルイ」

佐藤清忠氏著 「ヒタカミの鬼アテルイと田村麻呂」より抜粋

<http://yositsune.ichinoseki.ac.jp/SATOK/pr/ezo/oni.htm>

1999.11.27.採取

htkmi.htm by Mutsuo Nakanishi



東北電力 原町発電所発行「真金吹く陸奥の行方」より

「それ以前にも、紀古佐美(きのこさみ)率いる約5万朝廷軍をわずか千数百の兵で打ち破り、遁走を余儀なくしたこともあった蝦夷の雄 アテルイ 774年から38年間続いた蝦夷征伐戦争で、前沢・衣川付近でひと頃は約10万の田村麻呂率いる朝廷軍の侵入を迎えた。

日本を二分した畿内政権と蝦夷との戦いの戦場が日高見(北上)一関から始まった。

8世紀末の10万の大軍が、胆沢平野へとなだれこんできたのだが、胆沢の巨星、アテルイはひるまず、戦い大軍を翻弄した

しかし801年、初老の域に達したアテルイは、朝廷軍が現水沢市に造った胆沢城(後の鎮守府)を目の当たりにし、田村麻呂に最後まで残った500の兵を連れて降伏し、都に連れてこられた。

朝廷はこの天才指揮官らを田村麻呂必死の懇願に関わらず斬首してしまった。

みちのく民衆のこころ、怨念の歴史は、この時から始まった。

さまざまな伝説が生まれ、今日までも、奥浄瑠璃や祭の形で語り継がれてきた。

佐藤清忠氏 「ヒタカミの鬼-アテルイと田村麻呂」より抜粋

畿内政権が行方(現在の福島県原町市)に大規模な製鉄所を持ち大量の武器の製造を行っていたが、対抗する蝦夷国も日本刀の原型になった蕨手刀(わらびてとう)の量産技術をもっていた。憶測では、渤海など大陸との交易や出羽や津軽との交流により、採鉱、燃料調達、製鉄の技術を持っていたものと推定される。

目立った戦争経験がない蝦夷国が朝廷の十分の一以下の兵力で抵抗でき、民の心を結集できたのだろう。



畿内政権と戦った蝦夷国アテルイの武器 蕨手刀の分布

2.3. 8世紀 紀元724 蝦夷と戦った

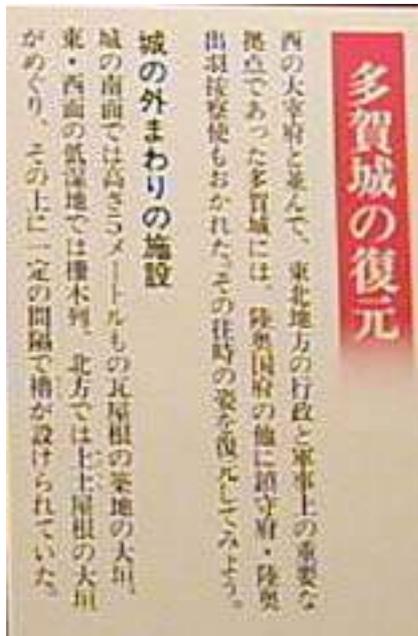
畿内王権の前線基地 「多賀城遺跡」

2000.1.20. tgjyo.htm by M.Nakanishi

多賀城は仙台平野の東北端に位置し、海拔4mの低地から50mを越す丘陵地まで起伏に富んだ地域を占めている。

周囲は約900m四方の不整形に土塀や柵木列がめぐり、その中央に約100m四方の政庁がある。その周辺には多くの役所や兵氏の住居などがある。

佐倉歴史民俗博物館にかざられたこの復元模型は780年の伊治公皆麻呂の乱で焼失後に復興された平安初期の姿を示している。



2. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫
「行方製鉄」遺跡を訪ねる

【完】

岩手県 北上川流域 の 和 鉄

6-3.

蝦夷の主要武器 「蕨手刀」

日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて一関博物館へ

2001. 10. 11, ktkmi01.htm by M. Nakanishi



一関市立博物館 一関市巖美溪

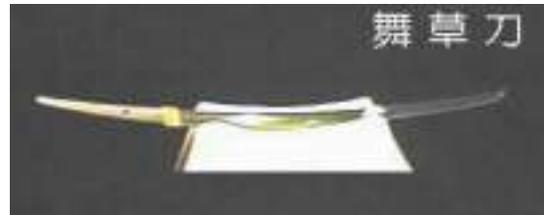


宮城・岩手の国境にそびえる栗駒山 2001. 9. 22.

古代 奥州で生まれた日本刀のルーツ



蕨手刀



舞草刀

3.1. 北上川流域の和鉄



岩手北上盆地から太平洋(右側) 栗駒山頂から 2001. 9. 22.

10 月半ば 一度訪問したいと考えていた北上・一関を訪問仙台をでて約 30 分 新幹線が広い宮城平野を抜け 右手に栗駒山・栗駒高原を背後にした広い田園地帯が広がる。栗駒山・焼石岳などの連なる奥羽山脈と北上山地にはさまれた広い田園地帯で、岩手県の母なる川「北上川」がその中央部を北から南へ流れ下る川沿いに南から北へ一関・平泉・水沢・江刺・北上・花巻・盛岡と点々と街が続く北上地方である。

ここは この山間は古代から鉄や金などの鉱物資源が豊富な土地で、古代 奥州・蝦夷 が活躍した根拠地。蝦夷の首領「アテルイ」が「蕨手刀」を武器に大和朝廷に最後まで抵抗した土地である。

水沢・江刺の北上川の東には奥州征伐の前線基地 胆沢城跡が残る。そして、中世 一関・平泉では金や鉄など豊富な鉱物資源を背景に藤原三代が栄華をほこった。

また、「鉄の国 岩手」を支える鉄の中心は「南部」久慈から釜石へかけての海岸地帯であるが、古代・中世にはむしろその中心は北上川沿いの盆地であると聞く。 蝦夷の兵器庫・鍛冶部がどこにあったの

か 自分は知らないが、蝦夷が使った「蕨手刀」。

それまで「突き」が主体の「直刀」であった刀に対し、「切る」ことを主に「反り」をつけた「蕨手刀」が、猛威をふるった。その後 中世この蝦夷刀鍛冶の伝統を受け継いだすごい刀「舞草刀」がこの土地（一関近郊 舞草）で生まれた。この刀が「反りと長身」を有する日本刀のルーツだという。

盛岡の岩手県立博物館には「奥州 和鉄」の多くの資料がありそう。また、一関博物館には「奥州鍛冶」や「蕨手刀」の展示があると聞き、是非一度ゆっくり訪ねたいところだった。

何度も東北新幹線では通るもののゆっくり歩いた事なし。一関・平泉に出掛けたのはもう 30 数年前。栗駒岳登山と引っ掛け、一関へ。また 10 月 11 日秋の溶接学会出席の帰りに盛岡岩手県立博物館そして現在の岩手一の工業都市北上にもよって帰りました。

一関博物館では蝦夷の首領アテルイが使った「蕨手刀」や古代奥州鍛冶の流れ 日本刀の原型「舞草刀」を知ることができました。また、奥州の和鉄製造に広く使われたと言う主要原料「餅鉄」。聞いた写真で見たことはありますが、まじかにみるのは初めてでした。ましてや 川などから得られ、そのまま製鉄原料として使われていたなど知らず。実際に物を見て、本などに書かれている事など理解出来ました。

北上川沿いに新幹線が走るたびに 一度は下車して調べて見たいとおもいつづけていた「和鉄の北上地方」「蝦夷と蕨手刀」と「餅鉄」。この二つの不思議な謎がやっと解けたような気がします。

今度は岩手のもう一つの和鉄の中心地 釜石から三陸海岸沿いに久慈まで歩きたい。10 数年前 後背地北上山地の圧倒的な木々の多さと海岸の陰しさに圧倒されながら歩いた和鉄の道。当時は全くみむきもされなかった和鉄の道ですが、今はどうなっているのだろうか????。

10 数年をへて 日本の近代製鉄業も変わりつつあり、また、日本各地のたたら遺跡が日本歴史の 1 ページとして掘り返されつつある今 どんな風になっているか 楽しみでもある。

2001. 10. 21. M. Nakanishi

岩手県 北上川流域 の 和 鉄

3.2. 一 関 市 立 博 物 館 で

ktkmi02.htm by M. Nakanishi



1. 餅 鉄
2. 蝦夷の首領 阿弭流 為の蕨手刀
3. 舞 草 刀
4. 参 考
 1. 古代畿内勢力の蝦夷征伐の兵器庫
福島県原町 金沢製鉄遺跡
 2. 平泉中尊寺・盛岡 岩手県立博物館



1. 餅鉄

古代東北地方で産出した粒状・塊状の磁鉄鉱で主砂鉄や鉄鉱石と共に蝦夷が使用した要鉄資源。
 (平均2キロ。1個で50キロのものもあるという。)

餅鉄は破碎を必要としない粒状のものもあり、主に河の中などに堆積しているが、山道や耕地にもある。金属状の光沢があるので採取しやすい。特に岩手県釜石付近の餅鉄は純度が高く、鉄分含有量が平均70%。特にリンやイオウなどの不純物が少ないなど良質。

北上で後年出土した「蕨手刀」の製鉄原料として この「餅鉄」を原料として精練・鍛冶されたものが多数ふくまれているといわれている。

2. 蝦夷の首領 阿弭流為の蕨手刀



蕨手刀は5世紀末には既に製造がはじまっており、奈良時代後期を中心にして、奈良時代前期から平安時代初期にわたってつくられたもの。特に北上の胆沢と和賀が拠点とみられ、餅鉄や砂鉄を原料につくられた。この頃大和朝廷の奥州征伐に対して、激しく抵抗した蝦夷の主要武器として威力を発揮した。蝦夷の首領阿弭流為の蕨手刀は66cmぐらいあったという。



現在鹿児島や徳島まで180刀発見されているが、岩手が57刀と断然多い。奈良の正倉院にもこの「蕨手刀」がある。

一関市立関博物館 展示より

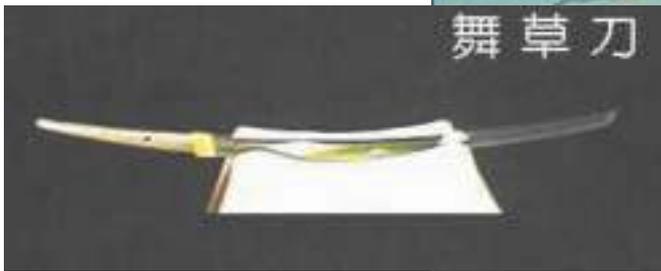
「奥州でいつ鉄の加工鍛冶・精練がはじまったのか？」は定かでないが、700年文武天皇の製鉄禁止例「東辺北辺に鉄冶を置く事得じ」との令がでて、蝦夷の武器作りに大和朝廷が神経質になっていた事が記されている。

この事から かなり古くから鉄の加工・鍛冶精練が始まっていた事がうかがえる。おそらく 大陸・朝

鮮半島からやって来た渡来人を通じ、鉄鍛冶の技術が伝えられていたのであろう。

この禁止令が出た頃 奥州には渡来人の刀匠(漢国鍛冶)がいたことが記録されている。そして この奥州の鉄鍛冶・刀作りの優秀性は奈良・平安時代都にも広く伝わり、奥州刀が都に広く持ち込まれている。一関郊外の「舞草」はその刀鍛冶の中心の一つとして、蝦夷が滅んだ跡 蕨手刀を改良して長身で反りのある刀「舞草刀」を作った。これが、日本刀のルーツとして奥州鍛冶とともに日本全国へ伝播していった。

3. 舞草刀



舞草刀 一関市

一関市を流れる北上川の東側にある舞草地区
ここには鉄落山はじめ、刀鍛冶伝承や地名、
信仰された石像などの平安時代に栄えた舞草
刀鍛冶の痕跡が残っている。
この地の鉄落山の南斜面から平安時代の土器
とともに鉄滓が出土しています。
刀身が長くて反りのある日本刀の原型がこの
舞草など奥州で作られ都で評判になった。
その後 藤原氏の衰退などで舞草など優秀な
奥州の刀鍛冶が各地に散らばり、この特徴あ
る刀作りが日本刀の原型として拡がっていった。
蕨手刀を改良した舞草刀。舞草は日本刀の故郷

4. 参 考

1. 古代畿内勢力の蝦夷征伐の兵器庫 福島県 原町 金沢製鉄遺跡

【 黄金吹く 「行方製鉄遺跡」 】



2. 「一 関 ・ 平 泉」 点 景



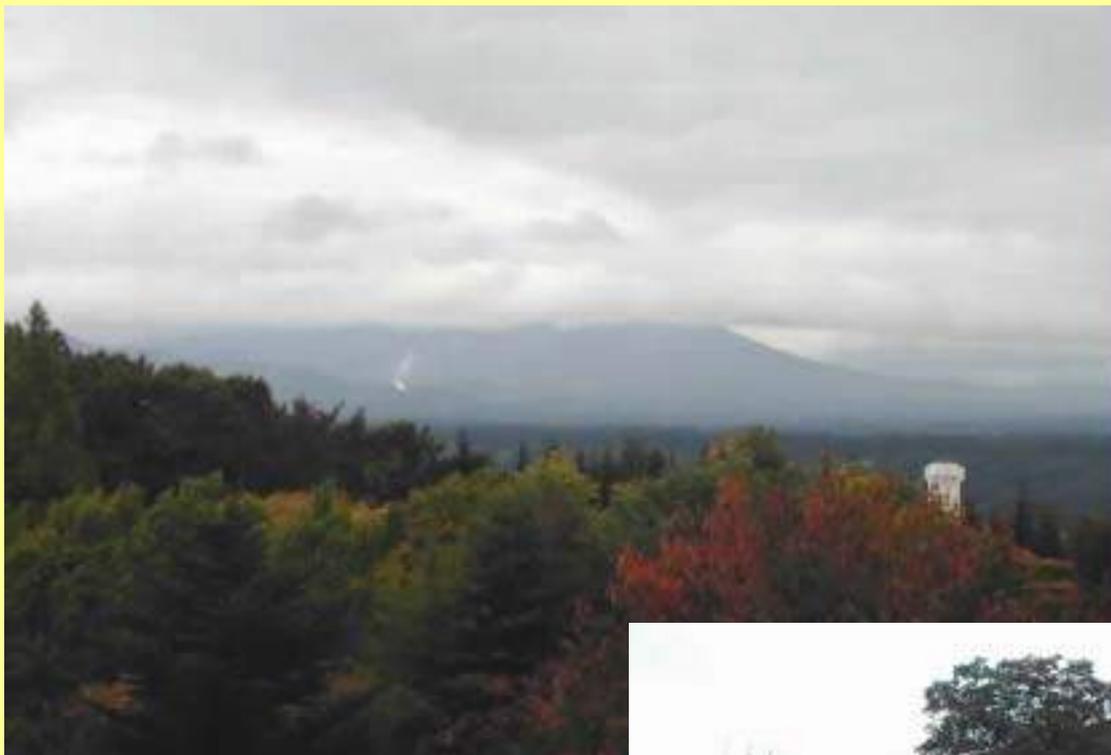
美 瀬 川 と 一 関 博 物 館 一 関 美 瀬



平 泉 中 尊 寺 金 色 堂

中 尊 寺 从 前 九 年 の 役 古 戦 場 2001. 9. 22

3. 岩手 盛岡



岩手県立博物館 岩手山を望む



盛岡の夜景と旧岩手銀行本店 2001. 10. 11

6-4.

心残りだった東北「和鉄のふるさと」WALK

北上 江釣子・砂鉄川・蔵王

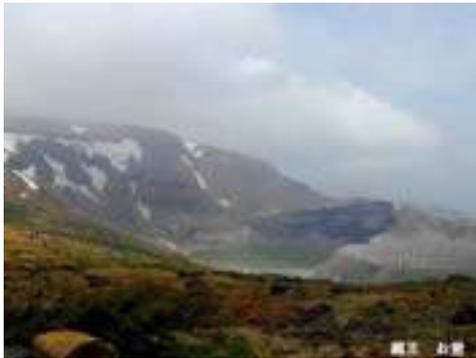
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・ 北上市市民憲章」と歌う
 東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いて。
 0307toughoku.htm 2003. 7. 14-15 by M. Nakanishi



沼原(ぬまっぱら)湿原
 福島県 2003.6.28.



北上市 江釣子古墳群・和賀川
 岩手県 2003.6.14.



蔵王連峰 熊野岳とお釜
 山形県 2003.6.15



砂鉄川・猊鼻溪
 岩手県 2003.6.14.

千葉 柏での単身赴任の4年間 東北へ随分通いました。

北の端 青森・秋田を含め、4年 東北各地を随分訪ねました。僕は 東北好き人間。
 神戸に帰るとちょっと遠くなるので、まだ 行けてないところ 気になっている所をチェック

1. 蝦夷 鉄のふるさと 和賀の里 和賀川と北上川の合流点 北上市江釣子
 ここには 蝦夷の古墳群があり、その近くには今「鬼の館」が建っている。
2. 北上山地の南の端の山中を流れ、一関近傍で北上川に注ぐ「砂鉄川」
 北上川との合流点近傍 東山町では谷が迫り 猊鼻溪という美しい渓谷をつくっている。
 今はもう砂鉄が取れないが、透明な流れに砂鉄が沈積し、船頭が歌う民謡を背に川くだりの舟がゆく
3. 山形蔵王連峰と含鉄泉の蔵王温泉
 東北の脊梁を南北に貫く奥羽山脈は鉄鉱脈の眠る鉄の山。
 東北への新幹線から何時も眺める蔵王連峰。和鉄の話は聞かないが、山麓の蔵王温泉は含鉄泉。
4. 那須連峰の南端 山懐に眠る沼原(ぬまっぱら)湿原
 この地は材料屋としてスタートした最初の仕事「高溶接性 70 キ口高張力鋼板が水圧鉄管として使用された揚水発電所建設地。すぐそばには「鬼が面山」がそびえ、山麓の板室温泉の「赤滝温泉」は含鉄泉。

サラリーマン生活を終えるに当たって 是非行ってみたい所 沼原湿原
今はニッコウキスゲが花盛りの時期

6月の週末 6月14,15日

随分 世話になった「週末 JR 東日本 乗り放題全線パス」これを使って 岩手・山形へ行って来ました。
また、沼原湿原には すっかり引越しの準備を整えて 6月28日 家内と二人で出かけました。

4.1. 蝦夷の故郷 北上市 江釣子と鬼の館 2003.6.14.



北上川と和賀川の合流点から奥羽山脈を望む 北上市 2003.6.14.



奥羽山脈 和賀岳・焼石岳から流れ出た和賀川が北上川に合流する地域 そこはかつての「蝦夷 アルテイの根拠地」現在の北上市。和賀川の北側の段丘地「江釣子」には蝦夷の古墳群 そして江釣子から焼石岳の方へ約1kmの集落 は鬼剣舞の里 そこには北上市立鬼の館が建っている。



北上市 和賀川土手の背後の奥羽山脈と鬼の館

鬼の館で見た北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上 」 と歌う。



蝦夷の遺跡 江釣子古墳群は 集落の林の中にひっそり ここからも蕨手刀などが出た。
蝦夷の遺跡を意識して立たずんだのは初めて。 感無量でした。

北上市 江釣子 蝦夷の古墳群
2003.6.14.北上山地を縫うように
流れ、北上川に一関市の西で北上
川に流れ込む砂鉄川。
砂鉄川の名を地図で見つけ、北上
川に合流する手前で深い渓谷を形
成する狛鼻溪。

一度は大雨で引き返した北上市を
今度はゆっくり歩き、和賀川と北
上川の合流点にも行ってきました。



4.2. 砂鉄川と狛鼻溪 2003.6.14.



北上山地 南端の山中を流れ、一関近傍で北上川に注ぐ「砂鉄川」
北上川との合流点近傍 東山町では谷が迫り 狛鼻溪という美しい渓谷をつくっている。
今はもう砂鉄が取れないが、透明な流れに砂鉄が沈積し、船頭が歌う民謡を背に川くだりの舟がゆく



和鉄のふるさと 「砂鉄川・狛鼻溪」 一関周辺で北上川に合流する砂鉄川

会社の同僚いわく

「狛鼻溪の川下り 酒ワンカップ 持って船に乗り込み 周りの景色をつまみに
船頭の歌う民謡を聞きながら 飲むワンカップ たまん・・・」と。

私もその通りしてきました。



砂鉄川・狛鼻溪 川下り 2003. 6. 14.

砂鉄川の名の通り、今はもう 砂鉄が取れなくなったと聞きましたが、川の淵の縁には砂鉄が堆積し、雲母がキラキラ光っていました。

渓谷の緑と砂浜の砂鉄と雲母が織り成す模様に見とれ、船頭の歌う民謡が渓谷にこだまして goo.



狛鼻溪 砂鉄川の川岸に堆積した砂鉄 狛鼻溪で 2003.6.14.
黒いのが砂鉄 キラキラ光る黄色いのが雲母

この狛鼻溪から里山の中を縫うように一関に向って走るバス。山間部を抜け、一関の盆地に出る山の出口が舞草。思いもかけず、舞草鍛冶・舞草刀の里「日本刀の故郷」舞草を通り抜けて 一関へ
やっぱり 砂鉄川の鉄が舞草の刀鍛冶を育てたのだろうか……………
船頭の歌った民謡が耳につきながら 砂鉄川・狛鼻溪の余韻にひた 一関の手前でバスの車窓を楽しみつつ一関に帰りました。



山裾に「舞草」の集落がある狛鼻溪 一関のバス車窓から

4.3. 蔵王連峰 縦走 2003.6.15.



蔵王連峰 お釜・五色岳を前衛に主峰 熊野岳を望む イワカガミ 縦走路で 2003.6.14.

昨年まであまり足を踏み入れていなかった山形。

米沢・横手・山形・鶴岡出かけましたが、いつも東北新幹線で眺めながら素通りの蔵王連峰
梅雨の雨上がり 山形から入って 蔵王のお釜 眺めてきました。

刈田岳ー馬の背(お釜)ー熊野岳ー地藏岳ー蔵王温泉

山はイワカガミが満開。残念ながらコマクサはちょっと早くてダメでした。

ビックリしたのは 蔵王の最高峰 熊野岳の山腹はそれこそ 鐵スラグの蓄積と思えるガレの蓄積。

山形側の登山・スキー基地 蔵王温泉が含鐵単純泉であったことと考えあわせると蔵王もまた「鉄の山」



熊野岳の斜面 スラグ状のガレで覆われ、まさに鉄の山 含鐵泉の蔵王温泉を望む

安達太良・吾妻連峰そして蔵王連峰 栗駒・焼石岳から和賀岳から青森岩木山へと長々と東北の脊梁を貫く
奥羽山脈には鐵の鉞脈が続き、ここから流れだす川の 流域には砂鉄が産出。

これを目印に奥羽山脈に産鐵の民がわけいったことであろう。

「蝦夷の和鐵」をそんな風にイメージを膨らましながら 蔵王温泉の湯に入っていました。

「たたら」を訪ねながら 何時も 頭の片隅にあった問いかけ

「鬼は悪者か????」

「蝦夷」「鬼」に持つなとはなしの後ろめたさ



江釣子 古墳群がある和賀川



砂鉄川



蔵王



北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌 この大地 燃えたついのち ここは北上」
と高らかに歌う。

「鬼すむ誇り」と歌う北上市の市民憲章に「東北人の広さ」を感じました。

横手の街を歩いた時にもそう思いましたが、東北には今日本人が忘れかけている日本人の原点がある。
もやもやも 吹っ飛んで、実に 爽快な walk で帰途につきました。

2003.6.15. 柏にて

Mutsu Nakanishi

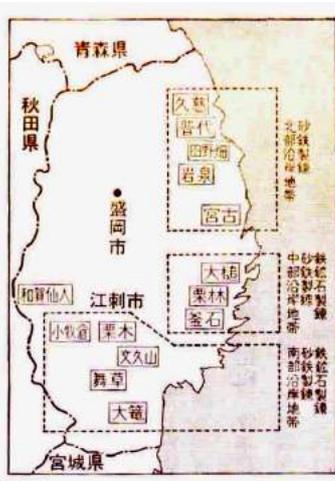
6-5.

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

1. 蝦夷の鉄 北上山系南部の鉄
2. 古代 北東北の鉄生産（秋田・岩手・青森）
3. 釜石 鉄の歴史館に「餅鉄」を訪ねて
4. 古代 蝦夷の鉄 鬼伝説の街 大槌町へ
5. 北上は蝦夷の根拠地 もう一つの和鉄の故郷

1. 蝦夷の鉄 北上山系 南部の鉄



9.23. 津軽へ行った帰りに東北 和鉄の故郷 「大槌・釜石」へ行ってきました。
約10年前 盛岡から北上山地をバスで越え、三陸海岸北部の山田から田野畑・久慈へ和鉄を訪ねた事があるのですが、今度はそれにつながる三陸海岸中央部 釜石へ

「蝦夷の鉄 餅鉄」 砂鉄と並ぶ和鉄の製鉄原料「餅鉄」

この餅鉄 そして 蝦夷の鉄のロマンを訪ね 同時に今の釜石も見たくて・・・



鉄の歴史館に展示されている餅鉄

製鉄遺跡が散在する「大槌・小槌」

「餅鉄は釜石へ行けばゴロゴロしている」との話を聞いて 盛岡から車で東へ。北上山系の主峰 早池峰山の山裾 遠野を通って山中へ。



洋式高炉の近代製鉄発祥を支えた鉄鉱脈と高炉建設場所である深い山並みを海岸に出たところが釜石。この北上山地一帯は古代蝦夷の根拠地。古代「砂鉄 たたら」とは別に 蝦夷と呼ばれた人たちによって磨かれた独自の「鉄鉱石・餅鐵によるたたら」製鉄法があったという。北上山系の鉄・鉱物資源と森林資源は古代 蝦夷の宝であり、蕨手刀という強力な武器を持つ蝦夷が中央の大和朝廷と対峙した。

中世には この北上・南部の鉄製錬・鍛冶加工技術が日本中央や各地に持ち込まれ、出雲を発祥の地とする日本古来の砂鉄製鉄技術と融合し、飛躍的な製鉄技術の発展をみたといわれる。



遠野ー釜石間 千人峠近傍の山深い北上山脈 トンネルを抜けると釜石の街



そして、近世には この釜石で後背地の山から出る鉄鉱石を原料とした日本最初の洋式高炉による鉄生産がはじまり、今日の鉄鋼王国日本のスタートがきられた。

「西の奥出雲・中国山地 東北の南部 」 和鉄ルーツのロマンを秘めた和鉄の故郷である。



北上山系 釜石周辺の山には砂鉄と共に豊富な自然鉄（鉄鉱石鉱脈）があり、それらが川にながされて磨かれ『餅鐵』が作られ、北上山中から流れ出る川のあちこちには餅鐵があったという。

この餅鐵は容易に「野たたら」鍛冶製錬や鍛錬で鉄製品に加工することが可能であり、この技術を知った蝦夷は古代西から砂鉄製錬が持ち込まれる以前から独自の製鉄技術を

連綿と続けてきた。（確かな証拠はないが・・・）

そして、さらに西から入ってきた砂鉄製錬技術とも融合させてきたのではないかと・・・

北東北周辺に広く分布する蝦夷の武器「蕨手刀」には砂鉄製錬による鉄ばかりでなく、鉄鉱石精錬で作

られた鉄で作られたものが多く混じっている。

また 大和政権の奥州征伐後 奥州の鉄の工人が「俘囚」として日本各地に散らばっていった事 さらに「蕨手刀」工人の故郷「舞草」や「月山」の工人が中央に出て「日本刀」の原型が作られていった事などはこの傍証となろう。

また 釜石市の隣りの大槌町小槌の小林家に伝わる「小林家製鉄絵巻」では 餅鐵をではないかといわれる「六合吹き」の製鉄絵が描かれている。この絵巻には巻末に1126年に模写した事、巻頭の絵の余白



には「大道二酉歳二月十六日」との記載があると言われ、「大道二年」が「大同二年」とすると807年にあたり、そのまま信用は出来ないとしてもかなり古くから製鉄がこの地で行われていた事が推察される。

大槌町小槌の小林家に伝わる「小林家製鉄絵巻」

また 南部は「遠野物語」に代表される民話の故郷でもある。

古くから製鉄の故郷であるこの地（大槌町小槌）にも鉄と鬼との深い関係が語られた「鬼」の伝承もありました。（しおはまやすみ・船橋暉男「遠野上郷大槌町物語」柴田弘武著「鉄と俘囚の古代史」より引用）

北上山中から流れる川の流域から得られる餅鐵の秘めたロマン

でも この餅鐵が古代から現代まで 「悲劇の蝦夷」を含めて 日本誕生に果たした役割は大きい

深い深い北上の山中を抜け、狭い谷合いを甲子川に沿って広がる釜石の街並みに入り、程無く釜石の市街と新日鉄釜石の工場が見えてくる海岸部の釜石駅。

釜石は考えていたより小さい街。駅前に広がる新生なった新日鉄釜石の工場には高炉が見えない。

何ともさびしい限りであるが、真新しい工場群と新しいショッピングセンターに新しい芽吹き。



釜石点描

釜石駅から 新日鉄釜石	新日鉄釜石 正面	釜石駅
釜石後背の鉄鉱脈の山並み	釜石湾	鉄の歴史館

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

2. 古代 北東北の鉄生産(秋田・岩手・青森)

インターネット 岩手日報「岩手 21 世紀への遺産」&

「みちのくの鉄」(シンポジウム「今東北は燃えている -」より) 抜粋収録

kitatetsu.htm

2002.10.1. by M. Nakanishi

東北地方の北部での鉄生産のはじまりは、大和政権が724年陸奥の支配強化と地方行政機構確立を目的に多賀城を建設した時に鉄生産にかかわる専門工人も多数移住させたのに始まると考えられている。しかし、東北南部ではそれ以前から既に鉄生産が開始されており、福島県浜通りの武井地区製鉄遺跡群や金沢製鉄遺跡群では多賀城建設以前の7世紀～10世紀まで製鉄作業が行われていたことが確認されている。

多賀城跡付近東約4kmに存在する柏木遺跡では4基の製鉄炉、5基の木炭窯、鍛冶工房などが発見され、その製鉄炉は福島県相馬地方や群馬県の製鉄炉の系譜を持つ円筒形の縦型炉であることから、関東・東北南部の技術移入が基礎にあったと考えられる。

東北北部岩手・秋田・青森での鍛冶・製鉄が広くおこなわれるようになったのは8世紀大和政権が多賀城を建設以降である。岩手県の三陸沿岸部宮古市から山田・大槌町にかけてからはチタン分の少ない良質の砂鉄が採取され、製鉄や鉄加工が早くから行われ、鉄滓、羽口を出土する遺跡がいくつか存在する。

8世紀代の製鉄炉 山田町上村(かみむら)遺跡をはじめ、大槌町夏本遺跡では4基の鍛冶炉が検出され、山田町山ノ内遺跡・宮古市島田遺跡など製鉄遺跡が11世紀代まで継続することが明らかになってきた。

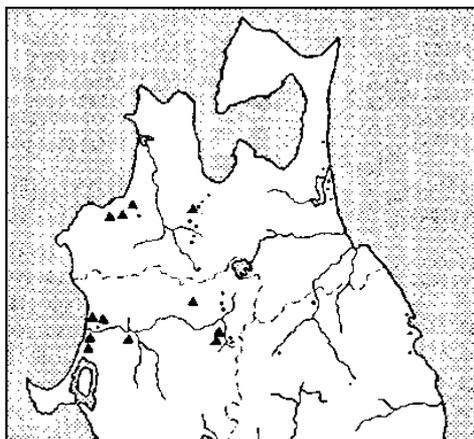
岩手県北上川流域の製鉄遺跡としては、大瀬川遺跡があり、3基の豎形製鉄炉と考えられる遺跡が発見されているが、製鉄の詳細は不明である。

当時は沿岸部が鉄の供給地として重要な位置を占めていたと思われる。

秋田、青森県地方の鉄生産については、最近、古代の製鉄遺跡が次々に発見されている。

9世紀前～中頃秋田城に関連したものと推測される秋田市坂ノ上E遺跡では住居跡、豎形炉と木炭窯が一つずつ発見される。

また、その後 米代川流域と津軽の岩木山麓を中心にした地域に10世紀～11世紀頃と推定される豎形炉を有する製鉄遺跡群が発見されている。集中する



▲ 製鉄遺跡 ● 鍛冶工房と思われる遺跡
東北地方北部の古代鉄生産関係遺跡

みちのくの鉄

<http://www.iwate-np.co.jp/isan/isan711.html>

(シンポジウム「今東北は燃えている - みちのくの鉄の歴史 -」より抜粋)

● 岩手日報 「岩手 21 世紀への遺産」

<http://www.iwate-np.co.jp/isan/isan711.html>

エミシの生業 - 沿岸部の鉄生産

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

3. 釜石 鉄の歴史館に「餅鐵」を訪ねて



【釜石湾 鉄の歴史館より】



【釜石： 蝦夷・南部 鉄の故郷 近代製鉄発祥の地】

釜石は海岸まで山が迫っており北上の山から、今 車で下ってきた狭い谷合いを流れる甲子川沿いと河口のみが平地でその狭い場所に釜石製鉄所・市街地・港があり、釜石湾のみがオープンであとは山また山である。思ったより狭いが、放射状に街があり、その向こうに釜石湾が広がっているので明るい。日本近代製鉄発祥の地であり、出雲の鉄と並ぶ和鉄の故郷 東北「蝦夷の鉄」の本拠地・南部鉄 等々釜石への思い入れは強かっただけに「やっと来た」の思い。是非「餅鐵」にもしっかり会いたい。

釜石は日本近代製鉄発祥の地

江戸時代 末期 洋式の製鉄技術を学び、反射炉の操業に成功した大島高任(盛岡出身)が、良質の鉄鉱石が出る釜石に洋式高炉をつくり、安政4年12月1日、釜石の後背地の山大橋産の磁鉄鉱を用いた銑鉄の製造に成功。これが日本における近代製鉄の始まりで、この日を「鉄の記念日」としてその功績を今に伝えている。その後、釜石は常に日本の製鉄業の中心的存在として日本近代製鉄の歴史を作ってきた。そして釜石にはこれらの鉄の歴史を展示した釜石市立「鉄の歴史館」があり、まず、鉄の歴史館を訪ねてそれから大槌の街にも立ち寄りたい。



現存最古の橋野洋式高炉跡



釜石後背の北上山系の川から採取された餅鐵

3.1. 釜石市立鉄の歴史館



釜石駅からタクシーで約 10 分 新日鐵の工場に沿って海岸の方にて 海岸に出る手前で南側の岡へ登って行く。正面には 釜石湾が広がり、その中央の突き出た半島には大きな釜石観音の大きな像が海を見下ろしている。素晴らしい眺め。 背後は釜石の鉄を支えた北上の山々が連なっている。その高台を登った位置に鉄の歴史館が横に鋭い三角形の塔と円筒形の本館が組み合わせられた立派な建物が小高い丘のてっぺんに建っている。

「鉄の歴史館」は日本ではじめて洋式高炉を築いた高島高任の偉業とその後の幾多の先達の業績を中心とした鉄の総合的な資料館で、原寸大の高炉の復元模型を中心に大島高任の日本初の洋式高炉についての各種資料やその後の釜石近代製鉄産業の発展（官営から民営やがて近代製鉄までの変遷）がパネル等で展示されている。



日本初の洋式高炉が作られた釜石
 近代製鉄の父と呼ばれる高島高任は、南部藩大橋に洋式高炉を建設し、安政4年12月1日（1858.1.15）わが国で初めてこの鉄鉱石精錬による出鉄に成功。このほか檜野・佐比内・栗林・砂小瀬にも高任の指導で10座の高炉が築かれました。

9/22 訪れた「鉄の歴史館」で「餅鉄」のことや、楠木謙三高炉での製鉄実験など実物を見せていただき、色々教えていただいた釜石市の歴史 昌一氏、すっかり お世話になりました。



大槌町 小林家蔵 古代の製鉄絵巻

3. 2. 史跡 橋野高炉群跡 陸中大橋近傍

遠野から東へ北上山系の分水嶺を越えて釜石に入るあたり一帯の山は磁鉄鉱と黄銅鉱を主とする鉱石が豊富に埋蔵されている。日本初の洋式高炉（大橋高炉）橋野高炉郡跡は、この山中にあり、釜石から北へ約36Km、標高560mの山地にある。



洋式高炉を支えた鉄鉱脈



陸中大橋 釜石鉱山近傍の北上山系 山中



この豊富な鉄鉱石を原料に安政3年 高島高任によって、日本初の洋式高炉（大橋高炉）が建設。その後この山中 大橋に3座、橋野に3座、左比内に2座、栗橋及び砂ばん子渡に各1座合計10座が良質豊富な鉄鉱石の産地を背景にいずれも高任の指導によって建設された。これらの高炉は鉄鉱石を原料とし、銑鉄の製造に成功した我が国最初の洋式高炉である。

かくして我国近代鉄鋼業は深い山々に囲まれたこの地にその発祥をみ、やがて明治維新を迎えるや、官営製鉄所の発足となり、釜石製鉄所の礎を築いたのである。

釜石鉄山大橋高炉跡地



橋野三番高炉跡



3.3. 蝦夷の鐵 餅 鐵



<p>餅鐵(米鉄)</p> <p>梶野、栗林の川で採取したもの。餅鐵の名称は製錬した鉄の性質が粘性に富むことから由来し、形状からきたものではない。</p>	<p>餅鐵</p> <p>分析表</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>Fe</th> <th>C</th> <th>Si</th> <th>Mn</th> <th>P</th> <th>Cu</th> <th>Ti</th> <th>S</th> </tr> <tr> <th>%</th> <th>wt</th> <th>wt</th> <th>wt</th> <th>wt</th> <th>wt</th> <th>wt</th> <th>wt</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>89.54</td> <td>4.46</td> <td>0.41</td> <td>0.03</td> <td>0.131</td> <td>0.13</td> <td>0.004</td> <td>0.030</td> </tr> </tbody> </table>	Fe	C	Si	Mn	P	Cu	Ti	S	%	wt	89.54	4.46	0.41	0.03	0.131	0.13	0.004	0.030						
Fe	C	Si	Mn	P	Cu	Ti	S																		
%	wt	wt	wt	wt	wt	wt	wt																		
89.54	4.46	0.41	0.03	0.131	0.13	0.004	0.030																		

鉄の歴史館入口を入ったところに大きな「餅鐵」が飾ってある。大きい。。。。。

館内には後背地の北上山系から流れ出るかわの流域から掘り出された沢山の餅鐵が展示され、これらが洋式高炉の原料として重要な役割を果たしたことが展示されている。

「餅鐵」については 古代から東北のたたら製鉄には出てくるのですが、私にとっては本当に不思議でよく判らなかった製鉄原料。

砂鉄・鉄鉱石たたらと同時に東北では餅鐵を使ったたたら製鉄があるという。

また まん丸の形で川にゴロゴロあり、それを加熱鍛冶製錬したり、鍛錬するだけで容易に鉄加工素材に出来るとも聞きました。

今までに幾度か 展示されている「餅鐵」を見たことあるのですが、見ただけではよく判らず。

沢山の「餅鐵」が産出場所と共に解説付で展示されていてやっと理解できました。



【釜石後背の北上山地と餅鐵が出る川】



【甲子川と後背の山々】

餅鐵とは

山中に鉄鉱石（磁鉄鉱）鉱脈としてねむっていた鉄鉱石が川に流され、流れ下る過程で磨かれ丸くなったもの。

従って 鉄鉱石（磁鉄鉱）の鉱脈がある山から流れ下る川の流域で産出される。鉄分は 70%を超え、非常に純度が高い。

釜石の後背地の北上山系には大規模な磁鉄鉱の鉄鉱脈があり、ここから流れ下る甲子川や釜住居川・小釜川などの流域で産出される。

餅 鐵(米鉄)

餅鐵を釜石・梶野・栗林地方では「へいてつ」を讀り「へんでつ」といっている。

東北地方一帯でもさまざまな呼称があり、「へんでつ」「こくてつ」「まぐる」「ばふんでつ」「すえひろかね」「おもしろい」ともいわれる。

磁鉄鉱石が長い間、川の流にもまれて丸みをおびたもので、専門的には「円礫磁鉄鉱」あるいは「磁鉄鉱礫」と呼ばれる。

鉄分の品位は優れ、リンやイオウといった不純物が少ない。鉄分の含有率は約70%。

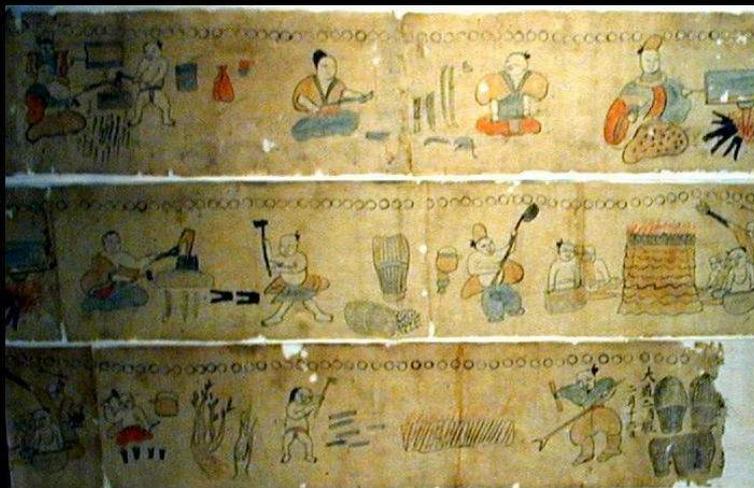
東北にはほかにも 餅鐵は北上川や秋田県米代川流域などで産出すると聞きましたが、資源が偏在するのもこれで理解。

70%を超える鉄分と高純度は砂鉄では得られぬものであり、砂鉄に替わる近代洋式高炉の原料としてこの釜石の鉄鉱石が浮かび上がり、かつ 釜石の地に洋式高炉が立てられたのも、釜石の后背の山中で大鉄鉱脈が発見された事と共に、古くからこの餅鐵が製鉄原料として使われてきた歴史があったためと考える。

思っていたものよりも 大きいもの 細かいもの 色々あることも判りました。

また、鉄の歴史館のパネルの中にもう十年ほど前 久慈市の川鉄たたら館の入場券に使われていた「六合吹き」の図を見つけました。

大槌町小鋸 小林家蔵の製鉄絵巻で巻頭に少し疑問はありますが 807年の銘がある製鉄絵巻の一部たたら製錬の部分を切り取ったものであること初めて知りました。



小林家製鉄絵巻 釜石市立鉄の歴史館パネルより
大槌町 小鋸在 蕨打直 小林孫右衛家 1126年の模写絵



野たたら六合吹き図

- 左側 烏帽子をかぶった吹棟梁
- 中央 6名の番子
- 右側 原料を投げ入れる作業長

小林家製鉄絵巻 釜石市立鉄の歴史館パネルより
大槌町 小鋸在 蕨打直 小林孫右衛家 1126年の模写絵

巻頭 「大道二百歳二月十六日」の銘
大道二を大同二とすると807年にあたる
但し、大同二年は亥年で疑問は残る



製鉄絵巻巻頭にある
807年の銘
小林家蔵 大槌町小鋸

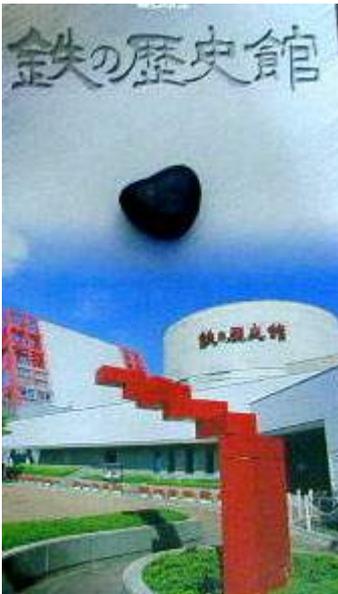
807年は疑問があるにしろ、古代 大和勢力が東北に勢力を及ぼす前 この地方には既にこの「六合吹き」図に見られる餅鐵を製鉄原料とするたたら製鉄があったのではないかと・・・

蝦夷の武器 蕨手刀には 餅鐵・鉄鉱石原料の鉄製品が多数混じっているという。

又、釜石の隣町大槌町小鋸には この地名の由来となった「鬼伝説」があり。

「北上山系橋野の鬼が畿内からやって来た鍛冶屋の技術を毎夜毎夜盗みに来て退治される」鬼伝説を伝承。これもたたら製鉄黎明の古代 西日本からの砂鉄製錬と餅鐵製錬の鍛冶師の争いではなかったか・・・

餅鐵を通じて 古代蝦夷と呼ばれた人たちの時代に既に釜石には餅鐵を原料とする独自の製鉄技術があり、その鐵が蝦夷と呼ばれる人たちの力の大きな源泉でなかったか・・・



鉄の歴史館 監理員の留畑昌一氏に大変お世話になり、餅鐵について色々教えていただいた。

氏は植木籾など簡単な縦型実験炉での古代たたら製の鉄実験を指導されており、「餅鐵は素人では見つけにくい、今も釜石後背地の川の流域に行けば採れる。」と先週行かれて採ってこられたバケツ一杯の餅鐵をひょいと見せていただいた。

また 簡易実験炉なども見せていただき「餅鐵が非常に原料として良い」事教えてもらった。

植木鉢を炉底とした簡単な炉で鉄が作れるなど思いもよらなかった。ビックリするとともに 古代の十分温度の上がらぬ「野たたら」でも餅鐵を原料とすれば 鉄が作れる事の証明かも・・・と思いました。

でも、同じ餅鐵でも 産地が違くと製錬の容易さが非常に違う事を簡易実験炉で経験していると。

餅鐵を砕いた製鉄原料や実験炉・餅鐵さらには 餅鐵のある沢の写真など現物を見せていただきながらいろいろ熱心に教えていただき 餅鐵の疑問もほぼ解消。本当にありがとうございました。

砂鉄だけが原料でない事鉄原料・鉄素材としての餅鐵の優秀性など本当に思いもよらぬ事でした。やっぱり イメージだけではだめですね・・・これをつくづく思いました。

帰り際に ひょいとちいさな餅鐵一つ 氏から戴いて帰りました。

よっぽどほしそうに見えたのでしょ。でも 感激です。

早速帰って磁石に引っ付けたり、感触を楽しんだり、古き蝦夷の時代をいめーじしたり・・・色々楽しんでます



日本初の洋式高炉が作られた釜石
 近代製鉄の父と呼ばれる高島高任は、南部藩大橋に洋式高炉を建設し、安政4年12月1日(1858.1.15)わが国で初めての鉄鉱石精錬による出鉄操業に成功。
 このほか檜野・佐比内・栗林・砂小瀬にも高任の指導で10座の高炉が築かれました。
 9/22 訪れた「鉄の歴史館」で「餅鉄」のことや植木鉢三二高炉での製鉄実験など実物を見せていただき 色々教えていただいた監理員の留畑 昌一氏 すっかり お世話になりました。



大徳町 小林家蔵 古代の製鉄絵巻

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

4. 古代 蝦夷の鉄 鬼伝説の街 大槌町へ



【 大 槌 町 】

せっかく釜石まで来て やっぱり古代製鉄遺跡の街 大槌町には寄って帰りたい。

大槌・小槌と製鉄と関係する名前がついている町。大槌。

大槌・小槌が古い和鉄・たたらと関係のある地名であり事は知っていましたが、この地名が鬼伝説と密接にかつながらしていることつい最近まで知りませんでした。

古代 北上山中にやって来た製鉄の民が この山中の餅鐵と出会い、蝦夷と呼ばれる人たちの鉄を育ててきた。その過程で起こる幾多の争い。それが、鬼伝説としてこの大槌の街にも伝承されています。

釜石の隣町ですが、一つ汽車を逃すと柏まで帰れない。釜石駅で時刻表を眺めるが妙案無し。

北ヘリアス式海岸の山の中を汽車で大槌駅まで行って 約40分大槌町にいて下りの汽車で釜石まで戻りそのまま盛岡行の急行に飛び乗る。汽車の中から、たたら遺跡がいたるところに散在しているといわれる大槌町の後背の山・鵜住居川・小槌川を眺める事にする。



小槌川周辺



鵜住居川周辺



釜石 - 大槌 海岸を望む



【 鬼伝説の周辺で 釜石 - 大槌 の 車窓より 】

釜石駅を甲子川沿いに少し引き返し、遠野への鉄路とわかれ 直ぐ北へカーブ。すぐトンネルに入って山中へ。チラッと海が見えたと矢思うとまた山の中。約 15 分で大槌町へ
駅には観光案内版があるが、ここがかつて和鉄生産の宝庫であったことを示すもの何も無し。大槌町の由来となった鬼伝説もまったく痕跡無し。

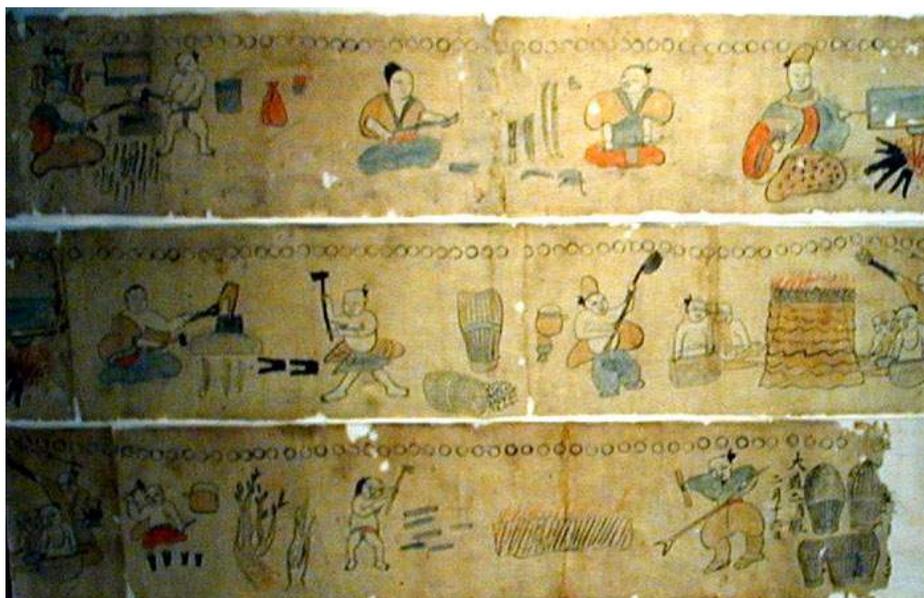
駅の越線橋から後背の山々を眺め、古代の鉄のイメージ膨らまし、汽車で引き返し、小槌川・鶴住居川に眼をこらす。

小さい川ではあるが川原が広く 川筋の奥にどっしりと北上の山々が控えている。

この奥が釜石の鉄を支えた鉄の山。蝦夷の宝かも・・・。

鬼伝説の山にふさわしい奥行き・・・。

次回はゆっくり 歩きたい。そして 山田へも

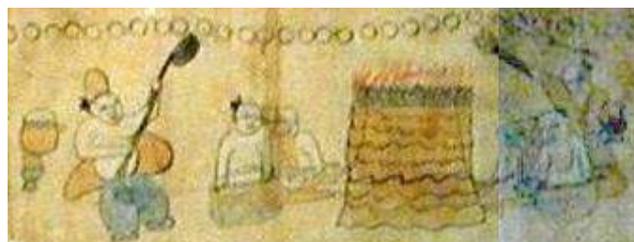


大槌町 小槌 小林家蔵 古代の製鉄絵巻

大槌町に伝わる鬼伝説

「遠野上郷大槌町物語」しおはまやすみ・船橋暉男著

柴田弘武著「鉄と俘囚の古代史」より引用



野たたら六合吹き (小槌 蕨打直 小林氏蔵 製鉄絵巻より)



小鍬川・大槌川 概略



大槌町

「遠野上郷 大槌町 物語」

「小鍬川の川下より川上に向けて左の山を葡萄森という。土地の人これをブンタ森と呼び、鶺鴒の住居村との境をなす。

この山裾に大和高取より移り住みし鍛冶屋あり。いつの頃より、毎夜この家の仕事場を窺い見る鬼が現われ、やがて屋の柱をゆするなどの狼藉を働く。鍛冶屋ついに怒り、手に持ちし大槌・小鍬にてその鬼を叩きしという。

鬼は頭を打ち割られ、大いなる声を発して飛び上がり、そのはずみにて屋根を突き抜け、山奥目指して逃げ行きぬ。鬼は逃走の途次も小鍬川中流の蕨打直にて川前の一軒の家に打ち当たり、その家を壊し、山向こうの橋野の方へ去れり。鍛冶屋は手負いせる鬼の行方突きとめんと……弓箭を携えてやまに入る。されど鬼の行方ついに分明ならず。

後に橋野人の伝えしは橋野の山奥、笛吹峠に近き山中、片羽山といえる山の麓にて、鬼の仰向きになりて死せるを見たりと。この地を誰いうとなくアオノキの地という。今日の青ノ木なり。

鍛冶屋はその後家業に精出さんと思ひ立ちしも、その手に大槌・小鍬を持つたびに打ち殺せし鬼の思い出されて気色悪し。ついに鍛冶を廃業せんと鬼を打ちし大槌・小鍬を家の前を流るる川中に打ち捨てり。鉄にてつくりし小鍬はその川底に沈み、木にてつくれる大槌はその川面に浮き、流れて海へ出でしが、後ふたたび潮により岸に戻され、一つ北の川筋の河口へ漂い着けりという。

これにより土地の人、誰言うもなく小鍬の沈みし川を小鍬川、大槌の漂い着ける川を大槌川と呼びならわすようになれりとぞ。」

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

5. 北上は蝦夷の根拠地 もう一つの和鉄の故郷



古代「西から製鉄技術が伝えられる前に東北には製鉄技術はなかった」との説が有力であるのも承知しているが、古代東北で育まれた「餅鐵を原料とした製鍊・鍛冶鍛鍊技術」「蝦夷の鉄として捨て去られたように見える技術」これも又 和鉄の源流。

この蝦夷の鉄加工技術が蕨手刀を生み 出羽月山や舞草の刀鍛冶を生み そして日本刀の源流となっていく。

ここにも 鬼がいたが 鬼が築いた伝統の技が日本のルーツとして生きている
釜石に行ってそんな意を強く思った。

それにしても 北上の山は深い。緑の山の中をどんどん汽車が登ってゆく。釜石鉋山の事務所の写真探ろう 仙人峠の写真 深い山並み あっという間にトンネルや山肌で隠れてしまい写真とれず。



汽車と山とがあまりにも近い。本当に北上は深い山 鉄の山

『田舎なれども 南部の山はよ 西も東も 金の山』
やっと峠を越えて 視界が開け 早池峰の山々が見え出し、遠野の盆地へ入っていった

2002.9.23. 蝦夷の鉄 餅鐵を釜石に訪ねて

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

【 完 】

6-6.

古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて

北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三澳へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線

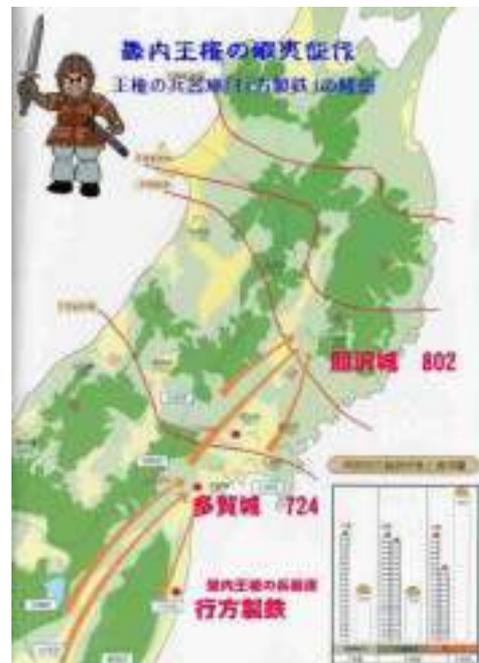
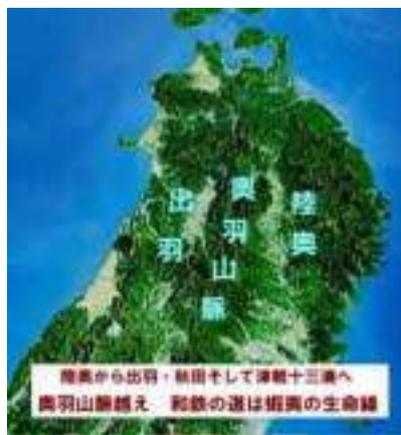


北上市和賀から奥羽山脈を望む 2003.3.15.

- 1. 古代出羽・秋田の産鉄は蝦夷の生命線
- 2. 秋田の古代製鉄遺跡群が眠る秋田の丘陵地
木村清幸氏「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」より概要抜粋
- 3. 秋田の街に製鉄遺跡を訪ねて 2003.3.15.
秋田大学鉱業博物館・古代秋田城遺跡・製鉄地名の残る金足集落

1. 古代出羽・秋田の産鉄は蝦夷の生命線

この和鉄の道での鉄の覇権をかけた争い



古代奥州では奥羽山脈を背骨として山脈から流れ出る大河の流域は蝦夷の支配地で独自の文化を育んできた。

西側 陸奥国 北上川流域並びに東側 出羽国 最上川・雄物川・米代川流域などである。

この奥羽山脈には黒鉱脈が走っており、鉄・金・銅などの鉱物資源が有り、蝦夷の重要な公益品であり、蝦夷の力の源泉であった。

山でこれらの鉱物の採取加工に携わる山夷と河の流域で農耕に携わる田夷とが多くの部族に分かれて生活していた。

古代 秋田は蝦夷の支配地 出羽国 雄物川の河口日本海海岸に位置している。



当時の日本のメインロード東国から蝦夷の最前線陸奥国北上川流域に入り、そこから奥羽山脈を越えて出羽国を通り日本海側に出て、蝦夷の国際貿易港である津軽十三湊への要衝の地にあり、まさに蝦夷の生命線重要路に位置している。

採取された鉱物資源 鉄・金・銅などが、このメインロードを通して十三湊で取引されたという。鉄はもっとも重要な交易品であり、この道はまさに蝦夷の和鉄の道。

蝦夷は奥羽山脈山中の鉄 川の流域・海岸の砂鉄を原料にして鉄精錬・鍛冶加工を行い、自らの武器・農耕具として使うだけでなく 交易品として和鉄を産した。蝦夷の武器 蕨手刀の優秀性はその後の日本刀に大きな影響を与えた。

7世紀中頃からの中央政権の奥州征伐により大量に発生したこの蝦夷の鉄の工人たちが、日本各地に連れていかれ、その後の日本各地の和鉄精錬 鍛冶加工の発展に大きなやくわりを果たしたことは良く知られ、蝦夷地の製鉄技術の優秀性を示す良い例である。



図にインターネットで採取した古代東北の製鉄遺跡分布を示した。

7世紀半ばからの中央政権の奥州征伐も基本的にはこの蝦夷の持つ鉄を中心とした鉱物資源の支配が目的と考えられている。

7世紀 越の国の安倍比羅夫が海岸ぞいに北上し、出羽・能代・津軽の蝦夷を恭順させ 俘囚化したのを皮切りに奥州征伐を繰り返しこれらの地方の蝦夷を従属させていった。

7世紀から9世紀にかけての奥州征伐・奥州支配の戦いが繰り返され、その征伐の進行北上にあわせ、中央政権は奥州各地に柵をつくり、支配をつよめていった。

しかし、蝦夷は統一された国でなく、いくつもの集団に分かれた部族集団であり、優秀な蕨手刀などの武器で反抗もしたが、次第に俘囚として集団ごとに中央政権に組み入れられてゆく。

すなわち、産鉄を背景にした交易など蝦夷の力は強く 中央政権としてもこれら蝦夷をねじ伏せる事ができず。征伐とはいえ、直接支配できずに懐柔策として、その地方の豪族を俘囚長にして恭順した蝦夷部族を俘囚として支配していったのである。

蝦夷の強力なリーダー 胆沢のアテルイ・和賀のモレが坂上田村麻呂にやぶれ、京都で処刑された後は蝦夷の勢力は次第に弱まり、陸奥は安倍氏 出羽は清原氏といった俘囚長の下にたばねられ、中央政権の支配下に入っていった。



そして この俘囚長を通じた中央政権支配のため、多賀城をスターに 北上川流域には胆沢城 志波城などが作られ、出羽の国にも雄勝城・金沢城・秋田城が次々と作られていった。中央政権がこれらの城で地方経営を行うと共に蝦夷の手に産鉄の支配が奪い返されるのを恐れ、これら辺境の地での新たな製鉄基地を作る事を禁じ、鉄の工人を集め、直接これら城の中で鉄鍛冶・精錬を行うなど鉄の支配を強め、また、反抗した蝦夷の俘囚は西国へ兵士・製鉄の工人として送られていったといわれている。

この俘囚長支配の中で、蝦夷部族間の争いもたえず 出羽の俘囚長清原氏と陸奥の安倍氏の争い前九年の役 清原氏の内紛後三年の役を経て安倍氏の系統である奥州藤原氏がこの鉱物資源の覇権を握り栄華を極めてゆく。そして中央政権が直接支配が出来るようになるのは 奥州藤原氏が鎌倉政権に打たれる中世になってからである。

奥羽山脈が中央を貫く奥州は古代から 蝦夷にとっても中央政権にとっても宝の山。

この覇権をめぐる古代史を彩る壮絶な戦いが繰り広げられた。

奥羽山脈を東西に横切る幾筋かの険しい山岳道はその歴史を刻む奥州和鉄の道

この道は今も新幹線・高速道路が越えて行く重要交通路 そんなこと知る由もないが、昔も今も時代の



流れを吹き込む通商路・文化の道であることに代わりはない。

これらの地を訪問した三月の半ば 奥羽山脈は深い雪に閉ざされ、一筋の鉄路だけが国をつないでいた。
しかし、平野部に下るともう雪が消えて 早春の明るい景色
横手の街のあちこちの商店では 蝦夷のリーダー「アテルイ」の長編アニメ映画 鑑賞会の切符販売が
売られていた。

蝦夷の歴史を知れば知るほど 鬼といわれる蝦夷がいとおしくなる。鬼は悪者か・・・
今 問答無用の戦争がはじまっている。何か智慧はないのか
縄文のサークルにかけた平和の思い 蝦夷の生きた奥州古代 何かヒントにならないか・・・

2. 秋田の古代製鉄遺跡群が眠る秋田の丘陵地



秋田駅より 北の丘陵地



古代秋田城遺跡



金足から八郎潟東岸に続く丘陵地

7世紀後半から中央政権は この奥州・蝦夷地の鉱物
資源・鉄の覇権を求めて蝦夷征伐を繰り返し、その支
配を強めていった。

秋田での支配の中心としてこの地に 733年出羽柵が建
設され、760年頃より秋田城と呼ばれるようになった。
秋田市内及び秋田市の北の丘陵地から八郎潟の東岸地
域にかけては数多くの製鉄関連地名群がある。

一方 数はすくないが、 この地域から古代の製鉄遺
跡も出土し、この地域が古代からの製鉄基地であつた
事がうかがえる。

秋田・八郎潟東岸の製鉄関連地名群分布を調べ古代鉄生産の可能性を詳細に検討した木村清幸氏の研究
があり、それを引用紹介することで、 蝦夷征伐の推進 そして その押さえの中心となつた秋田城が
建設され、中央律令政権の支配が進む8,9世紀からの古代秋田・八郎潟東岸の地域にあつた和鉄生産基
地の状況を眺めたい



秋田市泉周辺 秋田市内金砂神社



秋田駅より西の丘陵地



金足付近 八郎潟東岸丘陵地



秋田市内に見える製鉄関連地名



秋田市北部 金足から昭和町への丘陵

木村清幸氏 「八郎瀧東岸の古代製鉄遺跡と地名」より概要抜粋



「秋田地名研究年報」第15号

<http://www5.et.tiki.ne.jp/~koremaru/chimei/nenpoxx/nenpo15/KIMUr.htm>

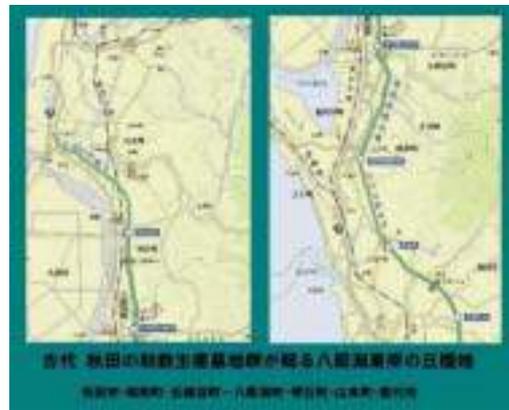


表 秋田・八郎瀧東岸の製鉄関連地名群分布

鉄の原料である砂鉄や材料に係わる地名。 蟹沢、金ヶ沢、砂子沢(いなごさわ) 金山(かねやま) など	31ヶ所
製鉄炉や鉄の生産加工に関連する地名。 踏躰(たたら)、大平(おおひら)、雷(いかづち)、鍛冶屋敷など	26ヶ所
生産された鉄製品の流通を仲介したとみられている神人(じじん)と関連した地名 八田(はった)、神田(かんだ)、飛鳥田(あすかだ)、八幡田(やわただ) 等	20ヶ所
製鉄や須恵器の生産技術を持つ工人集団の出自を表わしたとみられる地名。 泉、今泉、小泉、泉田、泉八日、泉沢、寒川等	11ヶ所

須恵器の生産工人集団や鉄生産工人の多くが五幾の和泉国や今木郷の出自であったことから

工人達の出身地である「泉」を、百済王に近い鉄工人集団は「寒川」地名を鉄生産の居住地へ出自に因んで付した

表 秋田周辺の古代製鉄関連遺跡の分布状況

<p>鍛冶遺構や精錬窯等が出土して古代鉄生産活動が確認できる遺跡 琴丘町堂の下、泉沢、八竜町扇田谷地、能代市寒川、秋田市諏訪の沢、秋田城</p>	六ヶ所
<p>製鉄のための鍛冶用炭窯遺構が確認できる遺跡 秋田市大平、能代市十二林、琴丘町堂の下</p>	三ヶ所
<p>鉄生産に付随する須恵器の製造を行なう須恵窯が存在 秋田市上新城松木台、大沢、下新城末沢、槻木、手形山、濁川、 昭和町元木、能代市十二林</p>	八ヶ所
<p>刀子や鉄器類、須恵器が出土する古墳群に近い遺跡。 五城目町岩野山古墳群、井川町飛塚古墳群。</p>	二ヶ所

このように製鉄に関連する地名群は八郎潟東岸の丘陵部を縫うように北上している。
 八郎潟東岸部で合計二十ヶ所とこの地域が古代製鉄の生産基地であったことがうかがえる。

これらの結果を基に製鉄遺跡を中心にして鉄関連地名の分布を調べてみると、南から北へ八郎潟東岸には6つの製鉄地名群の存在が地域性を持ちながら読取ることができる。

表 八郎潟東岸に存在する6つの製鉄地名群

第一群	秋田市上新城の松木台遺跡（八世紀中葉）須恵窯を中心に芋地、閩金、大平、雷田、保多野、雷、泉沢の地名が分布する一帯。
第二群	秋田市金足の大平遺跡と昭和町元木遺跡に連なる丘陵地で、蟹沢、金ヶ崎、大平、砂子沢、山王田、神田、小泉、八幡田等の地名が分布。
第三群	井川町飛塚古墳群跡に連なる丘陵地帯。飯田川町金山、糠塚森、蟹沢、昭和町泉沢、小泉、山王田、井川町大平、赤沢、大菅生、小泉、泉沢の小地名が分布。
第四群	五城目町岩野山古墳群跡周辺一帯。五城目町蟹沢、金ヶ沢、菅ノ沢、雷、大平、八田、泉田、磯の目、踏鞠沢といった地名が分布。
第五群	琴丘町堂の下遺跡、泉沢中台遺跡、八竜町扇田谷地遺跡一帯。琴丘町金畑、小金畑、たたら袋、砂子沢、山本町今泉、泉八日、飛塚、蟹子沢、金山、赤川等の地名が分布。
第六群	十世紀後半の操業年代と推定される能代市寒川、十二林遺跡付近。 この洪積台地一帯には、蟹子沢、船沢、赤川、逆川、塩辛田、小野沢、福田等の製鉄生産の施設関連地名が多く分布しているのが特徴である。

鉄の一回の生産には鉄資源としての砂鉄が4300貫（約16.1トン）鍛冶炭が4250貫（約15.9トン）を必要とすることから砂鉄より鍛冶炭の資源となる木材の枯渇によってその生産基地を移動せざるを得なくなる。

これを手がかりにすればこれらの古代製鉄関連地名・製鉄遺跡分布とその年代を重ね合わせると製鉄の工人が歩いた道筋が見えてくると木村清幸氏はいう。

この鉄工人集団が移動する際に工人達が居住していたことを示す地名が各地に残されており、その地名を手掛かりに集落分布を辿ってみると鉄工人の通った道筋が見えてくる。

これをこの秋田・八郎潟東岸の製鉄遺跡群にあてはめると次の二つの集団の道筋が見える。

製鉄関連地名から読み取った 古代 八郎瀧東岸の製鉄集団の足跡

原住地の和泉国の「泉」を地名に付して移動している工人集団

秋田城に近い秋田市泉の泉山周辺を起点に、秋田市五十丁・泉沢、秋田市金足・小泉、昭和町上虻川・小泉、泉田、井川町北川尻・泉田、黒坪・小泉、五城目町高崎・泉田、山本町下岩川・今泉、森岳・泉八日、琴丘町鹿渡・泉沢に至まで、この「泉」を付した地名が八郎瀧東岸を徐々に北進し工人集団の移動した道筋が読取れる。

百済王の一族で東国を経て出羽国に来た寒川工人集団

秋田市の鍬代山を中心に太平・目長崎と下北手・寒川付近で長期間に渉る鉄生産を行い、元慶の乱が終息した後に鍬代山から北の能代市寒川付近へ移動。規模の大きな製鉄生産施設の跡が発掘されて、ここにも工人集団が北進した道筋が見える。

緻密な地名解析にビックリすると共にこの木村氏の製鉄解析で解き明かされたごとく古代秋田には永年にわたって鉄の生産基地があったことがうかがえる。

都からも奥州支配の拠点多賀城からも遠く離れた奥羽山脈の山影 出羽国に置かれた秋田城はまさに蝦夷の生命線と鉄の道にらみを聞かす一大拠点であったろう。

また、秋田城の中に鍛冶遺跡があるが、朝廷が蝦夷征服後 鉄生産基地が蝦夷に落ちるのを恐れて、辺境の地で独自の鉄生産を禁じ、自ら城の中で鉄生産加工をやった痕跡であろう。



秋田城遺跡 と 秋田城政庁後 発掘現場 2003.3.15.



丘陵地の一角にある秋田城そして鉄の工人集団が住んだという秋田市金足

どこまでも続くまだ春浅い丘陵地を歩くとここがそんな古代日本の歴史を飾る桜舞台とはとてもおもえぬのどかな林の中である。また、この明るい丘陵地の林の中にと奥州征伐という当初抱いていたこと

とばのイメージとは何か違う蝦夷と中央政権との関係を感じている。

秋田からその後金沢柵があった出羽横手を訪問したが、この出羽・秋田でも蝦夷のことばの暗さはない。



前にかいたごとく 青森・津軽・鹿角で感じたのと全く同じ。

やはり この奥州が中央とは別に大きな文化圏を持ち、それが今もそこに暮すひとたちに生きづいていてあり、よそ者の我々が抱くイメージからは程遠いのかも知れない

3. 秋田の街に製鉄遺跡を訪ねて 2003.3.15.

秋田大学 鉱業博物館・古代秋田城遺跡・古代製鉄地名の残る金足集落

- 3.1. 秋田大学 工学資源学部 附属 鉱業博物館
- 3.2. 古代中央政権の東北支配の前線基地 秋田城
- 3.3. 古代製鉄関連地名 秋田市 金足集落を訪ねる

鉱物資源の宝庫秋田にあつて古くから鉱物資源開発・金属材料のエンジニアを育ててきた秋田大学金属材料を志す者にとっては是非とも訪問したかった秋田大学鉱業博物館である。

また 何とはなしに蝦夷の最北の地が秋田。でも縄文から見ると日本の中心 米代川・雄物川流域にはストーンサークルはじめ多くの古代遺跡あり。

また秋田・能代の海岸に古代製鉄遺跡の印がついている。そして 古代には秋田城が置かれている。

秋田は蝦夷の時代からの産鉄の根拠地ではないか・・・????

そんな 心もとないイメージの中で



北上市から西へ和賀川に沿って奥羽山脈を越え米沢へ至る道は

「奥州藤原氏が支配した鉱物資源の通商路 秀衡古道」

その奥羽山脈の一番奥深いところか仙人峠そこから鉄が出る。

相澤史郎著「奥州・秀衡古道を歩く」

蝦夷のリーダー「アテルイ」を描く佐藤清忠氏の「ヒタカミの鬼・和賀の里」に別項のような文章があり、次のことが生き生きと書かれているのを知った。

和賀は蝦夷の主交易品 和鉄の生産基地。

北上川流域の陸奥から奥羽山脈を越えて出羽に入り、日本海に面する秋田

- ・ 津軽十三湊に至る道は蝦夷の生命線 鉄の通商路

<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html> より

奥州藤原氏はこの蝦夷の鉄の覇権を受け継ぎ、平泉の繁栄へとつながり、古くからの蝦夷の鉱物資源・鉄の通商路を受け継ぎ それが「秀衡古道」として今に残っている。

薄ぼんやり縄文の北東北 country walk で得た秋田のイメージと 鉱物資源・蝦夷 和鉄の国「秋田」が結びつくにつれ、一度は是非秋田から出羽の山里を歩かねば東北は語れないとの感が強くなった。

私が秋田へ出かけたのは 3.15. の早朝。 秋田行の新幹線に飛び乗った。

秋田までそのまま新幹線で行き、帰りに横手から北上線に乗って仙人峠を越えて和賀・北上へ出る計画。

福島 吾妻・安達太良連峰 蔵王連峰 そして仙台を越えて 栗駒・焼石・和賀山 盛岡から八幡平 へ

と続く奥羽山脈の峰々にはべったりと雪がつき、快晴の空に壁となって聳えている。この山の向こうが
出羽・秋田。 蝦夷の本拠地である。

盛岡を越えて田沢湖線に入り、山中に入ると深い雪。よくまあ こんなところに鉄路をのばしたものだ
と思う。秋田・横手から北上に抜けた仙人峠越えも 福島から米沢への道も雪深いすごい道。

でも これらは いずれも 古代から受け継がれた奥州の通商路。その中心は鉄・金・銅の鉱物資源
奥州の和鉄の道である。

雪が覆い被さる川筋の中腹を川筋にそって鉄路が延びている峠越。周辺が雪だけなので余計に奥羽山脈
で隔てられた出羽・秋田への峠越えの道のすごさ 古代最後まで中央政権が直接支配できなかった理由
が判る様な気がする。

厳しい峠道を越えて 田沢湖・角館に入ると一面銀世界であるが、明るい市街が広がり、大曲に入ると
秋田県の大川 雄物川を渡ると一面雪野原の秋田平野が広がり、この雄物川にそって海岸に出ると秋田。
海岸に近づくにつれ、雪が消え 秋田市周辺には雪はなし。朝 上野を出て昼前には秋田についた。

参 考 佐藤清忠氏著「ヒタカミの鬼・和我の里」より 抜 粋

<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html>

「出羽は、いかがでしたか」

アテルイもモレに尋ねた。出羽は現在の横手市の近辺である。そこにある雄勝城で、エミシの民と朝廷の間
でいざこざがあったのである。

「雄勝城に帰順する者と背くものが半々というところでしょうか。いまは、出羽の租や調は、比較的軽い状
況ですが、いずれ、出挙（すいこ。年利率50%で朝廷の稲を貸す制度）や、義倉（ぎそう。凶
作にそなえた穀物の無尽制度）で、がんじがらめになることを心配していたようです。征服された民のさ
だめですが」

「背いた人たちは、その後どのように暮らしているのですか」

「帰順した人が多くおりました。しかしすぐに西方（九州地方のこと）に送られるようですね。

ええ、ご推察のように、林業と製鉄の技術指導が兵士としてです。その他は山に逃げたようですね。

子波族の地にも、多数流れたようです。和我でも受け入れました。たたら作業に就いております」

長老側近でなければ知らない情報がモレの口から紹介された。

「和我の鉄は、定評がありますからね」十三湊（とさみなと）の者が口をはさんだ。

和我の里では、「高殿たたら」による生産様式が、和我川上流（現土畑鉱山付近）に導入されており、天候に
関係なく一定のペースで鉄素材を生産できたのである。モレは逆に、十三湊の者に尋ねた。

「十三湊の鉄の相場はいかがですか」

モレの関心は和我の主力交易品である鉄素材の状況である。和我の若者達も緊張した顔になる。

十三湊の者はしかし、暗い顔で答えた。

「ふむ。正直な話、下がり加減になった。越後の連中の話だが、このところ朝廷改修や造都の熱が冷め、新
羅侵略を計画していた仲麻呂もいなくなった。しかし近江や出雲、越後はあいかわらず鉄を量産
し続けているようなので、陸奥の鉄がだぶついたようだ」

エミシの玄関十三湊には、越後等から鉄素材や木材また塩、魚介類の仲買人の来訪者が多い。

この貿易港には、交易品の流通のみならず、村を追われた者や渡来人がたどり着き、その後、当時の禁制品
であった製鉄に従事することも多かった。

アテルイは、このような者の組織化や開発、流通を行うことが本業であった。

広いコンコースのある秋田駅の二階から西側を見ると奥羽山脈を背に広がる市街地越しに南北に長く連なる低い丘陵地が見える。この丘陵地が古代 秋田の製鉄基地となったところ。

この一角の南の端の山裾に秋田大学があり、さらに北側に古代秋田城遺跡 そして 古代製鉄遺跡群ならびに製鉄関連地名群がつながる金足地区へと続いている。

案内所地図を貰ってスケジュール確認する。

秋田大学の鉱業博物館を見学して 古代秋田城へ行って 木村清幸氏の「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」で知った金足集落まで足をのばす計画

3.1. 秋田大学 工学資源学部 付属 鉱業博物館



秋田大学 鉱業博物館 と 大学キャンパス 2003.3.15.



秋田駅の東側にでて 車で約 10 分 市街地を抜け 丘陵地の高台の上に鉱物博物館があり、その下には大学のキャンパス越しに市街地が見える。

是非訪づれたかった鉱業博物館。立派な建物にビックリ。確か昔は鉱山学部だったと思いますが 鉱物資源の国秋田を支える秋田大学。「工学資源学部」の名に日本の鉱物資源開発のエンジニアを育てて来た伝統と自負の意気込みを感じました。

秋田県を鉱物資源国にした奥羽山脈に延びる黒鉱脈 鉄・金をはじめ銅 亜鉛ほかそして石炭・油まで産出。数々の鉱石標本が円形の建物の中に収められていました。

兵庫県生野銀山の三菱コレクション 茨城県の自然博物館の鉱石コレクションや東北大金属博物館も立派でしたが、量・質・大きさとも勝るとも劣らない素晴らしさでした。



鉱石標本展示

鉄鉱石も明礬石など変わった鉱石も見つけました。標本というとは大抵は 親指大の大きさなのですが、何百と並ぶ鉱石標本がいずれもこぶし大の大きさ。そして 鉄鉱石標本だけでも数十を越える豊富さにビックリしました。また 蝦夷の和鉄生産基地和賀 仙人峠から産出した鉄鉱石も見ました。



岩手県和賀郡和賀町仙人鉱山 赤鉄鉱



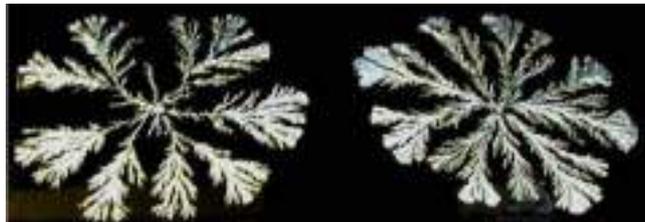
群馬県六合村 群馬鉱山 鉄明礬石

含鉄温泉の一つきれいな黄色をした温泉 明礬泉 また 赤鉄鉱を含む赤湯にも温泉はわかったけどどんな形で鉄がふくまれているのか・・・鉱石を見てみたいと思っていましたが、鉱業博物館で大きな標本に出会えて満足。

又、 雪の結晶にも似た亜鉛の成長の姿 亜鉛花の美しさも印象的でした。メッキの中にこんな技術があるなど知りませんでした。

亜鉛花

亜鉛花の美しさ



残念ながら和鉄・たたら関係の展示はありませんでしたが、和賀 仙人峠の鉄鉱石を見れたのも収穫。やっぱり大したコレクションの数々 その立派さに伝統を支えてきた重みを感じました。

3.2. 古代中央政権の東北支配の前線基地 秋田城



秋田駅より北へ車で約 15 分八橋・泉・金砂神社などの地名を眺めながら中心部の市街地を抜けて国道を走ると左手に小高い丘が見えてくる。ミッションスクールの所から左に折れ、丘陵地への道を登って行くと雑木林が広がる丘陵の上に出ると外郭東門とそれに連なる築地塀が復元されている国の史跡「秋田城跡」の中に入る。この秋田城のある丘陵は高清水丘陵と呼ばれ、秋田駅より約三キロメートル北 土崎駅の南に位置し、旧雄物川と草生津川に挟まれた標高 30～50 メートルの丘陵地である



秋田城跡 復元された外郭東門 03.3.15.

秋田城は奈良時代から平安にわたって約 3 世紀にわたっておかれた日本最北端の大規模な役所で政治・軍事・文化の中心地だった。天平 5 年 (733) に秋田村高清水岡に造られた当初は「出羽柵」と呼ばれ、『続日本紀』733 (天平 5) 年の条に「出羽柵遷置於秋田村高清水岡」と記されている。やがて天平宝字 8 年 (764) 頃 秋田城と呼ばれるようになった。

その後、奈良時
(中国東北部)
割を果たしてい



秋田城跡のほぼ

部の地域を政庁と呼んでいるが、その大きさは東西 94m 南北 77m で周囲に塀をめぐらし、その中に建物が規則的に配置され、ここで重要な儀式や政務がとられた。

秋田城跡は昭和 14 年 (1939) 9 月に 90 ヘクタールが国の史跡指定。昭和 47 年 (1972) から発掘調査を開始し、現在も継続中である。

代には「国府」が置かれ、大陸の渤海国など対北方交易の拠点としても重要な役たと考えられています。

中央



秋田城 政庁跡 発掘現場 2003.3.15

3.3. 古代製鉄関連地名 秋田市 金足集落を訪ねる



木村清幸氏「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」の研究で秋田市周辺から八郎潟東岸にかけて、数多くの製鉄関連地名があることを知り、その中で唯一知っていたのが「金足」の地名。

『甲子園に出てくる常連校「金足農業高校」って 秋田市の学校・・・??』

木村氏の資料にでこわして調べるまで全く知りませんでした。



秋田市 金足追分周辺

秋田城のある丘陵地から降りて、国道をさらに北へ15分 市街地を抜け、左手海岸沿いに私の仲間が溶接をしたタンクのある秋田発電所の煙突を過ぎ、男鹿半島が近づくと田園地帯が広がる秋田市の北の端が金足地区。右手には田園地帯の向こうに低い丘陵地が延々と北に伸びている。

この丘陵地を南から北へ古代のたたら集団が薪・炭を求めて移動ながら和鉄精錬を続けていった所である。奥羽本線で秋田駅から三つ目追分駅のところで車を降りて東へ秋田歴史博物館のある林の中に入ってゆくと金足追分から金足小泉集落への道。いきなり林の中に「金足農高」がありました。



奥羽本線 追分駅



金足地区の丘陵地と県立博物館

2003.3.25.



林の一本道 奈良姓の家が並ぶ家並みを過ぎると金足風致地区の標識と葎が生茂る潟か散らばる丘陵地にはいり、潟の向こうには丘陵地をバックに秋田県立博物館。残念ながら県立博物館も改装中で閉館。

丘陵地の木々の芽吹きはまだで褐色の丘陵地が続いているが 古代の和鉄製造に思いをはせながらの里歩き。

どのあたりの丘陵に生産基地があったのか・・・

秋田の蝦夷は阿倍比羅夫の征伐軍に戦闘をいどまず 従順だったという。

俘囚となった製鉄の民はどうしたろう・・・

この丘陵地のたたら衆はその流れか・・・それとも渤海 朝鮮半島からやって来た韓鍛冶か 大和の鍛冶か・・・

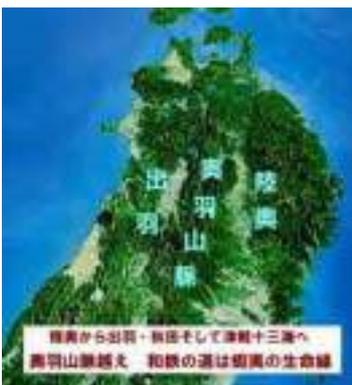
地図には古代製鉄関連地名と木村氏が指摘した金足・小泉・新城などの地名とともに

下刈 浦山も製鉄関連か・・・

たたら製鉄関連の遺跡そのものにはぶち当たりませんでした。本当に goo な蝦夷和鉄の道 を訪ねる秋田 walk でした。

このまま 能代まで八郎潟東岸の和鉄関連遺跡探訪も魅力ですが、やっぱり横手から北上線に乗って蝦夷のふるさと和賀へ 古代出羽から陸奥への仙人峠道を通りたい。

午後2時過ぎ 秋田新幹線・奥羽本線の乗継で横手へ



秋田の後背地 古代には蝦夷の鉄の生産基地であったろう 長く延びる丘陵地を眺めながら秋田を後にして横手へ向かった。

2003.3.15. 秋田から横手への汽車のなかで

6. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて

北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ 奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線

【完】

6-7.

奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道 北上（和賀）仙人峠越



1. 北上山地 東の仙人峠 と 奥羽山脈 西の和賀仙人峠
2. 和賀仙人峠に古代蝦夷の鉄に思いをはせて
3. まだ雪深い早春 横手から北上線で和賀仙人を越えて北上(和賀)へ
 - 横手 walk & 北上線 和賀仙人越 —
 - 3.1. 横手 Walk
 - 3.2. 北上線 和賀仙人越

1. 北上山地 東の仙人峠 と 奥羽山脈 西の和賀仙人峠

北上市をセンターに北上川をはさんで東西の山地にある二つの仙人峠 東の「千人峠」と西の「和賀仙人」。そこは古代から奥州の製鉄の生産基地。北上川をはさんで丁度 対称の位置 東の北上山地と西の奥羽山脈を越える厳しい山越えの峠それぞれがそれぞれに「仙人峠」の名がある。

どちらも本当に山深い奥地であり、かつ 古代からの鉄資源の宝庫 最近まで鉱山があった。

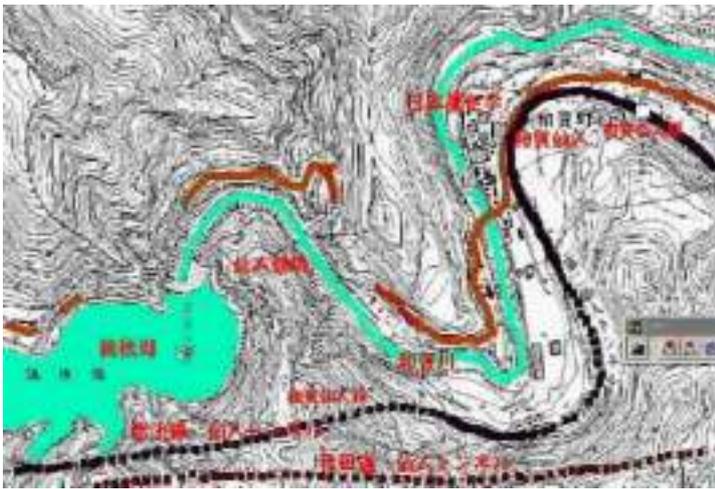
奥羽山脈と北上山地に挟まれたこの北上川流域 北上(和賀の里)・胆沢の地は蝦夷アテルイの前線基地。これより北に広がる広大な地域「奥羽」は蝦夷の勢力圏であり、ここで大和の勢力と蝦夷が対峙して幾多の攻防を繰り返した。

蝦夷の根拠地 胆沢・和賀から東へ早池峰山麓の遠野から北上山地を越えて海岸に出ると釜石。

その北上山中にある仙人峠はこの地から出る鉄鉱石(磁鉄鉱)を原料とした洋式高炉が初めて作られた地。この峠近傍から流れ出る川には「餅鉄」があり、また海岸には砂鉄。

この北上山地から釜石の海岸に至る川の地域には古代からこれらを原料とした一大製鉄基地があり、幾多の製鉄伝説が残る地である。





奥羽山脈 和賀仙人周辺

一方 北上(和賀)で北上川に流れ込む和賀川に沿って西の奥羽山地へ分け入る和賀



仙人峠一帯もまた鉄や銅などの鉱脈が走る日本有数の資源地帯で金・銅・鉄(赤鉄鉱・黄鉄鉱)を産出する。

和賀仙人峠の事を知ったのはつい最近。平泉で栄華を極めた奥州藤原氏の通商路「藤原秀衡古道」について書いた新書で。

奥羽山脈焼石岳と和賀岳の間から流れ出る和賀川に沿って奥羽山脈に分け入る峠道 今は北上線と秋田自動車道路が通る山中に鉄鉱山とそこに和賀仙人峠の名がつけられていた。

古代蝦夷の時代からの鐵の通商路調べれば調べるほど 面白い所である。

知っているようで知らなかった奥州・蝦夷の世界でした。



和賀仙人峠周辺 秀衡古道と周辺の鉱山

古代蝦夷の支配する「和賀」〔奥羽山中を流れ下ってきた和賀川が北上川に合流する現在の北上市周辺〕は大和との戦いの最前線「胆沢」の後方拠点。

奥羽山脈から産出される鉄をベースに武器などの製造拠点・補給基地の役割を果たしていたという。

和賀からこの奥羽山脈越の仙人峠を越えると出羽の横手へ。

そこから海岸地帯の秋田・能代と出羽の鉄の生産地をとり蝦夷貿易の玄関口津軽・十三湊へと続く道は古代からの蝦夷の重要通商路。

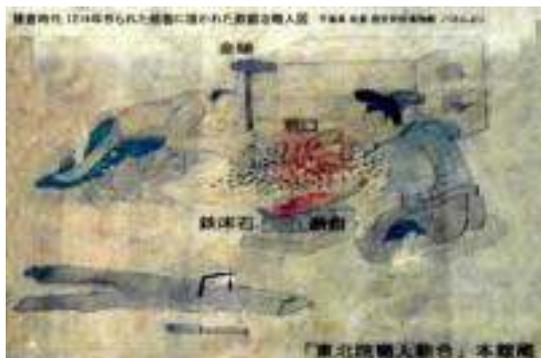
この道は奥羽山脈を背にその東西の陸奥・出羽に広がる蝦夷の心臓部をつらぬき、蝦夷の最大の武器「蕨手刀」など主要交易品である「和鉄」の通商路として繁栄を極める蝦夷の生命線「蝦夷 和鉄の道」であったに違いない。

北上川をセンターに東西にある北上山地・奥羽山脈それぞれにある「仙人峠」付近は古代から現在に至るまで 鉄などの鉱物資源の宝庫。古代から「和鉄の道」が通っていたに違いない。

参考 「蝦夷の鉄・餅鐵を訪ねて ー北上山系 釜石・大槌町ー」

- ◆ 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
- ◆ 佐藤清忠著「ヒタカミの鬼 ー和私の里ー」
- ◆ PHP 文庫「秀衡古道」

2. 和賀仙人峠 に 古代蝦夷「和賀の鉄」に思いをはせて



蝦夷の刀・日本刀の原型となった「蕨手刀」 中世鎌倉時代の鍛冶加工図

この奥羽山脈の和鉄並びに鉱物資源の覇権をめぐる大和と蝦夷が対峙し、ある者は恭順を示し、また、幾多の戦闘ののち、蝦夷から大和の手にこの覇権が順次落ちてゆく。

阿倍比羅夫・坂上田村麻呂らの奥州征伐 蝦夷征伐といわれるが、その本質は蝦夷の支配する鉱物資源の覇権をめぐる「和鉄の道」での戦いだったともいえる。

中央政権の支配が強まるにつれ、 蝦夷は俘囚として中央政権に組み込まれてゆくが、蝦夷の後継者安部氏が鉄の覇権をかけて 出羽の豪族清原氏と争い（前九年の役）さらに、清原氏の内紛後三年の役を経て、奥州藤原氏がこの東北地方を治めることになる。

これらの戦いもまた 蝦夷を束ねる出羽・陸奥の豪族間の戦いと同時に奥羽山脈に眠る豊富な鉱物資源の覇権をめぐる争だったとも言われている。

これらの戦いの中で敗れた蝦夷・俘囚の出羽鍛冶・舞草鍛冶など優秀な奥州の鉄の工人在都や西国に連れてゆかれ、その後の西国での和鉄生産 日本刀に代表される鍛冶加工の発展を担って行く。



このように古代奥羽山脈の東西を結ぶ「和鉄の道」はその後 日本各地の鉄生産・鍛冶加工にかかわる重要な役割を果たしていったと考えられ、「金売り吉次」の伝説もこれらの中から生まれた。また 奥羽山脈の鉱物資源の覇権を握った奥州藤原氏は平泉を本拠として栄華を極め、平泉から奥羽

山脈を越える通称路はその後も奥州の主要通商路として益々繁栄する。

平泉から北上市で和賀川にそって 奥羽山脈に分け入り、和賀仙人峠を越えて横手に至る道は後三年の役の後、奥州の蝦夷支配ならびに奥州の鉱物資源の覇権を握った奥州藤原氏の主要通商路 「秀衡古道」とよばれ、繁栄を極めた。

その後も この仙人峠付近の鉱物資源の主要通商路としてとして今に名を残している

また この仙人峠付近の鉱物資源は古くは蝦夷・平安の古代から中世・江戸時代をへて、現在にいたるまで採掘が続けられてきた。

いわゆる奥羽山脈を貫く黒鉱脈ベルトに位置し、まさに日本の鉱物資源産出の役割を担って来た。そういう意味でも明治の洋式高炉が建てられた東の北上山地の仙人峠と双壁である。



黒鉱ベルト地帯が走る 仙人峠近傍と鉱山群



黒鉱脈走る奥羽山脈
日本資源産出マップ



和賀仙人鉱山から産出した赤鉄鉱
秋田大学 鉱業博物館 展示より

3. まだ雪深い早春 横手から北上線で和賀仙人を越えて北上(和賀)へ

— 横手 walk & 北上線 和賀仙人越 —



横手川と横手市



北上線 和賀仙人付近



山中のフェロアロイ工場



和賀仙人鉱山産出赤鉄鉱

昨年秋、釜石線に乗って東の仙人峠を越しましたが、今回は西の仙人峠越え
秋田へ出かけた帰りに横手から北上へ通ずる北上線に乗ってこの和賀仙人峠を越える
山の斜面に沿って、雪の壁の中を走る一筋の鉄路 よくまあ こんなところに鉄路を・・・というのが印象でした。

3.1. 横手の街で 2003. 3. 15.



横手駅前 「かまくら」の像 2003. 3. 15.

午後 秋田を出発して 秋田の大河 雄物川をちらちら見ながら 雪の秋田平野を突っ走って横手に入る。横手市に入る手前の雪野原の丘陵地に「三年の役」駅。この丘陵地にかつての金沢城(金沢柵)があり 線路に沿って 後三年の役の合戦を描いた大きな立て看板が立っている。

古代 蝦夷の俘囚長となった出羽の清原氏の内紛の中、陸奥安部氏の流れくむ奥州藤原氏が勝ち、栄華を極めてゆくスタートとなった古戦場である。



【 後三年の役 と 金沢城 インターネットより 】

すっぽりと雪に被われた野原であるが、中央政権が 蝦夷支配を強めるために築いた金沢柵。そこを本拠として出羽・陸奥の俘囚長として蝦夷を支配した清原氏。

出羽蝦夷の郷の真っ只中にある。

そんなことを考えている間に横手の駅へ汽車はすべりこんだ。もう 雪が消えて「かまくら」のイメージはない。



雪の秋田平野

山深い横手の待ちを訪ねるのは初めて。

出来れば「かまくら」の時に訪れたかったのですが、三年ながらダメ。でも 駅前の「かまくら」の像が迎えてくれる。お目当ての奥羽山脈越えの北上線の出発まで約1時間ほど待たねばならない。



秋田平野を貫く雄物川

雪横手は 東に奥羽山脈 西に出羽山地に挟まれ中央に雄物川が流れる盆地で、通商の要衝として 古代 金沢柵が置かれ、朝廷 出羽蝦夷支配の根拠地になったところ。その後も雄物川海運の物資集散地として発展。街の中心部には雄勝川に注ぐ横手川が流れ、川の後背の丘に横手城の天守閣が見える。

また、金沢柵が置かれた場所は街の北の外れ 覆う線で通過してきた後三年の役駅の背後の丘陵地。

今回はゆけず。

の中をゆっくり歩く。



横手川と横手城



横手市の大通 2003. 3. 15.

周囲を山で囲まれた横手盆地 東側には今日越える奥羽山脈が連なり、南側には出羽山地が海岸部まででばっている。 午後の太陽の明るい日ざしの中、雪国の暗さはない。 駅前の商店街から一筋はいるとまだ昔の古い商店の家並みが連なり、各家々の玄関口が二重になっているのが、雪深さを思い出させる。



懐かしい看板などと一緒に二重になった玄関が並ぶ 横手市の市街

商店のガラスに「アニメ映画『アテルイ』の前売り券あります」の張り紙があちこちにある。 やっぱり ここは古き蝦夷の根拠地。 蝦夷に対する親しみをこの張り紙に見ました。

後三年の役駅前には雪の中に合戦の絵のおおきな立看板がたっていたが今回は行けなかった金沢柵。 出羽 蝦夷の俘囚長 清原氏の本拠。

後三年の役ではここを舞台に源義家の支援を受けた奥州藤原氏が清原氏を追い詰め、清原氏は金沢城で滅亡する。 奥羽本線の後三年の役駅のすぐ前から広がる丘陵地。 今 この古戦場は「平安の風わたる公園」として整備されているが、一面の雪野原。

次回には一度金沢柵まで行ってみようと思っている。

金沢柵そばの「平安の風わたる公園」 internet より採取

後三年の役の主戦場。清原貞衡死後、清原一族が内紛を深めていく中 清原清衡は異夫弟の家衡に妻子を殺害され、清原一族をまっぶたつに分けた戦争に発展していく。

そのおりに家衡がこもったのが、ここ、金沢柵である。

天然の要塞であるこの柵に手を焼いた清原清衡と陸奥守源義家の連合軍は兵糧攻めで、この柵をおとし、後三年の役に勝利する。 難攻不落の柵である。本丸付近に今は兜八幡神社がある。

また周辺には義家が雁の列の乱れから敵方の兵が潜んでいることを見破った場所という西沼がある

この周辺は「平安の風わたる公園」として整備されており、清原清衡、清原家衡、清原武衡、源義家のブロンズ像などがある。



3.2. 北上線 で 和賀仙人峠 越



約1時間ほど街を歩いて 真っ暗になる前に仙人峠を越えることを期待して北上線4時発北上行に乗り込みました。

山形県新庄・秋田湯沢方面から秋田角館方面から判らないが、カメラを片手に持った人がやたらに多く乗り込んできて、みんな場所取りをやっている。

そんなこの北上線の山越えの鉄道の雪景色は有名なのか・・・??? と期待が膨らむ。

街を出るとさすがに雪野原が広がり、雪の奥羽山脈の山懐へ向って汽車がはいてゆく。

横手から奥羽山中に入り、和賀岳の麓 湯田高原を通り、今はダム湖になった黒鉱ベルトの山岳地帯和賀仙人を抜け、一気に山を下り北上市に至る約1時間30分の路線。

雪の山間を約30分程で雪の中にすっぽり埋まったほっとゆだ駅。

和賀岳の麓に広がる高原の中心駅で湯田温泉郷の中心で駅舎に温泉があることから多くの人が下車する。

ここから先は奥羽山脈の鉱山地帯。

雪に埋まった山と山の狭い谷間のダム湖の縁雪壁に沿ってつけられた一筋の鉄道を汽車が進む。よくまあ こんなところに鉄道がつけられているというのが実感であるが、すばらしい雪景色が続く。



錦秋湖周辺 2003.3.15.

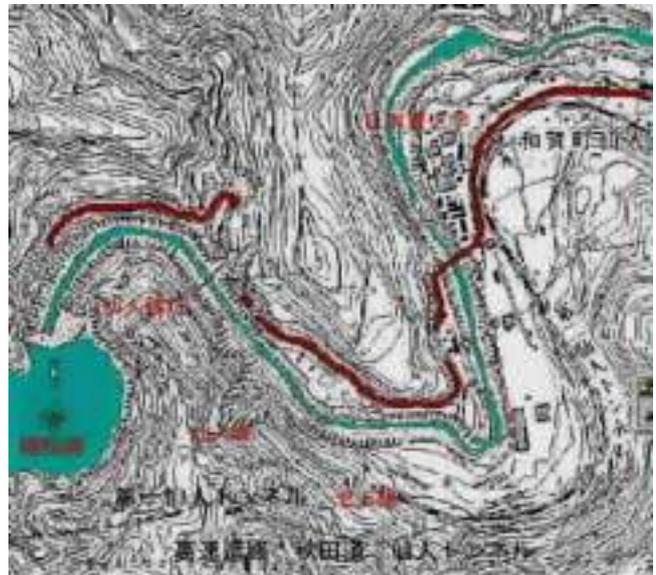
カメラ片手に先頭部に大人も子供もみんな群がって雪を掻き分け進む奥羽越えの写真をとっている。ほどなく雪の中にすっぽり埋まった「ゆだ錦秋湖」駅。家々がすっぽり雪に埋まり、山奥の郷であることがわかる。次の駅がよいよ「和賀仙人」駅。



北上線 鉄路 和賀仙人周辺 2003. 3. 15.

汽車は雪の中を山肌へべりつきながら いくつかのトンネルを抜けて山を登ってゆく。幾つかのトンネルを抜けた後、山中に山肌へべり付いて建つ工場が前方に見える。今も操業している鉱山であろう。

いよいよ 和賀仙人峠周辺に至ったことをこの風景が示してくれる。幾つか山肌を巻きトンネルを抜けると四方を高い山に囲まれた山中に不意に大きな工場群が現れた。日本重化学工業・の南岩手事業所のような。



和賀仙人周辺 日本重化学工業の工場群 2003. 3. 15.

和賀仙人 山中に忽然と現れる工場群

厳しいビジネス環境にさらされているようですが、発電所等を持つ今も現役のフェロアロイの工場群である。(後で調べて判ったのですが、この工場では現在アルミ化成箔が主力で フェロアロイの工場は海外関連会社にシフトしているようだ)

かつては仙人峠周辺から産出する鉄資源を元にフェロアロイを生産し、日本の製鉄会社に供給するトップメーカーである。

日本古代から「鉄」を供給した「和賀の鉄」がこの雪深い奥羽山中仙人峠の鉄。福島県原町の行方金沢製鉄遺跡群が古代中央政権の武器庫といわれているが、対峙した蝦夷もこの和賀を中心とした奥羽山脈の山中に鉄資源とそれを加工する兵器庫を持っていた事が対抗できた所以であろう。この山の険しさが抵抗の支えになったことがうかがえる。



奥羽山脈 黒鉄ベルト地帯が走る



和賀仙人鉱山から産出した赤鉄鉱

その和賀仙人峠周辺が今も資源地帯の現役であることにもビックリ。

日本資源産出マップ

秋田大学 鉱業博物館 展示より

つい先程 秋田大鉱業博物館で勉強した日本の黒鉄脈の優秀性 そしてその黒鉄脈が貫く奥羽山脈と秋田の鉱物資源にも思いをめぐらした。

仙人峠を越えて和賀の平野部に汽車が入ると、そこは 古代 蝦夷の本拠地 和賀。雪原の背には和賀川越しに今越えてきた奥羽山脈の峰々が夕日に染まって本当にすばらしい景色。



和賀川越しに仙人峠を望む北上市より 2003. 3. 15.

古代蝦夷の時代も同じ風景があったろう。自分は東北人ではないが、東北の人達が愛する蝦夷のリーダー「アテルイ」。そして蝦夷の人達への仲間意識

そんな中に 自分も入ったような気分で覆う山脈に沈む夕日に見とれていました。横手から約1.5時間。北上駅に到着したときには 外はもう真っ暗になっていました。



北上線の車窓より
奥羽山脈に沈む夕日を眺めながら

2003. 3. 15. M. Nakanishi

奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上(和賀)仙人峠越-

2003. 3. 15.

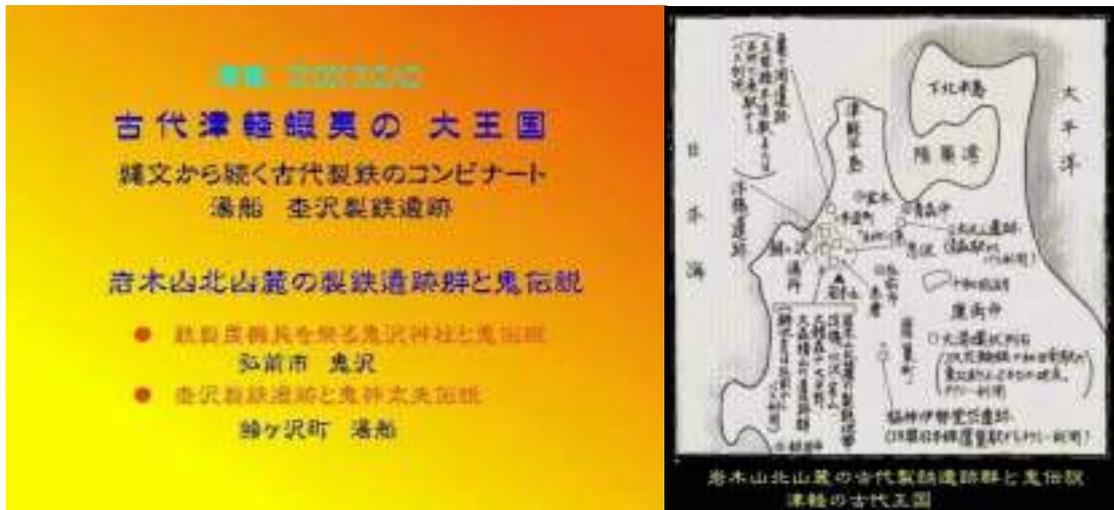
【完】

古代津軽 北の鉄の大王国【1】

6-8.

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

tgruoni.htm by M.Nakanishi 2000.3.5.



- 8.1. 鬼伝説と古代製鉄
- 8.2. 岩木山北麓 鬼沢 「鬼神社」と「鬼伝説」
- 8.3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」
- 8.4. 中世の交易都市 安東氏の拠点 十三湊



【岩木山から津軽半島から北海道を望む】 【北海道側から十三湖・七里長浜・岩木山を望む】

岩木山の頂上から 北を見ると眼下に、点々池・湿地が広がる広大な津軽平野「北のまほろば津軽の王国」が望める。北山麓には鬼伝説をもつ古代一大製鉄基地 鱒ヶ沢から弘前の幾多の沢筋がひろがっている。その向こうには、広々と開けた平野部が広がり、数々の縄文遺跡がある森田村そして五所川原・弘前・青森の市街の東西のベルトが伸び、陸奥湾を望む青森のはずれには、縄文の巨大都市山内丸山縄文遺跡が見える。

その奥の津軽半島に目を転じると日本海にそってまっすぐに北に伸びた砂鉄の浜『七里長浜』が見える。その海岸の湿地帯・池塘群の丘には亀ヶ岡縄文文化と呼ばれる縄文遺跡がちらばり、その奥には中世安東氏の繁栄を支えた貿易港 十三湖・十三湊が見え、竜飛岬を隔てて北海道 かつてのオホーツクの王国の地が見える。

津軽へ初めて行って<もう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。

原色と太い線で描かれるあの躍動感あふれるねぶた絵とねぶたのリズム 津軽三味線の響き 恐山

のイタコ。そして、地吹雪までも観光資源としてしまう。古代からの津軽王国の歴史が今も続く活力のある地域である。

津軽へ初めて行って もう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。しかし、日本書紀によれば、この津軽の蝦夷と大和朝廷軍とは戦闘を交えたというよりも、和睦によって、大和朝廷の支配下にはいったものであると言われる。

独自の文化をもった勢力圏 津軽王国が弥生時代～中世までずっと独立性を保って存在してきたという。

弥生時代後半から 6,7 世紀にかけて、大陸・朝鮮半島からやって来た渡来人技術集団によって伝来した鉄器・製鉄技法が日本で活発に取り入れられ、製鉄も行われるようになり、それらを手に入れた各地の王国 文化圏が日本統一をめざして覇を競い、その中から大和朝廷・日本が誕生した。

そして日本の大半を統一し、東国毛野・常陸国まで進出してきた大和朝廷は 8～9 世紀初には、東北部蝦夷征伐に乗りだし、大量の鉄製武器が動員された。

既に紹介した福島県原町に存在する製鉄遺跡群はまさに大和朝廷蝦夷征伐の兵器庫として隆盛を極めた大製鉄遺跡である。また、畿内河内の古市台地の大製鉄遺跡群をはじめ、京都府丹後半島弥栄町の製鉄遺跡群 吉備・出雲・そして伯耆など中国山脈各地や九頭竜川流域の越の国など日本各地の製鉄遺跡群もこの時代隆盛のひとつのピークを迎える。

大陸からつながってきた『鉄の道・Iron Road』が日本誕生を演出した流れである。

話を津軽に戻すと『鉄の道・Iron Road』は古来早くから、日本海 海路 津軽にもつながっており、日本列島の北の端で大きな独自文化圏を築いてきた。ただ、日本・大和朝廷の敵方勢力圏から外れていた為、北海道と同様 未開の土地と切り捨てられていたにすぎない。

事実 岩木山北山麓が古代の大製鉄地帯であったことが その地帯に伝わる鬼伝説と多くの製鉄遺跡群によって判ってきている。



津軽 鬼の故郷 岩木山と岩木山神社

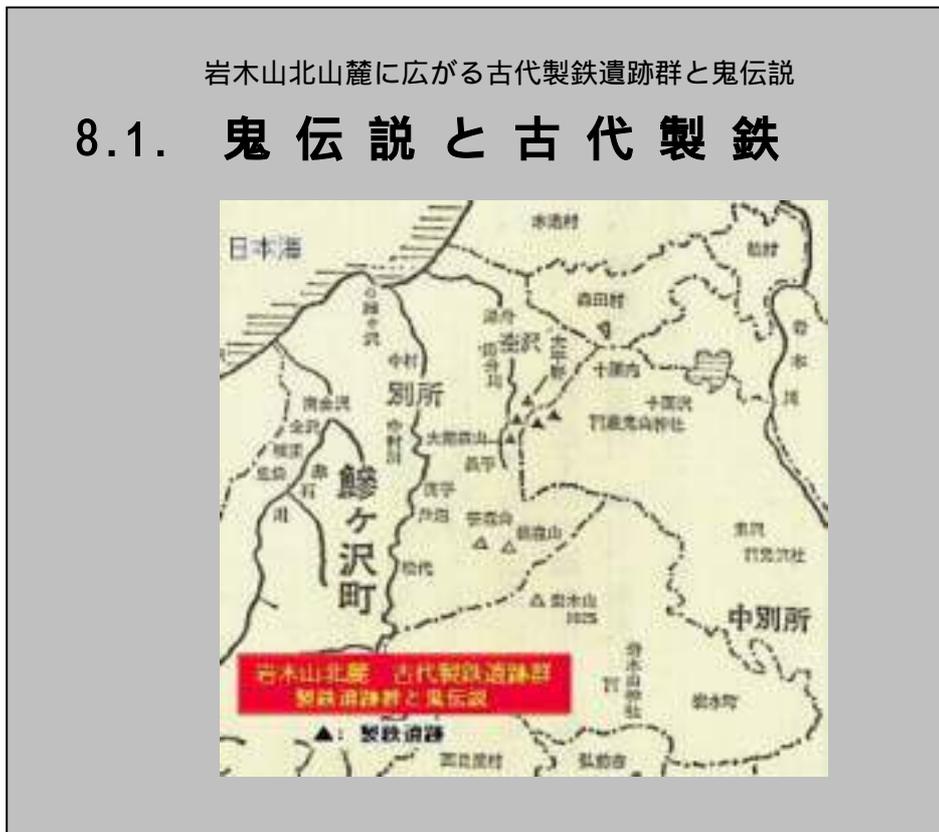
この製鉄遺跡から発掘される炉の構造が、この時代大和朝廷の支配下にあった製鉄遺跡の炉とは少し異なっており、伝播の道が少し違っていると言われている。また、柴田弘武氏らの本によるとこれら鉄の技術を持った東北の集団がその後の時代に俘囚として、日本各地でたたら製鉄に従事し、たたら製鉄の伝播に大きな役割をはたしたことが示されている。当時 奥州・津軽の製鉄技術の優秀性が大和朝廷でも認められており、完全に津軽を征服しなかったことと合わせるとあまりきっちりとした証拠は見されていないが、津軽に巨大な鉄の王国があった。証拠であろう。

昨年秋、津軽を訪問し、岩木山に登り、縄文文化の花開いた津軽半島西海岸を歩き、鉄の痕跡を探した時にはその痕跡は見つけれなかった。しかし、山内丸山遺跡・亀ヶ岡縄文文化のスケールにふれ、また、「ねぶた」のあの山車の迫力、そして 現代の青森の明るさとエネルギーに圧倒され、ここにも古

代日本誕生にかかわった「Iron Road」が伸びていると想像していた。

岩木山の北麓一体が古代の大製鉄遺跡群であり、また、製鉄と関係深い「鬼伝説」の伝わる土地であることを知ったのはつい最近であり、いつも津軽王国の存在を意識していたものの、製鉄遺跡の存在を知り、また、じっくりと岩木山麓を歩いたことと合わせ、やっと津軽 鉄の王国『津軽鉄の道・Iron Road』の存在が実感として結びついた。

雪が消え、暖かい花の季節には、是非 この岩木山北麓に広がる古代製鉄の地を訪ねたい。



岩木山から岩木山北麓にかけての一带では、多くの鬼伝説が伝承されており、同時に古代の大製鉄遺跡群や鉄滓が数多く発見されている。鬼伝説と古代製鉄遺跡との関わり合いは日本各地で見られ、鬼伝説の有る所 かならずや古代製鉄と何らかのつながりがあったことが、製鉄遺跡や鉄滓の発掘や地名等から判って来た。吉備の桃太郎伝説 丹後の大江山鬼伝説 伯耆の国大山山麓溝口の鬼伝説 北上山地地・一関の鬼伝説 そして津軽岩木山北山麓の鬼伝説などいずれも古代製鉄の技術を持って渡来した産鉄の民との関わりが深い。

この伝説に登場する「鬼」とはいったい誰か？。

製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打っている様子が鬼と映ったのかもしれない。製鉄には鉄を精錬するための炉の場所として、風が吹きあがる谷間や山すそが必須であり、大量の炭の必要から森林の伐採が必要で、製鉄炉が築かれると山が丸裸になってしまう。鉄生産に付随した森林の大量伐採と 砂鉄・鉄鉱石採取のための山を切り崩しと川流し等による山の荒廃により起こる自然災害により、農耕の民との争いもたえなかったと想像される。山深く入った産鉄の民は山と里人との争いを通して 山の民=「鬼」 悪者として描かれるこ

とが多い。しかし、時には里に下りてきたこの産鉄の民が開墾を促進し「開拓の祖」と善者にもなった。これらが鬼伝説として、また 地名として今に伝えられている。

一昨年 大ヒットした映画「もののけ姫」の記憶は新しい。

また、各地に残る大男「ダイダラボッチ・ダイダラ坊」の伝説や「河童」伝説も産鉄の民・渡来人との関わりがあるとの説があるが、よく判らない。

8.2. 岩木山北麓 鬼沢「鬼神社」と「鬼伝説」 弘前市 鬼沢



鬼神社 社殿 多数の農耕具献額を掲げた鬼神社正面 農耕具の献額

弘前市から岩木山を左手に見ながら鱒ヶ沢町に向かう県道を行くと「鬼沢」という地名が見えてきます。この集落には、「鬼神社」があり、鬼が御神体として祀られ、農業の守護神として地域の人々の信仰を集めています。この地の鬼神社には、『山から下りてきた鬼が、一夜にして荒地に一大水路を作り上げ、農耕の民の開墾を助けた』との鬼伝説が伝わっています。2月の節分、この地域の人たちは今も「鬼は内、福は内」と言い、鬼を悪者ではなく、自分達の守護神として祭っている。

鬼神社のご神体は鉄滓を数個積上げたもので、古くから石の仏様として大事に祭られてきたという。また、神社拝殿正面の頭上には奉納額が並んでいるが、それら全部が全部、農耕具だというのが非常におもしろい。

このように鬼沢神社はこの地が古くからの製鉄地帯である事を含め、鉄との関わりが非常に深く、これがまた、『鬼伝説』とも結びついている。

岩木山にいた沢山の鬼たちが山麓に流れ出る赤倉川の流域に移り住み、この鬼沢の鬼もこの赤沢の鬼が下りてきたといわれている。岩木山から赤倉に下って行く途中には 今も「鬼の土俵」などの地名が残っている。

赤倉の山にいた製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打ち、農具を作っている様子が、村人には鬼と映ったのかもしれない。

津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒地で、作物の実りはきわめて悪かった。そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せっせとこの荒地を耕し始めた。村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思

い、開墾の困難と農業用水の必要を鬼に訴えた。すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。翌朝になって村人たちが行ってみると荒地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

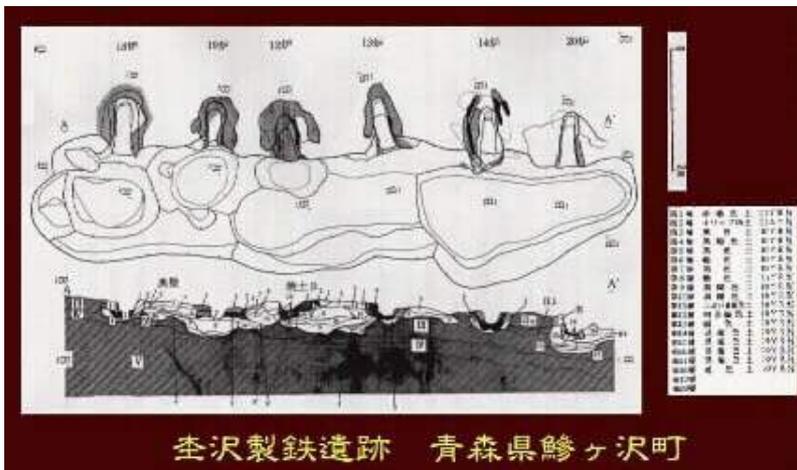
村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

8.3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」



青森県鱒ヶ沢町から南に広がる岩木山北山麓の一带は鬼神伝説を持つ古代から続く一大製鉄地帯の中に、鱒ヶ沢湯舟で発見された空沢製鉄遺跡がある。

数基単位で整然と並んだ製鉄炉跡 134 基とともに鉄滓・羽口や炭焼がまなどが発見された。



空沢製鉄遺跡 青森県鱒ヶ沢町

【青森県鱒ヶ沢町 教育委員会 資料より】



傾斜地の斜面に長さ 1m 前後 幅 50cm 弱 高さ 30cm 程度の製鉄炉が数基づつ整然と並び、その前にこれらの前庭部には共用される廃滓ピットと作業場がある。

このような一連の製鉄炉をもつ製鉄場が 9 群 total 30 数基の製鉄炉などが発掘されている。

大半が、10 世紀平安時代の製鉄炉遺跡であるが、このような小型の製鉄炉が整然と並び製鉄場を基本とする製鉄遺跡は、同時代日本中央に見られる製鉄遺跡にはない独自の形式を有する遺跡である。

また この一帯は縄文時代から続く製鉄地帯であり、数々の縄文遺跡もあり、本遺跡も古い製鉄遺跡の上に築かれていることから、この地での製鉄はもっと時代を遡れるといわれている。

このように独自の形式を持つ製鉄遺跡が発見されたことからこの地が古くからの津軽蝦夷の王国を支えた一大製鉄基地と考えられる。

湯舟の鬼神太夫伝説

鯉ヶ沢町



湯舟 中央の杉木立の上にお宮がある

湯舟 湯舟神社

昔 鬼神太夫(鬼)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。

桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して、娘をくれるようにと申し込んだ。

困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、

長者が一本盗んで鳴沢川に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、

「十腰無い十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと

鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼を見つけ、刀鍛冶の兄が打ったものであると打ち明け、

その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

長者が亡くなる時姉娘には形見として湯舟(鉄を冷やす水を入れた船)をやり、

分家させた。また、妹娘には金敷(鉄を打つ台)をくれた。

それが湯舟村 金敷村の起こりとなった。

また、長者が刀を捨てた刀が浮いた所を「浮太刀」と言うようになった。

今の「浮田」である。

なお、鬼神太夫の打った刀の一本が今も岩木山 巖鬼神社に祭られているという。

「ふるさと あじがさわ」より

増補 蝦夷と製鉄遺跡の発見

一地名も伝説も鉄づくめ——岩木山ろく一帯

製鉄史の研究をしている「たたら研究会」（本部・広島大学）の穴沢義功委員によると、古代の製鉄炉の数はこれまで岡山県内の遺跡（古墳時代）の五十九基が最高、製鉄技術が普及発展した奈良・平安時代では本沢遺跡が最多になる、という。しかも、同遺跡では、古いものを焼した上に新しい伊を築いており、相当の長期間、鉄を生産していた、とみられる。

岩木山ろくには製鉄遺跡が多い。本沢遺跡の南約四キロの鯉ヶ沢町・大平野遺跡と大前森山遺跡からは平安時代の製鉄炉跡がそれぞれ、三、四基出土。山ろく周辺の森田村や五所川原市では、鉄を加工する鍛冶場が多数見つかった。

しかも、山ろくは砂鉄の産地。鯉ヶ沢町の郷土史家、坂井冬樹さんによると、二十年ほど前まで、赤ん坊の頭大の金葉（かなくそ）製鉄したあとのクズ（くず）が山中にゴロゴロころがっていた。鉄が不足した戦時中は、本沢遺跡近くの鳩沢駅から貨車で搬出するほどだった、という。

鯉ヶ沢町内には、鉄にちなんだ地名が多い。同遺跡がある地区の地名「湯舟一」は「熱した鉄を冷やす水の入った舟」、隣接地区の「小塚敷」は「金敷」（鉄を打つ台）が転じた、とされる。刀鍛冶の若者を取り上げた伝説「鬼神太夫」、遺跡近くの神社のご神体は、巨大な鉄の塊……と鉄づくめなのだ。

平安時代、坂上田村麻呂らが蝦夷を征討し中央政府の勢力圏は次第に北上したが、東北北部は極端に蝦夷の反乱や、陸奥の豪族・安倍氏と中央から派遣された東國の武士団の衝突（前九年の役）など戦乱が相次いだ。岩木山ろく一帯の「製鉄コンビナート」が、武器や農具に使われた鉄の、北日本における供給源だった可能性が強い。

空沢製鉄遺跡の特徴

中央と違う伊の型、高い生産力をしめず
平安時代の「製鉄コンビナート」が八日までに岩木山ろく・西津軽郡鯉ヶ沢町湯舟の本沢（もくさわ）遺跡で見つかった。付近には製鉄・鍛冶（かじ）の遺跡のほか、鉄にちなんだ伝説、地名が多い。今回の発見は、岩木山ろく一帯が当時、「蝦夷（えみし）の地」だったとされる東北北部の鉄生産の「拠点」の一つで、北日本の鉄製品の供給源だった可能性を強く示している。

発掘調査に当たった東北文化財調査センターによると、製鉄炉、木炭窯、鍛冶場、住居、それに戸の跡といった「製鉄工場」と工人たちの生活の場がまとまって出土したのは、県内では初めて。二十三基前後の炉跡はトンブ相の斜面の土を掘り出してつくられていた。

今回発掘された製鉄工場遺跡の範囲は、東西約三十メートル、南北約百二十メートル。南側に製鉄炉群が六列並び、さらに燃料を生産する木炭窯跡が三基あった。北側には、十九棟の住居と三基の鍛冶場を配置。製鉄炉群の斜面の上方には相い構、住居部分の南方には幅三メートルの大きな溝が走っていた。相い構は製鉄炉への水の侵入を防ぐためのもの、大きい溝は防衛用だった可能性がある、としている。

多い製鉄や鍛冶の遺構

- | | | |
|------------------|----------|-----------|
| 空沢遺跡 製鉄炉跡調査報告 | 青森県 鯉ヶ沢町 | 教育委員会送付資料 |
| 鯉ヶ沢 鬼伝説資料 | 青森県 鯉ヶ沢町 | 教育委員会送付資料 |
| 「謎解き日本古代史の歩き方」 | 彩流社 | |
| 柴田弘武著 「鉄と俘囚の古代史」 | 彩流社 | |

8.4. 中世 津軽安東氏の拠点 十三湊

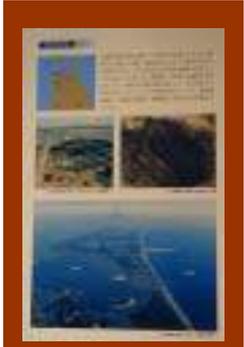
・活発な国内各地・大阪との交易 & 鉄の積出・
jyusanprint.htm by M.Nakanishi 2000. 2. 22.

十三湊は十三湖と日本海にはさまれた砂州上に発達した港町。鎌倉時代には既に港町が存在し、室町時代には安東氏の居所としても大いに栄えた。

「津軽船」と呼ばれる船便で中央と結ばれる一方、当時の最北端の港として、北の世界とつながるターミナルとしての役割をはたし、中国との交易をはじめ、国内外の物産がこの地に集まった。

輸入陶器や安東氏の館跡や町屋などが発掘されている。

縄文時代の一大文化圏として脚光を浴びた津軽がその後大和朝廷の支



配下に入ったものの遠く未開の土地として、歴史の世界からは消えてしまう。
大和朝廷の影響の及ばない中で、独立の勢力として文化を育ててきたとおもわれる。そして、中世 安東氏の日本海交易による繁栄により、世界の物産が集まる大交易港湊町として脚光をあびた。
またこの時代 鉄の積み出し港としても栄え、津軽岩木山周辺の古代製鉄の流れが連綿と引き継がれ、この時代においても 津軽が製鉄の大基地であり、安東氏の勢力もこの鉄の生産によるとも言われている。

私が昨年秋、再度 十三湊を訪れたときには、台風の嵐の中。

荒れ狂う日本海に抗して砂州がひろがり、その内海・十三湖 十三湊では数多くの船が嵐のおさまるのを待っていた。天然の良港である。

日本海の荒波と風が吹きすさが北の端にあって、十三湊の繁栄の理由が判ったような気がした。

もっとも、十三湊はその後の大地震と日本海が吹き寄せ体積する砂によって 浅くなり また放棄され、現在ではひっそりとした津軽の一漁 港となっている。

本年 1 月 千葉県松戸市の博物館で催された『日本列島発掘'99』展で昨年 発掘調査された十三湊旧跡から出土した数々の物産を見た。中国の磁器はじめ、日本各地の品物が広くこの北の端の十三湊に集められ、また各地に散って行く。出土品の多用さと豪華さから、当時の十三湊の繁栄振りがよく判かる。



十三湊遺跡より
発掘された公益品の数々



「発掘された日本列島展」より 松戸博物館

8. 古代津軽 北の鉄の大王国【1】

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

〔完〕

6-9.

「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」

「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

2000.8.3-4 onisawaprint.htm by M.Nakanishi

【鬼沢のねぶた】



【岩木山 赤倉口】



8月東北は祭の季節。

弘前ねぶたと秋田・大湯のストーンサークルに接したくて、8月3.4日の休みを利用して日朝早く東北へ飛出した。今回津軽 walking の目的は古代の製鉄地帯であり、ねぶたの発祥の地でもある岩木山山麓弘前・五所川原のねぶたを見て、古代製鉄のエネルギーをねぶたに感じることを目的。

赤坂先生編集の「東北学2」に鬼沢・鬼神社の祭礼のきれいな写真が紹介されているのを発見。ねぶたを見て、岩木山北山麓の古代津軽の大製鉄地帯に伝わる鬼伝説と関係する鬼神社・巖鬼神社を訪ねる予定を組んで出かけた。

2000.8.3, M.Nakanishi 訪問記

【 内 容 】

1. 「弘前ねぶた」
2. 「鬼沢のねぶた」出陣へ
3. 岩木山の鬼伝説
4. 鬼神社 巖鬼山神社を訪ねて

9.1. 弘前ねぶた



8月3日夕方 盛岡-弘前の高速バスで弘前に到着。駅には「弘前ねぶた」が飾られ、観光客を迎えてくれるが、もっと混雑を想像していたが、予想外。

むしろ青森「ねぶた」観光列車が出たり、駅員はそのPRに忙しい。もっとも、五所川原・弘前とも「ねぶた」で宿をとるのはむづかしい。やっと弘前公園の近所の街中の旅館に宿が取れた。

五所川原の「ねぶた」は高さのあるおおきな「立ちねぶた」として有名でひそかに見ることに期待していたが、今日は前夜祭で火は入るものの運行なしとのこと。ゆっくり弘前のねぶたを見ることにした。



午後7時夕闇せまる弘前城のお堀端から運行がはじまった。例の「ねぶた」の囃子とともに扇型のねぶたが一斉に動き出した。

巨大な太鼓の上にも打ち手がまたがり、太鼓の上下から打ちたたき凄い音とリズムをだしている。

津軽じょっぱり太鼓というそうだが、この強烈な音とリズムを伴走に中国三国志等の絵が描かれた「ねぶた」が多次から次と繰り出される。

その数50を越える連。ねぶたの総数優に100を越える。



弘前ねぶた

弘前の「ねぶた」は扇形で、一つの連では、小さなねぶたを先頭に大小幾つものねぶたを出し、一番最後に大きなねぶたと大きな太鼓とその打ち手を先頭にした囃子方が続く。

それらのねぶたの大きさに応じて その引き手・担ぎ手も小さな子供達から大人まで、いろんな年齢の人が一つの連を組み行進する。

このねぶたの共同運行に参加することを「出陣」という。街や集落のあちこちに「出陣」の登りがひるがえり、それぞれの街が、「ねぶた」を出していることをほこっている。

日が落ち暗くなると引き手や周りの建物の影が消え、囃子の主役である太鼓とねぶただけが浮かび上がり、太鼓を中心とした囃子に乗って、時々「トウリヤートリヤ」の声が掛けられる。また、表には三国志等を題材にしたねぶた絵が描かれ、裏面には美人画が描かれる。このコントラストもおもしろい。この表・裏面の絵を見せる為、この扇型の部分を引き手が回転させると見物している人達からパチパ



と拍手がおきる。青森ねぶたのあの「ハネコ」はいないが、太鼓のリズムは強烈だし、都会では消えた津軽の街のエネルギーを感じると同時に実に美しく楽しい祭である。また、弘前の街の性格から来るのが良く判らないが、殆どの連が地域・地区の連で、他の観光化した祭に見られる企業の連とそのPRの連は少なく、絵もほぼ伝統のねぶた絵にまとめられており、手作り・地域の人みんなで楽しんでいるといった風が色濃く守られている。例えば幼稚園のグループが沢山出陣

していたが、小さなねぶたに子供達の今のキャラクタがまじっているが、ほほえましく全く違和感がない。



次から次と連がくりだし、横丁を歩くと運行に参加するねぶたが順番待ちであふれている。少し離れて町をみると祭りのさなかであるが、どこも普通にいつもとかわらずと言った風。街も人も特別な風ではなく、みんな楽しみで仕事を終え、ねぶたに参加するため、三々五々集まっている。そうでないと1-7日まで7日間もつづかない。

また この祭はどこかの神社の祭礼といったものでなく、みんなで夏を楽しんでいる。後で知ったのであるが、街の中心部だけでなく近郷の集落もみなそれらの集落で準備し、この弘前の街の中心の運行に参加すると言う。

運行の丁度真中あたりで、明日出かける「鬼沢」集落の連が「鬼伝説の里・ねぶた」として登場。びっくりした。地図で言うともう弘前の外れ、街から岩木山の麓を鱒ヶ沢の方へ車で約30分のはず。随分遠く離れているのに。

後でわかったのだが、鬼沢の里は今も「鬼」を大事にするおおきな集落であった。

観光化せず、周りの集落も含め、老いも若者もそして子供たちもみんな、年に一回、弘前の街の中心にあつまって楽しむ手作りの祭それが「弘前ねぶた」。

都会では消え去った地域のつながりを強く感じました。

9.2. 「鬼沢ねぶた」出陣



丁度運行の真中あたり、「鬼伝説の里 鬼沢」と浮かびあからせねぶたを先頭に「鬼沢ねぶた」の連がやって来た。大きな連である。

私の頭の中では、何の根拠もなく、津軽のエネルギーを「ねぶた」と「たたら・鬼伝説等古代からの文化」とをだぶらせて考えていたが、ストレートに「鬼沢の集落が鬼伝説の里として」ねぶたの運行に加わっている事に意外で少なからず感動した。



鬼沢は弘前の街から西へ鬼が住むと昔から伝えられる岩木山北山麓の赤倉山麓を鱒ヶ沢へ続く一本道を車で約30分。古代の集落遺跡や古代の大製鉄地帯の端にあり、次の鬼伝説があり、さらに4,5扣進むと弘前市の端「十腰内」。

この十腰内から鱒ヶ沢にかけては既に紹介した古代たたら遺跡が残る古代たたら中心地であり、古代遺跡ばかりでなく、有名な鬼伝説「鬼太夫伝説」や地名に古代たたら製鉄の基地としての痕跡を色濃く残している。

9.3. 岩木山の「鬼伝説」

【岩木山北山麓赤倉側 古代製鉄地帯の鬼伝説】

1. 鬼沢の「鬼伝説」

**** 津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」 ****

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒れ地で、作物の実りはきわめて悪かった。

そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せっせとこの荒地を耕し始めた。

村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思い、開墾の困難と農業用水の必要を 鬼に訴えた。すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。

翌朝になって村人たちが行ってみると荒れ地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

節分に豆をまかないという

2. 鬼神太夫伝説

***** 岩木山北山麓の「鬼太夫」伝説 *****

鱒ヶ沢町 湯舟 湯舟神社 弘前市 十腰内 巖鬼神社

昔 鬼神太夫(鬼)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。

桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して、娘をくれるようにと申し込んだ。

困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、

長者が一本盗んで鳴沢川に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、

「十腰無い十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと

鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼を見つけ、刀鍛冶の兄が打ったものであると打ち明け、

その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

長者が亡くなる時姉娘には形見として湯舟(鉄を冷やす水を入れた船)をやり、

分家させた。また、妹娘には金敷(鉄を打つ台)をくれた。

それが湯舟村 金敷村の起こりとなった。

また、長者が刀を捨てた刀が浮いた所を「浮太刀」と言うようになった。

今の「浮田」である。

なお、鬼神太夫の打った刀の一本が今も岩木山 巖鬼神社に祭られているという。

「ふるさと あじがさわ」より

なお、このような鬼太夫伝説はほかにも日本各地にあり、鍛冶屋などが、実在の名刀 工などに鬼神の名をつけた伝説を作り広げたと言われている。

9.4. 赤倉山山麓に鬼神社・巖鬼山神社を訪ねて



岩木山北山麓のリング畑



鬼沢・鬼神社



十腰内 巖鬼山神社



赤倉口近傍 岩木山

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社
2. 鬼伝説の里 鬼沢 & 鬼神社

8月4日の早朝 弘前から鱒ヶ沢まで、岩木山北山麓に広がる赤倉側のに残る鬼伝説を訪ねるため、バスターミナルへ行った。予想していたとは言え、「一番奥の巖鬼山神社のある十腰内を通る鱒ヶ沢行 次は2時間後。鬼沢までは、約1時間後にある」との返事。

まあ、「岩木山山裾 鱒ヶ沢への1本道。何本かバスがあるかも」の淡い望みはダメでした。「バスだと約1時間。タクシーで約30分。」の話をたよりにタクシーにする。

タクシーの運転手氏に「岩木山の赤倉の集落を通して 一番奥の十腰内の巖鬼山神社に行き、引き返して鬼沢の鬼神社でおろしてほしい」と目的を伝えると「まあ 物好きな」と笑いながら「それでも 1年に数組 同じように鬼伝説やたたら製鉄遺跡を訪ねて、この赤倉側から鱒ヶ沢まで案内する」と。

岩木山北山麓は古代から開けた土地。この地では、岩木山の峰の一つで昔から鬼が集団で住んでいるといわれる巖鬼山(赤倉山とも言う)がその急峻な山裾を津軽半島にむかって伸ばしている。

そして、昔からこの赤倉山側の山裾から巖鬼山を通して頂上への険しい道が通じ、その入り口近傍の十腰内の山合の地に岩木山神社の元宮である巖鬼山神社がある。

岩木山神社のある百沢口が開かれるまではこの赤倉側の道が岩木山への本道で、古代より広く人々の信仰を集めている。

このあたり幾筋も伸びる沢筋からは古代から製鉄がおこなわれ、鉄滓や製鉄炉跡等が発見され、この地が古代津軽の一大製鉄地帯であることが判って来た。

その中で、十腰内から山裾の沢筋をすこし鱒ヶ沢の方に下った鱒ヶ沢町湯舟は十腰内や巖鬼山神社と共に、鬼神太夫の伝説の中心地である。

また数々の製鉄遺跡も発見されている。

鉄滓や羽口とともに100を越える製鉄炉や木炭炉の跡等が発見された空沢遺跡はここにある。

参 考 津軽岩木山北麓の古代津軽の大製鉄地帯と鬼伝説

う鬼伝説の里「鬼沢」は十腰内から3つほど集落を弘前の方へ戻ったところ。この鬼をまつる鬼神社は巖鬼神社を本社とする末社。

このように岩木山北山麓赤倉側の山合には、鬼伝説が広くつたわり、古代から渡来した産鉄の民が鉄の王国を築き、大和勢力と対峙する蝦夷の本拠地であったと推定されるが、まだ確たる証拠はない。

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社



弘前から街を出て、岩木川を渡り、岩木山山麓にさしかかるあたりからは、一面のリンゴ畑。リンゴの実をつけているもののまだ、青く熟した真っ赤な実になるには数ヶ月かかるだろう。

リンゴ畑の一本道を走るが、岩木山は霧の中で全くみえず。出発して 15 分ばかりすぎると岩木山の外周道路にでて、山麓が見えるほどに山が近くなる。赤倉の集落である。岩木山の輪郭が霧の中に薄っすらと見え、霧で埋まった幾筋もの谷筋・沢筋がみえ、いよいよ山の中に入ってきた。

赤倉から 10 分ほどさらに走り、鱒ヶ沢への道と別れ、巖鬼山神社への別れを山の中へと原生林の中に入ると谷筋の出口に巖鬼山神社が立っていた。



巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。

おそらく境内の 2 本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らませている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。



千年杉の巨木 原生林につつまれた本殿 千年杉と本殿 本殿そば龍神を祭る沢筋

巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。おそらく境内の2本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らましている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。

2000.8.4, M.Nakanishi 訪問記

2. 「鬼伝説の里」 鬼 沢 と 鬼 神 社

待たせたタクシーに乗って巖鬼山神社から約 10 数分。弘前の方へ引き返す。来るときに通った道から一筋北側のバス道を2,3の集落の家並をすぎると大きな明るい集落に入った。

山裾の村というより、大都会弘前のベッドタウンといった感じの前後を沢筋で区切られた明るい丘陵。それが鬼沢であった。もっと暗い山合の小さな集落をイメージしていたが、まったく異なる。これだけ大きければ、昨日の大きな鬼沢地区ねぶたの出陣もうなずける。

鬼伝説の鬼神社は、こんな街中の小さな森の中にひっそりありました。

「鬼が灌漑用に堰を築いて水不足をすくってくれた鬼沢」の伝説によって、いまも地域が一つにまとまれる鬼沢といったイメージを昨日の鬼沢のねぶたと重ねています。



鬼神社鳥居 鬼伝説の里 「鬼 沢」の集落 弘前市鬼沢 鬼神社社殿



【鬼神社 社殿正面に掲げられた農機具の献額】

鬼を祭る鬼神社の本殿の軒下には本殿正面も含め、ぐるりと幾つもの鉄製の農機具が献額として奉納されていました。

鉄の農機具を使って一夜にして、堰をきず[°]いて村の人たちを救った鬼の伝説からすれば、鉄の農機具は鬼つまり、産鉄の民の象徴といえます。

また「たたら民」と農民との深い結びつきを現わしているとも言えると考えます。

赤坂憲雄氏編集の「東北学 vol.2」には内藤正敏氏の「赤倉山の鬼神 津軽・鬼神社民俗誌」が収められ、鬼神社や巖鬼山神社などに伝わる貴重な民俗を整理している。

鬼神社では、鉄製の古い農機具がご神体として奉られている事や古くからの神事と鬼伝説との関係やこの地帯の製鉄と鬼や鬼伝説との関わり等が整理されている。

鬼神社の神事の中で、この農機具が吉凶を占うきわめて重要な役割を果たしている事がしめされており、長年にわたり、多くの農機具が献額として奉納されるのもうなずれる。



【鬼神社の神事 & 獅子舞】赤坂憲雄編「東北学2」より

津軽岩木山北山麓の古代製鉄の地を歩いてみて、もっと山奥まで立ち入り、もっと暗いイメージがついてまわると想像していたが、「鬼沢ねぷた」といい、鬼神社と鬼沢の集落といい、十腰内から鱒ヶ沢に連なる製鉄の村村いずれも想像とは別の明るいものでした。案内してくれたタクシー運転手氏いわく「良い鬼の伝説の地」が象徴的でした。

2000.8.4, M.Nakanishi 訪問記

「弘前ねぷた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

〔完〕

M. Nakanishi Home Page 2004

『 Iron Road 和鉄の道 』 【4】

- 日本の源流・「たたら」探訪 -

【 第2分冊 【7】 ~ 【14】 】

2005.1.15. by Mutsuo Nakanishi



先大津阿川村山砂鉄洗取之図より



古代美濃 和鉄の郷
赤鉄鉱を産した美濃赤坂「金生山」
と南宮大社「ふいご祭り」

M. Nakanishi Home Page 2004

『 Iron Road 和鉄の道 』 【4】

- 日本の源流・「たたら」探訪 -

【 第2分冊 【7】 ~ 【14】 】

7. 播磨風土記の和鉄【2】 御方里周辺 (宍粟郡一ノ宮町安積)
安積山製鉄遺跡(平安時代末期の製鉄遺跡) 探訪
8. 古代 初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地
鉄の山「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道
9. 日本 木の文化のルーツ 北陸に点在する縄文のウッドサークル探訪
10. 播磨風土記 産鉄の里「御方里」 一宮町「三方」を訪ねて
11. 「須佐高山の磁石石」& 白須鉄山遺跡を訪ねて 山口県須佐町
中国山地の砂鉄ベルトの西端 山口県北東部の和鉄地帯を訪ねて
12. 「鉄の5・6世紀」古代 大和政権の日本統一を支えた
北河内の大規模専業鍛冶工房 大県製鉄遺跡 探訪
13. 先大津阿川村山砂鉄洗取之図」の周辺で
-江戸末期長門のたたら製鉄(白須たたら)工程絵巻-
14. 旧暦霜月8日(11月8日)金山祭り・鞆祭 (ふいごまつり)

播磨風土記の和鉄【2】 御方里周辺(宍粟郡一ノ宮町)

7. 安積山製鉄遺跡(平安時代末期の製鉄遺跡) 探訪 2004.2.11.

1. 古代 産鉄の地 「讃容里」大撫山の夜明けと朝霧 佐用郡佐用町
2. 古代 産鉄の地 「御方里」周辺 平安末期の安積山製鉄遺跡を訪ねて 宍粟郡一宮町
azumiyama00.htm by M. Nakanishi 2004.3.1.



古代の御方里周辺 一宮町安積にあるこの地方で一番古い製鉄遺跡 安積山製鉄遺跡



讃容の里 大撫山の夜明けと朝霧



産鉄と縁の深い大国主命を祭る 播磨一宮 伊和神社

一番寒い時が過ぎ、やっと暖かくなりだした 2.12.早朝

兵庫県の西端 西播磨北部の佐用町大撫山に素晴らしい朝霧が出ると聞いて家内と二人出かけました。

また、同時に大撫山など佐用の山々を挟んで東側の揖保川が流れる一宮町一帯は古代には「御方里」と呼ばれたもうひとつの産鉄地。一宮町安積にある安積山製鉄遺跡を訪ねてきました。

「讃容の里 大撫山」は「四面十二の谷皆鉄を産する」と播磨風土記に産鉄の記事があり、昨年 11 月に訪れた所である。

播磨国風土記 古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk 兵庫県佐用郡 大撫山製鉄遺跡群を訪ねて 2003.11.14.

<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/sayou00.htm>

山また山に囲まれた佐用町の中央にあって山また山の狭い盆地の山の間を朝霧が覆うという。

また、一宮町は町名の由来となった鉄と関係深い出雲の大国主命を祭る播磨国一の宮「伊和神社」があり、古代播磨風土記に「御方里」と呼ばれた産鉄の地はこの一宮町北部山間一帯(三方町)である。

ちょうど 次は揖保川水系の製鉄遺跡を訪れたいと計画していた事もあり、大撫山の日出にあわせ、真っ暗な早朝神戸を出て、朝靄の中に浮かぶ山々に朝日が輝く素晴らしい大撫山の光景。

一宮の街道筋の際の小高い丘にある安積山遺跡。眼下に揖保川と一宮を見下ろす城山の南面の小高い丘今は周りの山肌に沿って鉄分を含む赤茶けた水が流れ込む湿地に灌木や雑草が埋め尽くしているが、谷に沿って幾段かになった地形と山肌の赤いベンガラ色が本当に印象的な製鉄遺跡でした。

1. 古代 産鉄の地「讃容里」 大撫山の夜明けと朝霧 佐用郡佐用町
2. 古代 産鉄の地「御方里」平安末期の安積山製鉄遺跡を訪ねて 宍粟郡一宮町

兵庫県の西端 西播磨北部の中国山地は古代からの和鉄の一大製鉄地帯である。

播磨国一宮 伊和神社に出雲の大国主神(おこなむちのみこと別名 大国主命または大物主命 素戔鳴尊の子の孫という伝承もある)が祭られ、「出雲から播磨にやってきた大国主命がまず讃容の地にやって来て、その後 宍粟郡 御方里の地に本拠を置き、播磨国全体を治められた」と風土記に記されている。

出雲の神 大国主命伝承には産鉄族が強く結びついており、播磨北部のこの地が古くから産鉄の地で出雲と深く結びついていた事がうかがえる。

奈良時代に成立した播磨風土記には次の西播磨北部佐用郡や宍粟郡の揖保川や千種川の山間地に産鉄の記事がある。

播磨風土記に記された 西播磨北部 古代の産鉄の地

大撫山の山裾を千種川に注ぎ込む佐用川の山里「讃容の里」(現在の佐用郡佐用町)

『山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある みな鉄を産する。難波の豊前の朝廷に始めて献上した』

千種川のさらに上流「柏野里」の条 敷草村(現在の宍粟郡千種町)

『草を敷いて神の御座所とした。だから敷草という。この村に山がある。その南方十里ばかりの所に沢がある。二町ばかりである。

(桧・杉・オウレン・黒葛などが生える。鉄を産する。狼・熊が住む)』

揖保川水系 「御方里」の条 金内川(御方里は今の宍粟郡一ノ宮町 三方町)

『御方と呼ぶわけは葦原志許乎命が天日槍命と黒土の志爾嵩(のちの生野銀山)にお行きになりお互いに黒葛を三条足につけて投げなされた。その時葦原志許乎命の黒葛は一条は但馬の気多 一条は夜夫の郡に落ち、一条(三条目)はこの村に落ちた。だから三条(ミカタ)という。あるいはこうもいっている。

「大神が形見として御杖をこの村に立てられた。だから御形(ミカタ)という。

大内川・小内川・金内川 大きい方を大内といい、小さいのを小内と称し、鉄を産するのを金内と称する。その山には桧・杉・黒葛などが生える。狼・熊が住む』

(金内川は一ノ宮町の北で西から引原川を合流する前の揖保川本流の最上流部と考えられている)



このように古代 風土記の時代から、強く産鉄と結びついた伝承の残るこれら西播磨北部の一大製鉄地帯は地質的にも出雲から美作・播磨北部 丹後の地へ中国山地を東西に高品質の砂鉄を含む花崗岩の大ベルトが分布するその真っ只中に位置している。この中国山地中央を東西に貫く花崗岩地帯には品質の良い鉄鉱物が含まれ、それらから山砂鉄・川砂鉄・浜砂鉄が採取され、たたら製鉄原料として用いられた。

特に千種川上流の千種 揖保川上流の波賀町は磁鉄鉱系の砂鉄が取れる花崗岩鉱脈があり、千種岩野辺には製鉄神「金屋子神」降臨の地として、和鉄発祥の地伝承が残り、近世には「千種鉄」の大産地として発展する。

また、揖保川水系の谷間 一宮には町名の由来となった播磨国一宮の伊和神社があり、製鉄と関係の深い出雲 大国主命が祭神で、さらに、揖保川を遡った三方町が古代の御方里で、多くのたたら遺跡がある。さらに、揖保川に合流する引原川の上流波賀町にも多くのたたら遺跡が残っている。

佐用町では品位は低いが比較的容易に溶融するチタン鉄鉱系の砂鉄を産出し、古代 播磨風土記の時代には讃容里として柏野里敷草村や御方里とともに和鉄の産地であった。

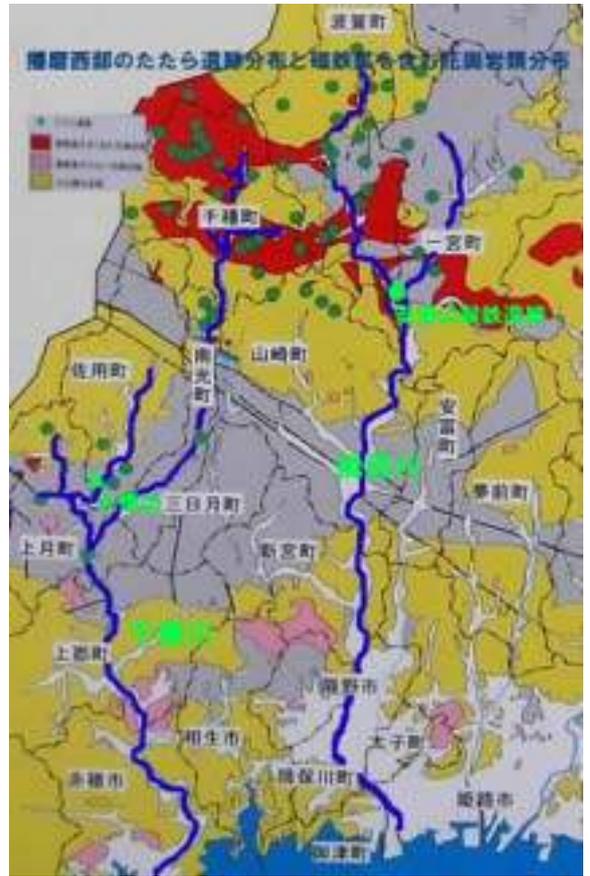
一宮町はちょうど姫路・山崎から兵庫の背骨氷ノ山の南戸倉峠を越えて鳥取へ抜ける因幡街道の中間点。

また、千種より東へ岩野辺を通過して山越えて揖保川沿いに下りたところ。

幾度か「たたら」の文字を見た街道筋。千草か街道筋に沿ってすぐそばにたたら遺跡があるとは露知らず。

1.15. 姫路の県立歴史博物館「播磨北部の生業と武士」の展示で古代の御方里 一宮町の揖保川本流が引原川と分流するその分流点の山に平安末期の大きな製鉄遺跡 安積山製鉄遺跡があることを知りました。

一宮町境界を訪れにはちょうどいい機会になりました。



播磨国一宮伊和神社
 伊和神社の森
 宮山 神奈備山
 伊和神社入口 社 殿



製鉄と関連の深い出雲 大国主命を祭る 播磨国一の宮 伊和神社



安積山製鉄遺跡のある一宮町 安積近傍

中央の写真 背後の山が南麓に安積山製鉄遺跡のある城山

右の写真 山裾を引原川が流れる

1. 古代の産鉄の地「讃容里」 大撫山の夜明けと朝霧 佐用郡佐用町



2月11日 まだ、夜明け前 神戸から中国道を通って、佐用 IC へ。大撫山は佐用 IC のすぐそばにある。

山崎断層が東西に伸びる山々に囲まれた狭い盆地に佐用の街があり、この盆地の中に佐用川と千種川の本流が流れ込み佐用の街の南で合流する。

この川霧が秋から冬にかけての寒い朝この狭い盆地を埋め尽くし、周りの山々を霧の中に浮かび上がらせる。

大撫山は佐用の街のすぐ北にあり、この佐用の盆地や周辺の山々を見下ろす絶好の位置にある。

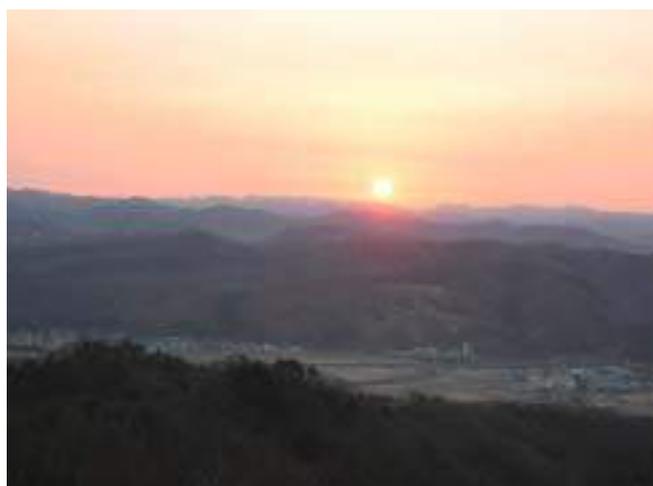
ちょっと時期的には遅いのですが、朝霧が出ることを期待半分 周りの朝焼けの山々が見られるだけでも良いと思って出かけました。山口県的美祢盆地も朝霧が出る素晴らしい所 写真取れなかったので 写真が取れば・・・とかすかな期待。



夜明け前の中国道 佐用 正面が大撫山



日の出を迎えた佐用の街 2004.2.11.



大撫山の日の出 2004.2.11.

東の空がしらみはじめ、まだ日の出前の朝7時前に佐用の町につき、大撫山のドライブウェイを登りだす。くっきりと山が見え残念ながら霧は全くなし。

人っ子一人いない大撫山山頂。山並みが続く東の空を真っ赤に染めながら朝日が昇ってくる。

眼下の佐用の街や山々の間にうっすらと霧が立ちこめ、山の朝の素晴らしい景色が見える。雲海に埋め尽くされた山の朝を期待しましたが、朝靄に煙る山々の背後から、朝日が照らす山の静かな朝 やっぱり落ち着いた素晴らしい景色である。

東の日名倉山の山腹のあたりには一条の朝霧がずっと横に糸を引き谷や小さな集落を覆い隠して、また違った朝霧の風景を見せている。



佐用町 大撫山の夜明け 朝霧 2004.2.11.



心地よい寒さと共に周りの山々とよく調和した素晴らしい山の朝。やっぱり来た甲斐がありました。雲海が出る頃はおそらく 多くの人で一杯なのでしょうが、今日は二人で独り占め。

神戸から高速道路で約 1.5 時間 山また山の夜明け 素晴らしい風景が楽しめ お奨めです。

2004.2.11. Mutsuo Nakanishi

【参考】 播磨国風土記 古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk

兵庫県佐用郡 大撫山製鉄遺跡群を訪ねて 2003.11. <http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/sayou00.htm>

2. 古代産鉄の地「御方里」一帯

平安末期の安積山製鉄遺跡を訪ねて 宍粟郡一宮町



安積山製鉄遺跡のある一宮町 安積近傍

中央の写真背後の山が南麓に安積山製鉄遺跡のある城山
右写真 山裾を引原川が流れる

中国地方の東方に連なる宍粟郡の北部一帯では、近代にいたるまで鉄を原料とする製鉄が盛んに行われて来ました。古くは、奈良時代に成立した「播磨国風土記」の中に、「御方里」に「鐵を生ず土地があったことが記されています。

安積山遺跡は古城山の南麓に位置し、南東約1kmの地点では引原川本流と引原川が合流しています。この地域は、播磨地方と但馬地方および因幡地方とを結ぶ交通の要所として重要な役割を果たして来ました。

平成6年度に行われた発掘調査では、丸山の東西向き斜面を削り出した3段の平坦部の上に築かれた2基の製鉄炉跡が確認されています。製鉄炉は、大型炉(6基)・小型炉(5基)と、特殊な形の炉(1基)に分けられ、その構造から中国地方に多い「長方形箱形炉」と呼ばれる形制のものであったと考えられます。炉の周囲では原料の砂鉄置き場や燃料の木炭置き場なども確認されています。

安積山遺跡の製鉄炉跡は、平安時代の終わりに築かれたとみられ、現在のところ内宮郡内においては最も古い時期のものであり、なおかつ最大規模の製鉄遺跡と考えられます。

あさみやまいざさき
安積山遺跡
(一宮町安積字丸山)

1.15. 姫路の県立歴史博物館「播磨北部の生業と武士」の展示で 一宮町の揖保川本流が引原川と分流するその分流点の山に平安末期の大きな製鉄遺跡 安積山製鉄遺跡があることを知りました。
 一宮町はちょうど姫路・山崎から兵庫の背骨氷ノ山の南戸倉峠を越えて鳥取へ抜ける因幡街道の中間点。
 また、千種より東へ岩野辺を通過して山越えして揖保川沿いに下りたところ。
 幾度か「たたら」の文字を見た街道筋。でも 街道筋に沿ってすぐそばにたたら遺跡があるとは露知らず。
 古代の御方里 一宮町界隈を訪れにはちょうどいい機会になりました。

佐用町から東へ一旦山崎町まで戻り、そこから揖保川に沿って北へ遡る。
 昔から鳥取と姫路・大阪を結ぶ因幡街道の街道筋。山崎から北は中国山地奥に分け入る山深い道である。
 両側を山に閉ざされた狭い平坦地を流れ下る揖保川に沿って遡ってゆく国道 29 号線因幡街道を北に向かう。
 この街道筋の両側に家並が続き、揖保川と両側の山を眺めながら 中国山地の奥へ奥へと向う。
 約 20 分ほどで道の左に森、右に道の駅。播磨一宮 伊和神社である。杉の大木が街道と境内を分けている。
 出雲からやってきた大国主命を祭る大社である。背後の宮山は神奈火備山。出雲との交流の深さ 鉄とのかかわりを伝える神社である。



播磨国一宮伊和神社
 伊和神社の森
 宮山 神奈備山
 伊和神社入口 社 殿



製鉄と関連の深い出雲 大国主命を祭る 播磨国一の宮 伊和神社



安積の街にある案内板



安積橋から 城山

目的地の安積山製鉄遺跡はさらに 10 分ほど北に行った安積にある。ここは一宮町の中心で揖保川が東側からの引原川と西側から流れ下る本流とが合流する地点で、この合流点の山「城山」の南麓に安積山製鉄遺跡がある。

この城山の東側を揖保川本流に沿ってさらに遡ると古代の御方里 三方である。

今も この奥には多くの製鉄遺跡が残っている。

御方里へはもう少し暖かくなってからゆっくり訪ね、製鉄遺跡ばかりでなく、谷筋の溪谷や古代遺跡などを歩き、温泉にも行って、山越えで生野へ抜けたいと思っている。

また西側を引原川に沿ってさらに遡ると波賀町 ここにも多くの製鉄遺跡が残っている。

そんな御方里への入り口が安積 そこに平安末期の安積山製鉄遺跡がある。

このあたり一帯は古代から、時代を越えた和鉄の大製鉄地帯である。

【参考 播磨風土記に記述のある古代産鉄の地 御方里】 インターネット検索より

播磨国風土記（713～714年）御方里の条に

『御方と呼ぶわけは葦原志許乎命が天日槍命と黒土の志爾嵩(のちの生野銀山)にお行きになり、お互いに黒葛を三条足につけて投げなされた。

その時葦原志許乎命の黒葛は一条は但馬の気多 一条は夜夫の郡に落ち、一条(三条目)はこの村に落ちた。だから三条(ミカタ)という。

あるいはこうもいっている。

「大神が形見として御杖をこの村に立てられた。だから御形(ミカタ)という。

大内川・小内川・金内川 大きい方を大内といい、小さいのを小内と称し、鉄を産するのを金内と称する。その山には桧・杉・黒葛などが生える。狼・熊が住む」

とある「御方里」である。

この一ノ宮町三方周辺で周囲の山を水源として、三つの川が揖保川に流れ込む。そのひとつ公文川の川筋「公文」には金屋、タタラ場、鍛冶屋敷、堤ケ谷、カマス置場等、鉄に因んだ場所と、数ヶ所のタタラ址があり、また、公文の枝郷小原、溝谷は木地師の里で木地屋、鉄山、うるし採取、炭焼き等、山は栄え、賑やかで、但馬との交流も多く、次のような古歌も残っているという。

「朝日さす、夕日かがやくこの奥は、真金千杯、うるし千杯」

また、この地には、大国主命を祭る御形神社や縄文時代から中世にかけて営まれた複合遺跡 家原遺跡などがあり、この地が産鉄地として古代から開かれた地であることがわかる。

御形神社 祭神は葦原志許男神で、現存する本殿は、三間社流造り、檜皮葺きで宝亀3年の創建から3度目の1527年に建立されたものです。

室町時代後期の様式や技法を伝える木組や彫刻があり、彩色が施されています。

昭和42年に国の重要文化財に指定。

家原遺跡公園 家原遺跡は、一宮北部の河岸段丘の上に営まれた縄文時代から中世にかけての大規模な住居跡複合遺跡。

公園内には、その家原遺で実際に発掘された遺構をもとに各時代の建物を忠実に復元。



御形神社社



家原遺跡公園



曲里・安積橋から眺める城山 2004.2.11.

伊和神社から さらに 10 分ほど北に街道を進むと程なく三角形の小高い山が正面に見えてくる。それが、安積山製鉄遺跡群が南麓にひろがる城山。大きな曲里集落に入るとすぐに、右に大屋・八鹿・朝来町への標識がある揖保川にかかる橋に出る。揖保川はこのすぐ手前に北からの引原川と合流点があり、其処から西北に変えて、古代の

御方里 三方など源流部にいたる。この安積橋を渡ると安積の集落。城山がすぐ前に迫る。ここで国道と別れ、安積の集落に入り、八幡神社の脇を通りまっすぐ城山の山へ登ってゆく。八幡神社を南から北へ回りこむと林に包まれた小高い丘にでて北に城山がそびえる南麓に出る。

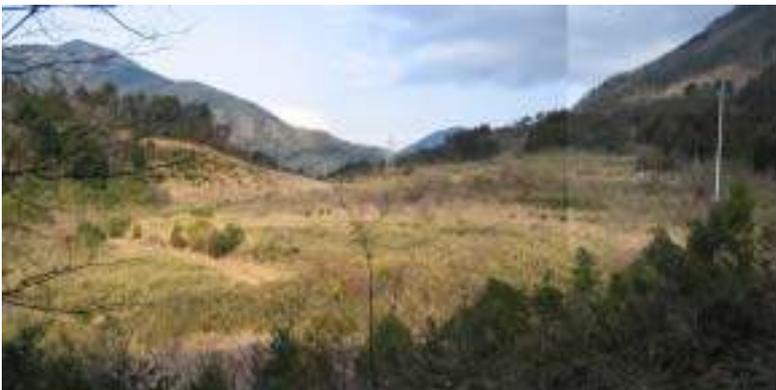


安積集落から安積山製鉄遺跡に登ってゆく八幡神社脇の道

西に向って小道が続くその正面に赤茶けた山肌を露出した小高い丘があり、道の南にはなだらかな雑草の生い茂った原っぱが広がり、道端に小さな説明板が立ち、ここが安積山製鉄遺跡である。



安積山製鉄遺跡 正面が丸山 道の右手に城山がそびえる 2004.2.11.



丸山の東斜面に沿って広がる湿地 安積山製鉄遺跡



北側の城山 南麓側

道路のそばに立てられている「安積山製鉄遺跡」の説明板には下記のように記されている。

「平成6年度に行われた発掘調査では、丸山の東向き斜面を掘り出した3段の平坦部の上に築かれた12基の製鉄炉跡が確認された。

製鉄炉はいずれも中国地方に多い「長方形箱型炉」の形態をした大型炉6基小型炉5基特殊な形の炉1基に分けられる。炉の周囲では原料の砂鉄置き場や木炭置き場も確認された。

この製鉄遺跡群は平安時代の終り頃に操業されたと見られ、現在では宍粟郡内では最も古い時期でかつ、最大規模の製鉄遺跡である。」



製鉄炉が築かれた？丸山東斜面



説明板に載っていた発掘調査で出土した製鉄炉

おそらく看板が立てられたすぐ横の赤い土を露出している斜面が製鉄炉が建設された丸山東向き斜面だろう。この斜面の下は背の高い雑草や灌木が生い茂る広い平坦な湿地が広がり、南の方に傾斜しながら幾つかの小さい支谷を形成し、小さな川が流れている。

この湿地に降りると中は生い茂る草と水でぐしょぐしょ。よく見ると水溜りは赤茶け、油が浮いたようになっていて、鉄分が本当に多い湿地である事がうかがえる。



丸山東面に沿って広がる湿地 安積山製鉄遺跡



丸山東面に沿って広がる湿地



安積山製鉄遺跡の平坦部を鉄分の多い水が湿地を覆っている





安積山製鉄遺跡の北側部 城山南麓の平坦部



「釜床」の地名標識が見える



安積山製鉄遺跡の北側部



城山南麓の平坦部に残る 苔むした石垣



湿地とは反対側の北 城山の南麓にも数段に分かれた平坦部があり、ここにも色々製鉄関係の施設があったに違いないが、今はもう全くわからず。ただ、道路沿いを含めて幾つかの平坦部があり、「釜床」の地名も見える。また、時代はわかりませんが、苔むした石垣が数段残っていました。製鉄遺跡を引き継いで関係した建物があったかも知れません。

この安積山製鉄遺跡 周辺は中国山地の真っ只中であるが、明るい尾根筋。集落のすぐ裏山で、因幡街道のすぐ横で実に開放的な場所。山を分け入るという感じがしない。他の製鉄遺跡が人里はなれて山深く 谷をつめた場所を切り開いて存在するのはちょっと印象が違う。これは、この地の山々の尾根筋が赤茶けた色で判るごとく周辺一帯が本当に砂鉄豊富な場所であり、この山の両側すぐ横に川が流れ、品質の良い原料が大量に容易に手に入れられる場所である事。そしてこのことを軸に古くからの鉄の通商路が開けた街道筋であったことによると思われる。まさに大製鉄地帯の真っ只中にあることの証がこの製鉄遺跡の位置なのかもしれない。こんなに街道筋に近く 大きな製鉄遺跡があったことにビックリ。



丸山頂上部から眼下に広がる安積の町と西麓を流れる引原川



また、この遺跡は平安末期の遺跡であるが、この遺跡の東北には古代播磨風土記の産鉄地 御方里が在る。そこさらに生野・八鹿・丹後への道が延びている。

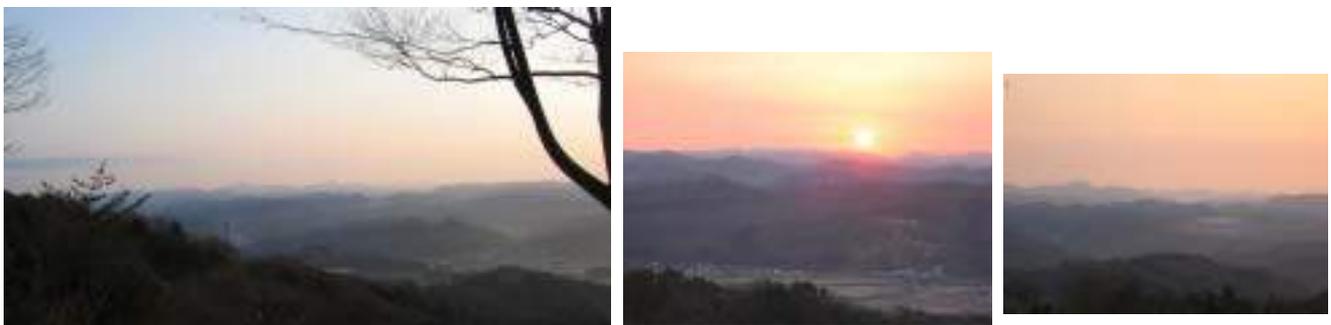
東には 柏里敷草村 千種・岩野辺から吉備・美作から出雲へ
また北には波賀町から産鉄地伯耆国・出雲へ。

いまだ この地で古代の製鉄遺跡は見つかってはいないが、その伝承など考えると この地を含め、西播磨北部は間違いなく大陸から畿内 また中国山地に広がる産鉄国を結ぶ古代の鉄の通商路 Iron Road の交差点。
鉄とともに多くの人々・文化が通っていったに違いない。

次は是非 三方 古代の御方里へ そして 丹後についてももう一度考えてみたい。

豊富な高品質な磁鉄鉱系の砂鉄がありながら、他所からチタン含有量の多い砂鉄を用いた丹後遠所遺跡の製鉄技術。佐用ではチタン系 千種・揖保川周辺では磁鉄鉱系砂鉄が使われ、ここも古代の大きな時代の転換にかかわっていると思われる。そして若狭から越の国も・・・・・・・・・・。

これらが 畿内 大和政権の伸長 渡来人を巻き込んだ日本の覇権をかけての争いにかかわって・・・・・・・・。



最近の新聞では

「最近の加速器 C14 による年代測定の成果は目覚しく、弥生時代の倭国の卑弥呼の時代が、どうも古墳時代の幕開けの時代と重なっている。

そうなると卑弥呼も今までの巫女的役割から深く鉄の覇権の中心的存在としての側面が浮かび上がってくる。奈良の古墳群の評価見直しが始まっている」

との研究成果を伝えている。

奈良の鉄屋の仲間が纏向遺跡や箸墓遺跡を訪れ、興味津々と前にメールくれましたが、現実味をおびてきました。

いよいよ、産鉄民の神奈備山 三輪山 と卑弥呼の時代が結びついてくる。

三輪山は山麓に古い製鉄遺跡のある鉄の山 三輪明神 大神神社（おおみわじんじゃ）は三輪山を御神体として、大物主神を祀る。

「山と溪谷」3月号では 神社で許可をもらえばこの三輪山の頂上に立てる。その眺望はすばらしい・・・と。

全く意外 知りませんでした。

本当に暖かくなるのが待ち遠しい。

2004.2.11. 一宮町安積 安積山製鉄遺跡の帰り

播磨国の製鉄遺跡から日本誕生の和鉄の道に思いをめぐらしながら

by Mutsuo Nakanishi



播磨風土記の和鉄【2】 御方里周辺 (宍粟郡一ノ宮町安積)

安積山製鉄遺跡(平安時代末期の製鉄遺跡) 探訪 2004.2.11.

1. 古代産鉄の地「讃容里」大撫山の夜明けと朝霧 佐用郡 佐用町
2. 古代産鉄の地「御方里」周辺 平安末期の安積山製鉄遺跡を訪ねて 宍粟郡 一宮町 安積

【完】



8.

古代 初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地 鉄のやま「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道



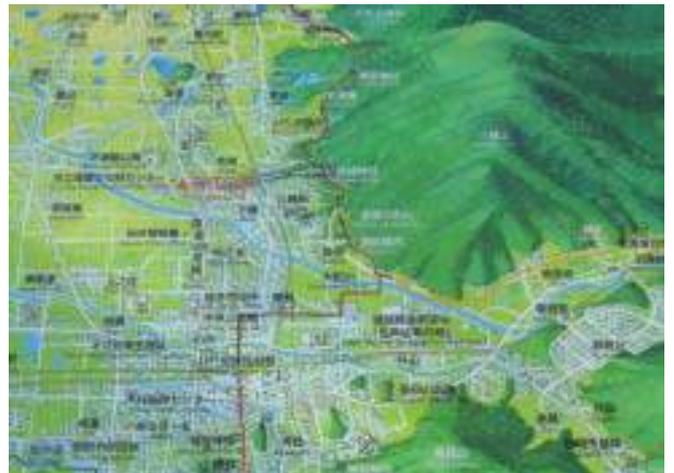
大和盆地を大阪に流れ下る大和川(初瀬川)が青垣・吉野の峰々が連なる東の壁から大和盆地に流れ出る所に秀麗なピラミッド型の三輪山がそびえている。この奈良県桜井市「三輪山」の麓は古代日本誕生の黎明の時代「やまと」の枕詞「しきしま」と呼ばれた王城の地。4世紀三輪王権と呼ばれる初期大和政権成立の舞台。

ここで大和朝廷の基礎が養われたという。

また、北に伸びる三輪山山麓には3世紀に遡れる巻向地区には纏向古墳群があり、邪馬台国畿内説を唱える人はこのこの三輪山北山麓の地が卑弥呼 邪馬台国の地という。

この山裾を縫って明日香から北へ古代の道 山辺の道が王城の地を貫き、麓にはこの三輪山をご神体とし、出雲の神「大物主命」を祭神とする日本最古の神社大神神社がある。

鉄との深い関連が考えられる神社で、産鉄地・産鉄の民と関係の深い地と見られ、今もその山麓には金屋・穴師・金刺などの産鉄地名が残り、南麓の金屋からは鉄滓が出るとの文献もある。



そう考えるとこの三輪山山麓は古代の重要な産鉄地で三輪山は鉄の山ではなかったか・・・。この地を得た人たちが、この三輪山の鉄および鉄の技術を背景にこの地を本拠として、日本誕生がなすとげられたのではないかと・・・おぼろげに三輪山は古代の産鉄地と認めていたのですが、もっと強く 三輪山の鉄が直接に日本誕生に重要な役割を演じたのではないかと考えてくる。



ちょうど 畿内の製鉄遺跡を歩こうと思っていた矢先である。また、大神神社の神域 三輪山へは届を出せば登拝出来るという。

三輪山へ行けば、何か鉄の痕跡が見つかるかも・・・そんな期待をもって出かけました。
 期待にたがわず 三輪山は今も砂鉄が見られる鉄の山
 また、この王城の地は時代を越えて脈々と鉄の系譜と共に続いていると思えてくる。
 また、大神神社の巨大な大鳥居は現代の鉄のモニュメント。これから1300年も三輪山の前に立って王城の地 やまとを見据え続けるという。もうビックリ・・・・・・・・。
 古代 畿内には三輪山・石上と同時に河内にも大きな鍛冶工房。それが三輪王朝に続く河内の王権へ・・・
 そして北近江・越の鉄をバックに畿内へ入った継体天皇の誕生へ。
 畿内の「鉄」が面白くなってきた一日でした。

内 容

古代 初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地 産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道



1. 産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道 Walk
 1. 産鉄地名の桜井市金屋集落 そこは古代王城の地「しきしま」
 2. 三輪山をご神体とする日本最古の神社 大神神社
 3. 三輪山 登拝 三輪山に鉄の痕跡を探して
 4. 卑弥呼の地 箸墓界限 三輪山麓の丘より夕日の大和盆地を眺め

2. 『 古代の鉄の山「三輪山」と初期大和政権 』 思いつくままに
 1. 三輪山は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・
 2. 三輪山 大神神社 三輪山山麓は産鉄の地
 3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係
 4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓 山辺の道



三輪山山麓山辺の道からの大和眺望

【 (左) 大和三山 (右) 箸墓古墳を中心とした纏向古墳群 】

1. 産鉄の地「三輪山」と山麓を縫う山辺の道 Walk



3月23日の朝 難波から近鉄に飛び乗り、桜井へ久しぶりの大和である。古代産鉄のシンボル三輪山とその周辺に鉄の痕跡を訪ねるのが今日の目的。知らなかったのですが、三輪山へも神社で届を出せば登拝出来ると聞き、飛び出してきました。気楽な風来坊のWalkである。

大和盆地を経て大阪に流れ下る大和川(初瀬川)が青垣・吉野の峰々の連なる東の壁から大和盆地に流れでる所に秀麗なピラミッド型の三輪山がそびえる。この三輪山山麓の地が桜井 古代初期大和政権の中心地である。



三輪山から流れ出る狭井川で見つけた砂鉄の堆積ときらきら光る雲母

三輪山山麓には産鉄と関係する大國主命を祭る日本最古

の神社 大神神社 そして地図には金屋・穴師の地名が残り、其処は初期大和政権の遺跡が残る初期大和政権の中心地。また、大和川の岸は都の外港で難波津から大和川を遡る舟運の最終地として栄えた「海拓榴市」。和鉄・鍛冶の技術をも含め、大陸からの新しい文化が渡来人と共に真っ先に伝来する地でもある。確証はないが、和鉄と深いかわりを持つと考える。

生駒山山麓を通過 二上山が見え出すと西に葛城・金剛山 東から南へ青垣・吉野の山に隔てられた広大な大和平野。大和三山を眺めながらその中をまっすぐ東に突ききり、東の山々が近づくと桜井。大阪難波から約45分足らずである。

駅前広場に歴史街道「山辺の道」の標識。今日は一日三輪山山麓の山辺の道を歩く。

東の方向に市街地の家並みの直ぐ向こうに三輪山に連なる山々が見え、そっちへ歩き出す。



桜井駅周辺 桜井は吉野杉の集散地

まず、初瀬川を探して、その北岸三輪山山麓の産鉄地名のある金屋集落へ行って、そのまま山裾を北へ大神神社へ。そして三輪山へ登拝して 山辺の道をそのまま北へ卑弥呼の墓といわれる箸墓へ ぼかぼかの春の日差しにゆっくりと東へ山の方向へ歩き出す。

さすが 桜井は吉野杉の集散地。

桜井の駅の直ぐ近くに最近ではほとんど見られなくなった大きな貯木場がある。この横を抜けるともう市街地を外れ、菜の花の向こうに傾斜の緩やかなピラミッド型の三輪山が見え、田舎ののどかな風景がひろがっている。



桜井市市街を抜けたところから 三輪山

ている。

三輪山を眺めながら田圃のあぜを横切っていくと三輪山の山裾を流れる川岸に着き、歴史街道「金屋」の標識。

「やまと」の枕詞「しきしま(磯城嶋)」 初期大和政権の王城の地である。

この川が大和盆地を縦断して大阪湾にそぐ大和川の中流 初瀬川。

運の終着地。都の外港しとしても大いにさかえたところ。また、ここからは陸路となり、長谷・伊勢詣の宿場としても栄えた。

古代には大阪難波からこの三輪山麓まで遡る舟運の終着地。都の外港しとしても大いにさかえたところ。また、ここからは陸路となり、長谷・伊勢詣の宿場としても栄えた。

この東西に流れる初瀬川とクロスして 三輪山の山麓を通過して石上へ古代王城の地を貫く山辺の道がつづく。橋からは東の山々の間からまっすぐ流れ下る大和川が良く見え今も交通の要衝である。



初瀬川 三輪山南麓 金屋付近



初瀬川から東の長谷溪谷への街道筋

1.1. 産鉄地名の桜井市金屋集落 そこは古代王城の地「しきしま」

6世紀 欽明天皇磯城嶋金刺宮 仏教伝来の地ならびに7世紀栄えた都の外港「海拓榴市」

この一帯は「やまと」の「まくらことば」である「しきしま」(磯城嶋)の地。

川の南側に6世紀欽明天皇の磯城嶋金刺宮が造営され、欽明天皇の十三年(552)に百済の聖明王から釈迦仏の金銅像一軀と経論若干巻とがもたらされ、仏教が公式に日本に伝来した仏教伝来の地でもある。



金屋集落へ入る橋のたもとに仏教伝来の地の碑が建っている。

また この川岸周辺は「海拓榴市」と呼ばれ、交易の中心で7世紀には「藤原京」の外港として遣隋使もここから旅立ったという。また さらにその後 平安時代には「伊勢詣」「長谷詣」の宿場町として随分栄えたという。



今は全く静かな山裾の集落。ここで初瀬川に沿った東西の街道筋と北へ三輪山に沿って続く山辺の道が交わり、道の両側に落ち着いた家並みが続いている。

この古い家並みに沿って金屋の集落を三輪山の山裾を北へ細い山辺の道が続き、金屋の石仏や崇神天皇の磯城瑞離宮跡が山裾の林の中にひっそりと残っている。



金屋の石仏 2004.3.23.



崇神天皇の磯城瑞離宮跡 2004.3.23.

鉄滓が出たと文献のある金屋遺跡を探して、ひっそりと静まりかえった山裾の金屋集落を北へ向う。幾度となく集落の人に聞くが、全くわからぬ。

金屋の名が示すとおり鉄の痕跡がないかちよろちよろ流れる小川を見たり、山間の細い谷筋を覗いたりであるが、まったく判らず、30分ほどで金屋の集落を抜け、大神神社のある三輪の集落に入った。午後 桜井市の埋蔵文化財センターを訪ね金屋遺跡について尋ねると

「 古老の話として、集落のあちこちで鉄滓が出たとの話がある。また中世鋳物師があり、その滓もあり、古代の鉄滓・鍛冶滓の真偽はよくわからない。 」

との事であった。

この三輪山の周辺で本当に古代の史実どうりに鉄の痕跡が見つかるだろうか・・・不安になってくる。

1.2. 三輪山をご神体とする日本最古の神社 大神神社



日本最古の神社 三輪山をご神体 大物主命を祭神とする大神神社(三輪明神)

三輪山の山裾を縫って北へたどると山裾の林の中から不意に大神神社の鳥居の前にでる。西の街の中心部に

ある大鳥居からまっすぐ三輪山へ続く参道と直角にここで出会う。

ここでは、もう三輪山に近すぎるほど近づいているので、ご神体の三輪山の全貌はもう見えない。

鳥居からまっすぐ大樹の林の中を拝殿に向って参道が続き、階段をあがったところに立派な拝殿がある。

三輪山が神体山であるので、社殿はない。



大神神社の有名な三ツ鳥居は拝殿の後ろにあり、ここからは見えない。この三ツ鳥居は三輪山山中にあるみっの磐座を現し、大神神社が祭る3柱の神を示すという。



檜原神社 三ツ鳥居

大神神社より、北側へ山裾を回ったところにある大神神社の摂社檜原神社も三輪山がご神体で社殿はなく、三ツ鳥居が正面にあり、この三ツ鳥居を通して三輪山に参拝する。

この三ツ鳥居は三輪を代表する三輪そうめんの商標にもなっている。



大神神社から摂社狭井神社への道

大神神社からさらに北へ林の中の参道を 10 分ちょっと歩くと森の中に大神神社の摂社狭井神社がある。三輪山への登拝の為にはこの狭井神社で許可願いをせねばならない。



大神神社の摂社 狭井神社

1.3. 三輪山 登拝 三輪山に鉄の痕跡を探して



正午少し前に狭井神社で白いたすき

授け、神域なので飲食・写真撮影禁止 途中にある磐座でお参りすることなどの注意を受けて、拝殿の直ぐ横の登拝口より、三輪山へ登り出す。

三輪山にはそれぞれが大神神社の神々と同一視され、化身と言われる三つの磐座がある。

麓の辺津磐座・少彦名命 中腹の中津磐座・大己貴命 頂上の奥津磐座・大物主命の三つである。大神神社の三つ鳥居もこの三輪山の三磐座に起因すると言われる。麓の辺津磐座・少彦名命 中腹の中津磐座・大己貴命 頂上の奥津磐座・大物主命である。

ゆっくり歩いて登り約 1.5 時間弱 帰り 1 時間弱の道のり。

よく整備された登拝路が原生林の中についている。平日でもあり、全く人影なし。狭い小さな谷がまっすぐ上に向っている。小さなせせらぎがチョロチョロと音を立て心地よい。

神域の原生林の中、視界は開けないが、気持ちよい小道が続いている。

横の小さなせせらぎを見ると階段状の溜まりの中にきらきら光る小さな小片が散らばっていて、底には多くはないが、黒い堆積がある。きらきら光るのは雲母 黒い堆積は砂鉄である。

上部へ続くせせらぎの中にずっとある。

以前東北岩手の砂鉄川で見た雲母と砂鉄の組み合わせがこの三輪山にも存在する。

30 分ちょっとで 中腹の滝のところきて、ここから細い谷と別れ、山腹をまっすぐ上に登ってゆく。

視界は開けず、林の中。急斜面と言うわけではないが、上へ上へと良く整備された道が続いている。

道がひだまりに出るとききらきら雲母が輝いて美しい。また この道の上にも階段状になった所々に黒い砂鉄が堆積している。雨水の通り道として、この登拝路に流れ出て、堆積しているのだろう。

幾度となく砂鉄を産する山に入った事があるが、注意してこなかった精もあるが、これほど砂鉄が山道にあるところはない。やっぱり 鉄の山である。神域で写真が取れないのが残念。

注連飾りの付けられた磐座の横を歩いてさらに上へ登っていく。

所々木々の間から大和盆地が垣間見え、金剛・葛城の山をバックに平坦地の中に大和三山が見える。

低い山とはいえ随分登ってきた事が判る。相変わらずつづら折れでない登りの道が続き、「もう空も近いのに頂上の尾根に出ないなあ」と思っていて、ふっと気がついた。この山は稜線のないピラミッド型 上り詰めた所が頂上。



大神神社大鳥居



狭井神社からの三輪山登拝口

約 1.5 時間ほどでまわりの樹木で視界は開けないが平坦な広場状の社のある頂上部に到達。三輪山頂に鎮座する大神神社摂社高宮神社で大物主神の子・日向御子神を祀る。後ろ両側には 1 本ずつ天に向かってまっすぐ伸び、神聖な場所を演出している。視界は開けないが、気持ちのよい場所である。

さらに少し奥に進むと磐座がありここで道は行き止まりとなっている。大物主命の化身と言われる奥津磐座である。磐座の前に立ち手を合わせる。

200 年も昔 幾多の産鉄の人達がここに立ち、鉄の自立を願って儀式をしたに違いない。

この山の下で繰り広げられてきた日本誕生の歴史をあれこれひとり思い浮かべてました。

神域であるので、もっと宗教臭いと思っていましたが、たすきをかけていること以外特にそれもなし。

平日でお参りする信者に出会わなかったからかもしれないが・・・

20 分ほど頂上にもときた道を引き返す。

登拝路は神域の中にあり、写真を取れませんでした。狭井神社の直ぐ北、三輪山の谷筋から流れ下る狭井川でも川底に光る雲母と砂鉄の堆積を見つけました。



三輪山から流れ出る狭井川の川底に堆積する砂鉄 2004.3.23. 狭井神社の直ぐ北で

どこに鉄の鉱脈があるのか判らないが、黒い砂鉄が散らばり、差鉄の有る所にきらきらと雲母が光る。三輪山は鉄の山であることに納得した登拝でした。

また、三輪の街中に立つチャコール色の落ち着いた大鳥居 その下に立ってビックリ。耐候性鋼板を使った無塗装の鋼鉄製。

建設後約 20 年を経て素晴らしい色でそびえ、鉄の神 三輪山の前景を作っている。

意図されたのではないだろうが、古代からの鉄の神に現代の鉄のモニュメントである。



完成 昭和 61 年 5 月 28 日
高さ 32.2m 柱間 23.0m 柱径 3.0m 笠木長 40.8m
本体総重量 18 トン
材質 耐候性鋼板
表面に錆層が形成され、無塗装で
塗装の役をなし腐食を防止する
耐久性 1300 年
基礎 10x7x4m の鉄筋コンクリートを打ち、
その下 24m まで 1.1m の鉄筋コンクリート杭
4 本が打たれている。
大神神社 大鳥居 銘板より

耐用年数 1300 年の銘板のある現代の鉄のモニュメント 大神神社 大鳥居

30 分ちょっとで麓に下りて、三輪の特産 三輪そうめんと柿葉すしで遅い昼食。

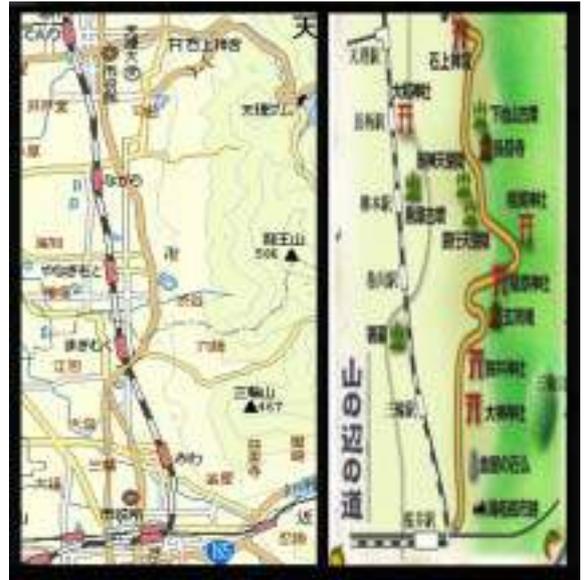
再度 大鳥居の前から三輪山の山麓を北の箸墓古墳への道をたどる。

1.4. 卑弥呼の地 箸墓界限 三輪山麓の丘より夕日の大和盆地を眺める

三輪山の北に位置する巻向地区には3世紀に遡れるといわれる纏向古墳群がある。卑弥呼の時代まで遡れるといわれ、ここが畿内説の邪馬台国の地であり、箸墓古墳などの纏向古墳群のいずれかが卑弥呼の墓という人もいる。またこの巻向地区の山側 三輪山に隣接した山麓穴師には初期大和政権(三輪王朝)の創始者崇神天皇陵や景行天皇陵がある。この三輪山に隣接する穴師も産鉄地名であり、またさらに北の石上には、古代5世紀には物部氏の大きな鍛冶工房があった。

三輪山山麓から北に続く山裾の一角は卑弥呼の時代から続く産鉄の地。

卑弥呼も初期大和政権(三輪王朝)も鉄を求めてこの地を支配し、鉄の力をバックに巨大化していったと考えるのも嘘ではなく思えてくる。確証はないが・・・。



箸墓古墳の傍にある纏向古墳群の標識

そんなロマンを考えながら、三輪山を眺めながら 大鳥居から北の森へ向って歩き出した。

三輪山をながめながらののどかな田園風景が広がる。

20分程で大きな森に隣接した箸中の集落に入る。

大きな森でこれが箸墓とは気付かなかったが、この森の端に沿って集落をぬけると大きな池がこの森を取り囲み、ここが箸墓と知る。本当に馬鹿でかい。

ここから東へ箸中の集落を直角に曲がって北へ向う。桜井線を北に渡ったところで丸い頂を見せるよく整備されたホケノ山古墳に行き着いた。



箸墓古墳の東端 箸中集落



箸墓古墳



箸墓古墳から東へ 山裾へ



ホケノヤマ古墳



箸墓古墳 ホケノヤマ古墳頂上より

ホケヤマ古墳は良く整備された公園になっていて、その頂上からは 直ぐ傍の箸墓古墳の大きな森が見え、その向こうには大和盆地が遠望される。

北側に眼をやると平野部には巻向古墳群の古墳と思われる森が点々と散らばっている。

また 東北の三輪山麓 穴師と思われるあたりにも幾つかの森がまじかにあり、三輪王朝の崇神天皇陵や景行天皇陵などであろう。

本当にまじかに日本誕生にかかわった古代の歴史が足下に広がっている。しかも、あまり気にとめていなかった古代産鉄の地がその本拠である。



卑弥呼の時代からの「鉄の重要性」にビックリする。「卑弥呼の邪馬台国が鉄をバックに大きくなってきたのでないか。。。。」と考えるなど今まで思いも寄らぬ事 鉄の山三輪山のロマンにしたりながら 陰影を増す大和盆地を眺めていました。

ホケヤマ古墳から桜井に戻る事にし、一番三輪山山裾に沿って続く山辺の道へ戻り、眼下に広がる夕暮れの大和盆地の景色や山裾の田園風景を楽しみながら三輪へ戻ってきました。



三輪山山麓 山辺の道 箸中付近より 大和盆地 2004.3.23.夕

遠く大和盆地の西の端には二上山から葛城・金剛の峰のシルエットが浮かび、その前には大和三山が優美な姿を見せている大和盆地がひろがり、直ぐ前には箸墓古墳の森。この大和平野の南東の端には三輪山の大鳥居が慄然と大和平野を見据えている。

「やまとはくにのまほろば」「しきしまのやまと」がゆったりと広がっている。

三輪山に行こうと思った当初は「古代産鉄の地に鉄の痕跡を訪ねよう」との軽い気分でしたが、「この地が卑弥呼の時代から日本誕生にかかわる初期大和政権の本拠地　そして古代を通じて難波津へ通ずる都の外港で遣隋使もこの地から出発した」など思いも寄らぬ事。

しかもそれがすべて三輪山を中心とした古代の産鉄の地で・・・。

本当に卑弥呼の邪馬台国が鉄とかかわるこの地なのだろうか・・・卑弥呼の国と鉄とがかかわりをもっていると考えなど本当にゾクゾクしてきます。

また、古代　畿内には三輪山・石上と同時に河内に大きな鍛冶工房。それが三輪王朝に続く河内の王権を・・・

そして北近江・越の鉄をバックに畿内へ入った継体天皇の誕生へ。



三輪山の登拝路には今もきらきら光る雲母の片と共に砂鉄が散らばる鉄の山。

「古代日本誕生はこの三輪山の鉄を求めてこの地を本拠にしたのではないか・・・」

現代も古代もやっぱり「産業・文化の米」鉄の持つエネルギーにただ感激。



そんな思いでみる眼下の大和平野の端に1300年の耐用年数を持つという三輪山の鉄の大鳥居がリンと大和平野を見据えているのが、印象的。

三輪山へ登拝した満足感と思わぬ三輪山の鉄のロマンに浸りながら、桜井への道を急ぎました。

夕暮れの大和盆地をながめながら　桜井への山辺の道で

2004.3.23.　by M. Nakanishi



2. 『古代の鉄の山「三輪山」と初期大和政権』 思いつくままに



1. は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・
2. 三輪山 大神神社 三輪山山麓は産鉄の地
3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係
4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓 山辺の道

1. 三輪山は古代鉄支配のシンボルでなかったか・・・

青垣山に囲まれ、巻向川と初瀬川の水垣に区切られた奈良県桜井市「三輪山」の麓は日本誕生の黎明の時代古代大和の中心であり、4世紀初期大和政権成立の舞台であった。「やまと」の枕詞「しきしま」もこの地である。

この地の東の後背にピラミッド型の均整の取れた美しい姿でそそり立つのが三輪山。

麓にはこの三輪山をご神体とし、出雲の神「大物主命」を祭神とする日本最古の神社大神神社がある。産鉄と関係深い出雲の神を祭る事で判るごとく、鉄を産する神秘の山でこの周辺は産鉄の地と考えられる。



大和朝廷の成立期 3世紀～6世紀 国内で

は自立製造できず、伽耶などの朝鮮半島からの輸入に頼ってきた「鉄」。この時代 朝鮮半島諸国も戦乱の中にあり、鉄の覇権をめぐる日本国内はもとより、朝鮮半島でも揺れ動く。

日本には数多くの産鉄の民が渡来し、力の源泉「鉄の自立」・鉄の覇権を求めた和鉄黎明の時代でもある。大和政権をも含め日本各地の諸国・豪族が輸入鉄原料による鉄鍛冶による武器・工具製作を勤める一方、産鉄地を手に入れ、品質は輸入品には劣るものの和鉄製造に乗り出し巨大化してゆく。



畿内では 大和政権の各氏族がこの大和・三輪山山麓そして河内などで そして吉備・美作・丹後・北近江・越の諸国が産鉄を背景に大和政権と連合・対抗してゆく。三輪山はそんな鉄支配のシンボル 大和政権にとっても放せぬ産鉄の地でなかつたか・・・

卑弥呼の邪馬台国は三輪山の北 箸墓古墳などの纏向古墳群の一帯との説が大和存在説で有力であり、4世紀三輪王権と呼ばれる前飛鳥初期大和政権(崇神・垂任・景行・成務・仲哀)の中心地である。5世紀には王城の地は河内の産鉄地に移るものの近江・



越の産鉄地をバックに王権に付いた継体天皇が大和に入り、6世紀半ば欽明天皇はこの三輪山南麓の金屋に都磯城嶋金刺宮を造営。仏教がこの地に伝来すると共に次の聖徳太子の時代 大和朝廷の安定成長時代へとつながってゆく。



営まれた。また初瀬川が長谷溪遡ってきた舟運の終着地として 欽明天皇の十三年（552）に 論若干巻とが我が国にもたらされ、

日本誕生の黎明の時期 大和政権の黎明を支えたこれら三輪山の麓には 北から南に古代の道 山辺の道が山麓を縫って走り、今も金屋や穴師



出雲などの産鉄地名が産鉄の痕跡をとどめ、数々の古代遺跡が横たわっている。「やまと」の枕詞「しきしま」の地であり、三世紀後半から四世紀初頭の崇神天皇の都磯城端離宮や6世紀半には欽明天皇の磯城嶋金刺宮などが谷から流れ出るこの地は難波津から大和川を長く都の外港の役割を果たす。

は百済の聖明王から釈迦仏の金銅像一軀と経

2. 三輪山 大神神社 三輪山山麓 は 産鉄の地

三輪山をご神体とし、大物主命を祭神とする大神神社は産鉄と関係深い出雲氏の神社であり、いまも山麓に出雲の地名をとどめている。この出雲氏の居地に割り込む形で営まれるのが崇神天皇の磯城瑞離宮である。また、三輪山の北 石上には崇神天皇に重用され、次第に勢力を伸ばし朝廷の軍事・武器を支配した物部氏の本拠がある。当時 有数の鍛冶工房があり、鉄支配の本拠地だったのだろう。



三輪山と物部氏の関係についてはよく知らないが、物部氏と大物主神との関係からすれば、物部氏も出雲氏の系譜と考えられなくもない。

当時 鉄は朝鮮半島の輸入に頼っており、力の根源として 鉄の支配(鉄加工原材料の輸入・鍛冶加工)と共に、国内での自立製造に必死になっていた時代であり、製鉄原料が探され、製鉄技術者である渡来人を中心に幾多の製鉄が試みられたに違いない。

そんな中で 鉄を産する三輪山はそれら産鉄に携わる人達 鉄支配のシンボルとしてさん然と輝いていたのではないだろうか・・・

弥生後期 倭と朝鮮半島の鉄を巡る交流

3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係

この4世紀～7世紀半ばまで、朝鮮半島の三国時代 日本の古墳・前飛鳥の時代 朝鮮半島は戦乱の時代であった。

北には漢・魏の植民地があり、半島には高句麗が南への進出を狙い、百済・新羅そして小国の連合 伽耶が相互に競い合う激動の時代であった。特に伽耶は鉄の生産輸出で日本はもとより周辺諸国もこの伽耶の鉄の輸入に頼っていた。この伽耶では 国力の小さな小国が群立しており、鉄資源・製鉄技術をめぐって常

に近隣諸国の侵略にさらされていた。そして、660年に新羅が半島を統一する。大和政権および日本各地の豪族も文化・技術の先進国であるこれら朝鮮半島の諸国と友好・同盟関係を結ぶと共に半島に派兵するなど深く朝鮮半島諸国とかかわり、活発な交流があった。

当時 朝鮮半島・日本地域での外交の中心はなんと言っても「鉄・鉄の技術」の入手と唐や隣国からの侵略への対処であったと考えられる。朝鮮派兵・任那など日本からの半島移住者・逆に日本各地への朝鮮半島からの渡来や朝鮮にルーツを持つ氏族の存在そして、百済・新羅・高句麗諸国との密接な関係はこんな情勢の中で生まれた。

562年に製鉄国「伽耶」が強大化した新羅に滅ぼされると、武器などの原材料「鉄」を伽耶からの輸入に頼っていた日本にとっては、鉄の入手経路の厳しい現実にはさらされることになった。

つまり、この世紀 年々大陸からの鉄の入手は困難になり、鉄の大陸からの自立が大和朝廷にとっては最大の課題であり、伽耶の滅亡により、より一層の緊急課題となった。

日本には、朝鮮半島の混乱を逃れ、多くの渡来人が大陸からやって来て鉄の技術を日本に伝えたという。



日本・韓国の鉄テイ分布 (4世紀後半)

供給源: 伽耶・新羅・百済

大陸から輸入された鉄を原材料に、兵器や工具に加工する鉄鍛冶が専門職化して、軍事と結びつき、また、鉄の自立に向けた製鉄も始まっていたと考えられる。その起源は6世紀半ばと見られているが、まだ良く判っていない。

そんな製鉄にかかわる渡来人の系譜が豪族・氏族として大和朝廷にも多数かかわっていたと考えられ、

現在においても各地に残る産鉄地名・氏名の中にはこの頃の産鉄に起源を持っているものもある。

出雲・息長・鴨・葛城・物部などの諸族 三輪山周辺に残る金屋・穴師・出雲・石上などの地名がこれにあたるのではないかと・・・



4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓 山辺の道

邪馬台国大和説では、天理市から桜井市にかけて広がる纏向遺跡や大和（オオヤマト）古墳群が、邪馬台国の中心だったと考えられています。

最近、ホケノ山古墳が、築造年代3世紀前半にさかのぼることが発表され、箸墓古墳と並んで邪馬台国大和説との関係がいられています。

纏向古墳群

三輪山の麓にある桜井市の巻向地区には、卑弥呼の墓ではないかといわれている箸墓古墳を中心に多くの古墳や遺跡があり、近くの山辺の道には大和朝廷の実質的な創始者とも言われる、崇神天皇陵（行燈山古墳）や景行天皇陵（渋谷向山古墳）等もあり、ここが大和朝廷の発祥の地という人もいます。

纏向遺跡には20数基の古墳が存在する。

このうち現状から前方後円墳と判別できるものとして、箸墓古墳、纏向石塚古墳・矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳がある。これらの古墳を総称して「纏向古墳群」という。

これら前方後円墳群は3世紀に現れ、4世紀後半には消滅してゆく。

近年の檀原考古学研究所や桜井市教育委員会等々の発表によれば、纏向古墳群のなかの、勝山古墳、矢塚古墳、ホケノ山古墳、マバカ古墳などは出土物の調査等から、建造時期が3世紀半ばまで遡るとされ、これで卑弥呼活躍の時期と一致するという。

卑弥呼から大和朝廷へ 日本誕生にかかわる大和の連合王権の連合のシンボルがこの前方後円墳と唱える人もいる。

三輪山に行こうと思った当初は「古代産鉄の地に鉄の痕跡を訪ねよう」との軽い気分でしたが、

「この地が卑弥呼の時代から日本誕生にかかわる初期大和政権の本拠地

そして古代を通じて難波津へ通ずる都の外港で遣隋使もこの地から出発した」

など思いも寄らぬ事。しかもそれがすべて三輪山を中心とした古代の産鉄の地で……。

古代 畿内には三輪山・石上と同時に河内にも大きな鍛冶工房。それが三輪王朝に続く河内の王権へ……

そして北近江・越の鉄をバックに畿内へ入った継体天皇の誕生へ。



三輪山は今も砂鉄が見られる鉄の山

この王城の地は時代を越えて脈々と鉄の系譜と共に続いている。

大神神社の巨大な大鳥居は耐用年数1300年の現代の鉄のモニュメント。これからもずっと三輪山の前に立って王城の地 やまを見据え続けるという。

もうビックリ……。畿内の「鉄」が面白くなってきた一日でした。

2004.3.31. by M. Nakanishi

古代 初期大和政権(三輪王権)が王城の地に求めた産鉄の地 産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道

1. 産鉄の地「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道 Walk
 1. 産鉄地名の桜井市金屋集落 そこは古代王城の地「しきしま」
 2. 三輪山をご神体とする日本最古の神社 大神神社
 3. 三輪山 登拝 三輪山に鉄の痕跡を探して
 4. 卑弥呼の地 箸墓界限 三輪山麓の丘より夕日の大和盆地を眺める
2. 『古代の鉄の山「三輪山」と初期大和政権』 思いつくままに
 1. 三輪山は古代鉄支配のシンボルでなかったか……
 2. 三輪山 大神神社 三輪山山麓は産鉄の地
 3. 鉄をめぐる朝鮮半島諸国と日本の関係
 4. 邪馬台国大和説と三輪山山麓 山辺の道

【完】

【 内 容 】

1. 「木の文化」をもたらした縄文の森の誕生と縄文時代の気候 縄文の海進が日本列島の骨格 豊かな縄文の森を作った

2. 北陸に点在する縄文のウッドサークル探 訪

金沢チカモリ遺跡・能登 真脇遺跡・富山県桜町遺跡

- | | | | |
|------|------------|-------------------|---------|
| 2.1. | <u>金沢</u> | <u>チカモリ縄文遺跡探訪</u> | 金沢市 |
| 2.2. | <u>能登</u> | <u>真脇縄文遺跡探訪</u> | 石川県能都町 |
| 2.3. | <u>小矢部</u> | <u>桜町縄文遺跡探訪</u> | 富山県小矢部市 |

3. 北陸 能登のウッドサークルは気候激変への集落の絆か・・・

1. 「木の文化」をもたらした縄文の森の誕生と縄文時代の気候

縄文の海進が日本列島の骨格 豊かな縄文の森を作った



日本は「木の国」と云われるが昔々の氷河期には、日本列島にはヨーロッパのような大氷河が発達しなかったため、針葉樹林帯ともに西日本の平地にはブナなどの落葉広葉樹林が広がっていた。

その後、氷河期が過ぎ約12000年前 日本で云う縄文時代に入ると間氷期に入って温暖化が始まり、地球規模での気候の大激変 寒冷化が6 /100年 温暖化が7 /50年という激変があり、地球上の生物も絶滅を含めて大きく変化した。

しかし、日本では既に述べた日本列島の特徴もあって、この気温の激変を乗り越えて、寒冷 地の針葉樹も冷温帯の落葉広葉樹林も生き延び、その後の温暖化で照葉樹林も西から北上するなど多種多様な森が日本列島を覆い、世界に類を見ない多種多様な植物相の森林が日本列島を北から南へ分布することになり、「木の文化」をもたらす日本の地形条件が形成された。

今から6000年前縄文前期、最も温暖化が進み、夏の気温が現在より、2~4 高い期間が始まり、氷河期以来、低くなっていた海面が一気に上昇(縄文の海進)、海面は今より3~4メートル高く、富山県魚津の埋没林のように大陸棚が水没するなど海岸線が大きく変化した。



その結果、中部・関東地方より北の地域は、東北地方を中心にコナラ・クリなどの落葉広葉樹林に広く覆われ、木の実を豊富にもたらす森の誕生する。

また、海岸線も平野の中まで深く入り組んで、魚介類の採取にきわめて都合の良い環境をつくりだした。

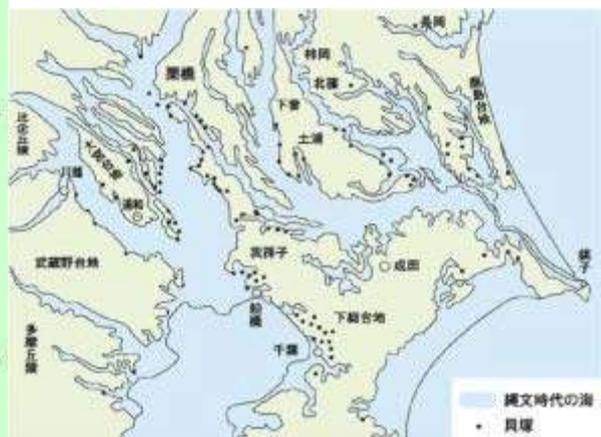
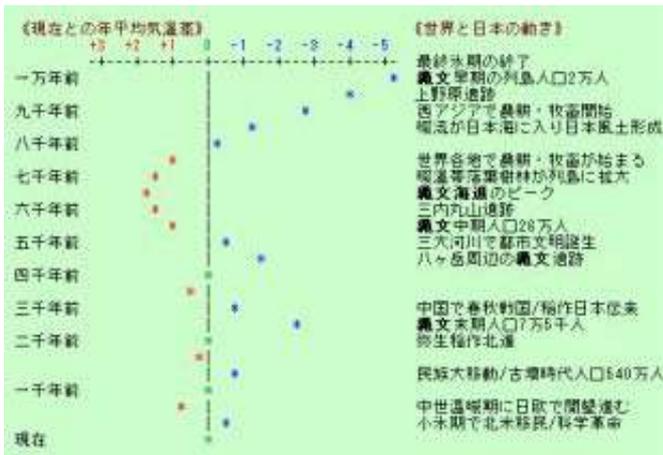
さらにその後 5000～4000 年前縄文中期になると気候は冷湿化して降雨量も大幅に増加し、山から流れ下る川によって、海岸部には沖積平野や、砂州や河口湖などが形成されていった。



針葉樹林帯 エゾマツ



落葉広葉樹林 ブナの森



過去1万年前から現代までの気候変化と約5000～6000年前縄文海進時の関東

仙台湾・東京湾沿岸ではかなり内陸にまで海水の浸入がみられ、青森県小川原湖、岩手県気仙沼、仙台湾周辺の多くの貝塚遺跡はこの時期以降、縄文時代後期までに形成されたものである。

また、大阪の上町台地以外の部分や、名古屋城の海側から岐阜県にいたる広い地域は海であったが、この時期に自然に埋め立てが進み、大阪平野・濃尾平野となっていた。



津軽の縄文文化を育んだ津軽の森

この後 4000～3000 年前縄文後期には一旦温暖となるが、さらにその後 2500 年～2000 年特に北日本や山陰・北陸で冷涼な気候が見られた。そして更なる気候の温暖化は、近畿地方以西の植生をやがて常緑照葉樹林に置き換えるが、その食料供給力は落葉広葉樹林に対して著しく低かった。その結果、縄文時代全時期を通じて西日本の人口は伸び悩み、縄文時代を通して東日本よりも稀薄になった。これに加えて、九州南部地方の激しい火山活動は、九州から本州の大半を被うアカホヤ火山灰の存在にも示されるように、縄文時代前期初頭の段階で確立した南九州の縄文文化に壊滅的な打撃を与えた。

“東高西低”と言われる縄文遺跡分布の片寄り、実はこのような過程で生み出されて行ったらしい。

縄文の人達もこれらの地形変化・生物相の変化を利用しながらその生活や生活の場を大きく変えてきたのであるが、これらの気候の変化は地球規模的な地球の動き・海流の変化・火山噴火・隕石などが原因といわれている。

このようにして、現在の日本列島の骨格がつけられ、縄文中期には 東北日本や北陸などには巨木が群生する森林を背後に木の実豊富な森そして魚介類豊富な入り江を有する豊かな集落が誕生し、「高度な木の文化」を持つ大集落へと成長してゆく。

縄文の森に花開いた『木の文化』

- 巨大柱の6本柱 大型住居を有する縄文の巨大集落
- 青森三内丸山遺跡に代表される津軽の縄文遺跡群
- 東北各地に点在するストーンサークルを作った縄文集落
- 秋田県伊勢堂岱・大湯遺跡 青森小牧野遺跡
- ウッドサークルと高度な建築技術を有する縄文集落群
- 北陸・能登の縄文遺跡群 金沢チカモリ・小矢部桜町・能登半島真脇遺跡など

a. 【縄文時代 東北に花開いた森の文化 青森三内丸山遺跡と東北縄文のストーンサークル群】

縄文人の心を繋ぐストーンサークル
avv6.htm by M.Nakanishi

『縄文のストーンサークル』探訪

秋田県伊勢堂岱遺跡 青森小牧野遺跡

ウッドサークルと高度な建築技術を有する縄文集落群

北陸・能登の縄文遺跡群 金沢チカモリ・小矢部桜町・能登半島真脇遺跡など

【縄文の森】に基く『ストーンサークル・環状配石遺』
青森 三内丸山遺跡

「縄文時代」のころから縄文時代を通じて「縄文」の
三内丸山遺跡のストーンサークル、環状配石遺跡の中心の石の柱に
建てられた配石。

三内丸山遺跡

伊勢堂岱遺跡

秋田県鷹巣 伊勢堂岱遺跡 H12.9.15.

b.【北陸・能登に花開いた森の文化 縄文のウッドサークル群】

**森の国 能登の国で育まれた巨大柱列
縄文のウッドサークル**

金沢 子カモリ遺跡 小矢部 桜町遺跡

縄文の集落で 幾度も建て替えられ、東南の方向を向いて 集落を見守る
巨大な栗の木を半割りにした10本の柱が環状に立ち、
その中では、祭りが行われたか・・・
諏訪御柱の奇祭や神社の鳥居のルーツかも・・・

縄文の建築部材
貫通穴など高度な建築仕口のある建築部材が出土
縄文時代 既に高度な建築柱立技術があった

貫通穴のある建築部材
貫通穴のある建築部材
彫刻柱
貫通穴のある柱出土状況

縄文のストーンサークル
金沢 子カモリ遺跡

縄文 真鍮縄文遺跡

復元 桜町遺跡環状木柱列

縄文の森で土器や漆と織そして高度な木の加工建築技術と共に育まれた

『日本人の心』 - 「和」・争いや穢れを知らぬ祖先と共に生きる -

ストーンサークル・ウッドサークル「環・サークル」はその表現の柱でなかったか・・・

東北で感じた親しみと
おだやかさ
それと同じサークルが栗
の巨大柱を半割りにして、
環状の列柱で作られ、東
南の方向へ向いて集落の
中に建っている。そして
このサークルは建替え建
替え何百年も維持されて
いる。



おそらく 祖先を敬い 神を迎え 村の繁栄を願う祭の場であったのだろう。

写真で見て ビックリ。推定復元ではあるが、シンプルな列柱が立並ぶ姿 これはまさしく諏訪大社御柱。 また日本の神社の発祥 三輪山をご神体とする大神神社 礼拝場の左右に立つ御柱 日本の鳥居のルーツを想起する。

直径 80cm を越える栗の巨大木を切り出し、それを半割りにして 正確に建てる。

これは 少人数では行えない。幾つかの集落が集まってこのウッドサークルを作る過程そのものが祭りであったろう。



縄文の森で「食」を支え、そして建築用材の主となった栗林と栗の巨木。

現在はほとんど里山の二次林の中に存在し、栗の巨木の森と云われてもイメージがわからない。

インターネットで調べると北海道道南森町に縄文時代から続くと推定される巨大木の栗林が天然記念物「茅部の栗林」として保存されていました。かつては縄文時代の遺跡群がならぶ噴火湾沿いの海岸段丘に約 20km におよぶ栗林があり、現在も胴回りが3mを越える巨樹の栗が147本も立並んでいるという。

るという。

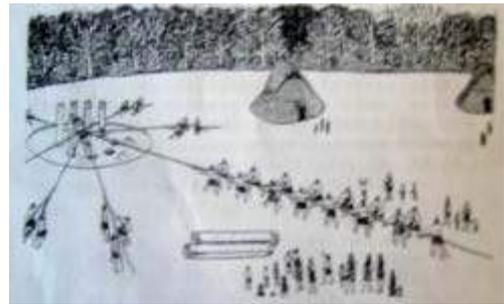
縄文時代にはこんな巨木から栗の実を取ると共に祭礼の場所や巨大な建築物群を作り上げていった。

北陸・能登のウッドサークルはすべて栗の巨木を半割りに加工して作られている。腐りにくいなどの建築用材のメリットばかりでなく、縄文の主食を提供した「栗の実」そんな思いが栗の木の加工に込められているのかもしれない。



道南 森町の市内 にある 北海道天然記念物 茅部の栗林 インターネットより採取

2. 金沢チカモリ遺跡・能登 真脇遺跡・富山県桜町遺跡 探 訪 2004.4.7&8.



金 沢 チカモ

リ 遺跡 巨大木柱列

能 登 真脇遺跡
小矢部 桜町遺跡

巨大木柱列・彫刻柱・大量のイルカの骨
巨大木柱列・彫刻柱・大量の加工建築用材

4月7日 近畿では桜満開の晴天の朝早く 約30名のツアーバスで名神・北陸自動車道を通って北陸へ能登の巨木を使った縄文の ウッドサークルを訪ねました。

また、富山小矢部の桜町遺跡ではウッドサークルと共にずっと後の時代と思われていた大量の加工建築用材に会えるのも魅力です。

「縄文のウッドサークル」 環状に配列された巨大木の木柱列が出土したと聞いてもあまり実感なし。

巨木といえば 富山湾魚津の 埋没林が頭にある程度で興味津々。

あの森の中にひっそり眠って いる東北のストーンサークルと同じだろうか・・・

大阪から2時間足らずで余呉 の湖が見え出すといよいよ北陸・越の国へ 福井嶺南・嶺北を分ける山をトンネルで越えてゆく。 ツアリーダーの片山先生の継体天皇・万葉に歌われた越の国の解説が通り抜けていく山中の景色とマッチして心地よし。

敦賀トンネルを抜け 次の今庄トンネルに入るほんの短い間見える郷が古代の官道 木の芽峠越え中山道 越と若狭・近江の境の鹿蒜・カエルの駅。

古代幾多の人達や渡来人がここを通過して 都と行き来したという。

継体天皇はじめ大伴家持や紫式部も・・・この「カエル」に思いを込めて通っていった。

「越」の国は6世紀 鉄の新技术をもって継体天皇が大和朝廷に入った根拠地「鉄の国」。琵琶湖北岸の高島・マキノの製鉄遺跡 余呉 伊吹の鉄そして越の国に入って九頭竜川沿いの古代の製鉄遺跡がこの周辺に眠る。ここは古代の鉄の重要路。今庄トンネルを抜けると北陸道は山間を抜け 福井平野へ流れる大きな川沿いを走る。標識に「鉄」に関係深い日野川の名称を見つけてビックリ。この川沿いが越の鉄の心臓部か・・・。

後で地図を調べるとまさしく 製鉄遺跡・古代の古墳が点々と存在する九頭竜川の本流のひとつ 鉄の川日野川。継体天皇の越の国の鉄と重なる場所。まさしく古代の「Iron Road」。武生・鯖江と古代越の国

の心臓部を走り抜け 福井で九頭竜川の本流を渡り、北陸の海岸沿いに出るといよいよ石川県。大阪から約4時間弱 白銀を抱く白山の山々が間近に見え、手取川をわたるとほどなく金沢西のインターチェンジ。

いよいよ ウッドサークル探 訪が始まる。

2.1. 縄文後期～晩期の集落 金沢チカモリ縄文遺跡

インターをでて直ぐの市街地 の道をいくつか曲がると住宅地の中に満開の桜の木が立並ぶ小さな公園がある。この公園がチカモリ遺跡である。

もっと 山近くの林の中と思っていましたが、金沢市の市街地。

かつてはもっと海岸が近く、手取川の扇状地なのでそれも見えそうにも思うのですが、今は静かな住宅地で 桜咲く 落ち着いた公園。

チカモリ遺跡は今から 2300～3000 年前の縄文後期～晩期の集落遺跡で、土地区画整理に伴う発掘調査で、集落跡と共に巨大木柱根が大量に出土。

今は埋め戻され、正面入り口にはチカモリ遺跡の立派な石碑があり、公園の片隅が小高く盛り上げられ、ウッドサークルが復元され、隣接して金沢市埋蔵文化財収蔵庫があり、出土品が整理展示されていました。



金沢 チカモリ縄文遺跡公園と其の中に推定復元された環状木柱列 ウッドサークル

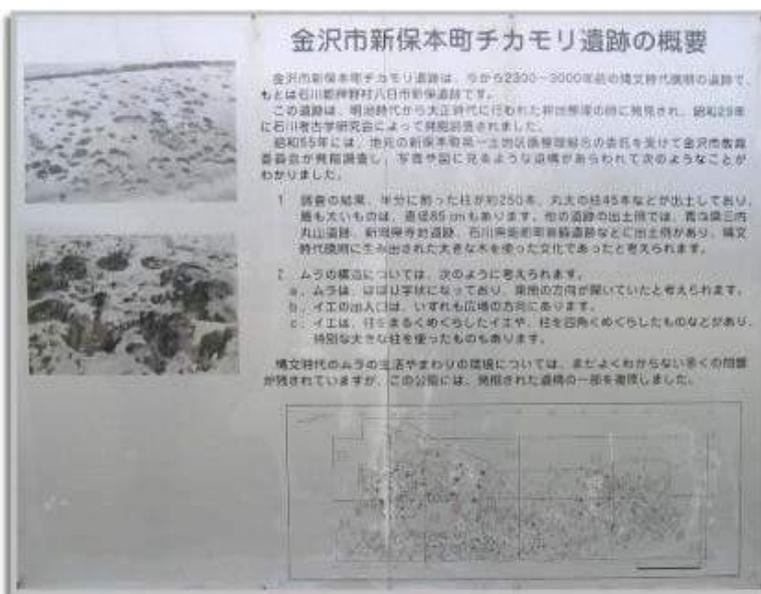
チカモリ縄文遺跡概説 金沢市埋蔵文化財収蔵庫資料ほかによる



金沢市街の西南方の手取川扇状地の北端 標高約7mの積低地で4、50cmも掘り進むと、地下水が湧き出すところで、発掘調査で全国的にも例をみない新しい事実がつぎつぎに掘り出された。

約350本もの柱の根元が立てられたままの状態で見つかりました。これらは地中に埋め立てられた住居や倉庫などの柱材で掘立柱であり、定温の地下水に浸され、厚い表土で密封された状態であったために、約3000年もの年月を腐らずに残されていた。

総数約350本の木柱のうち、約250本の柱がクスの木を半分に割り、断面をカマボコ形に加工されており、これまでに知られていない縄文柱で、幾つかのサークル状に立てられた柱根が、重なって出土した事が判明。「縄文のウッドサークル出土」とさわがれた。



この大量の縄文柱の中には、直径50cmを超える巨大な柱根が約40本あり、中には径85cmに達するものも含まれていた。

このようなカマボコ形の大柱 10本ほどをほぼ等間隔に立て並べて直径6～8mの円形にした環状木柱列の遺構8基が、環の中心をすこしづつずらしながら重なって出土。

いずれも、弧の面を環の内側に平らな面を外側に向けて埋め込んでいた。

また、環の一隅には、八の字形に外側に開いた出入口（門扉状）も備わっていて南東の方向を向いて建っていた。

柱材の加工も精巧で、平滑に整えているし、柱の底面も平らに削られ、縄文時代に磨製石斧で、これら巨木を精巧に加工できるなど驚きです。



このような巨大加工木材は、奈良時代になって寺院建築などでようやく出現すると考えられていただけに、縄文時代に石器のみで巨木を使いこなしていたとは誰もが考えもしなかった。

また、柱の基部には、溝や目 途（めど）穴が彫られており、藤蔓（ふじづる）を固くまき締めて、遠くから牽引（けんいん）した推定される。

これだけの作業と曳行に費やす労働力を組織化できる社会が縄文時代既に成立していた事も大きな驚きで、三内丸山遺跡と共に「森の文化・木の文化」縄文文化の見直しを迫るきっかけにもなりました。

これまでの 考古学界には、全く知られていなかった遺構であった。

チカモリ遺跡 復元環状木柱列



金沢市埋蔵文化財センターの見学後、復元されたウッドサークルで学芸員の人から説明を聞く。

興味はみんなこのウッドサークルが何の為に作られたのか・・・

広葉樹である栗の木は成長しても、ある程度大きくなると高さではなく横へ広がることなどを勘案して復元ではほぼ高さを2mにしたが、この構造物が屋根のある建物なのか 垂直に木柱が立っていただけのシンプルな構造だったのか 現在では全く不明である。



復元環状木柱列
金沢 チカモリ縄文遺跡
2004. 4. 7.

柱が巨大であること 木柱列が東南の方向に向き、幾代にもわたって建替えられ維持されてきた事などから特別な祭礼かなにかが行われた場所であつたろう。

また、周りのいくつかの集落共同 で維持されてきたとも考えられる。

でも なぜ この場所で 形状は環なのか・・・ ここでは見渡しても山と関係なさそうである。

現在では、集落周囲の環境は大きく変化し、海的位置もはるか遠くとなって今では良く判らない。

東南の方向を向いているのは 太陽の運行 半割りの木が性格に並んでいるのは月の運行を思わせる。 東北のストーンサークルも同じことが考えられたが、やっぱりよく解明されていない。

外から見るとサークルの径が小さいようにみえるが、中にはいると以外と広い。

東北のストーンサークルでは集落とは別の場所にあり、墓と関連した祭などが行われたと云われる。このチカモリ遺跡ほかの北陸・能登のウッドサークルでは集落の居住地の中にあり、墓との関連もなさそうである。

このウッドサークルの中でいったい何が行われたのか・・・

ウッドサークル・環状列柱では半割りの木柱が使われているが、一般住居と識別できる巨大柱を用いた正方形・長方形のものがウッドサークルとは別にあり、これには巨大丸柱が使われている。多くの縄文人が集まってこの地にこのウッドサークル建設に集まった。そして 何代にも渡って建替えながらこれを維持してゆく。

まさに「縄文人の心の絆」であり、共通意識のシンボルであったろう。

ここではシンボリックな山は白銀を戴く白山の峰々が考えられるが遠い。でも、三輪山大神神社の礼拝場の入り口左右に立つ木柱が近いのでは・・・。

また ちょうど6年毎の 祭礼が始まった諏訪神社の御柱の祭りが頭をよぎる。

でも やっぱり良く判らない。

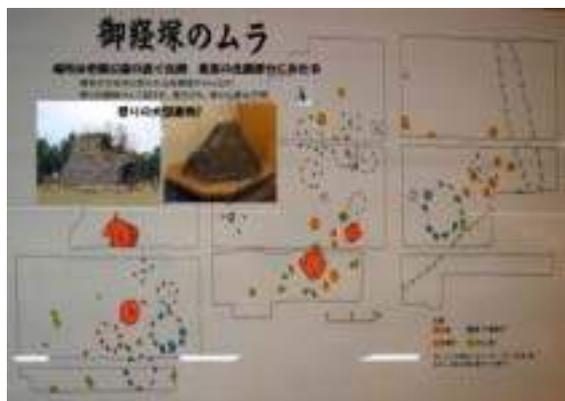
でも 思っていたよりも 巨大な柱を加工してウッドサークルが作られ、この木柱環の中に入ると 外とは隔離されたひとりの孤立した静かな空間になるから不思議である。

同じ手取川扇状地に位置する 野々市町御経塚縄文遺跡で

ここにもウッドサークルがあった・・・???



野々市町御経塚遺跡公園 復元集落



史跡公園の北側で発掘された御経塚の集落

この金沢チカモリ縄文遺跡の直ぐ近くに同じ手取川扇状地にほぼ同時期の縄文後期～晩期に営まれた縄文の大集落広さ約 35000 m² 野々市町御経塚遺跡がある。

30 軒を越える住居跡や大量の石器・土器が出土し、北陸の縄文時代晩期初めの標準となる「御経塚式土器」が設定されている。集落の真ん中には、お祭りや 集会を行ったと思われる広場があり、それを取り囲むようにして住居が建ち並び、その周りに墓がある。

現在は遺跡の一部が史跡公園 として隣接する収蔵庫・野々市ふるさと館とともに整備され、公園には竪穴住居や当時周辺にあったと思われるクリ・ドングリ・トチなどの樹木が復元されている。

2.2. 能登 真脇縄文遺跡 探訪

2004. 4.7. 石川県 能都町

午後 金沢から能登道路を 通って能登半島能都町にある真脇縄文遺跡に向う。金沢までくれば、能登はすぐと思っていたが、以外や以外能登半島は大きい。雨も降り出し真脇遺跡のある能都町に 3 時前やつと入り、海岸沿いにさらに走ると真脇の集落。

真脇遺跡公園の標識に従って、海岸から山に回り込み、上の方から海に面した高台で三方が山で囲まれた丘に降りてゆく。縄文の時代にはこの丘の直ぐ傍まで海だったと思われるが、今は海を見下ろす丘の上。この海岸段丘が真脇遺跡でその端に立派な真脇縄文館が建っている。あいにくの雨でこの縄文館に駆け込む。



真脇縄文館



海岸側正面能登鉄道 縄文真脇駅とこの海岸段丘の上に広がる真脇遺跡

真脇縄文遺跡概要 インターネット・第 8 次真脇遺跡調査 H15.11.1.現地説明会資料等より

真脇遺跡は、能都町の東端に 位置し、標高 4~9mの沖積低地にあります。

遺跡は真脇の入り江の奥にあたり、三方が山で囲まれ、6000 年前の縄文前期初頭から 2300 年前の晩期末まで 4000 年の長期途絶えることなく続いた縄文集落です。

縄文前期末~中期初頭の地層からは、大量のイルカの骨が出土。また、同じ場所からトーテムポール状の彫刻柱が出土。大規模なイルカ漁を集団でやっていた集落とみられている。



また、平成 10 年からの調査で 巨縄文晩期中葉(3000 年前~2500 年前)に作られたとされる直径 6~7mの巨大環状木柱列が 4 基重なり合って出土。

柱の数としては環状木柱列に使われた栗の巨木で断面



が半月形の円柱が計 80本、方形の木柱列(建物)に使われた円形の木柱計 19本が出土。

環状木柱列の周囲では、日常使われたかめなどは出土せず、飾りのある土器の出る頻度が高く、祭りなどをする空間であった可能性が高いとみられている。

金沢チカモリ遺跡と共に環状木柱列を持つ集落であり、また、それ以前の時代から、イルカ漁を集団で行い、イルカの墓場とも見られる良く整理された大量の骨と一緒に彫刻柱が出土しているなど北陸の縄文「木の文化」を考える重要な遺跡である。



環状巨大も木柱列 発掘調査 現地説明資料より

真脇遺跡から大量のイルカの骨がそれも整然と出土した事から大規模なイルカ漁そしてその加工処理が行われていたと見られ、また、この真脇では近世までイルカ漁が行われていた記録があり、またイルカも食べていたという。こんなことから、真脇は日本における漁業発祥の地ではないかと地元では考えている。

この真脇縄文遺跡に隣接して立派な縄文館が建てられている。イルカをはじめとする骨類、縄文前期～中期中葉の土器、木柱痕・木製品、石器・石製品、彫刻柱、装身具など主にイルカ層出土品を中心に真脇遺跡の出土品を展示して真脇縄文を展覧している。

個々の出土品がそれぞれ並べられているが、個々の説明でこの真脇遺跡縄文の4000年にわたる長期の流れや出土の状況 発掘マップもなく、遺跡全体は非常に捉えにくい。

真脇遺跡が一番北陸のウッドサークル環状木柱列の検討が進んでいると聞いていたのですが、環状木柱列はじめ、各出土品が出た遺跡位置もわからず、環状木柱列など館の床にモデル的にも柱根の跡がマンガ的に記されているのみ。

展示も説明も「イルカ漁」に偏っていて、時代の流れや縄文遺跡としての全体像を示す図説もなく、遺跡そのものの勉強にはガッカリである。

もっとも最新の真脇環状も木柱列発掘調査の現地説明会の資料は入手できましたが・・・

また、館内すべて 写真撮影禁止 説明員は声高に写真撮影禁止を何度も叫んでいましたが・・・エチケットは別にして パネル主体の展示でなぜ・・・。

真脇縄文遺跡 巨大木柱列 縄文のウッドサークル

環状巨大木柱列 発掘調査 現地説明資料より

巨縄文晩期中葉(3000年前～2500年前)に作られたとされる直径6～7mの巨大環状木柱列が4基重なり合って出土。柱の数としては環状木柱列に使われた栗の巨木で断面が半月形の円柱が計80本、方形の木柱列(建物)に使われた円形の木柱計19本が出土。

チカモリ遺跡と同様に半割の平面を外側に対角線上に10～8本の栗の柱で6～7メートルの環が重なり合って出土。柱の規模から90・50・30cm前後の3グループ4つの巨大木柱列に分類。

また出入り口と見られる2枚の凹型木柱がいずれも南東向いて建っている。

いずれも、金沢チカモリ遺跡と同じ構造。

環状木柱列の周囲では、日常使われた甕などは出土せず、飾りのある土器の出る頻度が高く、祭りなどをする空間であった可能性が高いとみられている。この東南の方向は真脇遺跡では海の入江の方向であり、また 太陽・月との関係も考えられるが、定かでない。



真脇縄文遺跡のウッドサークル 縄文晩期中葉

4000年の長きにわたって能登半島で 海を見下ろす縄文の丘で続いた縄文集落
集落の人たちを結び付ける 共有のシンボル 環状木柱列 ウッドサークル



図1 検出した環状木柱列の平面プラン(第2、8次調査合成図)
直径約6～7mの円形プラン上に8～10本の半割柱をほぼ等間隔に配置されています。柱の規模から90cm前後、50cm前後、30cm前後の3グループに分けることができます。柱根は近接していることから、同じ場所に数回の建て替えを行っていることが判りました。
門扉状遺構が出入口と考えられており、やや東向きに配置されています。



2.3. 小矢部 桜町縄文遺跡探訪 2004.4.8. 富山県小矢部市



昨日の雨が嘘のような晴天。宿泊した輪島荘から見下ろす日本海が満開の桜に映えて美しい。輪島の朝市を見学した後、能登半島を後にして、富山県小矢部市の桜町遺跡に向う。

ぼくの知っている小矢部市は金沢から、能登半島から南に伸びる倶利伽羅峠の山地を越えて、砺波平野へ入った所にある町で、学校などの公共施設にヨーロッパの建物をミニチュアで模して建てたおとぎの街。

そこに忽然と現れた縄文のおびただしい数の縄文の加工された建築用材。それらは丸柱ではなく 貫通穴など高度な加工が施された建築用材。縄文時代に既に素晴らしい建築加工技術があったことを示す

発見。そして鬼の顔と見間違われた彫刻柱も。同時に規模は他の遺跡よりも小さいが木柱列もまた漆のかけられた土も・・・桜町遺跡は縄文草創期の12000年前から晩期2300年前まで縄文時代全期間に渡って維持された縄文集落。素晴らしい木の文化が開花している。

僕にとっては、巨大建造物の組立・接合技術は金属では奈良の大仏 木組みでは法隆寺とっていたのが、この遺跡で出土した加工建築用材や建築仕口の発見によって縄文まで遡れるという。見るのが楽しみ。

そんなイメージを確かめている間に能登半島を走りぬけ、富山県小矢部へ。

今日は桜町遺跡ばかりでなく、直接小矢部市埋蔵文化センターで出土した建築用材や鬼顔で話題となった彫刻柱も間近に見せてもらえるかも知れないという。



金沢東ICから北陸道にはいってすぐ石川県と富山県をへだて能登半島の背骨に続く山々を越え、約30分ほどで砺波平野に入ると小矢部IC。

小矢部から高岡へ向う能越自動車道路小矢部東ICで降りる。倶利伽羅峠の小高い山々の方向に田園と街並が交差する中を進み、山並みが近づいたところで信号に桜町の標識。



そして すぐ正面に広い国道にぶつかり、この信号の脇にバスが止まる。



西側には能登半島から南北に続く倶利伽羅峠の山地が続き、東には広い砺波平野がひろがり、下に小矢部川がみえる。遠く南には白山の峰々が白銀を戴いている。

その山裾で東西に高岡と金沢を結ぶ国道8号線バイパスがここから右手の山間へと金沢への道がぬけてゆく。小さな枝谷をまっすぐ山へ国道が登ってゆく。この道路の下が桜町遺跡だという。前にも滋賀県国道1号線のバイパス道路の下に眠る野路小野山製鉄遺跡を見ているので驚かないが、遺跡の上を道路が

貫き、自動車がビュンビュン走る。

国道に沿って今も発掘が進行 中で国道に平行して発掘現地在り囲われている。



桜町縄文遺跡周辺

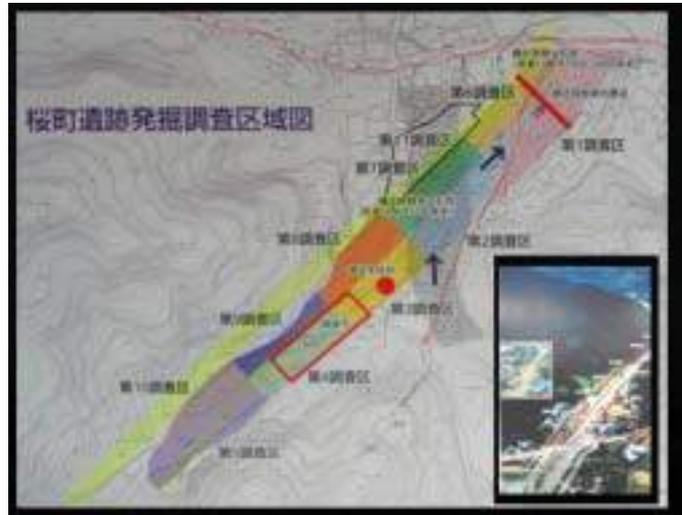


桜町西交差点から東へ広がる桜町遺跡

昔、この谷には中央を小さな川がながれ その両岸に縄文草創期から延々縄文晩期まで続く大きな集落があった。その小川跡から多くの道具や動植物の遺体と共に予想もされなかった縄文中期末約 4000 年前の栗の木に高度な加工が施された大量の建築用材が見つかったという。

小川跡の北側の丘からは縄文晩期中葉約 3000 年前の巨大木を加工して作った環状木柱列が見つかった。また、この遺跡のある桜町西十字路から道に沿って直ぐ南 200 メートルのところこの桜町遺跡の出土品展示室があり、桜町遺跡の概要がパネル展示され、外には出土した環状木柱列が復元展示されている。

小矢部市 桜町縄文遺跡 概要



桜町遺跡は砺波平野の西の端がちょうど能登半島から伸びてきた山地が接するところにあり、西から東側へ開く小さな谷の中にあり、今はそこを国道8号線のバイパスが金沢から高岡へ下ってくる。

この山のすぐ北には小矢部川に注ぐ子撫川が流れ、ちょうど子撫川が山を下り小矢部川に流れ込み扇状地を形成する。

縄文時代にはもっとこの周辺近くまで海岸が入り組んでおり、この桜町遺跡のあたりでは白山から流れる大河小矢部川に子撫川が流れ込む扇状地で集落の下には低地が形成されていたと考えられ、長期定住が出来る環境にあったと考える。

古代小矢部市周辺は小矢部川河口の伏木（高岡市）に「越中の国府」があり、京都から越中国府への道は加賀から北陸道を通して倶利伽羅峠を超えて越中に入り、石動小矢部市の小矢部川を下って国府に着くという道筋。

古代越中から都への古い街道筋。おそらく縄文人の道筋でもあったろう。



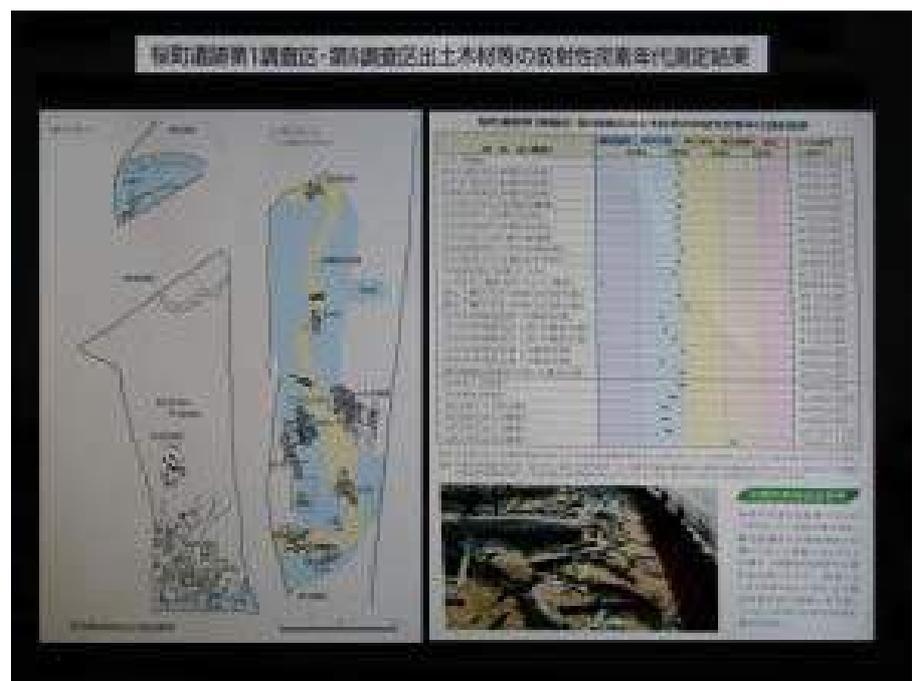
桜町遺跡は1986年（昭和61年）に行った試掘調査により、今から約12,000年前の縄文時代草創期から約2,300年前の縄文時代晩期まで、縄文時代全期間にわたる遺跡であることがわかった。

そして、1988年（昭和63年）の国道工事に伴う事前発掘調査で、谷の中を流れる小さな川跡がみつき、そこより、多くの木の道具や動物や植物の遺体と共に高床式建物の

柱材と考えられる貫穴（ヌキアナや椀穴（エツリアナ）と呼ばれる加工をした木柱の発見された。

それまで米作りの技術とともに弥生時代に日本へ伝えられたと考えられていた高床式建物が定説より2,000年も古い縄文時代にすでにあったことを証明した。

発掘当時、建築用材に「渡りあご」など法隆寺などの建築に始まるとされる高度な用材加工が施されていると大騒ぎになりましたが、詳細調査で貫穴であることなどがわかり訂正された。





桜町遺跡
出土品展示室で

2004.4.8.



仕口加工された高床式建築の為の建築用材

出土した巨大木柱根



木組された貯蔵穴

ザル

カゴ

塗り口鉢

塗り椀

第1・第6調査区の小川跡周辺より見つかった出土品

またこの小川跡は集落内で大きくゆがめて水場が作られている。縄文中期末約4000年前この谷を見舞った土石流で、この水場の足場に転用された建築用材やその他の出土品は大量の水と一緒に堆積したため、腐食せず残ったと見られている。

これら出土品も土石流とともに大量に流され、堆積したものと考えられる。

出土した建築用材に混じって先端部に角を持つ鬼面ともとれる彫刻柱も出土し、縄文時代の精神文化を考える新たな手がかりと話題になった。

この彫刻柱は小矢部埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管されており、大量に保管・処理が進められている出土建築用材と共に学芸員の人から説明と共にじかに見せてもらった。

また、この桜町西の交差点近傍の第1・第6調査区よりも山の方へ登った丘第3調査区の平成12年の調査で縄文晩期中葉約3000年前の栗の巨木を半割りにして約10本建てならべた環状木柱列の柱根が発見され、それらをもとに出土品展示室横の広場に復元展示されている。



桜町遺跡 環状木柱列 出土穴

桜町縄文遺跡の環状木柱列



桜町縄文遺跡の木柱列は直径 60センチ前後の栗の半割柱が10本 6.4m径の環状に立っていたと考えられています。

うち2本は板状に加工され、真脇やチカモリ遺跡のように出入り口の柱と考えられます。

発掘時の写真から見ると数基の環状列柱が重なっているようですが、よくわからない。

また、この周辺から人骨片や縄文後期約 4000～3000年前の特徴を備えた人体文付き土器などが出土。環状木柱列の時期と少し異なる様相があり、それらとの関係

ははっきりしませんが、他の環状木柱列とは違って、ここで葬送儀礼が行われたとも考えられ、そうすると東北のストーンサークルに非常に近いものとも考えられる。

今後の発掘でどんな様相になるのか 非常に興味がわいてきます。

桜町遺跡は 縄文草創期から晩期までの重層遺跡で、しかも他にない新しい発見が続き、日本の「木の文化」を代表する遺跡で、他に例のない新しい発見であるだけに年代の確定や考え方考証に慎重であらねばならず、諸説でているようだ。

桜町遺跡では建築用材の加工柱が発見されたこともあり、この木柱列に加工が施されているが、実際のところは良く判らない。門柱はほかのチカモリ遺跡などと同じく、南東の方向を向いていたようですが、良くわからず。

この地は能登半島からの山地が延びるその山裾にあり、砺波平野が入り江状に奥深く要りこんでゆく入り口近傍の場所にあり、海や海岸も意外と近かったかも知れません。

このサークルが復元された地に立つとはるか南に白山の峰がそびえ、眼前には小矢部川が流れ、砺波平野が広がっている。なんとはなしに穏やかな割ったりとした気分が流れ、縄文人が長期にわたってこの地に住んだのが判るような気がする。



桜町遺跡木製品管理センタ



小矢部市の街の中に桜町遺跡から出土した木製品を収納防腐処理管理している桜町木製品管理センタを特別に見学させてもらい、学芸員の人から、直接出土品を見ながら説明を聞きました。

中にはいるとおびただしい数の木柱・建築用材が棚に整然と詰めて、保管されると共に広い床面一杯にならべられた槽の水の中にそれら出土品が入れられ、防腐保管されていた。

黄色い箱に出土品をいれ、積み上げているのは幾度も見ましたが、木製品の処理・保管管理の現場は初めて見せてもらいました。年代測定や防腐処理は奈良に送られ、専門的に処理されていると聞きました。



みんなの一番先の興味は建築用材「渡りあご」仕口の用材と彫刻柱。

当初、「渡りあご」仕口の用材は用材に泥がこびりついていて、実際は「貫通穴」であったことが、防腐処理の過程でわかり、相手の用材の仕口も当時の木の切倒し方を考えるとその切り倒し過程で切り口の端面に「ちょぼ」が残るので、これら木材の端面の「ちょぼ」が在っても明確な仕口といえない。



先端に ちょぼ のある用材

「法隆寺の用材に見られる「わたりあご」の技術が縄文時代にあった」と一時話題になった考えは訂正された。

現在に通ずる高度な「渡りあご」の組立技術 組立技術のルーツ出現と思いましたが、ちょっと違うようです。でも、既に縄文時代に現代の組立接合の加工技術の萌芽があり、それにより、縄文時代に既に高床式の建物があったこと縄文人の匠としての技・文化には驚きです。

また、鬼の彫刻柱も棚から取り出し、目の前に広げて見せていただいた。現物を見るとやっぱり鬼に見える。

日本で真脇遺跡ほか 1 例計 3 例のひとつ この鬼の顔に見える彫刻柱は この桜町遺跡のみで発見され、他にはない。

でも学芸員の人の話では、

『 左にもうひとつ角があると見られて「鬼」と騒がれたが、
どうもこのかけている部分は自然のままで角はなかった。
そうなると「鬼」と考えるか・・・・・・ 』

本当に難しいところである。



桜町遺跡 縄文中期中葉の彫刻柱

鬼といえば鬼。 でもこれは 立っていたのか横なのか？

上下逆ならば？ 単に建築材の必要から作られた彫刻柱なのか？ 意図的に何か祭礼の儀式・モニュメントとして作られたのか？等々

・・・今後の検討を待たねばならない。

日本に3例しかない貴重な縄文の彫刻柱 今後どんな展開になるのか 早く結論が見たい気もします。でも、意図的に「これこれだ」との決め付け・断定的ないきっちりとした視点の研究者の姿がすがすがしい。



防腐処理保管されている桜町遺跡出土の建築用材ほかの木製品

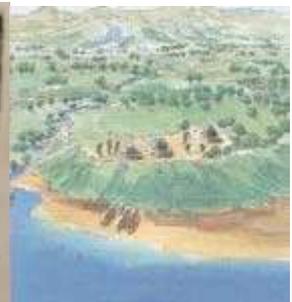
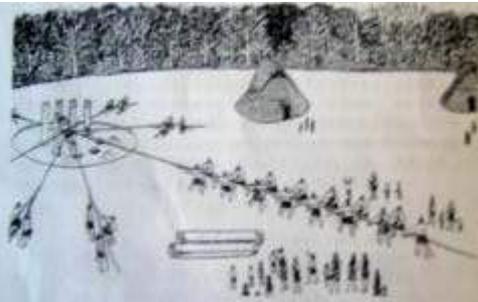
棚の中には防腐処理が終わった貫通穴のあいた用材ほか大量の出土柱が保管されている。

本当にその量の多さに驚かされると共に、鉄の道具のない縄文の時代の技術にいまさらながらビックリである。材料もさることながら 加工に使った道具 また匠の技をもった膨大な工人にまで夢が広がってゆく。もう みんなビックリであれこれ質問したり、用材に見とれたり。

1時間以上見学させてもらって、満足で引き上げました。

本当に貴重な体験。縄文柱の黒茶色の肌が本当に印象的 3000年の眠りからさめた輝きか・・・

3. 北陸 能登のウッドサークルは気候激変への集落の絆か・・・

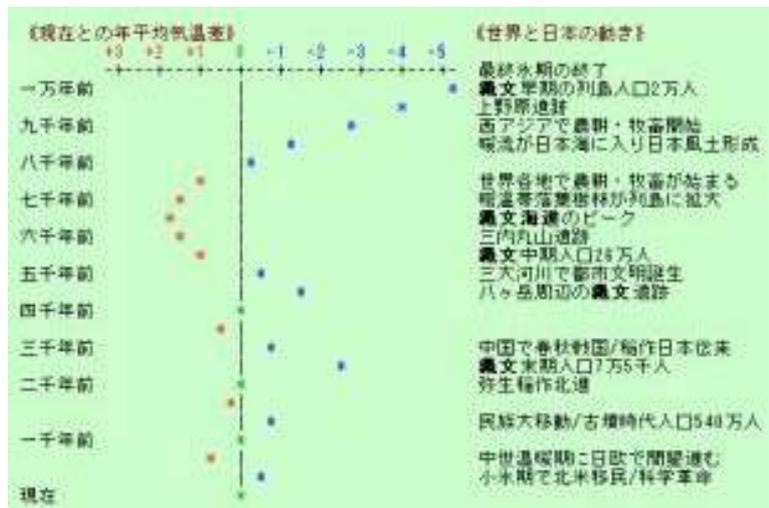


縄文時代東北にストーンサークルが出現したのと同じ頃、北陸・能登周辺に栗の巨木を使ったウッドサークルが出現すると聞き、縄文の会の北陸・能登のウッドサークルを訪ねるツアーに参加させてもらった。

縄文時代は「争い」や「穢れ」を知らぬ世界。海岸や川筋の丘の上の森に祖先を敬う墓を中心に「環」状に広がる集落をつくり、海と森の恵みを受け、相互に助け合う穏やかな生活と高度な「木の文化」「森の文化」を営んでいたという。そしてこの縄文人の「環・サークル」の精神は日本人の心「和」のルーツとして語られてきた。そんな縄文人の心を「ストーンサークルが映している」と云われてきたが、北陸・能登には「木のウッドサークル」があるという。私は全く知りませんでした。

このウッドサークルは何を意味するのだろうか 東北のストーンサークルと何らかの交流があったのか この縄文のウッドサークルで東北のストーンサークルの謎が解けるかも知れぬと興味深深でした。

今から約 1 万年前地球は長い氷河期が終わり、間氷河期に入った。日本ではこの氷河期にもヨーロッパのような大氷河が広がらず、多くの生物が生き延び、気候の温暖化と共に活発な活動を開始した。日本へやってきた縄文人も同じである。7～6000 年前縄文前期の頃には温暖化のピークを迎え、氷河の氷解により、海面は大きく上昇する。(縄文の海進)そしてその後 温暖な気候と共に、深



く入りこんだ海岸線には、降雨で流れ込んだ土によって、入り江と共に砂州や河口湖が形成され恵みの豊富な海が形成された。

また、森は針葉樹に代り、栗やブナなど木の実を豊富に実らす落葉広葉樹が進出し、豊かな森が出現した。

森の恵み・海の幸を生活の糧とした「森の文化」「木の文化」を育んだ日本列島誕生である。

東北には巨大な6本柱・大型住居を持ち、華やかな土器・土偶そして蔓・枝を編んだかご類と漆など素晴らしい縄文文化を花開かせた大集落三内丸山遺跡が出現する。

森の国 越・能登の国で育まれた巨大柱列 縄文のウッド サークル



金沢 チカモリ遺跡



小矢部 桜町遺跡

縄文の集落で 幾度も建て替えられ、東南の方向を向いて 集落を見守る
巨大な栗の木を半割りにした10本の柱が環状に立ち、
その中では、祭りが行われたか・・・
諏訪御柱の奇祭や神社の鳥居のルーツかも・・・

一方 北陸では 高度な建築技術でもって大型の高床式建物を建て、漆で彩色された椀や土器などと共に大量の加工建築用材が出土した小矢部桜町遺跡がある。

また、集団でイルカ漁をやっていた真脇遺跡など高度な技術を持った縄文文化が花開き、人口の増加をもたらした。

北海道 信州・諏訪 三陸海岸 岩手の森などの各地にもこんな光景が起こっていったと考えられる。そして、これらの村々の直接的な交流は不明であるが、日本海沿岸

では「ヒスイ」「黒曜石」などにみられる活発な交流もあった。

「ストーンサークル」「ウッドサークル」の出現前夜に 森の恵み・海の幸を生活の糧とした「森の文化」「木の文化」育んだ日本列島誕生である。

その後、縄文晩期 3000 年頃になると日本海沿岸・北日本を中心に一転して一時期急激な冷涼化があり、海や森の恵みが著しく変化して、大きな集落はその維持が困難となり忽然と消えてゆく。

寒冷化の中で小さな村が分散する時代となる。

この時を同じくして

東北には「ストーン サークル」

北陸には「ウッド サークル」

が現れる。

気候の変化がもたらした集団の分散化が
共通の意識基盤を求めて共通・共同の祭りの場として
作ったのが「ストーンサークル」「ウッドサークル」でなかったか
そして 特に森の恵みを与えてくれた栗の巨木に
特別の思いがあったかも知れない

北陸・能登の海岸近くの丘に点在する「ウッドサークル」
そんな気がしています。

縄文の豊かな文化を支えた「栗の巨樹の森」。

現代の我々には想像もつきませんが、インターネットを探している北海道 駒ヶ岳の麓 森町の海岸段丘の上に今も栗の巨樹の森が残っているのを知りました。



噴火湾に面した森町の海岸に沿った丘陵地に太古の昔から延長20kmの栗の密林
今も幹周 最大480cm 300cmを超える栗の巨木が現在も147本も残っている
また、この丘陵地には多くの縄文人の足跡が道跡として残っている

栗の巨樹が147本も森町の街中の丘に残っているそうです。道南のこの噴火湾沿いの海岸段丘は点々と続く縄文の丘 今も新しい発見次々と続いている場所。

我々にとっては栗のみをとる果樹。郷に近い二次林でしかみられなくなった栗の木ですが、信じられなかった巨樹の林が縄文時代の各地に存在し、集落を支えた事納得です。

また、縄文のサークルについて、太陽や月の運行の関係や海・山と関連付けることも検討されていますが、現状良く判っていません。

私などは諏訪の御柱や三輪山の礼拝場入り口・鳥居のイメージからシンプルに木柱が垂直に立っているイメージで考えますが、解説していただいた学芸員の人たちや現地北陸では「この雪深い土地で大型の建物に人が集まってくる。・・・そんなイメージをしています」と。。。。

雪を想像するとそうかも知れません。



この縄文のウッドサークルを訪ねるツアーで遺跡の説明をしてもらった幾人かの学芸員の研究者に出会いましたが、「云ったものが勝ち」のこの時代 これだけビックな新しい発見にみんな誠実に実証に基づく真摯な態度で出土品の考を淡々と進められているのにビックリ。

旧石器の捏造事件が若手の真摯な研究者を育てつつあるのか。。。。



また、絶対年代測定に威力を 発揮する加速器 C14 年代測定法が威力を發揮。
特に長期にわたる重層構造の遺跡発掘の検討で冷静な目として役割を果たしていること強く感じました。
桜町遺跡木製展示室を見せていただいていたお一層「遺跡発掘・考古学も新しい時代にはいった」と実感
させてもらいました。

縄文の時代に起こった厳しい 気候変化に耐え抜いてゆく知恵
それがストーンサークルやウッドサークルとなって結実したのではないか……………
厳しい時を耐え抜き 新しい渡来の民も入って 稲作・鉄の時代へと繋がっていったのか……
この流れが、今も日本の「木 の文化」「森の文化」の伝統をつくり、
また日本人の心にある「和」「サークル」への思いを形づくっていったのか……

今 地球環境が大きく変化し、地球温暖化が益々進み、その対処が恐怖を持って語られている。
既に縄文人たちはその温暖化と寒冷化の時代を知恵と文化で乗り切った。
それが今後の未来に大きな ヒントを与えるかもしれない。
素人がロマンを求めて 勝手な想像を大胆に描いているのかもしれないが……………
今また越える若狭と越の国境 「カエル(鹿蒜)」の郷をそんなことを考えながら帰路につきました。

2004. 4. 8. by Mutsu Nakanishi

1. 「木の文化」をもたらした縄文の森の誕生と縄文時代の気候

縄文の海進が日本列島の骨格 豊かな縄文の森を作った

2. 北陸に点在する縄文のウッドサークル 探訪

金沢チカモリ遺跡・能登真脇遺跡・富山県桜町遺跡

- | | | | |
|------|-----|------------|---------|
| 2.1. | 金沢 | チカモリ縄文遺跡探訪 | 金沢市 |
| 2.2. | 能登 | 真脇縄文遺跡探訪 | 石川県能都町 |
| 2.3. | 小矢部 | 桜町縄文遺跡探訪 | 富山県小矢部市 |

3. 北陸 能登のウッドサークルは気候激変への集落の絆か……………

【完】



そして更なる気候の温暖化は、近畿地方以西の植生をやがて常緑照葉樹林に置き換えるが、その食料供給力は落葉広葉樹林に対して著しく低かった。

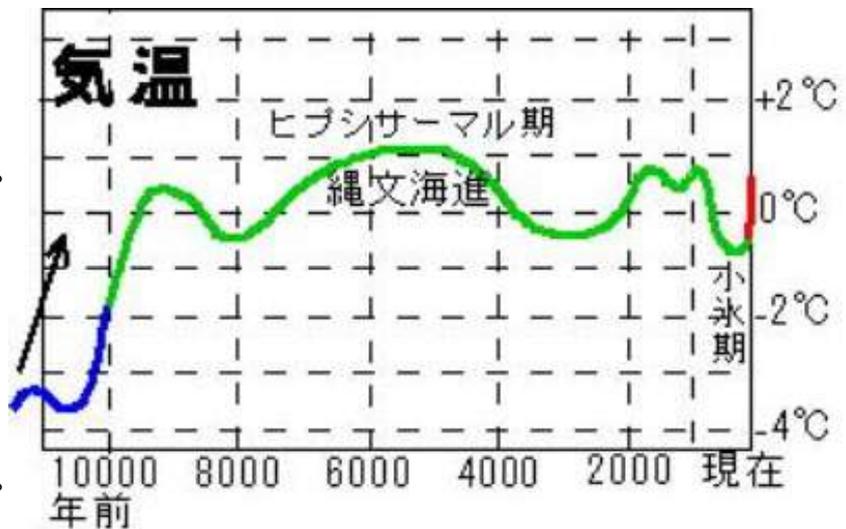
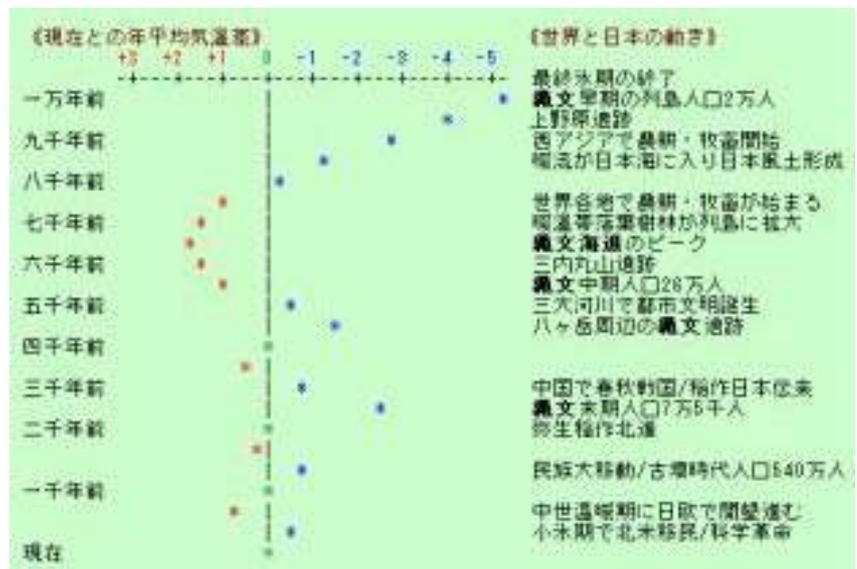
その結果、縄文時代全時期を通じて西日本の人口は伸び悩み、縄文時代を通して東日本よりも稀薄になったこれに加えて、九州南部地方の激しい火山活動は、九州から本州の大半を被うアカホヤ火山灰の存在にも示されるように、縄文時代前期初頭の段階で確立した南九州の縄文文化に壊滅的な打撃を与えた。

“東高西低”と言われる縄文遺跡分布の片寄りには、実はこのような過程で生み出されて行ったらしい。

約一万二〇〇〇年前の福井県は、今より冷涼で、現在の青森県ぐらいの気温といわれる。平野部でもブナの木が繁茂していたようで、鳥浜貝塚では草創期の層から、膨大な量のブナの実が出土している。ブナ・ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林が拡大していたのである。

ところが、今から約一万年前になると、温暖化が進みナラ・クリなどを中心とした暖温帯落葉広葉樹が拡大するようになる。

木の実を豊富にもたらす森の誕生でもある。



参考 3.

日本列島 気候激変が繰り広げたドラマ 太平洋側の里山傾斜地に咲くカタクリの花

「氷河期の生き残り」って知ってますか???

今 地球の温暖化が恐怖をもって話されていますが、今から約 6000 年前 「縄文の海進」と呼ばれる今より数度温度の高い時代があり、海面が今より数メートル高かったと云われています。
この「縄文の海進」以外にも日本列島は気象変化の激しい所。四季が形成されたばかりでなく、今までよりさらに温暖だった時代や逆に寒かった時代があり、この気候変化によってさまざまな日本の営みがあった事を「縄文の海進」を調べていて知りました。
知らなかった事いろいろ知りましたのでちょっと・・・・・・・・

太平洋側の里山傾斜地に咲くカタクリの花 「氷河期の生き残り」って 知っていますか????
関東平野も大阪平野も 6000 年前は海や低湿地 そんな昔の海岸線知ってますか・・・・・・・・
平安時代の貴族の家 あんなスケスケでも暖かかった
でも 疫病が流行して遷都 これが京都の始まり 逆に江戸時代は寒くて天明の飢饉などが起こりました

地球温暖化の未来シュミレーションまた今後の対応のヒントになるかも・・・・・・・・
日本沈没がささやかれています、どうなることやら・・・・・・・・

1. 太平洋側 里山の北傾斜地に咲く「カタクリの花」 これは氷河期の生き残り????

「カタクリ」は元来 日本海側多雪地域の里山で雪解けを待ちかねて美しい花をつける。
この雪国の植物が温暖な地域でも見かけるようになったのにはわけがある。
寒冷化した氷河期に寒さを避けて雪国から関東以西の太平洋側低地にまで南下。
それが氷河期が終わって温暖化するとカタクリにとっては暑すぎ、一部は北国に帰り、一部は涼しい山地へ。また、低地に残ったものは北向きの斜面で涼しく地下水がじわじわしみだす夏涼しいところ丘陵地の崖下などでひっそり生きている。
氷河期の生きた化石 カタクリが涼しい丘陵地の北斜面で場所でひっそり風に身を揺らしている姿はたまらない魅力なのですが、こんな生活の知恵によるとつゆしらず・・・・・・・・
近頃 群生地がどんどんへっているのも これまた新しい環境の変化か・・・・・・・・



2. 縄文の海進 関東平野も大阪平野も 6000 年前は海や低湿地 そんな昔の海岸線知ってますか・・・

地球はかつて何度となく寒冷化と温暖化を繰り返して、日本アルプスにカールとして氷河の跡が残されています。

でも、ヨーロッパのように日本列島全体が氷河に覆われ、すべての生物が絶滅すると言ったような事はなく、寒冷の時代でも夏には緑があふれ、花が咲き、多くの生物が日本列島にやってきたといわれています。

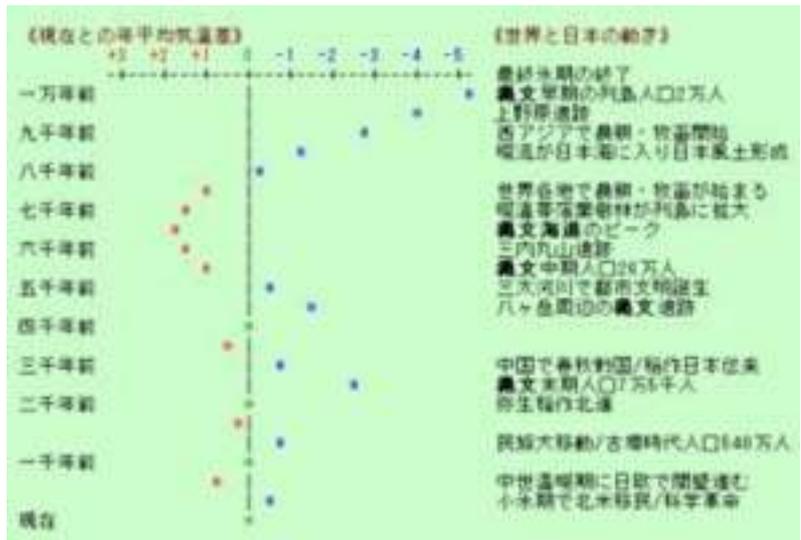
寒い寒冷の時代(最終氷河期)が約1.4万年前に終り、今は間氷河期にあります。

そして この間にも何度となく温暖・寒冷を繰り返し、多くの生物・人の営みも激変しています。現在の日本の源流といわれているのが、この「縄文の海進」。

約6千年前の縄文前・中期の時代 日本列島では温暖化はピークとなり、氷河が溶ける事による海面の上昇はピークとなり、海岸沿いには深い入り江が形成され、そこへ激しい降雨によって陸から大量の砂が運ばれ平野・砂州・河口湖が形成され、現在の日本列島がほぼ形成された。

同時に 陸にはドングリなど豊かな木の実を生み出す落葉広葉樹(ブナ・栗など)の森が形成され、豊かな縄文の文化が開きました。

広大な関東平野も・大阪平野もまだ、海の中ですが、日本列島の骨格ができ、そして、関東平野も大阪平野も形成されてゆきました。



4000 年前

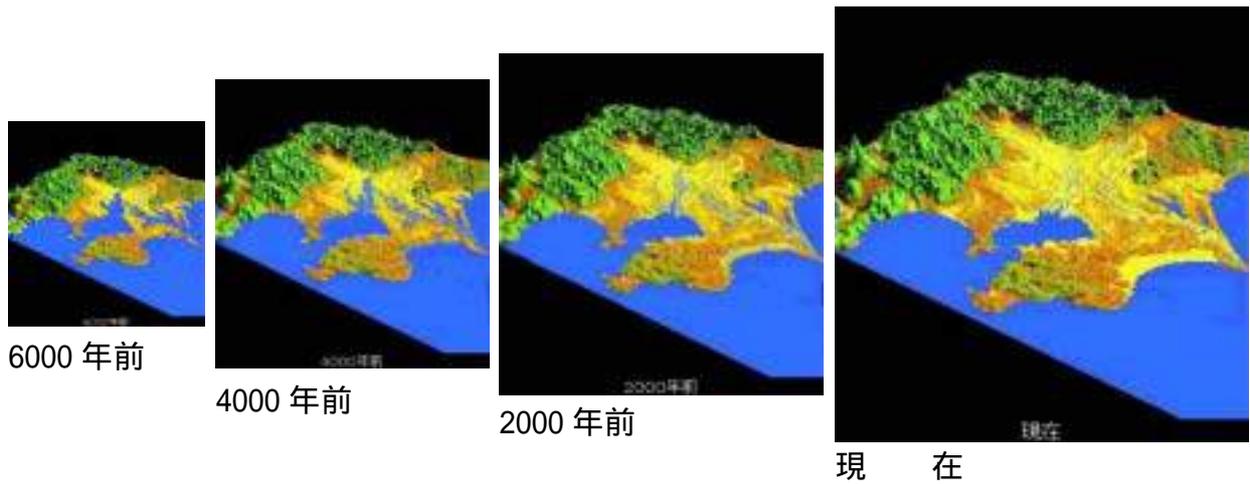
現在



大阪・河内平野 近つ飛鳥葉室古墳群丘陵より
大阪・河内 縄文改進と沖積平野形成

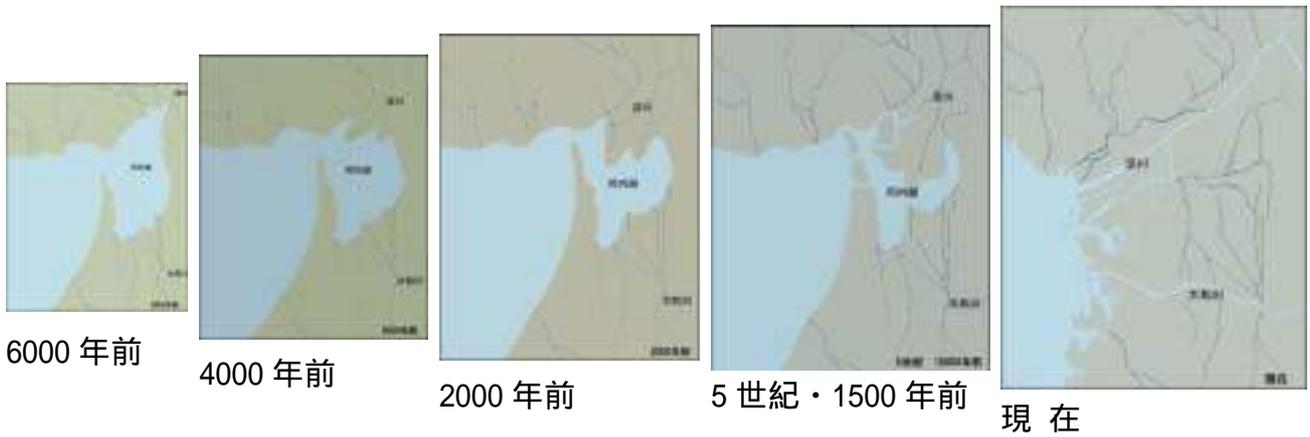


関東地方 縄文海進と沖積平野形成



縄文の海進とその後の冷涼化・沖積平野の形成による日本列島の形成【1】

国土地理院シュミレーションデータアレンジ インターネットより



縄文の海進とその後の冷涼化・沖積平野の形成による日本列島の形成【2】

<http://www80.sakura.ne.jp/~agua/index.html> より

3. 平安時代 貴族はあんなスケスケの家でも暖かかった!!!
でも 疫病が流行して遷都 これが京都の始まり



時代劇で見る江戸の町には雪が似合う でも寒くて 天保の大飢饉が起こった

平安時代 あの貴族の邸宅は なぜあんなにスケスケなのか? 寒くはなかったのか?????

8 - 1 3世紀は中世温暖期と呼ばれる温暖な時期。平安時代の花見の時期も1週間ほど室町時代より早かったという。

この温暖化は大洪水・疫病の流行を招き、平安時代は「怨霊」の時代といわれるが、その原因もこの温暖化が原因という。桓武天皇の平安遷都も「怨霊」をおそれたためといわれる。

一方 室町・江戸時代になると冷涼化が進む。時代劇といえば、コガラシ吹いて 雪の景色のイメージが似合います。

でも江戸時代には寒冷・大洪水の連続 宝暦・天明・天保の大飢饉が起こって……

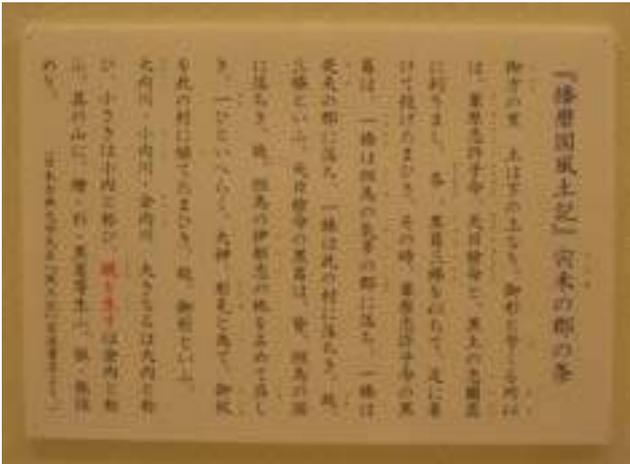
これも 間氷河期の中の現象

今は温暖化が進んでいますが、自然現象に環境破壊が加わって……。一体どうなるのか……



10. 播磨風土記にある鉄の里「御方里」一宮町「三方」を訪ねて

hrmka.htm by M. Nakanishi 2004.6.3.



播磨風土記に産鉄の記載がある御方里
2004.6.3.

4月に平安末期の製鉄遺跡「安積山製鉄遺跡」を「播磨風土記に記載のある産鉄地」揖保川流域の「御方里」周辺・一宮町として紹介しました。

その安積山製鉄遺跡のところ揖保川が左右の引原川と三方川にわかれ、その右側上流にあたる三方・公文川流域一宮町「三方」が播磨風土記記載の「御形」現在の「御方里」の中心地。

そこには、揖保川の上流三方川山にさえぎられ、三つの谷からの流れに分流する公文川が流れている。

播磨風土記にある大内・小内・金内川と考えられてきた。

そして、これら公文川流域にも古くからのたたら製鉄の痕跡が残っている。

山深い里でありながら、三方の扇状地の中央の丘には家屋遺跡があり、縄文・弥生時代から古墳時代へとずっと引き続いて集落があり、古代から中世には寝殿造りの立派な屋敷があり、この地がこの地方の中心地的存在であったと考えられる。

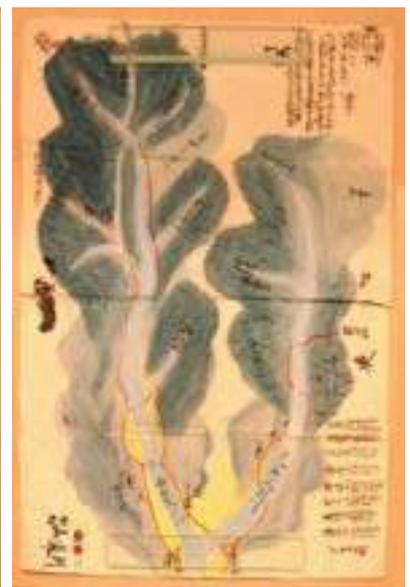
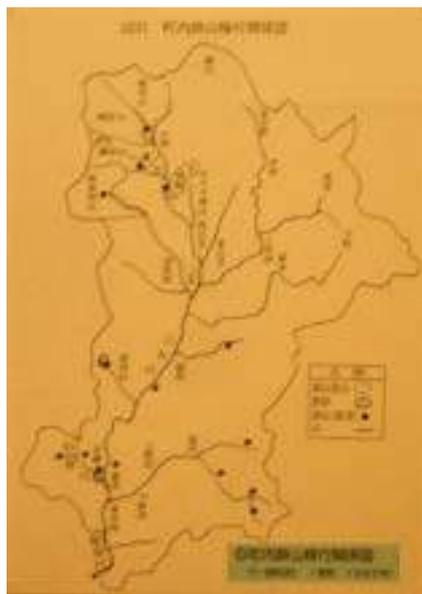
北の山間を縫って流れてきた左 引原川 右 三方川が安積山製鉄遺跡のところ合流した揖保川が山間を南に流れ下る。引原川の奥も三方川の奥もそれぞれ、古い製鉄地帯。

またこの引原川流域から山一つ隔てた西が千種川流域の製鉄地帯である。

安積山製鉄遺跡のところから、狭い谷を三方川に沿って北へあがると以外にも奥深い谷筋に沿って広い平野部広がり、その奥は北の山々が壁になっている。この山の幾筋かの谷筋から、川がこの扇状地にながれこむ。ここが三方で、谷は南にのみ開いている。この谷筋が古くは播磨風土記に記載がある産鉄地。また、この谷筋の製鉄地帯は江戸文化元年公文村山絵図として記録が残されている。

この「三方」の地からはいずれも山越えになるが、西には生野から但馬・丹後へ 北には但馬・伯耆そして、出雲へ 西には千種・美作 そして南には揖保川沿いに播磨へとつながる交通の要衝。

播磨・吉備・美作・伯耆・但馬・丹後と古代日本黎明の時代の中国山地に広がる大製鉄地を繋いでいる場所と見ることも出来る。

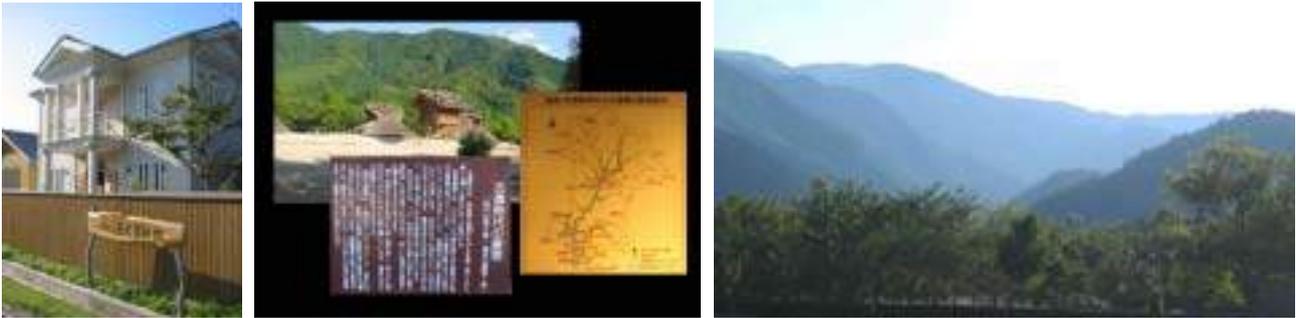


古代の和鉄の道の十字路にこの御方里が在ったのではないか・・・

交通の便悪く中々いけませんでしたが、6月6日の午後やっと行ってきました。

私達が実際に出かけたのは 山崎からまっすぐ揖保川沿いに一宮町を通って鳥取へ続く幹線国道ではなく、もう一つ西へ山並みを越えて、千種から、古代製鉄発祥伝説の地 岩野辺から山を越えて引原川の流域からまた、直接山を越えて三方に入った。

山から山へ谷をトラバースする道 おそらく古代の和鉄の道 周辺の山々には点々と産鉄の地の痕跡があるという山越えの道。今は車1台がやっとの山越えで谷筋から谷筋へ渡る道。古代和鉄のイメージが膨らむ山道だった。



一宮町立歴史資料館と家屋遺跡群のある史跡公園 2004.6.3.

三方の中心の丘には家屋古墳群がひろがっており、周囲の山々が見渡せる。

今ここには一宮町歴史資料館が建ち、縄文・弥生から古墳・古代・中世の住居群が復元され良く整備された史跡公園となっている。歴史資料館にはこの一宮町の古代からの歴史並びに播磨風土記に記された古代から近年にいたる揖保川流域の製鉄について、安積山製鉄遺跡を中心に企画展示されていた。

このあたりの古代製鉄については、播磨風土記など伝承はあるもののきっちり製鉄遺跡として発掘調査整理されているのは安積山製鉄遺跡のみであり、その調査結果が展示されていた。

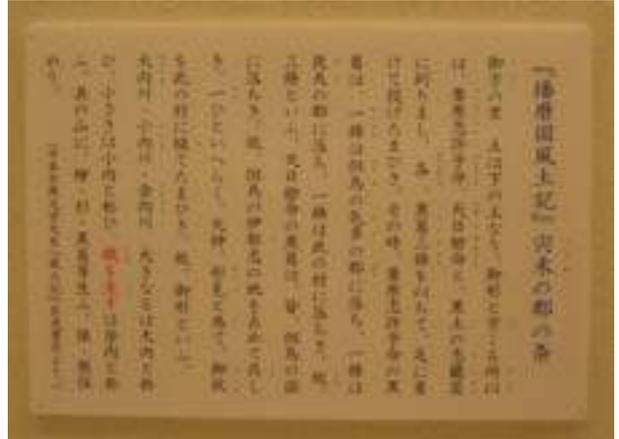
一番知りたかった古代製鉄の三方での痕跡については学芸員の方にも聞きましたが、安積山製鉄遺跡以前の遺跡は今もまだ見つかっていないとの事でした。



平安時代末期の製鉄遺跡 安積山製鉄遺跡展示 町立歴史資料館 播磨の鉄 企画展示より

歴史資料館の少し北に行った山裾に播磨風土記に製鉄記事と共に記載があり、製鉄と関係深い大国主命を祭る御形神社がある。

「御形」「三方(三條)」の地名の起こりである。



大国主命を祭る御形神社 2004.6.3.

千種から古代産鉄の地をたどる形で山越えの道をとって播磨風土記の「御方の里」へ入ったこともあり、本当に山また山の山奥にぱっと開けた地に出る。

古代においては表街道だったろう日本海側からくると本当にそんな気持ちになったろう。

そんな明るい地 古代和鉄の街道の十字路でなかったか・・・

後背の山々を眺めながらそんなことを頭に浮かべていました。

帰りは南へ三方川沿いに「御方の里」の中を下って行く。

安積山製鉄遺跡の横へ出て、播磨一宮 伊和神社の森の横をそのまま一宮の町を山崎へ。 気持ちの良い一日だった。

これで 随分長く引っかかっていた播磨風土記の鉄 千種岩野辺・敷草村 佐用・讃容 鹿庭山 一宮・穴栗 御方里 がやっとひとつにつながった。

いずれも 出雲・大国主命の足跡と関係した古代の先進製鉄群。

それらが盛衰を繰り返しながらも 大陸・朝鮮半島の技術を取り入れながらも大製鉄地へと発展してゆく。このドラマがどんなだったのか・・・

今はまだわからないが、千草鉄として日本の刀を支えた播磨の鉄黎明の歴史である。

2004.6.3.

夕日を横目に 揖保川沿いを姫路へ

Mutsu Nakanishi

11. 中国山地の砂鉄ペルト西端 山口県北東部の和鉄地帯を訪ねて

「須佐 高山の磁石石」& 白須鉄山遺跡を訪ねて 山口県須佐町 2004.7.2.



山口県須佐町 磁石石のある「須佐 高山」と高山から須佐湾を望む 2004.7.2.

「磁石石」って知っていますか。。。。

山口県の最北東部 中国山地が日本海に崩れ落ちる西の端

入り組んだ須佐湾の入口に有名なホルンフェルス断層の断崖が続く。

山裾がそのままこのホルンフェルス断層となって日本海に落ち込む小高い山「須佐 高山」

そこには 磁石石があつて昔から「この沖を通ると磁石が狂う」と言われているという。

また、須佐の港へ入るヨットマンも同じ経験があると。。。。。

今年の1月 播磨・中国山地の砂鉄・たたら製鉄地帯を調べている中でそんな話を聞きました。

「ほんなかいな。。。。」と半信半疑ながら色々断片的な話を集めて調べると実に面白い「和鉄の道・Iron Road」が浮かび上がってきました。これは 信憑性あり。。。。と。

「山口県 須佐町」はホルンフェルス断層の断崖を中心とした海岸線が美しく、町名の由来となった「スサノオ」伝説の残る町。



天然記念物 ホルンフェルス

ヤマタノオロチを退治した神話で知られる須佐之男命が、出雲の国から朝鮮半島に往き来したとき、須佐の地にとどまり、海路を望んだことから神山(こうやま)と命名されたという伝説が残っている。

この神山が現在の標高 532.8mの高山で山頂からは、美しい海食崖が数多く見られる須佐湾を一望。

また、頂上には強い磁力を帯びた岩が点在し、高山沖を通る船舶の羅針盤を狂わすと。。。。。

この高山磁石石は国の天然記念物に指定されていることも知りました。

出雲・須佐之男命や大国主命は「製鉄」技術伝来と深い関連をもつ神で、その行く所・伝承地は日本黎明期の製鉄関連地と関係していることが多い。その伝承地 須佐町に磁石を帯びた鉄の山。

そして 今も高山頂上部では磁化した石「磁石石」がごろごろしているという。

何度となく この周辺の山中や海岸沿いを walk しましたが、「高山 磁石石」については話を聞いて調べるまで知りませんでした。

地図でみると須佐湾入口に高山という小高い山があり、其処に天然記念物「磁石石」の印がついている。

一方、この山深い一帯はたたら製鉄遺跡が点々と散らばる山口県のたたら製鉄立ちたいである。



何度となく歩き回った所で、幕末 長州が武器の補給・支援基地とした長州の製鉄地帯である。

須佐高山の磁石石もこの地に散らばるたたら製鉄遺跡も、この地が白山火山帯に属し、太古の時代の火山活動で形成された鉄分を多く含む深成岩帯と関係している。出雲もまさにこの深成岩帯の中にある。

山陰の海岸に沿って中国山地を東西に走る鉄分を含む深成岩帯はまさに「和鉄の道」なのである。その西の端に「須佐 高山 磁石石」があり、阿武町「大板たたら製鉄遺跡」や「白須たたら製鉄遺跡」などがある。

須佐高山は須佐湾の北側 日本海に突き出た海岸の小さな山で、頂上からは北の須佐湾そして、南には中国山地が眼下一杯に広がる景勝地で、地球のマントルが砂岩・泥岩の堆積地を突き破って地表に頭をだし、日本海に崩れ落ちていているところ。

7月に入って山口県美祿を訪ねるのを機会に興味深々で「須佐 高山の磁石石」を訪ねて本当に磁針が狂うのか確かめてきました。



マントルが噴出した高山頂上部には深成岩の一種班レイ岩(マントルに多く含まれる鉍物質特に鉄分が多数含まれている)がごろごろ。

岩に磁石を近づけると確かに反対方位を指しました。
僕の胸の高さに磁石を持って
ゆくと正常でした。

そんなばかな・・・と思うの
ですが、磁石が狂う場所が日
本にもあるのです。

日本ではほかに 長野・新潟
大阪生駒山に同じような場所

があるというのですが・・・

この須佐ほど大規模な所は無いです。



南西の須佐湾を背に磁針が南東を指す



須佐 高山 磁石石の上で 2004.7.2.

須佐 高山で地表に頭を出したマントルの高熱によって周辺の砂岩・泥岩の地層が再結晶変質したのが
フォルンフェルス断層。まさに地球規模の溶接熱影響部である。

また、瀬戸内側徳山から北の須佐へ中国山地を横断する国道 315 号線を通ったのですが、中国山地に分
け入ると製鉄関連地名が点々と続く和鉄の道。その先の海岸に磁石石の高山 そして其処に立ち海を眺
めるスサノオノミコト。

須佐 高山に行くまで そんなに意識しなかったのですが、出雲・日本誕生にかかわる和鉄の道を思い
浮かべています。

海を隔てた朝鮮半島から東へ 長州・石見・出雲・因幡・美作・奥播磨・丹後・奥琵琶湖そして畿内・
越の国へと和鉄の道が日本海沿岸に沿って続いている。須佐 高山の磁石石はまさにその山陰沿岸を伝
う和鉄の道の西端を示すモニュメントか・・・

何度となくその絵図を参考に使った「白須鉄山遺
跡」はこの須佐の海岸から中国山地へ少し入った
全く人影のない山中。

合歡の木の花満開の静かな湖水が広がる山際の緑
の中に遺跡を示す看板だけが目印。

ひっそりと静寂の中に埋もれていました。



昔学生時代 山仲間によく歌った

「合歡の木のその下で ほろほーろと 泣いた人

わかれても はなれても 夢ならば 会えるもの 」

無性に恋しくなって 口ずさんでいました。

2004.7.2. 午後 白須たたら遺跡 ダムの傍で

「須佐高山の磁石石」 & 白須鉄山遺跡を訪ねて

中国山地の砂鉄ベルトの西端 山口県北東部の和鉄地帯を訪ねて

1. 徳山から中国山地を横断して須佐の街へ
製鉄地名が次々と現れる国道 315 線 そこはかつての和鉄生産地帯
2. 磁石石の「須佐 高山」
須佐湾や日本海沿岸を眺望できる展望所
スサノオ伝説の残る神山には 磁石石がゴロゴロでした
3. ホルンフェルス断層
高温の地球マントルが地表に噴出して 地層を美しく飾った自然の造形
4. 中国山地を東西に走る太古の深成岩地帯と和鉄を育んだ砂鉄ベルト
「須佐 高山 磁石石」・「ホルンフェルス」そして点在する製鉄遺跡
5. 詳細な近世和鉄生産が絵図にされた白須たたら遺跡 探訪
「先大津阿川村山砂鉄洗之図」に記録された和鉄・
幕末長州の武器を支えた萩藩営のたたら製鉄

1. 徳山から中国山地を横断して須佐の街へ

製鉄地名が次々と現れる国道 315 線 そこはかつての和鉄生産地帯

徳山から日本海側須佐へ 中国山地を横断する国道315号線
中国山地が日本海へ落ちる山中を走るこの街道は
幕末長州の武器を支えた和鉄の道



7月2日

快晴 朝 神戸を出ていつもの通り山陽道を西へ。昨年10月以来である。真っ先に須佐の磁石石を確かめてから、美祢まで行く。

約4時間で徳山東インターを出て国道315号を北へ、中国山地を越えて日本海側へ縦断する。東西に伸びる山口県では幾本かの国道が南北に本州を縦断して日本海側を結ぶ一番東の道。

徳山からもう直ぐ山の中に入り、鹿野町で中国縦貫道と交差し、さらに北へ。

約1時間で山を抜け、りんごの栽培が盛んなリンゴ南限の地「徳佐」。見覚えのある家並が広がる風景で。ここで、日本海側益田から山中の狭い盆地を縫って津和野・山口盆地を経て瀬戸内海へ出て下関に向かう国道9号線と交差する。

ここからまた山中に入るが、この山中は山深い山口県にあっても最も山深い地で平家落人伝説や隠れキリシタンの痕跡が残る静かな山郷が続く所。

また、北へ 阿東町・むつみ村・福栄村・阿武町そして須佐町へと続く「和鉄」の痕跡の残る古い山口の製鉄地帯でもある。

山口に赴任している時には原チャリで駆け回ったフィールドである。

徳佐から北へ入ってまもなく阿東町「鍛冶が原」の標識。そしてむつみ村に入ると金谷。地図には金谷峠の地名も見える。

山中を曲がりくねった道を行くとホルンフェルスへの標識も見える。

この山中 西側の山々を越える今回は行かないが、とかつて訪れた事のある福栄村 大板山たたら遺跡。正面に金山谷トンネルが現れる。このトンネルを抜けると山陰側日本海海岸の須佐の町。長いトンネルを抜けるとパッと空が開ける。



阿東町鍛冶が原の標識がみえる 国道315号線



国道315号線 ホルンフェルスへの標識と金山谷トンネル 2004.7.2.

まだまだ山並の上であるが、大きな谷にチョコレート色の大きな橋が緑の谷を渡っている。

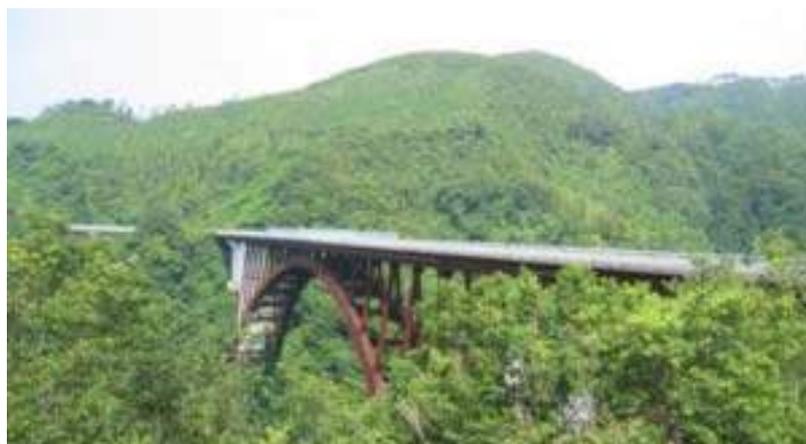
「須佐大橋」橋の横に展望台があり、眼下緑の谷の向こうに須佐の町と日本海が緑の山並みの中に見える。

少し霞んでいるが、須佐の海岸の突き出た所になだらかな山が見える。多分これが磁石石のある高山。

かつて何度か行ったホルンフェルス直ぐ上の山である。反対側南には今越えてきた中国山地の山が幾重にも重なっている。



「須佐大橋」と須佐大橋から見る「須佐 高山」



和鉄の道をつなぐ現代の鉄のモニュメント

1991年完成の無塗装 鋼橋 須佐大橋

この須佐大橋は1991年 国道315号線の須佐バイパス建設で唐津谷をまたぐ全長313mの逆ローゼ形式の巨大橋でアーチ支間長190メートル 下の唐津川からの高さ100m 耐候性鋼材1745tが使われ無塗装が実現されている。

緑の深い谷に橋のチョコレート色が映えて美しく、今も現役で無塗装であるのがうれしい。

この須佐大橋は製鉄関連地名やたたら製鉄遺跡が点々と連なる国道315号線「和鉄の道」をつなぐ現代の鉄のモニュメントである。



中国山地 緑の真っ只中にかかる須佐大橋

須佐海岸 高山からの眺望

この須佐大橋から海岸へ下れば、もう 磁石石のある「須佐 高山」

本当に磁石の針は狂うだろうか.....と興味深々で山を下っていった。

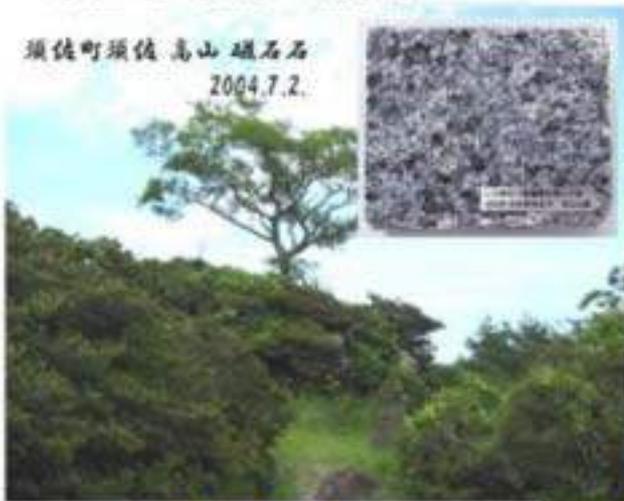
2. 磁石石の「須佐 高山」

須佐湾や日本海沿岸を眺望できる展望所スサノオ伝説の残る神山には磁石石がゴロゴロでした



須佐町 高山 磁石石

須佐町須佐 高山 磁石石
2004.7.2.



須佐町の海岸へ下りて国道 191 号線を横切り海岸に沿った街中へでる。

フォルンフェルスへの標識に従って、海に突き出た須佐湾沿いの海岸を少し行くと「高山山頂入口」の標識。

ここを右に折れてちらちら高山の頂上を眺めながら少し上るとほどなく須佐高山の駐車場に出る。



人っ子一人おらず、案内板もないが、頂上へ登っていく階段状の遊歩道がついている。これを上りきると展望台のある高山頂上に出た。

眼下には須佐湾から中国山地が広がり、素晴らしい景色である。また、北側には山々がそのまま日本海に落ち込んだ海岸が続いている。

「昔出雲の須佐之男命が出雲と朝鮮半島を行き来する際に海路を望んだ」とのスサノオ伝説の残る場所。

伝説の通り 360 度の展望とともに 日本海沿岸を行き来する海路が良くみえる。



須佐 高山頂上展望台からの 360 度の眺望 2004.7.2.



北東側 益田へと続く日本海海岸



南 南西側 須佐湾から萩・長門へと続く日本海海岸



南側 中国山地の山並みから西側須佐湾



須佐高山頂上付近より

展望台周辺には北長門海岸国定公園の案内板はあるもののなだらかな草原の丘で見渡しても岩も見えず、ちょっぴり心配になる。磁石出して方向を測ってみるが、特に変化なし。

この頂の西側にもうひとつの小高い丘が在り木々の間に岩が見えるので、そっちへ向かって灌木の間を抜けてゆく。

灌木の中に 折り重なった岩が幾組が見える。

鞍部にまで下ってから、少し西へ上ったところに「天然記念物 磁石石」の案内板があり、ほっとする。



どうも これら周りの木々の間にある石がいずれも磁石石のようだが、馬蹄形磁石を吊り下げてみるが良く判らぬ。



須佐高山 磁石石の案内板と 露出した磁石石(斑レイ岩) 2004.7.2.



馬蹄形磁石やコンパスを置いて 磁化を調べる 2004.7.2.

色々やってみたが、はっきりしない。

半分あきらめ気味に石の上にコンパスを置くとどうも方向がおかしい。

立ち上がって胸の位置で磁針の方向見ると正常に北を指している。 やっぱり岩は磁化している。

幾つかの場所でやってみましたが、大小の差はありますが、磁針が狂う。

でも岩から遠ざけると正常の磁針方向をさす。

聞いていたほどの磁化の強さではないが、頂上部の岩で本当に磁針の方向が狂う。



この須佐 高山は間違いなく「鉄の山」。

太古の時代に鉄分を多く含んだ地球のマントルが頭をもたげた場所。それが鉄分を多く含んだ斑レイ岩となって露出している。

海岸ににゅっと飛び出た鉄の山に何度となく落雷があっても不思議でない。

度重なる落雷によって、鉄山の磁化が完成したのだろう。



高山磁石石形成モデル

本当にこんなことあるのですね。。。。。。

どこかにもっと磁化の強い石はないかと探してみましたが よう 見つけれませんでした。



一方 この高熱の影響を受けた砂岩の大地は再結晶してホルンフェルスとなって、その断面を縞模様の岩の崖となってその地層を見せる。

鉄鋼の溶接・接合部の断面を幾度となく見てきましたが、まさに地球規模の溶接熱影響部断面。このホルンフェルス断層が岩石の溶着・溶接接合界面部であること知ってすっきりうれしくなる。。

もう一度 高山頂上に戻り、南の山々を眺める。

丹後・美作・伯耆・奥出雲・石見・長門へ延々と続くこの中国山地はこの高山で日本海へ崩れ落ちる砂鉄ベルト地帯。日本誕生からずっと日本を支えた和鉄生産基地が点々と並び、山並みを縫って、延々と和鉄の道が続く。

「須佐 高山の磁石石」ほんまかいな。。。。と

思っていました、本当に磁針が狂う磁石石がありました。

この磁石石に象徴される須佐に残るスサノオ伝説も和鉄生産地の焼き直しかもしれないし、また三輪山の磐座初め、各地の神奈備山の磐座も同じような性格を持っているのでは・・・とイメージがさらに膨らんでゆく。

また、大阪生駒山 長野 新潟 東北にも磁石石があるという。

これも機会があれば調べたい。

山口県の山の中ばかり、眼を向けていましたが、海岸にこんな和鉄の痕跡があるなんて全く知りませんでした。須佐町がスサノオ伝説の町と知ったときに気付くべきでした。

そんなことを考えながら、山を下って、もうひとつの和鉄の痕跡(中国山地 砂鉄ベルトの西の端) ホルンフェルスへ向かいました。



白亜紀～古第三紀深成岩類分布と重なる中国山地 砂鉄ベルト地帯・和鉄生産地

3. ホルンフェルス断層 高温の地球マントルが地表に噴出して 地層を美しく飾った自然の造形

須佐町 ホルンフェルス 2004.7.2.



須佐高山に噴出した高熱のマントルで高熱に熱せられた周辺の地層の岩帯が半溶融再結晶して、美しい層を形成。その後の地殻変動 断層でこのマントル熱影響変成層が露出している。

これがホルンフェルス。

須佐高山を下りて 高山の山腹沿いに須佐湾を回り、日本海の外洋に突き出た所で、高山が断崖となって海に落ちている。

まるで渋い服か壁紙のデザインでも見るかのように美しい水平の縞模様を持った断崖へ出る。ホルンフェルスである。



ここに来るといつも思うのですが、見た目よりも写真にすると非常に素晴らしい。ちょっとまねできないデザイン画。

自然の造形の中に身をおいて、また 何枚も写真をとりました。

頂上部は見えないが、「鉄の山 須佐 高山」の痕跡がないかと注意してみると、層状の岩の間から茶色の鉄分が滲み出している。ホルンフェルスそのものは鉄分を含まぬ砂岩・泥岩であるが、高山の斑レイ岩から溶け出た鉄分のサビがホルンフェルスの層間を通して滲み出している。



4. 中国山地を東西に走る太古の深成岩地帯と和鉄を育んだ砂鉄ベルト

「須佐 高山 磁石石」・「ホルンフェルス」そして点在する製鉄遺跡

中国山地に散らばる「たたら製鉄遺跡」地帯と中国山地日本海側を走る花崗岩類や斑レイ岩などの深成岩帯ベルトとは深いつながりを持っている。

これら深成岩帯は地球のマントルが火山活動の中で地球の内部深くから噴出し固まったもので、鉄をはじめ多くの鉱物資源が含まれている。

すべての深成岩に鉄分が含まれているという訳ではないが、白山火山帯に属する山陰海岸沿いの深成岩ベルトには磁鉄鉱など鉄鉱物が含まれている。

一方 瀬戸内側にも 豊富な花崗岩類のベルトがあちこちにあるが、あまり鉄分を含んでいないといわれる。

中国山地に分布する「たたら製鉄遺跡」

花崗岩類の分布 ●たたらに関係する遺跡や地帯が多く残されている赤穂・野一村

磁鉄鉱が多く含む花崗岩類 磁鉄鉱が少ない花崗岩類

地殻とマントルが接する日本列島

斑レイ岩

磁石石

石英

「千種のたたらと赤穂の塩田」 人と自然の博物館 先山徹氏
2004.1.18.兵庫県立博物館セミナー講演より

鉄分がこれらの花崗岩類などの深成岩に含まれるといってもせいぜい数パーセントまでであり、それらが鉄資源「山砂鉄」としてそのまま使われるのはずっと後の時代である。

鉄を含有するこれら岩石が地殻変動や自然風化・崩壊などによって砕かれて細分化されて、川に流され、海岸へと益々砕かれて流れ下る。

これら細分化される過程で鉄分が自然分離され、川砂鉄・浜砂鉄として川筋や河口の海岸に堆積し、日本独特の鉄資源として使われた。

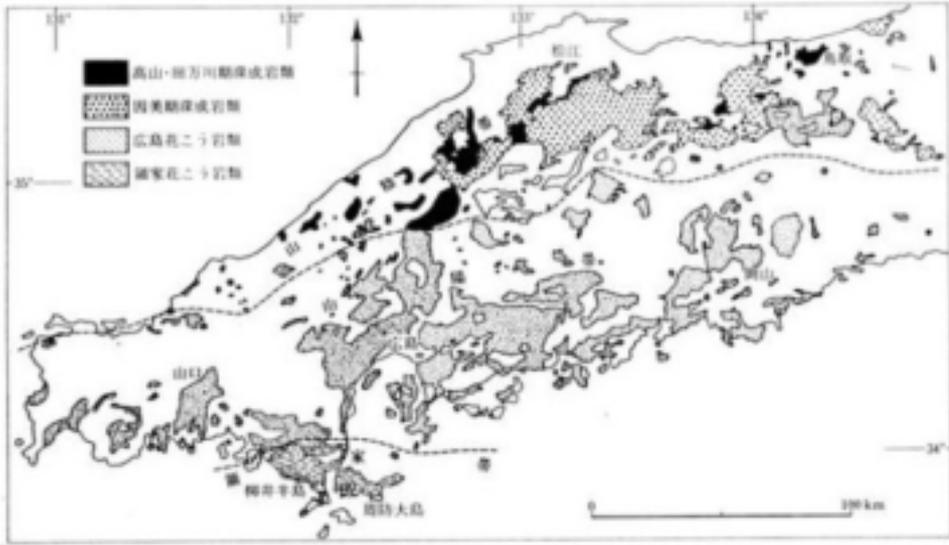


図 3.3.2 中国地方における白亜紀～古第三紀深成岩類の分布
(日本の地質「中国地方」編集委員会(1987)による)

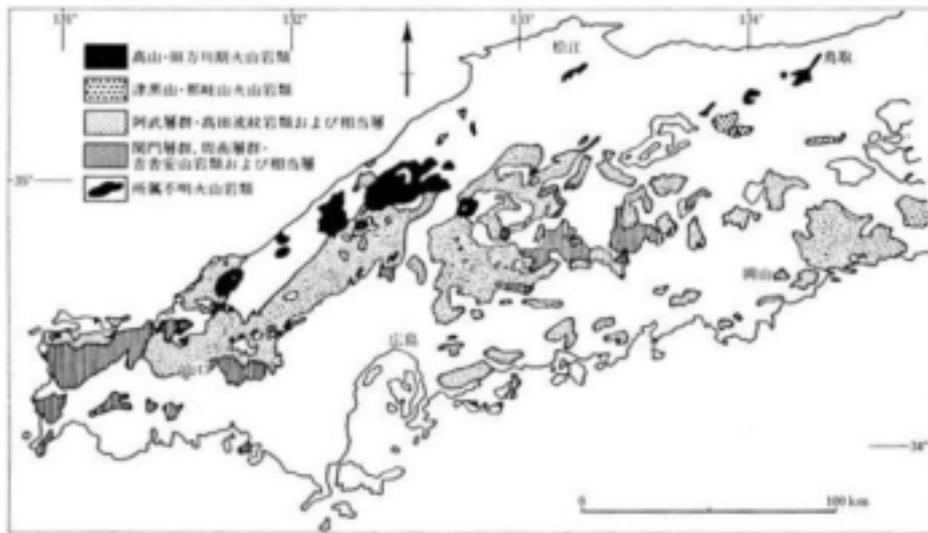


図 3.3.3 中国地方における白亜紀～古第三紀火山岩類の分布
(日本の地質「中国地方」編集委員会(1987)による)

中国地方 白亜紀-古第三紀の深成岩・火山岩分布

高山-四万川期深成岩類・因美期深成岩類には鉄分が多く含まれて、中国山地のたたら遺跡分布とかさなる。
一方、広島花崗岩類には鉄分がすくないといわれている。

白山火山帯に沿った日本海海岸に沿った中国山地にはこんな鉄資源を豊富に含んだ深成岩のベルトが長く伸び、日本海へ流れ下る川筋や河口の海岸には長い年月を経て砂鉄を堆積させた。

石見から出雲・奥出雲から伯耆・美作・奥播磨そして丹後・奥琵琶湖へと続く山陰地方の古代神話・伝

承にはこの鉄を含んだ深成岩ベルト地帯での製鉄神話・伝承が数多く含まれ、日本誕生のドラマもこの大陸との鉄の交易支配・製鉄技術支配を抜きにしては語れない。

また、近世・江戸時代には山砂鉄を切崩し、砂鉄を採取する方法として「鉄穴流し」の方法が発明されるとこの豊富な鉄資源を使って、和鉄生産の中心地として隆盛を極める事になる。

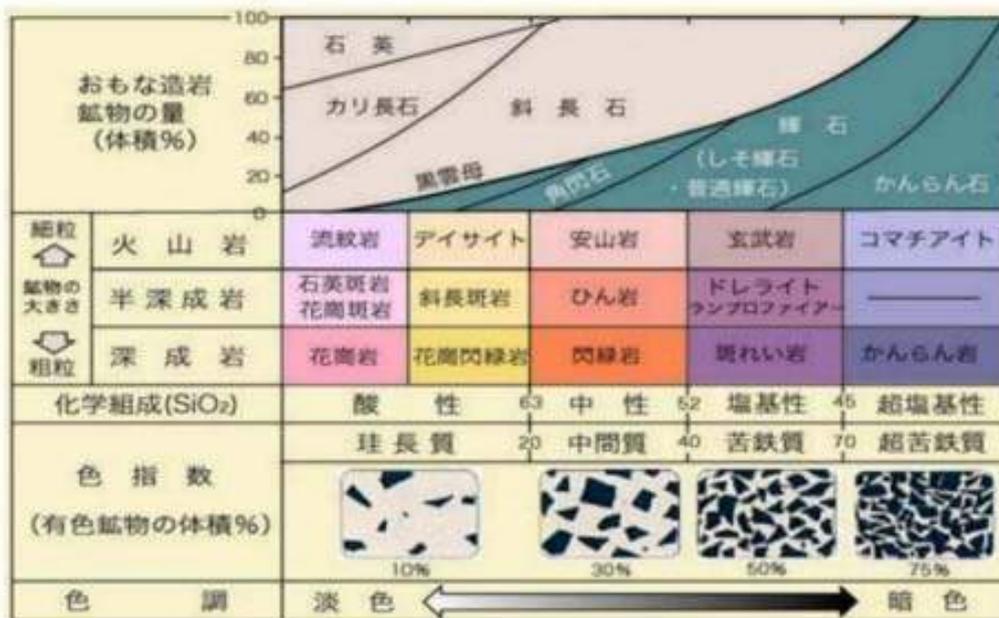
そんな中国山地の砂鉄ベルトの象徴が須佐高山の磁石石と考えられなくもない。

何度となく続く落雷が鉄分を含んだ岩山を磁化させ、鉄を吸いつけ、鉄の存在を知らしめる。

鉄の山が神の山になった所以であろう。神奈備山の磐座も同じような歴史を秘めているのかも知れない。

この須佐高山にスサノオ伝説があることから、古代 出雲の民は既にここに鉄原料があることを知っていて、日本での和鉄生産を試みていたかも知れぬ。

山口県の火山岩と深成岩



5. 近世和鉄生産が絵図にされた白須たたら遺跡探訪 2004.7.2.

「先大津阿川村山砂鉄洗之図」に記録された和鉄・幕末長州の武器を支えた萩藩営のたたら製鉄



白須たたら遺跡 2004.7.2.



「先大津阿川村山砂鉄洗之図」からの製鉄工場作業の模写



山口県のたたら遺跡で気になっていた製鉄遺跡がある。

鮮やかな赤の炎をあげる「たたら炉」の写真にお目にかかった白須製鉄遺跡である。

数年前 新聞記事でその位置を知って、確かな記憶は無いのですが、昔バイクで福栄町にある大板山たたら遺跡から山中を須佐へ駆け抜けた時に 人っ子一人いない山中の小さな池の岸に古ぼけた遺跡案内板があり、池を隔てて対岸にあった製鉄遺跡ではないかと思いながらいけなかった所。

白須たたら真の赤なたたら炉の絵図を見る度に気になっていた場所である。

須佐のホルンフェルス海岸から日本海海岸沿いを益田から萩・長門を結ぶ幹線道路国道 191 号線に出て 直ぐに須佐トンネル 大刈トンネルを抜けた所が惣郷。

地図では左へ山中へ入る県道 303 号に入り、少し行った所が白須たたら遺跡と眼っこをつけて大刈トンネルを抜ける。

山の中で見落としそうな車一台がやっと通れる道があり、碎石場が見えなければ、行くのをためらう道路を県道 313 号と見て入ってゆく。

入口を少しはいると県道 313 号惣郷の標識があり、この道でよいこと判る。なぜ、入口に標識がないのか。。。。。



県道とは名ばかり 全く生活臭が感じられぬ 超過疎 県道 313 号惣郷の標識



県道 313 号 白須谷

人のおいが全くしない道である

でも、まったく人の気配が感じられない道である。

碎石場の横を通り抜けると道の両側の雑草が車にぼんぼんぶつかるまったく手入れされていぬ狭い道。全くひと気のない谷間を遡ってゆく。横にいる家内がもう 引き返そうという。

もう、過疎の最たるところなのだろう。 通行が在ったとはとても考えられぬ寂しさである。

以前 通った事のあるイメージが無かったら止めただろう。

細い川に沿って 15 分ばかり、そろそろ登ってゆく。ひと気のなさ 寂しさ漂う不気味さとは別に 谷沿いの道には合歡の木が満開の花をつけて実に美しい。合歡の木の花を意識した事は余りありませんが、家

内に教えてもらって 初めて じっくり花に目を近づけると本当に美しい。

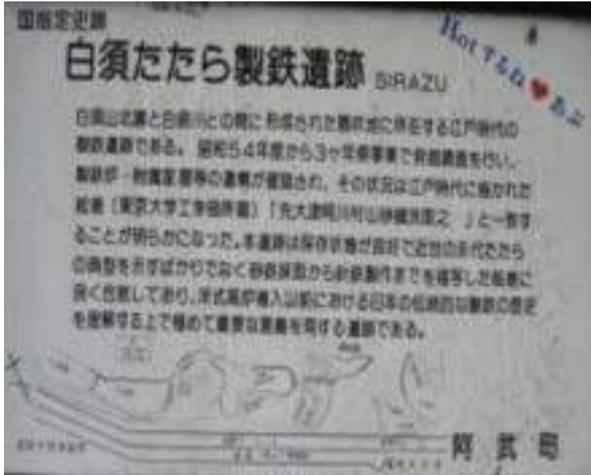


白須川にそって 満開の花をつける合歡の木 2004.7.2.



山中の道の向こうに砂防ダムとダム湖が現れ、ダム湖の道端に白須たたら古ぼけた案内板。前には反対側から入った場所で間違いなし。湖面に合歡の木と山が映って美しい。その向こうに湖面に沿って平坦な場所があり、その向こうに高い杉が並んで立っている。向こう側には渡れないが白須たたら遺跡である。昭和54年度からの発掘調査で製鉄場、事務所、鉄塊の冷却場、鍛冶屋、人足小屋などの状況が明らかにされると共に絵図との一致が確認された場所である。





須佐町惣郷 白須たたら製鉄遺跡 2004.7.2.

かつては この道も白須たたらへの街道筋として、賑わったに違いないが、今はまったく人家もない人
っ子一人いない静かな場所で眠っている。
満開の合歡の木がそれを静かに見守っている。
最近 は 幕末のドラマがもてはやされ、高杉晋作や長州が表舞台で語られている。
萩には西洋式の反射炉も作られ、その遺跡も残っている。

でも、その裏にあって 長州藩の武器を支えた製鉄工場が山深い日本海側の山里に点々と存在した事な
どほとんど忘れられている。
絵図が白須たたらを呼び起こしてくれたと聞く。
素晴らしい自然の中 今一度 表舞台に出ることはないのだろうか・・・
地域に人がいなくなるとやがては完全に忘れ去られてしまう。

よく歌った合歡の木の歌
「合歡の木の葉のように 今はただ眠ろうよ
.....」



白須たたら遺跡 概要

「先大津阿川村山砂鉄洗之図」に記録された和鉄・幕末長州の武器を支えた萩藩営のたたら製鉄

白須たたら遺跡は惣郷の白須山の山麓、国道191号線から分かれて白須川の谷に沿った県道303号線を約1.8キロ上 砂防ダム湖の湖水面南方の白須川左岸段丘上にある文化14年（1817年）頃操業と言われる江戸時代のたたら製鉄遺跡。

山口県東北部では中世末から近世初期にかけてたたら製鉄が大きく発展。

さらに、幕末維新に向い長州藩の軍事体制にとって重要な取組みとなり、白須たたらではやがて立木を伐り尽したため、尻高山が後継地となる。惣郷の浜からの船便は楽であったが、立木が少なく、水の供給も不十分で、条件が悪く、早くも五年目には、須佐町の金山谷へ移って行った。



白須たたら再発見の発端は当時通産省の葉賀七三男氏によって東京大学資源工学科の図書室にある絵巻物「先大津阿川村山砂鉄洗之図」と一致する製鉄遺跡としてこの遺跡が発表されたことによる。

昭和53年に白須川砂防ダム建設が始まったこともあり、昭和54年度からの発掘調査で製鉄場、事務所、鉄塊の冷却場、鍛冶屋、人足小屋などの状況が明らかにされると共に絵図との一致が確認。

絵図と共に保存状態がよく、永代たたらの様相を良く残しており、和鉄製造技術を理解するうえできわめて重要な遺跡と言われている。

「先大津阿川村山砂鉄洗之図」



たたら場



「先大津阿川村山砂鉄洗之図」からの製鉄工場作業の模写

「先大津阿川村山砂鉄洗之図」より

江戸末期に描かれたとみられる絵巻は全長約23メートル。

現在の豊北町から長門市にかけての地域で砂鉄を採る場面から始まり、惣郷村（現阿武町）のたたら場での炉づくり、風を送りながら砂鉄と木炭を三日三晩焼き続ける様子など鉄の延べ棒ができるまでの全工程が色鮮やかに描かれている。



「須佐高山の磁石石」 & 白須鉄山遺跡を訪ねて

中国山地の砂鉄ペルトの西端 山口県北東部の和鉄地帯を訪ねて

【完】



12.

「鉄の5・6世紀」古代 大和政権の日本統一を支えた

北河内の大規模專業鍛冶工房 大県製鉄遺跡 探 訪

2004.7.21. 大阪府柏原市大県



生駒山 右端が河内柏原市 大県地区



大和川(中央)と大県地区(中央右上)

大 県 の 鉄

柏原市大県、譯比古(めでひこ)神社参道の周辺では5世紀末から6世紀の土器と共に鉄滓・輪羽口・砥石・斧跡などが見つかった。

これまでに見つかった鉄滓の量は約500kg、輪羽口は約1000個という大変な量にのぼる。

これらの出土品から 大県の村では大がかりな鉄生産が行われていた事がわかる。

農耕具や武器としての鉄製品は農地を開き、土木工事を行い、戦いに勝つためのもっとも重要な道具で、日本統一を進める大和政権にとっては この大県の鍛冶工房は大変重要であった。

柏原市歴史資料館展示 大県の鉄より

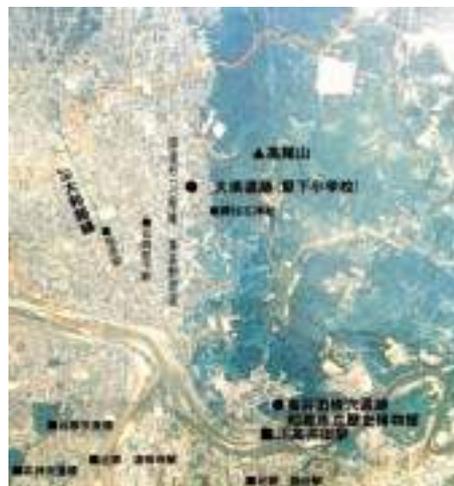
大和平野と河内平野を東西に隔てて北から南へ 生駒山連山と葛城・金剛の連山が壁のように続く。

この壁が生駒連山と葛城連山に途切れる隙間から大和川が大和から河内・難波へ流れ下る口の所に大県製鉄遺跡がある。

この山並みの両側には古代日本統一を進める大和政権を支えた渡来人や豪族たちの本拠があり、まさに畿内の心臓部。

河内側の山裾 生駒山から葛城山山麓には数々の古代の古墳群がひろがり、平野部には大和王家陵を中心に幾多の前方後円墳が点在する古市古墳群・百舌古墳群が広がっている。

近津飛鳥と呼ばれた王城の地も大和川のすぐ南にひろがっている。



4世紀末から6世紀前半の王家の墳丘墓 古市古墳群



古墳時代大王墓の集積，応神陵古墳は体積日本最大日本有数の大型古墳が密集する古市古墳群は、大阪府の東南部に位置する、羽曳野市・藤井寺市を中心に広がる古墳群で4世紀末から6世紀前半頃までのおよそ150年の間に築造された。なかでも体積では最大規模を誇る応神陵古墳など大王墳の伝承を持つ大型前方後円墳から、全長10mにも満たない小型古墳まで100基以上の古墳で構成されている。いずれも標高24m以上の台地や丘陵上にあり、古墳造営には渡来系の土師氏などが関与していたと考えられている。

この古市古墳群のすぐ北側 大和川を挟む生駒山南端の山裾にこの古墳群の造営時期と時期をほぼおなじくする鉄の大生産基地「大県製鉄遺跡」が存在していた。

巨大な墳墓に代表される土木工事など種々の日本統一の事業には、人を動員できる実力とともに武器・工具など大量の鉄製品をはじめ、多くの物資が必要であり、それらを安定供給する生産体制が重要な鍵であった。

この生駒・葛城の山麓 河内には 渡来人・豪族の本拠地があり、その周辺には5世紀半ばから6世紀・7世紀半ばにかけ、初期大和朝廷の確立を支えた数々の専業生産工房があった。



生駒山南端の位置にある大県製鉄遺跡は鉄製武器・工具を生産加工した大規模な専用鍛冶工房のひとつで、初期大和政権を支える中枢的な鍛冶工房。初期大和朝廷につながる河内の豪族がこの専業鍛冶工房を統率していたと考えられる。

当時 まだ日本では良質の鉄素材の安定自給ができず、需要が急速に拡大する中 朝鮮半島からの素材輸入路の確保と同時に鉄の自給に向けた模索が続き、早期大和政権の基盤を確立する上で鉄の支配が最も重要な時代。

日本統一の主導権を争って初期大和王家・豪族が渡来人・朝鮮半島諸国を巻き込んで幾多の政変があり、鉄の支配を通じて大和政権が確立していった時代であり、爆発的に鉄の実用が進む「鉄の5・6世紀」と呼ばれる所以である。

そんな中で 従来の製鉄技術に渡来技術を取込み大和中枢の専業鍛冶工房として鉄製品を加工供給してきたのが大泉製鉄遺跡。古墳時代中後期 5世紀半ばから 7世紀半ばまで、150年を超える長きにわたって初期大和政権を支え続けた大鍛冶工房である。

また、この遺跡から出土した羽口・鉄滓の多さは日本自給鉄の使用をものごとたり、日本での鉄精錬の始まりの証拠とも言われ、大泉遺跡はその意味でも重要な製鉄遺跡である。

数々の資料に登場する大泉製鉄遺跡を 7月 21日に訪ねて、生駒連山の南端の山裾 柏原市大泉を歩いてきました。

「 日本古代 鉄の5・6世紀 」

(日本古来の伝承等から考えると確たる証拠・学問的根拠はないが、すでに3世紀後半には日本にも鉄精錬の倭鍛冶が存在し技術展開が進んできたと見る人も多い。(出雲・播磨・丹後・三輪・美濃・諏訪ほか)

しかし、大型の・武器・道具加工に必要な大量・良質の鉄製造は困難であり、基本的には鉄素材を朝鮮半島から輸入して 鉄製品に鍛冶加工していたと見られている。

この間にも 日本海沿岸を中心とした再々にわたる朝鮮半島からの渡来や交流によって、半島の鉄精錬技術が日本各地に伝播し、古代たたら製鉄の原型が確立されて行ったと考えられる。

5・6世紀に入って日本では初期大和政権の日本統一期 鉄の需要が爆発的に伸びる鉄器実用期にはいい、吉備や近江そして北九州???・畿内???などで大量安定生産ができるたたら精錬による鉄精錬・鉄の国内自給が始まったと考えられる。現在 6世紀半ば吉備千引カナク口谷の製鉄炉が出土最古という。

一方、この頃、朝鮮半島は日本の自給が進む以前の鉄素材の供給基地。最大の鉄生産基地伽耶を南端に百濟・新羅北方に高句麗が群雄割拠。そして鉄の支配をもとめる日本も含め、戦乱の時代。

活発な半島諸国からの人・技術・文化移入・交流の時代であり、同時に初期大和朝廷を中心に皇族・豪族・渡来系氏族の融合・離散の中で鉄の自給・鍛冶加工を支配した大和朝廷が次第に勢力を伸ばし、日本統一・律令中央集権の確立を果たすと共に7世紀 大化の改新を経て、古墳・白鳳の時代から飛鳥時代へと引き継いでゆく。まさに古代日本誕生の時代。

その中心にあったのが「鉄の支配・鉄の自給」であり、「鉄の5・6世紀」と言われるゆえんであろう。

鉄をめぐる5・6世紀 朝鮮半島諸国との交流

5世紀は日本では「讃・珍・済・興・武の倭5王」の時代。

「宋書」倭国伝など中国史書などにしばしば日本が登場し、本州、四国、九州での支配権の確立を進めていく過程にある大和朝廷が、活発に中国・朝鮮諸国との交渉がおこなわれたことが記されている。

その中心課題はまだ国内では自給できなかった鉄の入手である。

「記紀」の天皇系譜から倭の5王は履中・反正・允恭・安康・雄略の各天皇が考えられている。

(讃又は珍が仁徳天皇とする説もあり、定説はありません。

また、武は、鉄剣・鉄刀銘文から雄略に比定されている。)

この頃、朝鮮半島では高句麗が北方で勢力を伸ばし、南部では百済と新羅そして南端の任那(任那・加羅)には鉄の輸出国でもある小国の連合伽耶があり、大和朝廷は南部の諸国と交流を深めるとともに任那に拠点を持ち、北の圧力には百済と結び高句麗や新羅と戦った。また、朝鮮南部の軍事的指揮権と倭王の地位を認めて度々、中国に使いを送っている。

このような情勢のもと、5世紀には朝鮮半島との活発な交流の中、半島の戦乱を逃れ、数多くの渡来人がやってきて鉄の鍛冶加工・製鉄の最新技術をはじめ、様々な新しい技術や文化がそれらの国々からもたらされた。馬に乗ることや硬焼土器の製作がはじまり、一部では文字も使われるようになる。仏教が伝来する。

また、横穴式石室が近畿地方に伝わったのもこの時代のことである。

6世紀 任那は次第に百済、新羅に圧迫されました。遂に欽明23年(562年)任那は新羅に滅ぼされる。高句麗からの圧力に対抗するため、新羅・百済は日本に朝貢し、時には王子を人質として日本に残しています。推古天皇の御代、巨大化する新羅に対抗するため、600年と623年の2回新羅に出兵しますが、660年百済滅亡。最後に663年百済の要請により、百済救援の為出兵し、白村江で大敗し、それ以降朝鮮との国交は途絶えました。

このように5,6世紀 朝鮮半島の鉄は日本統一と政権確立を進める大和朝廷にとっては朝鮮半島の鉄は生命線であったことが理解される。

一方 大量の鉄実用の時代 爆発的な鉄需要を支えるため 製鉄・鍛冶技術を持つ渡来人を得て、鉄の自給へ向けた製鉄法の確立や大量の武器・武具・道具の安定生産のため、専用の鍛冶工房が生産基地としてつくられ、初期大和政権を支えた。大県鍛冶工房はそんな中枢的生産基地である。

「鉄の5・6世紀」古代 大和政権の日本統一を支えた 北河内の大規模専門鍛冶工房 大県製鉄遺跡 探訪

【内 容】

1. 古代畿内の大鍛冶工房 大県製鉄遺跡を訪ねて
2. 「大県の鉄」 古代畿内の大鍛冶工房 大県製鉄遺跡 概要
・「大 県の鉄」柏原市教育委員会ほかより

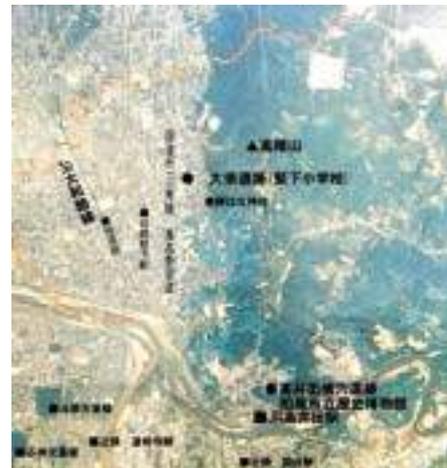
1. 古代畿内の大鍛冶工房 大県製鉄遺跡を訪ねて

雨上がりの午後、JR 高井田駅に下りる。

生駒の山並みと葛城の山並みがちょうど途切れ、この間を大和川が流れ下る位置 大和川の北側 生駒連山の南端の丘陵地大和川を見下ろす位置に駅がある。駅の南東側には二上山はじめ葛城の山々が見え、そこから西側に羽曳野丘陵 そして河内平野が広がっている。

駅は高井田丘陵の上であり、この丘陵の縁を北に回りこむと大県の遺跡であるが、ぎっしり家並が丘陵地をびっしり取り囲み状況が良くわからない。

まず、この丘のすぐ上の高井田横穴群のある高井戸史跡公園にある柏原市立歴史資料館に行って、「大県の鉄」の資料見せても



らうと共に情報をもらって丘陵に沿って北へ大県製鉄遺跡のあたりへ行く計画。

駅から5分も歩くと高井田横穴公園への入口があり、歴史資料館への道も記されている。

この入口から横穴群を見ながら上ってゆくと丘陵地の上の住宅地に飛び出し、その一角に柏原市立歴史博物館。



JR 高井田駅 2004.7.21.

1.1. 古墳時代の墳墓 高井田横穴群と柏原市立歴史資料館 2004.7.21.



高井田横穴公園入口

この横穴群は古墳時代の墓形式のひとつで山地や丘陵地の斜面を掘り込んで洞窟のような部屋を造り、数人の死者を葬ったもの。古墳時代後期になると巨大な前方後円墳のような巨大遺跡が姿を消してこの横穴式の石室がひろがる。

5世紀に九州から西に広がり、近畿では6世紀この地の高井田横穴群が最も古い。生駒山地（生駒山、高安山、高尾山）の山麓、山の斜面が格好の墓域。

石室には木造建築の屋根・入口・柱などを模した細工や線刻壁画・彩色壁画がみられる。

高井田横穴は平尾山の和和川に面した南西山麓にあって合計200基ぐらいある線刻壁画を持つものは30基発見されている。特にこの地の横穴を同時代の横穴式石室古墳の特徴と比べると分布がこの周辺地域に限られ、また立派な副葬品がないことなどが特徴。



高井田横穴公園 2004.7.21.

この地域が大県遺跡など渡来系氏族の本拠地で大規模な專業鍛冶工房と重なることから、これらの有力氏族・渡来人の墓ではないかといわれている。

高井田横穴公園の林の中を横穴古墳群を眺めながら登りつめた住宅地の一角にコンクリートの立派な柏原市立歴史資料館がある。

インターネットでこの歴史資料館に「大県の鉄」大県製鉄遺跡発掘調査報告があると読んだので、資料を分けてもらおうと共に現在の大県遺跡の状況を教えてもらう予定。

予想していたより立派な建物にビックリ。



柏原市立歴史資料館 2004.7.21.

歴史資料館には柏原市内の発掘調査で出土した考古資料をもとに、旧石器時代から近世までの柏原市域の歴史を紹介。といっても、この地は古代の先進地 多くの遺跡が点在しており、コンパクトにそれらにパネル展示されている。

この歴史資料館のある高井田横穴古墳群をはじめ、丘陵地に点在する古代の横穴古墳群そして古代初期大和政権を支えた鉄の大生産基地 大県鍛冶工房についても、簡単なパネルと共に大県製鉄遺跡から出土した大量の鉄滓と鞆羽口がそれぞれ積み上げて展示されていた。



柏原市立歴史資料館 「大県の鉄」パネルと大県遺跡より出土した鉄滓・羽口の展示

資料では聞いていたのですが、鉄滓の大きさと量にビックリ。

大県製鉄遺跡は鍛冶工房とはいえ、多くの人が指摘しているごとくこの大きさと大量の滓量を見ると朝鮮半島で完成された鉄素材を鍛冶加工していただけとは思えない。

滓の混在した鉄素材 つまり日本で作られた素材鉄が大量に持ち込まれ、ここで精製され鉄製品に加工されている。

まだ、日本で鉄製造が行われているとの確たる証拠が明確でないこの時代に「大県鍛冶工房では日本で作られた鉄がすでに持ち込まれている」との説が実感される。

また、この生駒山南端の丘陵地は今 河内ワインの産地稲作や葡萄栽培、葡萄酒醸造の様子も民具とともに展示していた。ちょうど企画展として この丘陵の下を大阪に流れ下る大和川の付け替え 300 周年記念企画展『大和川を掘る』として 縄文・古代から現代にいたる大和と難波・大阪を結ぶ海運と現在の河内平野にひろがっていた広大な河内湖とそこに流れ込む大和川の変遷をパネル展示されていた。

受付にインターネットで知った大県製鉄遺跡の発掘調査報告「大県の鉄」があるかどうか訪ねるとあるという。 お願いして柏原市教育委員会発行の「大県の鉄」の資料3冊分けてもらうと共に館員(資料館の説明ボランティアの人かも???)の方に大県遺跡への道を教えてもらう。
道筋を地図に書いてもらいましたが、もう 住宅地の中で遺跡らしい痕跡はなにも残っていないと……でも 詳細な調査報告書をいただいたので場所を探す必要軽くなったので助かる。

通り雨の中 「まあ いってらっしゃい」と笑いながら見送られて出発。

丘陵地の北へ 河内平野を眺めながら 柏原市大県 旧国道170号線沿いの豎下小学校を目印に歩き出した。



高井田丘陵から 南 二上山方面



高井田丘陵より 西 古市方面

丘を少し登ると後ろに二上山から葛城山へと続く山並みとその山麓に広がる近津飛鳥の古墳群をながめながらぶらぶら歩く。

左手の丘陵下平野部には市街地の町並みの中に古市古墳群 玉手山古墳が緑の点となつて点々と浮かんでいる。

今日本を誕生させた大和朝廷の心臓部にいることを感じてうれしくなる。



近鉄電車車窓から 逆に 大県 高井田へと続く生駒山山麓の丘陵地 2004.7.21.

1.2. 大県製鉄遺跡周辺で 柏原市大県 鐸比古神社参道・豎下小学校周辺

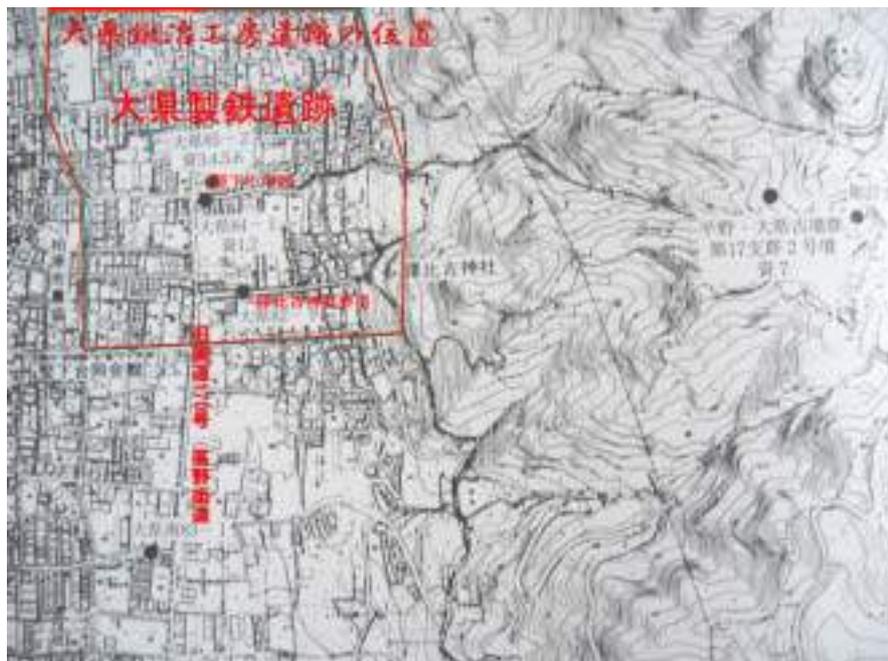


旧国道170号線 柏原市大県



大県製鉄遺跡 大県鍛冶工房の範囲

大規模鍛冶工房が密集点在大県・平野地区 東の山地域には横穴石室群が点在



この大和川に隣接した生駒山南端の麓 大県・平野地区には古く縄文の時代から人が住み着き、弥生時代にはこの大県地区にすでに大きな集落があり、そして古墳時代その広い地域に大規模な鍛冶工房が密集して存在し、専門の鍛冶加工集団が鉄製品を造っていた事が判ってきたという。

1982年この大県地区の道路下水道敷設に先立つ事前調査で5世紀末から6世紀の土器と共に大量の鍛冶滓や鞆羽口・砥石・炉跡などがみつかったのを皮切りに調査が進むにつれて、隣接する広い地域から大規模な鍛冶工房の遺構が次々と出土。古代5世紀半ばから7世紀半ばまで続いた大規模な鍛冶工房遺跡であることが判ってきた。また、この頃日本ではたたら鉄精錬がはじまったといわれ、この遺跡もそれに関係しているとも考えられる。

(15年にわたるこれら発掘調査報告がその都度「大県の鉄」として柏原市教育委員会から出されている)

高井田横穴群史跡公園から丘陵地の西麓を北へ河内平野を垣間見ながらのWalk。

この南北に走る生駒連山の西麓の斜面まで大阪のベッドタウンとしてぎっしり家並みが続いている。歴史資料館で聞いたとおり、大県遺跡もこの市街地の中に完全に埋まっているのだろう。

「鉄の5・6世紀」まさに大和政権が日本統一政権の確立を進めるこの時代にあって他に比類のない大規模密集した鍛冶工房「大県鍛冶工房」遺跡が初期大和政権の確立・日本誕生に果たした役割はきわめて大きい。

古墳時代の中期3・4世紀には 大和・河内・和泉には巨大な前方後円墳が造られ、大量の鉄製品や鉄ティが副葬。日本各地に起こった豪族が朝鮮半島諸国をも巻き込みながら、覇をきそい順次大和に統合され、初期大和朝廷が成立する日本誕生の時代。

鉄の需要が大幅に拡大する時代である。

そして さらに大和に成立した初期大和政権がその基盤確立と日本統一の事業を推進する。鉄の国内自給・高度鍛冶加工製品の量産を求めて 朝鮮半島からの鉄の輸入や製鉄・鍛冶加工鉄の新技术支配を求めて 初期大和政権につながる諸豪族・氏族・渡来人集団が抗争しつつその実力を高め、初期大和朝廷の体制が確立してゆく。「鉄の5・6世紀」である。

そんな中であって この生駒山南端の西麓 大県・平野地区に大規模な鍛冶加工工房 鉄の大規模コンビナートを作り、鉄武具・武器・農耕具などを供給しつづける。

おそらくは 渡来系の職能集団を多数抱え込み、多くの工人を支配する有力氏族がこのコンビナートを取り仕切り、初期大和政権を支えたのであろう。このコンビナートの東の山中に広がる大量の横穴群はこの大県を支配してきた有力氏族・工人・渡来人の墓域と推定される。

そんなことを考えながら、丘陵地を下りながら北にこの丘陵地に沿って40分ほど行くとびっしりと家が詰った住宅街を南北に走る交通量の多い道路路に出る。中世・近世の時代には高野山への参詣道として栄えた京都から富田林、橋本を経て高野山に通じる「東高野街道」旧国道170号である。

バイパスができた今は柏原の街中の生活道路である。この道にそって少し北に行くと大県の標識。大県地区に入った。住宅地の密集地でとても遺跡の痕跡を探すのはむづかしい。

この交差点のすぐ次ぎの交差点に立派な鳥居が見え、道路には「鐺比古(ぬでひこ)神社の祭礼」の旗がひらめいている。



高野街道 柏原市大県

高野街道 鐺比古(ぬでひこ)神社鳥居前

立派な鳥居からまっすぐに山に向かって舗装道路が伸びている。ここも両側びっしり家である。

この参道が大県鍛冶工房遺跡のひとつ。この参道の下から5世紀後半から6世紀の土器と共に大量の鍛冶滓や鞆羽口・砥石・炉跡などがみつかったという。



鐺比古(ぬでひこ)神社参道下に眠る大県鍛冶工房遺跡(大県4丁目 82-9次調査区)



この周辺一体の街中が大泉鍛冶工房遺跡であるが、まったく遺跡の中にいる意識はない。ただ、鐸比古(ぬでひこ)神社の名前にかすかに産鉄地のイメージが重なる。

静かな参道をまっすぐに丘の中腹まで登ると鐸比古神社がある。緑の森の中に美しい社殿がある。もともこの地にあったのではなく、もう少し北よりの平野地区の山麓にあったという。

この背後にある高尾山には横穴古墳群がひろがり、銅鏡などもでたという。

また ちょうどこの大泉と反対側の東山麓の青谷・雁多尾畑には古代製鉄と関係深い金山彦神社・金山媛神社があり、鳴石・隆小僧など葦などの根本に出来る水酸化鉄や二上山の噴火灰の中の鉄分を使ったとの伝承もあるそうだが、あまり良い質のものは出来なかったと云う。

「鐸」「雁多尾畑」金山彦神社・金山媛神社などがあるこの生駒山の南端の地はこんな伝承から大泉に古代大鍛冶工房ができる以前から たたら製鉄に先立つ古来の製鉄が行われた産鉄の地であった可能性も否定できず、大泉に鉄の大加工基地が成立した理由かもしれない。

真弓常忠氏「古代の鉄と神々」によると「鐸・サナギ」と読み「鉄鐸」「銅鐸」は古代の鉄精錬と関係するという。鉄鐸の意で銅鐸も鉄鐸と同じ起源をもち、古代製鉄の原料といわれる鳴石・高師小僧(葦などの植物の根に吸い寄せられた鉄分が根の周りに堆積した褐鉄鉱で根がなくなると空洞ができ音がすることから、鈴・鐸がこれを起源とするとの説がある)



鐸比古(ぬでひこ)神社



鐸比古神社境内から参道の両側大泉の町並みと遠く古市古墳群



鐺比古(ぬでひこ)神社からまっすぐ西へ伸びる参道より、100mほど北側にある豎下小学校からは多数の鉄滓や羽口・炉跡とともに工房遺構が出土した大県鍛冶工房遺跡の中心地。

そこを目標に境内の石段を下ってゆくと、住宅の中に埋没していて良くわからない。

めっこをつけて数筋北へ曲がりながら西へ住宅地の中を抜けてゆくと小学校が見えた。大県製鉄遺跡の中心部豎下小学校である。

大県遺跡の痕跡を示すものが何かないかと見回しながら、小学校の塀に沿って回りこんで旧国道170号線のところまで下る。



大県市街地



大県製鉄遺跡の中心部が埋まる豎下小学校 2004.7.21.



ちょうど、旧国道に出る角に体育館があり、体育館の建物の端と塀の間に本当に見捨てられたように「大県の鉄」大県鍛冶工房遺跡の案内板が2枚建てられている。網の塀にへばりついて覗き込む。

「日本の鉄そして古代大和・日本統一を演出した重要な遺跡で朝鮮半島交流史や渡来人をたどれる」重要な遺跡とおもうのですが、まったく見向きもされていない様子である。



豎下小学校体育館の隅に立つ大県遺跡案内板と校庭

近津飛鳥博物館・柏原市立歴史資料館には立派なパネル展示があるのに……………。

塀にへばりついて見ていると そばの店の主人が出てきた。多分物好きなやつが小学校を覗き込む不信人物とでも思ったのだろう。

大県製鉄遺跡の発掘現場のことなど聞くと「間違いなくここだ」という。

また、「小学校に行っても何処に行っても何も残のっていないだろう」という。

まあ 製鉄遺跡の現地なんて そんなものであるが、立派な博物館のパネルと現地のパネル随分差がある。でも 内容でいうとはるかにしっかり現地の看板の方が内容を良く示している。

古代史・日本の誕生ルーツ そして郷土史がブームというが、何をみるのだろうか……………

この小学校全域が大規模な古代の鍛冶工房の遺構で大量の鉄滓・羽口・炉跡 そして建物遺構が出土したという。



発掘調査地点 豎下小学校体育館 発掘調査時と現状

大県 鍛冶工房 遺跡

大県 85-2 次調査区

6世紀後半～7世紀前半

(現髪下小学校体育館建設地)

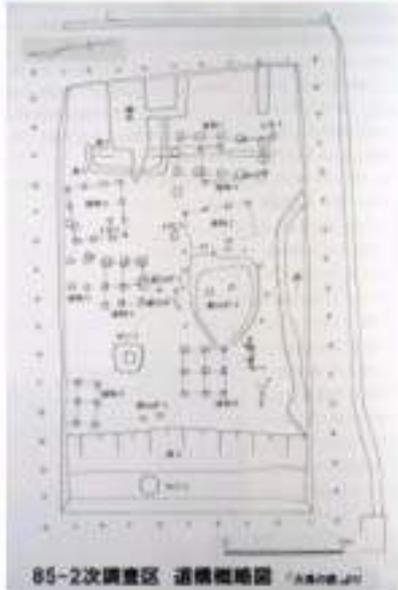
柏原市平野 2-1-5

【大県の鉄】より



髪下小学校体育館 (大県遺跡の中心部)

髪下小学校体育館建設地 発掘調査当時



85-2次調査区 遺構概略地図



3号新冶炉

4号新冶炉

【出土した新冶炉】



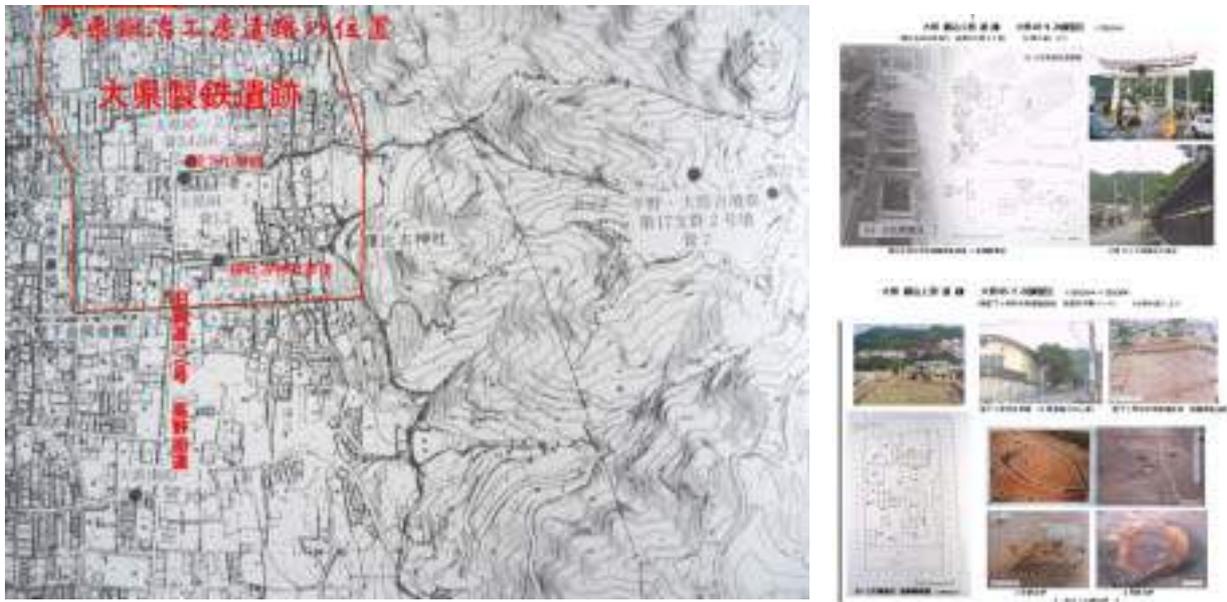
出土した鉄スラグと鞆羽口



鍛冶炉 3 出土状況 「大県の鉄より」

大県遺跡の領域を地図に重ねると本当に広い領域で、そこに約 150 年を超えて密集した鍛冶工房があった。 本当に畿内最大級の鍛冶工房である。

「渡来系氏族か 強力な氏族であろうが 誰が 何処から鉄素材を持込んで 何を作ったのか」
しかも 古代日本誕生の時代にこの初期大和朝廷の心臓部 河内で
きっと 本当に我々がまだ知りえていないロマンを秘めているに違いない



大泉鍛冶工房遺跡の大きさと遺跡中心部の発掘調査時と現在

これだけ大型・大量のスラグが鉄素材の鍛冶加工のみでであるだろうか・・・

否おそらくはスラグを大量に含んだ鉄素材が持ち込まれ、鍛冶の過程で分離されたと考えるのが妥当。
この素材が朝鮮半島から大量にスラグをつけたまま輸入したとは考えがたく、日本で製造された鉄がこの大泉の鍛冶工房に持ち込まれたとされる所以である。

本当に住宅地の中に埋没してしまっているが、古代初期大和朝廷の確立・日本統一の時期にそれらを支えた鉄のコンビナートがこの生駒山南端の麓丘陵地にあった。

この丘陵地から眺める平野部 河内・和泉には巨大な前方後円墳が並ぶ王城の地

王城の地の山裾で鉄を中心に繰り広げられたもうひとつの日本誕生にまつわる壮大なドラマがそのうちに 明らかになるに違いない

そんな思いを胸に近鉄堅下駅へ

そして 生駒の山麓に広がる古代のコンビナートを頭に浮かべつつ、車窓から眼下に広がる夕日に輝く河内平野を眺めながめていました。



2004.7.21.夕 河内・大阪平野をながめつつ

Mutsu-Nakanishi

2. 「大県の鉄」 古代畿内の大鍛冶工房 大県製鉄遺跡 概要

- 「大県の鉄」柏原市教育委員会ほかより -



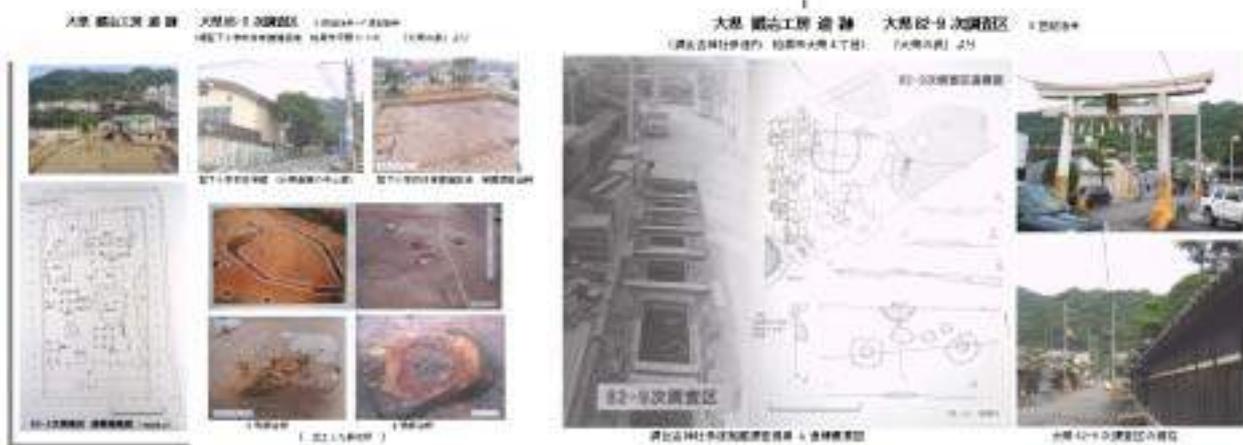
柏原市大県、鐸比古(ぬでひこ)神社参道の周辺では5世紀末から6世紀の土器と共に鉄滓・鞆羽口・砥石・炉跡などが見つかった。

これまでに見つかった鉄滓の量は約 500kg 鞆羽口は約 1000 個という大変な量にのぼる。

これらの出土品から 大県の村では大がかりな鉄生産が行われていた事がわかる。

農耕具や武器としての鉄製品は農地を開き、土木工事を行い、戦いに勝つためのもっとも重要な道具で、日本統一を進める大和政権にとっては この大県の鍛冶工房は大変重要であった。

柏原市歴史資料館展示 大県の鉄より



大県製鉄遺跡 心臓部 発掘調査時と現在 2004.7.21.

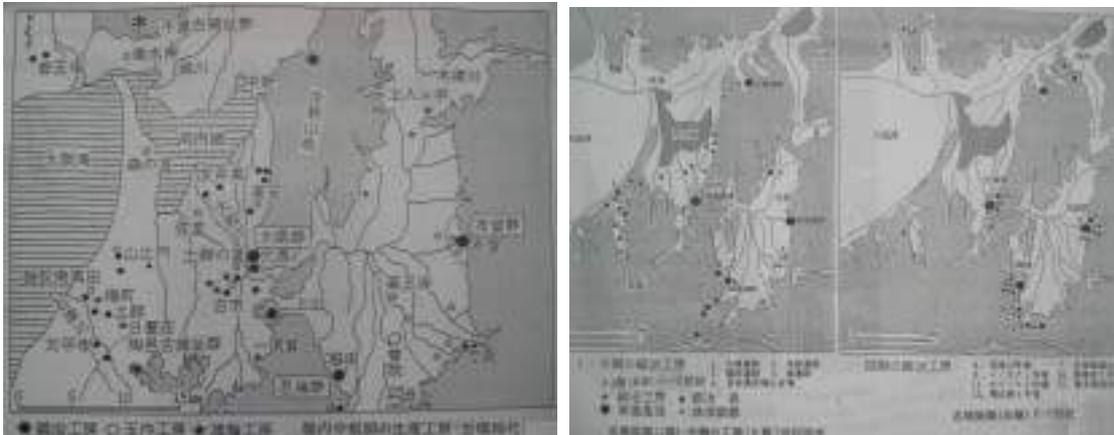
当時日本ではまだ、鉄材料の自給が出来ず、朝鮮半島から輸入に頼らねばならぬ時代。

しかし、この大県の鍛冶工房から出土する大型で大量の鉄滓は、周辺地域で製鉄製造された鉄材料が精錬(精錬鍛冶)されずにスラグの着いたままでこの大県の鍛冶工房に持ち込まれたか、この大県鍛冶工房で製鉄から製品までの一貫した製造が行われていた可能性 つまり、日本で自給された鉄素材使用の可能性を示しているといわれる。また、5世紀半ばから7世紀半ばの長きにわたって、大和政権の心臓部河内では武具・武器・道具を大量に量産して大和朝廷に供給しつづけたことが、初期大和政権の中央集権・日本統一の原動力であった。



大県製鉄遺跡周辺古代遺跡図

生駒山・高安山の南端と二上山・葛城・金剛へと続く山並みの間を大和から難波へ大和川が流れ下る口にあたるこの地はじめ、周辺地域には多くの技術を持った渡来系氏族が本拠地を築き、鍛冶・玉作・埴輪などの工房を営んでいた。そんな鍛冶工房が大量の鉄器製造で大和朝廷の展開を支えた。大泉製鉄遺跡は5世紀半ばから7世紀はじめまで、大和政権の鉄器製造の一大センターとして中心的存在だったと考えられている。

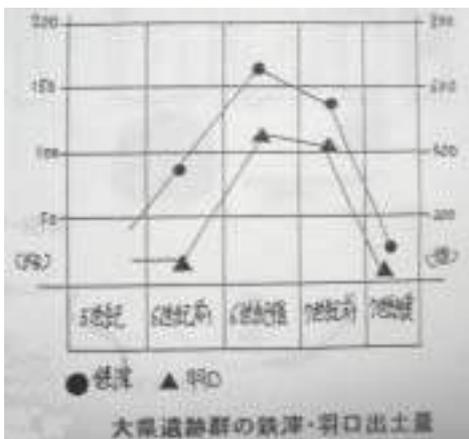


古墳時代 畿内中枢部の生産工房 「伽耶の鉄と倭国」花田勝広氏講演資料より

大泉遺跡から出土する大量の滓・羽口は5世紀半ばから6世紀後半に急速に増大する。この時期 大和政権が最も鉄製品を必要とし、かつ朝鮮半島に頼る鉄素材の供給から脱却せねばならぬ時期であり、大泉遺跡の拡大伸張と呼応する。また、この時期 周辺の鍛冶工房は縮小して行くことが指摘されており、初期大和朝廷の鉄支配力を強めていった様子が見えてくる。そして7世紀日本での鉄の自給が安定化してくるとこの大泉には寺院が立ち並ぶようになり、中枢的な鍛冶工房の役割を終える。
(「伽耶の鉄と倭国」花田勝広氏講演資料より)

大泉遺跡から出土する大量の滓・羽口は5世紀半ばから6世紀後半に急速に増大する。この時期 大和政権が最も鉄製品を必要とし、かつ朝鮮半島に頼る鉄素材の供給から脱却せねばならぬ時期であり、大泉遺跡の拡大伸張と呼応する。また、この時期 周辺の鍛冶工房は縮小して行くことが指摘されており、初期大和朝廷の鉄支配力を強めていった様子が見えてくる。
(「伽耶の鉄と倭国」花田勝広氏講演資料より)

7世紀日本での鉄の自給が安定化してくるとこの大泉には寺院が立ち並ぶようになり、中枢的な鍛冶工房の役割を終える。この鍛冶工房を誰が支配してきたかはまだ良くわかっていないが、この河内・葛城に本拠を置く物部または曾我系の氏族が朝鮮半島の伽耶・百濟・新羅からの渡来鍛冶集団・新技術を取り込みながらこれらを統率支配して拡大していったと推定される。



鉄滓・羽口出土に見る大泉鍛冶工房遺跡の変遷



古代の主な鉄滓・鉄滓供給分布 (「大泉の鉄より」)

この鍛冶工房を誰が支配してきたかはまだ良くわかっていないが、この河内・葛城に本拠を置く物部または曾我系の氏族が朝鮮半島の伽耶・百済・新羅からの渡来鍛冶集団・新技術を取り込みながらこれらを統率支配して拡大していったと推定される。

この時代 朝鮮半島 鉄の輸出国 伽耶の滅亡・百済の衰退・新羅の巨大化により、良質な鉄の入手が益々困難になりつつあり、大和政権にとっては大量鉄器製造と共に鉄の自給はきわめて重要な課題であり、活発な朝鮮半島諸国との交流を進めた時期であり、積極的な鉄の自給も進めたであろう。

日本での製鉄開始は6世紀半ば 吉備千引カナク口谷遺跡で製鉄炉が出土したのが、始まりといわれているがどこまで遡れるかいまだに良く判っていない。

しかし、この大量・大型の滓が付着した鉄素材が大規模鍛冶工房に持ち込まれていたことを考えると5世紀半ばから6世紀にはある程度実用できる鉄素材が日本で供給されつつあったと考えられる。

たたら製鉄による大量生産が開始される以前に

たたら製鉄につながる鉄精錬がすでにあったのではないか・・・

高師小僧など沼・湿原に堆積した褐鉄鉱による鉄精錬がその第一候補

6世紀以前には まだ実証的なたたら製鉄・精錬の確実な痕跡は認められない。

しかし、大和政権への鉄滓供献分布や各地に残る産鉄伝承を考えると小規模なたたら製鉄とはその製造を異にするかも知れぬが、出雲をはじめ各地でたたら製鉄につながる鉄精錬が始まっていた可能性がある。

この倭鍛冶の鉄精錬技術が渡来の新精錬鍛冶技術と融合して、急速に自給がこの時期進んだとは考えられないだろうか・・・。

その倭鍛冶の基礎精錬技術の候補として沼地・湿原に生える葦などの根に堆積していった水酸化鉄・褐鉄鉱(鳴石・高師小僧・鬼板などと呼ばれる)を原料とした鉄精錬・自給への試みがなされてきたと考えるのは行き過ぎだろうか・・・

たたら製鉄のように砂鉄や鉄鉱石を原料として高温製鉄炉で半熔融還元する製造法では高温を安定とて得る技術が重要。

まだ 十分高温を得られぬこの時代、植物の根に細かく析出した沼鉄・高師小僧などの褐鉄鉱原料は品質はよくないにしても、比較的低温で還元半熔融できないものか・・・

十分確かめてはいないが、可能性ありと???????

学者間では否定されているというものの日本各地にはあまりにも多くのこの褐鉄鉱起源の製鉄伝承は多く、また純度の高い砂鉄や鉄鉱石に比して多くの滓成分を含み細かい針状多孔質のこの原料では小規模ながら900 前後の比較的得やすい低温でも還元焼結が可能と考える。

非効率で小さな塊かもしれないが、その後の鍛錬で鉄素材への加工するのも可能ではないだろうか・・・



豊橋 高師が原でみつけた高師小僧

そう考えると古代製鉄伝承の世界をも含めて考えると、九州(豊後)・出雲・吉備・伯耆・播磨・三輪山・近江・越・伊吹・諏訪など日本各地で大規模な製鉄開始に先立って、多くの自立の試みがあったに違いない。

(最大の課題は鞆羽口の発達に連動した到達温度が KEY 技術と考えられ、土器焼成の釜など土師の技術も射程にはいる)

また、この大県遺跡から出土した鉄滓を分析した大沢正巳氏は大県製鉄遺跡から出土した鉄滓の中に鉄分量が少ない精錬滓が含まれていることをみつけ、この大県の鉄素材には国内素材が持ち込まれていた可能性をしめしている。

そして、大県遺跡の鉄滓成分と比較検討した岡山県・滋賀県の鉄鉱石の化学組成比較等の検証を通じて、滋賀・近江の鉄がこの大県に持ち込まれたのでないかと推察している。

まだまだ 古代 日本での鉄精錬の開始については 解き明かさねばならぬ問題が多く、結論は先に延ばさねばならない。またこの鉄の覇権をめぐる大和王家を中心に朝鮮半島の諸国を巻き込みながら、幾多の戦乱・抗争が起こった。

「鉄の 5.6 世紀」といわれた時代の大県の鉄 それを支配した人たちが演出した隠された古代日本統一のドラマ きっともっと劇的な真相があるに違いない。

また あまり省みられなかった「古代の鉄」が演出したドラマの数々邪馬台国論争・初期大和三輪政権・継体天皇政権の移入誕生・壬申の乱・曾我/物部抗争 藤原氏と天皇の主導権争い そして出雲神話・各地に残る羽衣・鬼伝承など題材には事欠かない。国内ばかりでなくこの時代の中国・朝鮮半島の動静をも抜きにしては考えられぬ。

畿内の鉄を解き明かすことにより ますます面白いドラマが展開すると考えている。「大県の鉄」にそんな重要性を感じています

2004.8.27. 「大県の鉄」をまとめていて

by Mutsu Nakanishi

本資料まとめに参考にした資料

- 「大県の鉄」(大県遺跡発掘調査報告書) 柏原市教育委員会
- 第5回歴博国際シンポジウム「伽耶の鉄と倭国」花田勝広氏講演資料より
- 村上恭通著「倭人と鉄の考古学」
- 京都博物館特別展「倭国」 邪馬台国と大和王権-
- 真弓常忠著「古代の鉄と神々」
- 関裕二著「古代史の秘密を握る人たち」「消された王権・物部氏の謎」

参考

「大県の鉄」資料より 日本における鉄精錬の始まりの検討

大県鍛冶工房出土鉄滓の成分分析評価 概要 「大県の鉄」より

1. 日本古代の製鉄遺跡の編年と系譜関係
第5回歴博国際シンポジウム 「伽耶の鉄と倭国」より
2. 大県遺跡出土鉄滓の分析結果概要 「大県の鉄」より
3. 大県遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織 「大県の鉄」より
4. 大県遺跡の鉄滓成分と比較された岡山県・滋賀県の鉄鉱石の化学組成 「大県の鉄」より

1. 日本古代の製鉄遺跡の編年と系譜関係

第5回歴博国際シンポジウム「伽耶の鉄と倭国」より



2. 大県遺跡出土鉄滓の分析結果概要 「大県の鉄」より

表-4 調査地の概要と調査項目

調査地	遺跡名	遺物名	調査年代	計量		分析項目	分析結果					備考
				重量(g)	容積(cc)		Fe	Si	Al	Mn	P	
大県1	大県1-1	鉄滓	6C中層	89.71	19.0		○	○				分析済
大県2	大県2-1	鉄滓	6C中層	73.36	19.5		○					分析済
大県3	大県3-1	鉄滓	6C中層	88.86	19.3		○					分析済
大県4	大県4-1	鉄滓	6C中層	83.74	20.4		○	○				分析済
大県5	大県5-1	鉄滓	6C中層	81.33	21.8		○					分析済
大県6	大県6-1	鉄滓	6C中層	92.71	20.3		○	○	○	○		分析済
大県7	大県7-1	鉄滓	6C中層	86.72	20.8		○	○	○	○		分析済

表-5 大県遺跡を中心とする鉄滓の化学組成

調査地	遺物名	調査年代	化学組成 (wt%)														備考
			Fe	Si	Al	Mn	P	S	C	N	O	H	Ca	Mg	K	Na	
大県1	鉄滓	6C中層	82.3	16.8	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
大県2	鉄滓	6C中層	81.2	17.1	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
大県3	鉄滓	6C中層	82.5	16.5	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
大県4	鉄滓	6C中層	83.8	15.9	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
大県5	鉄滓	6C中層	81.5	17.2	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
大県6	鉄滓	6C中層	92.8	15.8	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
大県7	鉄滓	6C中層	86.8	16.2	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	

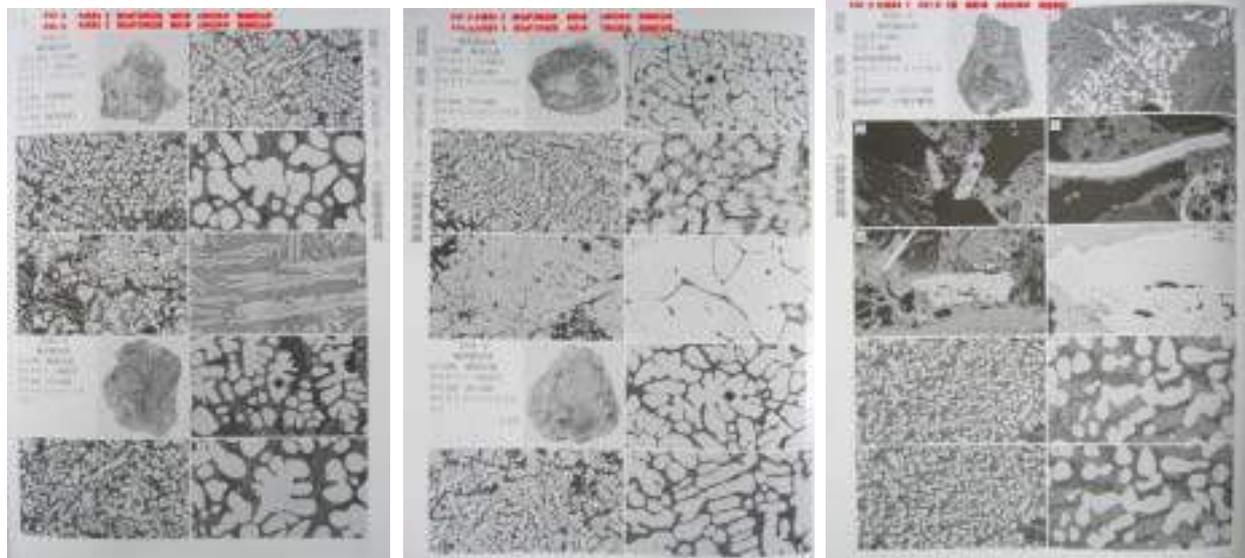
注: 大県1-7は、大県遺跡(6C中層)の調査結果を示す。[大県]は、大県遺跡(6C中層)の調査結果を示す。[大県]は、大県遺跡(6C中層)の調査結果を示す。[大県]は、大県遺跡(6C中層)の調査結果を示す。

表-6 調査結果のまとめ

調査地	遺物名	調査年代	調査項目	化学組成					分析結果	調査結果 (g)	
				Fe	Si	Al	Mn	P			
大県1	鉄滓	6C中層	大県1-1	82.3	16.8	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	18.36g (大県1-1)
大県2	鉄滓	6C中層	大県2-1	81.2	17.1	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	24.30g (大県2-1)
大県3	鉄滓	6C中層	大県3-1	82.5	16.5	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	24.30g (大県3-1)
大県4	鉄滓	6C中層	大県4-1	83.8	15.9	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	16.32g (大県4-1)
大県5	鉄滓	6C中層	大県5-1	81.5	17.2	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	24.30g (大県5-1)
大県6	鉄滓	6C中層	大県6-1	92.8	15.8	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	16.32g (大県6-1)
大県7	鉄滓	6C中層	大県7-1	86.8	16.2	0.2	0.1	0.01	0.01	0.01	24.30g (大県7-1)

W:Wustite(FeO), Mn:Magnetite(Fe3O4), F:Feoxide(FeO・Fe2O3), Fe:Feoxide(FeO・Al2O3)

3. 大県遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織 「大県の鉄」より



「鉄の5・6世紀」古代 大和政権の日本統一を支えた
北河内の大規模專業鍛冶工房 大泉製鉄遺跡 探訪
【完】



13.

「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」の周辺で

-江戸末期長門のたたら製鉄(白須たたら)工程絵巻-

山口県立博物館 平成 14 年度企画展 図録「鉄と人の文化史」

財団法人 JFE21 世紀財団 「たたら 日本古来の製鉄」 より

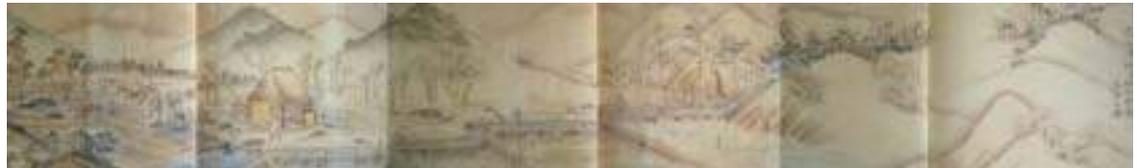


「先大津阿川山砂鉄洗取図」 東京大学大学院工学研究科蔵

江戸末期 長州のたたら製鉄の全工程を描いた全長 46m の絵巻。

北長門「白須たたら鉄山」について 長門での山砂鉄・浜砂鉄での砂鉄採取からその運搬そして白須鉄山山内の様子・たたら場・大鍛冶・小鍛冶による鉄素材の製造そして熱間鍛造・冷間線引き加工による線材製造にいたる原料採取からたたら製鉄・素材加工までの全工程を描いた絵巻物。

江戸時代 全盛期を迎えたたたら製鉄の工程や風俗を示す貴重な資料である。また江戸時代の針金ダイス線引きの図にビックリしました。また、かつて歩き回った長門の海岸・山中がたたら製鉄の関連地として描かれていることを知って、これもビックリ。



砂鉄採取「鉄穴流し」



木炭製造(小炭・大炭焼)



砂鉄と製品運搬



砂鉄仲買



白須たたら 山内 (高殿・元小屋・鍛冶屋・下小屋・下夕小屋・針金作業小屋)



鉄素材・針金製造



大鍛冶



鉄生産(たたら生産・本床づくり)



「先大津阿川山砂鉄洗取之図」を知ったのはもう随分前、岩手県立博物館でトップに配した鮮やかな赤い炎をあげるたたら炉の絵を見て、その鮮やかな炎とたたら炉の作業が正確に描かれているのにビックリしたのが最初でした。

その後 何度かインターネット等でこの絵を見て、これが山口県の北東部の山中にある白須たたら鉄山のたたら炉を描いたもので、たたら製鉄工程を描いた東大所蔵の絵巻であることも知りました。

たたら炉の絵でありながら、なぜ砂鉄採取の「先大津阿川山砂鉄洗取之図」なのか、長く不思議でしたが、全たたら工程を描いた絵図であれば、「山砂鉄」のことばがあってもおかしくない。しかも「大津」は今の長門市 「阿川」は長門市とは油谷半島をはさんで西側に位置する現在の豊北町。

「この絵図は白須たたらばかりでなくこの豊北町・砂鉄採取とも関係する絵図に違いない」・・・と。

でも、美祢・秋芳の花尾山周辺の鉱山地に付随して、たたら遺跡が一二あるものの山口県のたたらは県東北部の山中に集中していると思っていました。

何度も歩いた豊北町でたたら製鉄の痕跡を聞いたこともまったくなし。

一度ぜひ全体絵図を見たいと思いつつ、ほったらかしになっていました。

この夏 「白須たたら」製鉄遺跡を訪ねて 再度山口県のたたら製鉄遺跡を調べている過程で 平成 14 年に山口県立山口博物館が「鉄と人の文化史」としてこの「先大津阿川山砂鉄洗取之図」絵巻を中心とした展覧会を開催されたことを知りました。

また本年 7 月 JFE21 世紀財団が中高生や広く一般の人に鉄の科学的興味を抱いてもらう目的の記念事業として この「先大津阿川山砂鉄洗取之図」絵巻に描かれたたたら製鉄全技術を当時の風俗も加えて、絵巻とイラストで 一般の人に解り易く、しかも技術史として正確に描画、記述した初めての著作「たたら 日本古来の製鉄」を刊行されたことを知りました。

山口県立博物館 平成 14 年度企画展 図録「鉄と人の文化史」

財団法人 JFE21 世紀財団 「たたら 日本古来の製鉄」

絵図に関する資料をみせていただきたいとの連絡をとり、資料を送っていただきました。

本当に感謝です。

この二つの資料から、「先大津阿川山砂鉄洗取之図」絵巻の全体像を見ることができたばかりでなく、近世 江戸時代 たたら製鉄の全盛期のたたら製鉄技術を知るまたとない素晴らしい資料であることが判りました。そして かつて歩きまわって薄々感じていた長門の海岸・山中がたたら製鉄と深く結びついていた地であることなどを知ることができました。私にとっては土地の人に聞いてももうわからなくなって、物好きと言われていたのが、本当になって「ひょうたんからコマ」みたいなものです。そんな驚きで眺めた絵巻「先大津阿川山砂鉄洗取之図」の概要抜粋を自分の持っている写真と並べながら取りまとめました。

また、冒頭お話しした「先大津阿川山砂鉄洗取之図」の題の由来はこの絵図が山砂鉄採取で始まっており、この光景を示した絵に「津阿川山砂鉄洗取之図」と墨書されていることによるらしい。

【 内 容 】

1. 「先大津阿川山砂鉄洗取之図」に描かれた北長門の山並みの今
 - 1.1. 砂鉄採取の地として描かれた北長門・阿川(現 豊北町)の地
山砂鉄採取の地 豊浦町 粟野川流域
 - 1.2. 油谷半島両側に広がる油谷湾の阿川浦・伊上浜と深川湾の長門境川浜
 - 1.3. 白須たたら鉄山
2. 長門市俵山の山中 「釜(鑪)」の地を訪ねて
-俵山の山奥に黒川山たたらを訪ねる 1993.9.15. -
3. 「先大津阿川山砂鉄洗取之図」に近世・江戸時代 全盛期のたたら操業技術を垣間見る
「たたら 日本古来の製鉄」と「鉄と人の文化史」より

1. 「先大津阿川山砂鉄洗取図」に描かれた北長門の山並みの今



右端 この絵図の最初に「先大津阿川山砂鉄洗取之図」の墨書がみえる

1.1. 砂鉄採取の地として描かれた北長門・阿川(現 豊北町)の地 山砂鉄採取の地 豊浦町 粟野川流域

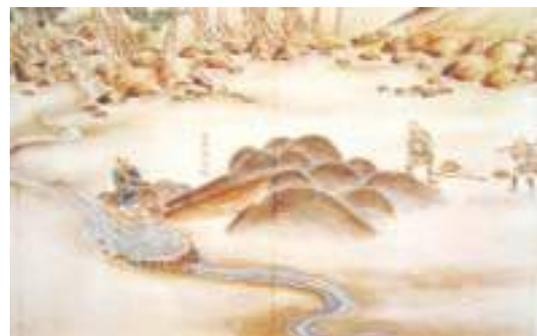
19世紀幕末の「白須たたら」鉄山では 山砂鉄を阿川村(現豊北町)で鉄穴流しにより採取。また 浜砂鉄を伊上村(現油谷町)や 境川(長門市)の浜で採取。これらの鉄原料は阿川浦の港から積み出され、惣合村川尻で陸揚げされ、白須鉄山に持ち込まれた。



阿川村(現 豊北町)での鉄穴流しの様子



阿川村(現豊北町)での鉄穴流し 砂鉄清め場



浜砂鉄洗取

秋吉カルスト台地の西側 秋芳町の嘉万 大滝山から長門市にかかる花尾山・俵山 一位山そして豊北町白滝山にかけての北長門の中国山地は 鉱物資源帯であり、鉄分を含む中国山地深成岩ベルトの西端にあたる。奈良の大仏の銅を提供したのもこの地。この地での近世



江戸時代のたたら製鉄の分布を右の図に示すが、大量生産の開始を告げる天秤鞆そして鉄穴流しの技術導入による山砂鉄の利用により、この地にも鉄山が営まれるようになったと考えられる。

【 山砂鉄採取の地 豊浦町 粟野川流域 】



白滝山から山間を流れ下る粟野川流域の盆地 豊北町田耕周辺

蓋之井鉄山・小河内鉄山が営まれ、その後この谷筋から山砂鉄が採取され白須鉄山に運ばれた



白滝山

白滝山から油谷半島・油谷湾を遠望

白滝山から粟野川流域 田耕周辺

山口県美祢の街から豊田町を抜け、山間を西北へ約 15 分ほど峠を越えて走ると山間を北に広がる狭い盆地に出る。

東側には特徴ある垂直の岩壁をみせる白滝山・一位山などの山並が俵山・長門市との壁となって北の油谷半島へ連なっている。

この白滝山・一位山を源流とし、この狭い帯状の盆地を北に流れるのが粟野川である。



豊北町を南北に流れる粟野川

「先大津阿川山砂鉄洗取図」の絵図の背景の山々は美祢にいる時には特牛(コットイ)や油谷の海岸へと出かけた道筋であり、この地の東に垂直の岩肌を見せる白滝山は滝・岩壁の間をすり抜けて登る山道が魅力で何度となく登ったところ。この山中で砂鉄が採取されたとは聞いたことがなかった。

思い返してみても 鹿・猪に出会った思いは何度もあるのですが、砂鉄の痕跡などまったく頭に浮かばない。

でも、確かに北の俵山から油谷半島へ越える山筋では真っ赤な土がいたるところで見られ、ぼんやりと鉄分の多い山のイメージ。

また、山向こうの東側 長門 俵山から美祢・秋芳にかけては 鉾山・たたら遺跡が点在すること知っていましたが、まったく以外で、山口県立博物館でもらった資料でここが近世長門の鉄を支えた地であること初めて知りました。

もう ほとんど痕跡もなく地元でもほとんど忘れ去られようとしています。

1.3 油谷半島両側に広がる

油谷湾の阿川浦・伊上浜と深川湾の長門境川浜

北長門海岸後背の鉄分を含む深成岩ベルト地帯から日本海側に流れる粟野川・大坊川・深川川などにより、油谷湾や深川湾に土砂とともに運ばれた砂鉄は浜砂鉄としてその海岸(伊上浜・長門境川浜)に堆積。白須たたらではこの砂鉄も製鉄原料として惣合村川尻の港で陸揚げされ利用された。



油谷湾 伊上浜方面



深川湾 黄波戸海岸より



油谷湾 伊上浜周辺



深川湾 長門市境川周辺 只の浜

日本海に突き出た油谷半島が静かな湾を形成し、油谷湾 伊上浜では正面に油谷半島 深川湾長門境川では青海島が横たわり、どちらも美しい砂浜がひろがる北長門国定公園内になっている。

1. 白須たたら鉄山



白須たたら たたら場

絵図で描かれた鉄山は山口県東北部阿武町の白須たたら。
海岸沿いの惣の集落から白須川沿いに山へ分け入ったところ。
現在はまったく人気のないダム湖の対岸に静かに眠っている。
往時の繁栄がまったく感じられぬ場所になっている。



2. 長門市 俵山の山中に「鈔(鑪)」の地名

-俵山の山奥に黒川山たたらを訪ねる 1993.9.15. -

1993年仕事で美祢に赴任してまもなく、五万分の一の地図に「鈔」の名前を見つけて、たたら製鉄の里に違いないと出かけました。

本当にまわりになにもない山中に「鈔」の地名がぼつんと孤立して記されており、もう興味深々であった。

地図では長門湯本温泉と俵山温泉を結ぶ道から奥に細い道がついていて、一番山奥のどんつきに「鈔」の文字。

周りの人に聞いてもまったくわからず、五万分の一の地図を頼りにでかけたのを覚えています。





長門湯本温泉から俵山への山越の路を約 15 分 山を越えると道沿いに山里の田園風景が広がる。夏にはホタルが飛び交うのんびりした里である。その一角に 806 年弘法大師創建と伝えられる古刹能満寺がある。赤い石州瓦が美しい。この寺の先で、細い道に曲がって集落を抜け、山に向かって入ってゆく。



長門市 「鉦」への入口
能満寺界隈の山里
1993.9.15.

能満寺の集落を抜けるとジャリ道となって、細い川沿いの谷合いを山奥に入ってゆく。もう家等まったくなくなって 15 分ほど奥に行き、もう廃村の集落かと思っていると突如山中に一軒屋が現れ、ここから先は小道になって道がなくなる。



黒川川沿いの「鉦」への道 「鉦」の一軒屋 1993.9.15.

家の表札の脇に「鉦」の文字がある。きつと たたら製鉄の里と思われるが、誰もおられず、おまけに不信な侵入者に犬にほえられ 話をきけず、やむなく引き返す。昔はにぎわった道だったろうなあ・・・と思いながら帰りました。

最近 山口県立博物館でもらった資料にここが黒川山鉄山の印がつけられており、やっぱり「長門市鉦」は「たたら」の里。

博物館の資料によると

1693 年の記録によると萩藩領では生雲村の渡川山(阿東町篠生 長門峡) 嘉万村大滝山(秋芳町嘉万) 同河原上山(秋芳町別府河原上) 渋木村(長門市渋木)の 4 箇所鉄山が操業しており、かつて 黒川山(長門市俵山黒川鉦) 金ヶ口山(長門市俵山金ヶ口) 大池山(場所不明)でもたたら操業が行われていた。そして 18 世紀以降 たたら製鉄の先進地 石州から永代鑪・天秤鞆の技術が導入され、白須山や栗野山・大板山鉄山など石見の鉄師により操業され、大量生産が始まり、19 世紀萩藩の藩営製鉄事業へと移行してゆく。

長門市黒川 釧 の地を訪れてから 11 年 今はどうなっているのだろうか・・・
今度 美祢に帰ったら 一度訪れたいと思っている。

2004.9.25. 神戸にて

3. 「先大津阿川山砂鉄洗取図」に 近世・江戸時代 全盛期のたたら操業を垣間見る

1. 鉄穴流しと山砂鉄堀

10月から3月は稲作田に水を流さないで河水が使えるので、この農閑期の冬に山砂鉄の採取が行われていたという。谷川に幾つもの堰を設けて、比重の重い鉄と土砂を選別して、砂鉄を採取した。



鉄 穴 流 し

土砂(主として火成岩)中には砂鉄が 0.3~数% 含まれているが、鉄穴流しにより、鉄分を選別することにより、砂鉄成分が約 80%まで高められる。

2. 原料と製品運搬



砂鉄運び



割り鉄出しと飯料米

「砂鉄七里に炭三里」という言葉がある。

砂鉄は細かく運びやすいが、炭は軽がかさばって運びにくい。したがって 炭が得られる山間地に鉄山が経営された。 また 鉄山からは製品である割鉄が運び出された。

これらの運搬には馬が用いられ、人の背でも運ばれた。

3. たたら操業と天秤鞆

たたら製鉄による大量生産の開始には鉄穴流し・山砂鉄による大量の原料確保と鞆の改良が進み大型の永代たたらが可能となり、さらに 1691 年天秤鞆が出雲で発明される。

永代たたらは貞享(1684~1687)・元禄(1688~1703)の頃に出雲・安芸に現れ各地に波及していった。

石見には享保(1716~1735)年間に波及し、その流れが、



長門に及ぶ。

4. 大鍛冶 割鉄(包丁鉄)作り

子割りした鉤を小炭で加熱し、鍛造で不純物除去・炭素調整しつつ板状の割鉄(包丁鉄)をつくる。鉤の加熱には高温が必要で、吹き差し鞆が使われている。

また 鍛造には飛び散る剥片を避けるため鉄を挟む大工は面をつけ、鋸方のテコは裸で 鋳を振り下ろしている。



大鍛冶 割鉄(包丁鉄)作り

5. 針金線材製造



包丁鉄から熱間鍛造による線材作り、そして冷間ダイス線引きによる針金作りの様子が克明に描かれている。こんな江戸時代のダイス線引きの様子を見るのは初めてでビックリである。

一度是非とも見たかった「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」

絵図そのものを見たわけでは在りませんが、下記資料で、抜粋をまとめました。

山口県立博物館 平成 14 年度企画展 図録「鉄と人の文化史」

財団法人 JFE21 世紀財団 「たたら 日本古来の製鉄」

近世江戸末期 たたら製鉄全盛時期のたたら製鉄の全工程の様子が克明に描かれているのにビックリでした。しかも この絵図がかつて歩き回った北長門 長門市から油谷半島 豊北町にかけての中国山地西端歩を砂鉄の産地として描いており、おもいもよらず、地元でももう忘れ去られようとしている山中に江戸期のたたら遺跡があったこと知って 昔の写真を持ち出して重ねてみました。

あまり品質の高い砂鉄がでず さほど大きなたたら製鉄も営まれなかったと思っていた山口県長門。
そして山口県北東部の中国山地。それらが、白須たたら鉄山などを通じて 江戸末期幕末の長州を支えた鉄の大生産基地と知ってこれにも驚いています。

この絵図の存在 そして 古代から連綿と続く山口県のたたら製鉄については、山口ではほとんど忘れ去られようとしており、それらに地元でも目を向ける人が増えればよいと願っています。

2004.9.25. 神戸にて Mutsu Nakanishi

なお、すでに訪ねて資料にした下記の山口県のたたら遺跡については今回まとめには入れませんでした。
ご興味のある方は下記ご参照ください。

1. 山口県のたたら遺跡 秋芳河原上製鉄遺跡・大板山製鉄遺跡
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa09.pdf>
2. 「須佐高山の磁石石」 & 白須鉄山遺跡を訪ねて 山口県須佐町
中国山地の砂鉄ペルトの西端 山口県北東部の和鉄地帯を訪ねて 2004. 7. 2.
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/11jsyaku.pdf>

「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」の周辺で

-江戸末期長門のたたら製鉄(白須たたら)工程絵巻-

【完】



14.

旧暦霜月8日(11月8日) 金山祭・鞆祭 (ふいごまつり)



岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 江戸 鞆祭の様子を描いた図

「鞆祭・古式鍛錬式」 鍛冶屋か? 家の中に鞆が見え、蜜柑まきの様子が描かれている

11月になって「鍛冶屋の祭 鞆祭。まもなくだ。今年是非見に行きたい。」

昨年訪ねた美濃一宮金山彦命を祭る「南宮神社」に電話すると11月8日(月曜日)朝 祭礼とともに古式鍛冶鍛錬式が見られるという。

また、播磨金物の街「三木」では金物祭にあわせ11月6日(土)朝早く 三木城址にある金物神社で鞆祭が古式にのっとり行われるという。

チャンスと三木市金物神社の鞆祭 そして 岐阜県垂井にある南宮神社の鞆祭を見学に出かけました。

三木市 金物神社 鞆祭

2004.11.6.



岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭

2004.11.8.



「鞆」は金属加工に使う火を強くおこすために風を送る装置。

江戸では 旧暦の霜月8日(新暦でいうと12月初め) 鞆祭の日に、鍛冶師・鋳物師・鋳(かざり)師・時辰(とけい)師・箔打師など鞆を使って金属加工をする職人たちが、お稲荷さんに供物とともにみかんを供える習慣があった。別名「たたら祭」とも称し、仕事を休み、鞆を清めて注連縄を張り、祭壇に新穀・新酒・蜜柑・海の幸を供え祖神のご加護を感謝し、火防・繁栄を祈願する祭りであった。蜜柑を満載して江戸へ運んだ紀伊国屋門左衛門 そして、この日の早朝、蜜柑をまいて近隣の子供に捨わせる「蜜柑まき」の催しが繰り広げられた。



江戸時代の千石船の絵馬

この鍛冶屋の鞆祭に必要なみかんを嵐の中 紀州から運んだ豪商紀伊国屋文左衛門。

「沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀の国蜜柑船」の紀伊国屋文左衛門である。

また、日本画家 横山大観は この鞆祭の「みかんまき」の光景を生き活きと書いた絵があるという。

鞆を使わなくなった現在でも、金属加工業者が奉る神社 鉄や金属加工と関係する神社(金山彦命や天目一箇命、金屋子神などを祭神とする神社)では、年に一度 この鞆祭の祭礼に火床を設けて火を起こし鞆で風を送る「金山祭 鍛錬式」または「火入れ式」が行われる。

霜月8日を陰暦のまま行うところと新暦の11月8日、或いは季節感から月遅れの12月8日に開催されるなどがあり、今も各地でこの祭礼が鉄・金物を扱う商工業者を中心に行われている。

鞆祭りの起源は、15世紀の中頃、当時、鉄砲鍛冶の中心であった堺の鍛冶屋が伏見稻荷の御焚の火(霜月8日)に、お礼をうけて鍛冶場に祀る風習が、稻荷信仰と一体となって地方へと拡散したという。そのルーツは定かでないが、次のように語られている。

鍛冶屋、鋳物師、石工など鞆を使う職人たちは、旧暦11月8日を鞆祭と呼び、この日は、一日中、仕事を休み、鞆を清めて、お神酒、赤飯、ミカンなどを供え、守護神の稻荷神を祭った。この行事は、昔、三条小鍛冶宗近が刀を打つとき、稻荷神が現れて相鋸を打って助けたとか、この日の卯(う)の刻に天からたたらが降ってきたので、その記念に祭るのだと伝えている。

一方 12月1日が「鉄の記念日」。

こちらは、1857年12月1日、岩手県釜石の製鉄所が洋式高炉によって鉄の操業を始めました。この洋式高炉によって、日本における鉄の近代的な生産が始まった。日本鉄鋼連盟はこれを記念して1958年、12月1日を鉄の日と制定しました。

旧暦霜月8日(11月8日) 金山祭り・鞆祭 (ふいごまつり)

内容

1. 三木市 金物神社 鞆祭見学記 2041.11.6.
2. 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 見学記 2004.11.8

- 参考 1. 紀伊国屋門左衛門 「沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀の国蜜柑船」
参考 2. 「村の鍛冶屋」衣川製鎖工業(株)のホームページより 横山 大観『鞆祭』

参考 1. 紀伊国屋門左衛門 「沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀の国蜜柑船」



船絵馬に描かれた「千石船」

貞享2年の秋、みかんの収穫期を迎えた有田川流域では、例年にない長雨にたたられ、その上、海は、暴風雨で荒れ狂い江戸への船便は、途絶えたままでした。

北湊の荷揚場には、黄金色のみかんを詰めた江戸送りのみかん籠が山のように積まれました。

やがて、江戸の鍛冶師達が毎年、旧暦の11月8日に祝う鞆祭に近い。目の前の荒れ狂う海に船出する勇気のある船主はいない。千載一遇のチャンスだ。今江戸へみかんを運べば、巨万の富が得られる。血気盛んな青年紀伊国屋文左衛門は、怒濤の熊野灘、遠州灘へ向けて一身を賭けて船出した。



図1 江戸時代の鍛冶屋（『和国諸職絵尽』より） 図2 江戸時代のふいご祭（『大和耕作絵抄』）

参考 2. 横山 大観『鞆 祭』

「村の鍛冶屋」衣川製鎖工業㈱のホームページより

横山 大観『鞆 祭』（ふいごまつり）

明治30年（1897）頃 絹本彩色・軸装

横山大観記念館蔵

「村の鍛冶屋」衣川製鎖工業㈱のホームページ

「鞆の話」より

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/huigo/index.htm>

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/huigo/02111.htm>

本作品では、子供達が屋根の上から投げられる蜜柑を奪い合う様子が生き生きと描かれている。

我先に蜜柑を拾おうとして、相手の髪の毛を引っ張ったものの、逆に頭を押さえつけられ、お互いに身動きの取れなくなっている少年や、逃げまどう犬の姿から祭りの日の活気が漂ってくる。



横山 大観 『鞆 祭』

旧暦霜月 8 日(11 月 8 日)金山祭り・鞆 祭 (ふいごまつり)

14.1. 金物の街「三木」と三木 金物神社 鞆祭 2004.12.6.



日本で最初の「金物の町」と言われる三木市。

神戸から北西に約 30km 加古川中流の播磨の低い丘陵地に広がる戦国大名別所氏の古い城下町である。

「ナイフといえば肥後守」 この肥後守はその名から九州産と思われていますが、三木の組合業者でなければ使えない登録商標である。

この三木市の金物産業は、事業所の規模は 9 人以下が約 80% と圧倒的に家内工業型が多いのですが、三木市の工業生産額の約 32% を占める地場産業である。

現在では、伝統的な利器工匠具類の比率は低下し、新しく工具を中心とした製品が多く開発、生産されています。

1. 金物の町 三木

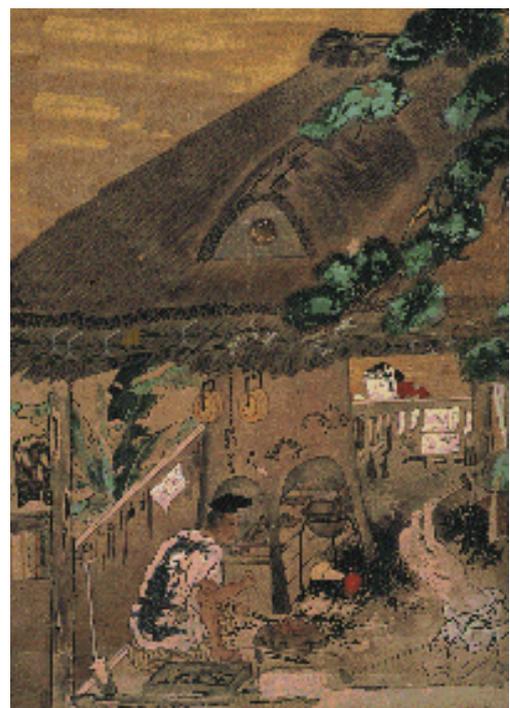
「三木金物」の起源は、今からおよそ 1500 年も昔、五世紀の中頃のこと。

天目一箇命(あめのまひとつのみこと)を祖神とするこの地方の大和鍛冶と、百済の王子恵が丹生山へ亡命してきた時に連れてきた技術集団、韓鍛冶が技術を交流。

すばらしい技術を持った韓鍛冶が三木に住み着いて、鍛冶を行ったのが始まりといわれる。

その後、鍛冶の発達とともに優れた技術を持つ大工職人を数多く輩出し、平城京、平安京の時代から国宝級の建物を手がけるようになる。(日原大工と呼ばれた)

戦国時代に入ると刀剣づくりが盛んになり、中国街道筋の城下町として大いに繁栄を誇った三木でしたが、秀吉の三木城攻めで一旦 三木の古い街並みも、文化の足跡もすべて焼失しましたが、その後、秀吉は三木の新しい街づくりを始め、「金物の街 三木」が、この時から本格的に培われ



てきた。

別所長治の三木城を攻め落した秀吉が、三木の街の復興を進める中で、多くの人々が再び町に帰るとともに、焼失した寺や家屋の復旧のため各地から大工職人が集まり、彼等に必要で大工道具を供給する鍛冶職人が増え、これが現在の発展につながる足がかりとなった。

さらに江戸時代、農閑期になると、大工職人は、京、大阪、丹波、但馬へ出稼ぎに行きました。

この時に持っていった大工道具のすばらしさが他国でももてはやされ、次に行く時には品物をもって売りさばくようになりました。これが、全国を股にかける三木金物卸商のきっかけです。



三木市 上の丸界隈の家並み



上の丸城址公園とそこから見る美嚢川の流れ

こんな 三木市の中心麓を加古川に注ぐ美嚢川が流れる上の丸の岡の上 旧三木城址に隣接して、昭和10年街の金物産業に従事する人たちによって金物業者共同の守護神として創建された「金物神社」がある。同時に この金物神社の境内には三木市の金物博物館があり、三木金物の歴史展示が常設され、その入口には童謡「村の鍛冶屋」の碑が建てられている。

毎年 秋 11月8日に一番近い週末に街をあげての金物祭が開催され、その幕開けの早朝(11月第一土曜日)金物神社の祭礼として 街の金物産業に従事する人たちによって「鞆祭」(技量、人格ともに優れた匠が御番鍛冶となり年番制で行われるふいごの火入式(鍛造))が催される。

本年は11月6日 早朝 9時から 金物神社でのお祭に続いて、境内にある古式鍛練場で「鞆の火入れ」に続いて「古式鍛錬」が行われた。



三木 金物神社 境内 2004.12.6. 早朝

写真下左より 金物神社社殿 古式鍛練場と金物博物館 金物博物館前の村の鍛冶屋歌碑

2. 三木 金物神社躰祭 2004.12.6.



前日電話で確かめると金物神社躰祭の開始は朝8時30分。街は金物祭でごったがえすという。

11月6日 早朝 神戸の家を出て、50ccバイクで三木へ向かう。

神戸の街の北を東西に伸びる丘陵地沿いに走る神戸 三木街道を走って 約40分ちょっとで三木の街。朝早いので、気抜けするほど街はまだ静か。市役所のある丘の広場周辺だけが、金物祭の数々の屋台店の準備であわただしく人が動いている。

上の丸の丘へ上がってゆく道がわからず、一旦神戸電鉄沿いの上の丸の駅前へ出て、古い家並みが続く上の丸の商店街を抜けて上の丸の城址公園へあがってゆくと、林の中にたくさんの旗がはためく「金物神社」があった。林の一角 石の鳥居と石碑の垣で囲まれた境内の中にモダンなコンクリート作りの社殿と金物博物館 そして、これらの間に古式鍛練場があり、躰祭に参列する街の金物工業の関係者であろう30人ほどの人たちが礼服に身を固め、社殿前に座っている。

後は、報道関係の人と僕みたいな野次馬数名。静かなものである。

考えてみれば、町一般の人にとっては、町おこしの「金物祭」は知っていても、躰祭の祭礼など関係なし。ちよつと拍子抜けであるが、ゆっくり見られる。

三木市立金物資料館

金物神社の鳥居をくぐると直ぐ正面に立派なコンクリート造りの金物資料館がある。正面に小学唱歌「村の鍛冶屋」の立派な歌碑があり、「ふいご」の形をしたモニュメントを中心に前後に歌詞と楽譜が刻まれている。

朝早いがちょっと時間があつたので、境内のなかにある金物博物館に入れてもらう。

博物館の中には数々の三木金物が、その歴史とともによく整備されて展示されていた。



金物博物館正面にある
小学唱歌「村の鍛冶屋」の歌碑



金物博物館 展示された三木金物

三木 金物神社 鞆祭



9時きっかりに社殿では街の関係者・金物業の人たちによって、鞆祭の神事がはじまつた。社殿に隣接した古式鍛練場には幕が張られ、鞆と炉には神かざりがつけられ、掃き清められた鍛練場の端には、「蜜柑」がお供物として奉られている。社殿での神事後の火入れ式・古式鍛練を待っている。三木の匠が御番鍛冶となり、小刀の古式鍛練が行われる。社殿での神事が終わり、神主の手で採火された火が、古式装束に身を固めた御番鍛冶の手に渡され、古式鍛練場の鍛冶炉に移された。そして、匠の手で鞆の風送りが始まった。

ふいご火入れ式 2004.12.15.



いよいよ 火の中に地金を入れられ、加熱が始まる

ほう酸などの成分を塗った地鉄に刃となる鋼片が重ねて 炉に入れられ、加熱が開始されて小刀の鍛練が始まる





鍛造 水打ち

数回に分けて 加熱鍛造が繰り返された後、棒状に素延べが行われ、真ん中で斜めに刃が打ち込まれ、二つの小刀素材に分割され、火作りに移ってゆく。

金槌や金敷が水につけられ、赤い素材に打ち下ろされる。の時に瞬間的に発生する水蒸気が表面にある滓などを吹き飛ばしてゆくという。

この加熱鍛造工程は水打ちとも呼ばれ、地鉄に刃鋼が接合されるとともに、表面のスラグや不純物がたたき出される。

そして 火作りに入り、刃の部分を含めて、金槌で小刀の形に厚さ・形が整えられてゆく。

そして 仕上げ鍛造がなされ、加熱後 横に置かれた水の中に焼き入れ・セルフの焼き戻しが行われ、約 30 分ほどで、古式鍛造が終わった。

どんな儀式だろうと、興味深々であつた鞆祭。

こんなに身近で、しかも人に邪魔されずに古式鍛造の現物を見たのも始めて……。ラッキーでした。

また、江戸期 江戸の鞆祭のために嵐の海をついて、紀の国の蜜柑を宿へ運んだ紀伊国屋文左衛門。

その「蜜柑」は現在の三木の鞆祭でも、古式鍛練場の横に備えられていた。

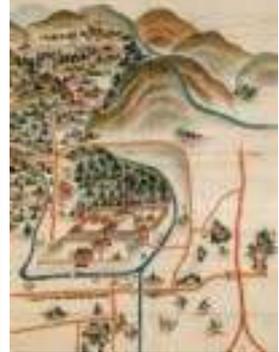
鞆祭を見た後、静寂の上の丸の城址公園をぶらぶら歩いて、街に出ると街は各地から 15 万人もの人が集まるといふ「金物祭」でごった返していた。

2004.11.6. Mutsu Nakanishi

旧暦霜月 8 日(11 月 8 日)金山祭り・鞆 祭 (ふいごまつり)



14.2. 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 2004.11.8



1. 南宮大社と鉄

鈴鹿・養老と伊吹の山々の狭い谷間に広がる関ヶ原を抜けて、美濃平野への出口が垂井。広大な美濃平野の北西の隅にあたる。この鈴鹿・養老の山々の裾に南宮山があり、そこに南宮大社がある。

垂井駅から南西約 1km の位置である。

南宮山は不破山とも呼ばれ、美濃の仲山の名で万葉集や古今集に詠まれている。

後に南宮山のある鈴鹿・養老の山々と対峙して北側に立ち並ぶ伊吹の山裾に美濃国の国府が置かれ、南宮大社の場所が、国府の南に位置するところから南宮大社と呼ばれるようになった。

鉄と関係深い金山彦命を主祭神に、美濃国一の宮として、また、全国の鉱山、金属業の総本宮として今も深い崇敬を集めています。

社伝では、神武天皇即位の年の創建とされるきわめて古い神社である。

慶応 5 年（1600）の関ヶ原合戦で社殿のすべてを焼失。寛永 19 年（1643）、3 代将軍徳川家光が再建したといわれています。

広い境内には本殿・拝殿・燐門など、朱塗りの華麗な姿を並べ、江戸時代の神社建築の代表的な建物 15 棟が国の重要文化財に指定されている。



『 この地になぜ出雲系の鉄の神金山彦命が祭られる大きな神社があるのか ?????? 』
この点については良くわかっていないが

垂井の町を東西に流れる相川をはさんで北側の伊吹山麓の井吹の集落は、古代の鉄に関係した渡来人伊福氏の本拠地。鈴鹿と伊吹の山の間を吹き降ろす伊吹嵐を使って、たたら製鉄が始まるその以前に「先たたら古代製鉄」を伝えた場所でないか考える人もいる。

また、この垂井のまちから北東に延びる古代の東山道(中仙道)を少し行くと古代の美濃国府があり、その後背地には古代より赤鉄鉱を産出した金生山があり、その麓には前方後円墳が連なる赤阪古墳群がある。ここも 金生山の鉄を背景とした古代豪族の根拠地ではないかと言われる。

まさに南宮神社から徒歩でも2時間もかからない範囲に直接的ではないが、古代鉄の痕跡が点々である。

さらに、南宮神社のある南宮山も「美濃の中山」と呼ばれた地。

これも古代鉄の王国吉備「真金吹く 吉備の中山」を思い浮かべる。

「この地は古代鉄の先進地であったのではないか?? そして、その鉄の先進地の守護の神として、南宮大社が建てられ崇拝されてきたのではないか????」と。

私はそんな風に今は考えている。

美濃一宮であると同時にそんな鉄の歴史を秘めた南宮大社は 全国の鉱山・金属業の総本宮として広く崇敬を集め、11月8日 盛大な「金山祭・鞆祭」が催され、この日には日本各地から数多くの金属・鉱山業の人たちが、参拝に訪れる。

2. 垂井駅から南宮神社へ 2004.11.8.早朝

朝10時からの鞆祭に間に合うように一番の快速電車で飛び乗り新快速に乗り換えて米原へ。

米原から大垣行の電車で約30分 9時前に垂井駅に着く。

一度 昨年来たことがあるので、今日は余裕のWALK。

今日は 南宮神社で鞆祭を見て、後は 足任せ・・・ 美濃路を鉄を訪ねてぶらぶら walk。

前回 夜になってしまった井吹の里 伊富岐神社へ行って、赤鉄鉱の金生山へ登ろうとあらかじめのスケジュール。時間があれば 刀鍛冶のおられる関にも足をのばしたいのだから・・・ まあ 後は風来坊である。

垂井駅の南 宮代地区 南宮神社 参道から南宮神社正面へ

垂井駅から赤い大鳥居を目印に街中を抜け、国道に出て、常夜燈のある石鳥居の所からまっすぐに南に伸びる街道筋を宮代の集落にはいる。落ち着いた古い家並みが続く南宮大社への参道である。

新幹線のガードをくぐると高さ20mを超える朱塗りの鋼鉄製大鳥居。

これを抜けると程なく、南宮山の森をバックに建つ南宮大社の正面へでる。

ここで街道は90度東に曲がるが、その角にある松並木の際に「右 伊勢・養老道 左 垂井」の道標。

右手には朱塗りの大きな楼門が見える。



垂井駅南を東西に走る国道から 南へ伸びる南宮大社への街道筋 2004.11.8.



南宮大社 正面前

朝 早いこともあって、静寂そのもの。「南宮大社 祭神 金山彦命 11月8日鎮座祭」の立て札が立っている。静寂の中とはいえ、次から次へとタクシーに乗った一団がやってきて、南宮神社に入ってゆく。大きな南宮大社のお祭というから、もつと人出の多い祭りと思っていたが、界限そのものは 本当に静かなものである。

楼門をくぐって境内に入ると 正面奥に社殿 その前に舞殿。朱塗りの建物が玉砂利の白 バックの山の緑に良く映える。 タクシ・ でやってきた一団は次々と「金山大祭受付」の所から社殿に昇って行く。バスでの一行も到着。 いずれも金属加工業の団体や会社の人たちで年に一度のお参りである。

社殿の前には立派な「舞殿」があり、この神社の格式を思わせる。

その舞殿には隅に鞆と炉が据えられ 鍛練場が作られて、ここで鞆祭・古式鍛練が奉納される。

老人が一人舞殿に上り「古式鍛練・鞆祭」が行われる鞆の調整などの準備をもくもくとすすめている。

また、あわただしくテレビの関係者がカメラ位置・カメラアングルの調整をしている。



南宮神社 社殿と舞殿 2004.11.8.



舞殿にしつらえられた鍛冶場と鞆 2004.12.8.

鞆祭が始まるまで、時間があるので、森に囲まれた静かな境内や、後背地の南宮山の上り口である不破高校のあたりまで、ぶらぶら上って、また、境内に帰ってきた。残念ながら この南宮山から流れ出る小さな幾筋かの谷川があるが、鉄の痕跡はみつからなかった。

社殿の端の軒下には鍛冶製品を取り付けた多くの奉納絵馬が飾られ、その下には数々の鉱石も奉納されている。

南宮神社の北 数キ口先の金生山の赤鉄鉱も奉納されている。



金山祭鍛練式 奉納絵馬



奉納された鉱石



年々の金山祭鍛練式(鞆祭)で古式鍛練を奉納した匠たちの奉納絵馬
「奉行 横座 先手 吹子」の名前が記されている

奉納された絵馬をよく見るといずれもその年々の金山祭鍛練式(鞆祭)で古式鍛練を奉納した匠たちの奉納絵馬である。

「奉行 横座 先手 吹子」の名前が記されている。

奉行：監視役、 横座：司令 火箸で鉄を支え、鍛練作業を指揮、
先手：鉄を鍛える役、 鞆(吹子): 火をおこす役

鍛練作業はこれらの人たちの合同作業で、毎年 年番で鍛造にたずさわる匠の中から選ばれるのであろう

3. 金山祭鍛練式 ・ 鞆祭



10時になって、社殿で神事が行われた後、舞殿には、神主はじめ、正装した鍛練奉納者 舞楽を奉納する人たちが座り、社殿に向かって、祭壇が設けられ、榊とともに「火打石」が置かれ、雅楽が演奏される中で鍛練式が始まった。そして、三々五々 参拝を済ませた人たちが4,50名ばかり舞殿を取り囲んでいる。

【美濃一宮 南宮大社 金山祭 古式鍛練・鞆祭 2004.11.8.】



火打石による 鞆 火入れ式 2004.12.8.



鍛練 2004.12.8.





打ちあがった鉄の奉納 2004.11.8.



舞楽奉納



鞆への火入れは 火打石による火入れ式として行われ、横座・鞆の兼用 先手2人の3人の匠・鍛冶職人の手で鍛練が始まった。

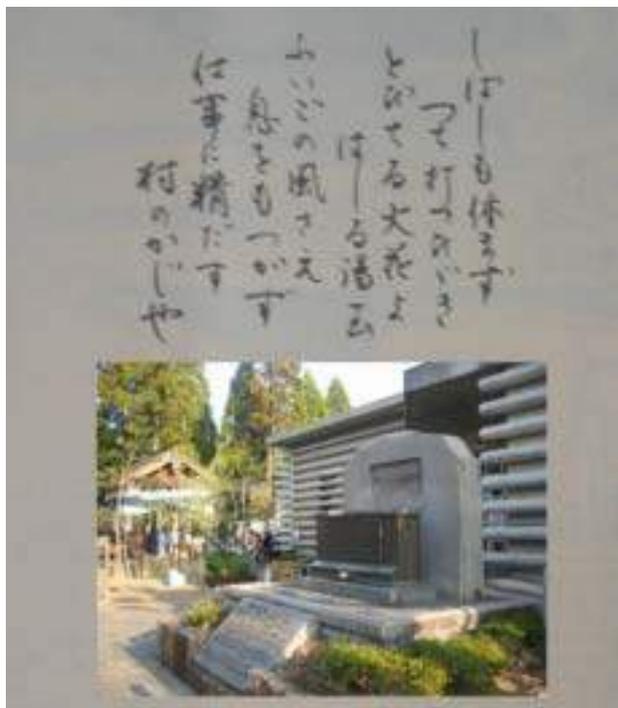
舞殿には上れないので、鍛練の様子は良くわからなかったが、雅楽が奏上されながらの鍛練。

伝統と荘厳さを感じられるこの鞆祭に、伊吹嵐が吹き降ろすこの地はやっぱり、鉄の先進地でなかつたか・・・と思いをめぐらしていた。

「金物の町」兵庫県三木市金物神社 そして 金属工業に従事する人たちの総本宮その創建は古代に遡る南宮大社の2つの場所での「鞆祭」を見学することができた。

いずれも 古式鍛錬を神前に奉納する式であるが、その主役は そばに置かれた「鞆」。鞆なくしては鍛冶・金属加工ができない。

古今東西 時代・場所を問わず、一道具としての扱いでない事に「鞆」の重要性が良くわかる。「たたらを踏む」「じだんだを踏む」などの言葉を生んだ素地もここにある。



小学唱歌「村の鍛冶屋」

ついぞ 思い起こすこともなくなりましたが、本当に懐かしく 新鮮に頭の中にそのメロディーが響いていた。

2004.11.8. 昼

南宮山神社から井吹への道を歩きながら

Mutsu Nakanishi

小学唱歌「村の鍛冶屋」歌碑

三木市立金物資料館 2004.11.6.

旧暦霜月 8日(11月8日)金山祭り・鞆 祭 (ふいごまつり)

- 1 金物の街「三木」と三木 金物神社 鞆祭 2004.12.6.
- 2 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 2004.11.8

【完】